

Sapientia Angelica

De Divino Amore et de Divina Sapientia

OPUS

EMANUELIS SWEDENBORG

CUJUS EDITIO PRINCEPS EXIIIT AMSTELODAMI, ANNO MDCCLXIII

エマヌエル・スヴェーデンボルグ著

神の愛と知恵

ラテン語原典訳

原典初版 1763 年より本邦初訳

アルカナ出版

愛と知恵を求める人へ

Cogitatio ex oculo occludit intellectum,
At cogitatio ex intellectu aperit oculum

DLW No. 46

肉眼から考えると、理性は閉じ、
理性から考えると、肉眼は開く
本書 46 節より

神の愛と神の英知についての 天使的英知

第 一 部

1 愛 Amor は、人間の〈いのち〉である

1. 「愛」と聞いて、人はその存在を知っていても、それが何かは分かっていません。普段の会話のなかで、愛が登場します。ある男がわたしを愛しているとか、国王がその臣下を愛し、臣下が国王を愛しているとか、夫が妻を愛し、母親がその子を愛し、またその逆である

などと言います。あるいは、あの人この人が、祖国を愛し、同胞を愛し、隣人を愛していると言うこともあれば、人と関係のない事柄についても、あれこれの事物を愛していると言います。愛は、話の中で、これほどありふれていながら、愛はいったい何かということになると、人はほとんど何も知りません。

愛について思いめぐらしてみても、その概念構成がうまくいかないため、愛など、とりたてて言うべきものではないと言ったり、あるいは見たり、聞いたり、触れたり、話したりしている中に、何か動きをもって、流れてくるものだという程度です。

つまり人は、愛が人の〈いのちそのもの〉だということに、まったく気づいていません。その〈いのち〉は、人の肉体をくまなく生かしているだけでなく、思考力もすべて生かしています。つまり、個々のもの全部を生かす〈いのち〉なのです。賢者ともなれば、次のように言われれば、ぴんと感じとることができます。

「愛からくる情愛がなかったら、何かを考えたり、行ったりできるでしょうか。愛からくる情愛がしぼんでくると、それだけ思考力も、会話力も、行動力も、しぼんできます。また、その情愛が燃えると、それだけ熱をもってきます」と。

賢者の悟りは、愛が人の生命であるという思想からくるのではなく、愛が人の生命であるという体験から来ています。

2. 愛が人の〈いのち〉であるのを知らないとする、人の〈いのち〉が何なのか、知っている人はだれもいません。それを知らなければ、人の〈いのち〉とは、感じること、行動することだと思ったり、

せいぜい思考作用だと思ったりします。ところが思考 *cogitatio* は〈いのち〉の第一次的結果であり、感覚 *sensatio* や行為 *actio* は〈いのち〉の第二次的結果です。

思考は、〈いのち〉の第一次的結果と言いましたが、その思考作用にも、より内的なもの、より外的なものがあります。そして、実際

上、〈いのち〉の第一次的結果になるものは、もっとも内的な思考であって、それは有限性を感知すること *perceptio finium* です。ただし、これについては、〈いのち〉の段階について触れるところで、後述します。

3. 愛は人の〈いのち〉であると言いましたが、それは、この世の太陽の熱をもとにしても、ある程度知ることができます。地上の植物全体にとって、太陽の熱は、共通の〈いのち〉のようなものです。春になって日が高く昇ると、あらゆる植物が地から姿をあらわし、葉で身をかざります。そのあと花を咲かせ、やがて実を結びますが、これこそ生きもののようです。秋や冬になって熱が減ってくると、それなりの生命にある装いを失い、しおれていきます。人間にある愛もおなじです。植物とおたがいに相応しています。つまり、愛は人を温めるものなのです。

2 唯一の神である主は、〈いのち〉そのものであるから、愛そのものである。天使や人間は、その〈いのち〉を受ける器である

4. 以上については、「神の摂理」また「神の生命」について扱うところで、くわしく説明します。ここで述べておきたいのは、ただ次のことです。主は全宇宙の神であり、創造されない方、無限な方です。それにたいし、人も天使も、創造されたもの、有限なものです。主は

創造されず、限定もされない方で、「エホバ」と呼ばれる存在そのものです。〈いのち〉そのもの、すなわちご自身の中にある〈いのち〉Vita in Se です。このように、創造されず、限定もされず、存在そのもの、〈いのち〉そのものである方から、人が直接 immediate つくられることはありません。神は一つで、分割されない方だからです。ただし、神 Divinum がその中に内在されるような意味で〈創造され、限定され、形成されたもの〉を元手にすることはお出来になります。人間や天使は、そんなふうに創られたものですから、〈いのち〉の器であるわけです。

したがって、〈いのちの器〉ではなく、自分が〈いのち Vita〉だと思ってしまうば、自分が神であるという考えから抜け出すことはできません。自分が〈いのち〉であるかのように感じたり、そう信じこんだりすれば、それこそ幻想です。道具因でありながら、主動因と一体だと感じ、そんな考えに落ち入ります。主こそ、みずからの中にある〈いのち〉です。それは、ヨハネによる福音書で主が教えておられます。

「父が、ご自分のうちに〈いのち〉をもっておられるように、子にも、自分のうちに〈いのち〉をもつことをおゆるしになった」
(ヨハネ 5・26) と。

また、ご自身が〈いのちそのもの〉だと言われます(ヨハネ 11・25、14・6)。そして〈いのち〉も愛も、前述したように一つです(1、2節)。したがって、主は〈いのち〉そのものである以上、愛そのもの ipse Amor です。

5. 以上を理解するため、ぜひ知っておいていただきたいことがあります。それは、主は、その本質の面で愛であり、神の愛ですから、天界にいる天使たちの眼前には、太陽として姿をあらわしておられることです。その太陽から熱と光が出ています。発出する熱の本質は愛であり、発出する光の本質は英知です。天使たちは、その太陽からくる〈霊の熱〉と〈霊の光〉を受ければ受けるほど、愛と英知に化していきます。そのような愛と英知は、自分からでなく、主からくるものです。受ける程度も、〈主への愛〉と〈隣人への愛〉によります。

その太陽自身、神の愛ですが、その熱と光をとおし、ご自分を出所にして *ex se*、人間が創造されるわけではありません。愛と言っても、ここでは主ご自身のことです。主が創造なさる場合、実体とか物的素材をもとに、それが熱や光をうけられるような〈かたち〉になさいます。この世の太陽を見ても分かります。太陽の熱や光が、そのまま地上に発芽をもたらすわけではありません。むしろ、土壌という素材があり、それに熱や光がしみとおり、そこから発芽が始まります。

主にある神の愛は、霊界では太陽の姿をとります。そこから霊的熱と霊的光が発します。天使たちにとって、それが愛となり、英知となります。以上のことについては、『天界と地獄』（116～140節）を参照してください。

6. 人は、〈いのち *Vita*〉ではなく、〈いのちの器〉であるとは、そのことです。人は父親のタネがもとのみごもりますが、これは〈いのち〉をはらむのではなく、むしろきわめて純粋な原初の〈かたち〉をはらむわけです。それは、生命を受ける器としての〈かたち〉

forma receptibilis vitae です。子宮の中では、ほんの手初めのタネでしかありませんが、それに一定の順序と、一定の段階をへて、〈いのち〉を吸収していく形が備わり、実体または素材が少しずつ付け加わっていきます。

3 神は、空間のうちに存在するのではない

7. 神すなわち神性は、この世の人間それぞれに、また天界の天使および霊界の霊それぞれに、あまねく存在しています。とは言っても、空間のなかにましますわけではありません。これは、単なる自然的な思考概念ではとらえられず、霊的な思考によります。

自然的な思考法でとらえられないわけは、自然的概念には空間が付随しているからです。その概念は、この世にあるいろいろなものが材料になっており、肉眼で見える個々全体にわたって空間的です。この世にある大小さまざまなものや、長いもの、広いもの、高いものなど、全部に空間が付随しています。一言でいえば、あらゆる形状・尺度には空間があります。したがって、神は空間のなかには存在しないと、神は遍在であると言っても、自然的な概念ではとらえられません。

ただし、その自然的概念のうちに、霊的光を投げかければ、自然的思考でも理解することができます。そのためには、まず、霊的な概念とその思考法について述べなくてはなりません。

霊的概念は、空間から抽象するのではなく、すべて状態 status

から抽象します。状態というのは、愛、生命、英知、情愛、それから生じる喜びなどです。ひらたく言えば、善と真理です。本当の意味での霊的概念は、空間と共通するものではなく、空間より上位にあり、自分の眼下に、空間概念を見下ろしています。つまり、天界が地上を見下ろしているようです。

それにもかかわらず、天使や霊も、この世の人間同様に、眼をつかって見ているわけです。見えてくる対象物も空間のうちにしか見えません。霊や天使のいる霊の世界にも、この地上の空間とおなじような空間があるように見えますが、本当の空間ではなく、見かけ *apparentiae* です。霊界での空間は、この地上での空間のように、固定したものではなく、縮小・拡大・変化・転移が可能です。したがって、測定できるようなものではありません。つまり自然的概念ではとらえられず、霊的概念によってしか把握できません。空間的距離といっても、善の距離とか、真理の距離のように、それぞれが自分の状態に応じて、親近性とか、類似性をもっているわけです。

8. 以上から、次のことが分かります。神があまねく存在していながら、空間的には存在していないことは、自然的思考概念だけでは理解できません。天使や霊であれば、それがはっきり理解できます。人間も、みずからの考えの中に、霊的光を受けいれないかぎりには、理解できません。もし理解できるとすると、それは、人の肉体がしているのではなく、人の霊が働いているためです。人の自然的なものではなく、人の霊的なものが働いているためです。

9. 多くの人はこれを悟ることができません。その理由は、自然的なものに愛着をもって、本人の理性の働きが自然的なものを越えて、霊の光にのぼっていく意志がないのが原因です。意志がないのは、空間をもとにしてしか考えが進まず、神についてもそうなります。神を空間の枠内で考えます。つまり、自然界の広がり枠内で考えているのです。したがって、神が空間のうちに存在しないことを知り、それをある程度感知するのでなければ、これから述べようとする〈神の愛と英知〉、つまり神の〈いのち〉については、何も理解できません。それが前提になります。神の摂理・遍在・全知・全能・無限・永遠についても、ほとんど悟れないでしょう。

10. 前述したように、霊界では、自然界とおなじように、空間があるように見えます。その結果、距離もでてきます。ただし、それは〈愛と英知〉すなわち、〈善と真理〉からくる霊的親近度 *affinitates spiritualis* がもとになって生まれる見かけです。

主は天界では、どこでも天使たちのいるところに存在しますが、天使たちにとっては、太陽のように高く見えます。愛と英知を受け入れる程度によって、主との親近性も生まれるわけで、受け入れの度合いが大きければ、それだけ主に近い天界の姿をとります。親近度が小さければ、それだけ主に遠い天界です。

天界は三層あって、おたがいがはっきり分離し、それぞれの天界にある社会も同じく分かれています。天界の下にある地獄についても、愛と英知への反発の程度にしたがって、隔離されます。全地上世界にも、主は同じように、人々のうちに、人々のそばに現存しておられま

す。主が存在しているのは、空間の中ではないため、このようなことが起こります。

4 神は、人間そのものである Deus est Ipse Homo

11. 全天界にわたって、神についての考えはすべて、神は人であるという考えになります。天界は、部分も全体も、人間 Homo、しかも神的人間 Homo Divinum の〈かたち〉を帯びていて、それが天使たちのもとにあって、天界を形成しています。神について考えると、天界の〈かたち〉に沿って考えが流れます。それ以外の考え方は、天使たちにとって不可能です。この世にあっても、天界と結ばれている人たちはみな、みずからの奥で、自分の霊のうちで考えるときは、そんなふうには神を考えます。

ですから、神は人間なのです。天使も霊も、みな完全な〈かたち〉をもった人間です。天界の〈かたち〉がそうするわけで、それがどんなに大きくても、どんなに小さくても、おたがいに類似しています。

(天界は、全体も部分も、人間としての〈かたち〉をもっていることについては、小著 『天界と地獄』59～87節を参照してください。天界の〈かたち〉に沿って思考が流れていくことについては、本書203、204節参照)。

人は神の像として、神に似せて造られていることは、創世記(1・26、27)にもあります。神は、アブラハムやその他の人々には、人 Homo として姿をあらわされました。古代人たちは、賢者から平民に

いたるまで、神について考える場合、人としてしか頭に浮かびません。アテネやローマなどでは、多神崇拝が始まりましたが、その神々もみな人間でした。これについては、次に記すことが参考になります。既版の小著の中から引用します。

諸民族のなかでも、とくにアフリカ人は、宇宙の唯一創造神をみとめ礼拝しますが、その神は人間であるとし、それ以外の神はあり得ないとします。神はただ、宙にただよう雲柱のように考えている人が多くいると聞いて、そんな人はどこにいるのかと聞き返します。キリスト教徒のなかとの返答に、それはとんでもないと返します。〈みことば〉の中で、神が「霊」であると記されているためですが、霊と言えば、一片の雲のようにしか感じないから、そんな考えになったと伝えました。つまり、霊も天使も、みな人間であることを、かれらは知りませんでした。

そのアフリカ人たちがもっている霊的思考の概念が、自然的概念と同じであるかどうか調べられました。そこで、主を天地の神として心から認めている人の場合、同じではないことが分かりました。キリスト教徒の中の、ある長老派の人に、わたしはそれを尋ねてみました。すると、「神人 *Divinum Humanum*」のような概念は、だれももつことができないと言います。

わたしは、その人がいろいろな国民のなかに移り行き、かれらの心の内部へ内部へと順を追って入りこんでいくのを目撃しました。それから当該の国民がいる天界へと進み、ついにはキリスト教徒の天界に入りました。どこへ行っても、そこにいる人たちが心の中で、神についてどう感じているかが分かり、そこで本人の気づいたことは、神に

ついては、「人」であると考えer以外にはないということです。つまりそれは、「神人」なのです」（『最後の審判のつづき』74節参照）。

12. キリスト教界で「神」といえば、一般には「人」であると考えます。三一性についてのアタナシウス信条にも、神を人格と呼んでいます。ところが、一般信徒以上の賢人たちが、神を「見えない方」として宣言しました。それは、神が人であるとするれば、天地の創造主である理由が分からないからです。全宇宙にみずから充満して臨在しておられるとか、理性ではつかみ切れないことがたくさんできます。つまり、神が空間のうちには存在しないことが、分かっているためです。ただし、主だけに目を向ける場合、人は神人性が頭に浮かび、神は人であるのが分かります。

13. 神について、正しい考えをもつことは、どれほど大切でしょう。宗教人にとって、その心の一番奥に、神について、どう考えるかがあります。どんな宗教にも、またどんな信心にも、神にたいし目を向けます。そして、どんな宗教にも信心にも、普遍的・個別的に神が存在するわけですから、神について正しく考えていないなら、天界との交流ができないことになります。

したがって霊界では、どんな民族も、神を人として考えているかどうかによって、自分の居場所が決まることになります。つまり、主のことを考えているかどうかです。それ以外にはありません。人が死んでから、どんな状態になるかは、自分の心に固めもった神概念により

ます。それとは反対に、神を否定することが、地獄をつくります。それは、キリスト教の世界にとっては、主の神性を否定することです。

5 神人の中にある存在 *Esse* と、実在 *Existere* は、区別されるが、一体である

14. 存在 *Esse* があるところに、実在 *Existere* があります。一方なくしては他方はありません。存在は実在をとおして、「ある *est*」と言えるわけです。実在がなかったら、「ある」とは言えません。理性で考えてみれば、実在しない存在があるかどうか、存在しない実在があるかどうか分かります。一方は他方を伴い、他方は一方なくしてはあり得ません。だから一つです。しかも区別されていながら一体です。区別されながらの一体性は、愛と英知の場合もそうです。愛は存在であり、英知は実在です。愛は英知の中にあって愛となり、英知も、愛から発してこそ英知になります。愛が英知の中にあってこそ、愛は実在するものとなります。

この二つは、以上のように一体でありながら、頭の中では区別できます。ただし現実の上で *actu* 区別しているわけではありません。思考上 *cogitatione* の区別であって、現実上の区別ではありません。だから、区別されながらも一体である *distincte unum* と言えるのです。神人 *Deus Homo* についても、靈魂と肉体の関係のように、区別されつつも一体であるわけです。

靈魂は、自分の肉体がなかったら存在しませんし、肉体も自分の靈

魂がなかったら存在しません。神人の場合の「神的靈魂 Divina Anima」は、「神的存在 Divinum Esse」を表わし、「神的肉体 Divinum Corpus」とは、「神的実在 Divinum Existere」を表わします。人の靈魂は、肉体がなくても 実在できるし、肉体がなくても、考えたり英知を味わったりできると考えるのは、幻想からきた誤りです。人の靈魂は、この世で身にまとっていた物質的な肉体から脱皮したあと、靈的肉体を身に帯びます。

15. 存在は、実在しなかったら存在にはなりません。なぜなら、形相 *forma* がないまま、以前から存在だけがあったと言えないからです。形相がなかったら、その存在の性格 *quale* もないわけです。そして存在としての性格がない場合、何か *aliquid* として存在するわけにはいきません。存在から発して *ex Esse* 実在するのは、存在から発しているという事実によって、存在と一体化します。したがって、ここに一体化 *unitio in unum* が成立します。したがって、また一方が他方なくしてはないという相互依存関係が成立します。それとおなじく、一方は他方の全部であり、みずからの中にあるように、他方の全体のうちにあります。

16. 以上から、神は人であることが分かります。神は人であることによって、実在する神になります。みずからの力で実在する *Existens a Se* ではなく、みずからのうちに実在します *Existens in Se*。

6 神人のうちにあつて、無限なもの infinita は、明らかに一つになっている

17. 神は、「無限なる方 Infinitus」と呼ばれている以上、神が無限であることは周知です。無限であるからこそ、「無限なる方」と呼ばれているわけです。神が無限な方であるとは、存在と実在そのものが、みずからの中にあるというだけの理由ではありません。ご自身の中に、いろいろ無限なものが存在しているからです。ご自身の中に、いろいろ無限なものがあつてこそ、神は無限なお方と言えるわけです。そうでなければ、名ばかりの無限です。

ご自身のうちにあるいろいろな無限 infinita in ipso と言つても、無限に多数のもの infinite multa のことでも、無限にひろがる全部 infinite omnia のことでもありません。多数とか、全部とは、自然的概念から出てきています。無限に多数あるといった自然的概念は、限界をもつたものですし、無限にひろがる全部とは、限界がないけれど、宇宙にある有限からの抽象です。

したがつて、自然的概念を伴つたままの人間は、神にある無限なものについて、ぴんとくるまでにいたりません。それを高めたり、近づけようとしたりしても無駄です。天使は、靈的概念のうちにあるため、人間がもつ程度を越えて、高めたり近づけたりできます。でも、神にある無限を感知するまでには至りません。

18. 神のうちには、いろいろな無限なものがあります。これは、

神が人であると信じる人には、だれもが肯定できることです。神は人であれば、神には体 *Corpus* があります。つまり、〈からだ〉に必要なものは、みな備わっているわけです。したがって神には、顔があり、胸があり、腹があり、腰があり、足があります。それがなくては人ではありません。神に以上のものが備わっているなら、眼もあり、耳もあり、鼻もあり、口もあり、舌もあります。また、人間の内部にあるもの、心臓とか肺臓、および、それに付随する器官もあります。つまり、人間を人間にする全部があります。

造られた人間の場合、その部分部分は多数あり *multa*、それなりの構成要素をとりあげると、数え切れません *innumera*。ただし神人にあっては、それが無限 *infinita* であるわけです。欠けているところはありません。したがって神には、無限な完全性 *infinita perfectio* があります。神は、造られない人間 *Homo Increatus* です。造られた人間 *homo creatus* と似ていますが、それは、神が人であるために他なりません。この世の人間は、その神の像として、その神の似姿として造られたと、神ご自身が言われたのも、それです（創世 1・26、27）。

19. 神のうちにはあらゆる無限が存在します。天使がいる天界では、天使たちにとって、それは何よりもはっきりしています。何百万何千万の天使からなっている全天界は、その全体像から見ると一人の人間です。天界の大小社会は、いずれも同様です。また天使も人間であって、天使は天界の雛形なのです。それについては、『天界と地獄』（51～87 節）の著書をごらんください。

天界は全体から見ても、部分をとってみても、また個々人から見ても、以上のような〈かたち〉を備えています。天使たちはその〈かたち〉を神からいただいています。つまり天使は、神からそれをいただければいただくほど、完全な姿の人間になります。だからこそ、天使たちは神のうちにいると言われ、神はかれらのうちにいると言われます。つまりは、神はかれらにとって、すべてなのです。

天界には、どれほど多くのものがあるかは記すことができません。なぜなら、神が天界を創造され、その結果、神によって、筆舌を越えた多数のものが生まれました。そのように、〈神にまします人〉ご自身の中には、あらゆる無限なものが存在します。

20. 造られた宇宙を眺め、その用途と、その対応物をとおして考えてみると、同様のことが結論づけられます。これが理解できるために、前提になることを述べることにします。

21. 神人には、あらゆる無限なものが存在しています。それは、鏡に映して見るように、天界にも、天使にも、人間にもあります。それに、神人は、空間のうちにはおられません（7～10節で前述しました）。そこで、神が遍在・全知で予見万能 *omniprovidens* な方であることが、ある程度まで見えてくるし、つかめてくると思います。つまり、この方は、人 *Homo* として万物をお造りになっただけでなく、ご自身が造った物を、みずからの秩序のもとに、永久に保持することがおできになります。

22. 神人 Deus Homo には、あらゆる無限なものがあって、それが区別されながらも一つになっています。それは、鏡にうつした人間からでも、よく分かるでしょう。前述したように、人間のなかには、多数のもの、数え切れないものが存在していますが、人はそれを一つのものとして感じています。

自分自身の頭脳、心臓、肺臓、肝臓、脾臓、膵臓について、感覚では何も分かりません。眼、舌、胃、生殖器、その他についても、無数のものがあるても意識しません。それぞれの感覚で意識しないため、自分では一つのものとして感じています。つまり、全体が一つとして意識され、それ以外ではあり得ないような〈かたち〉になっています。これこそ、神人からいただく〈いのち〉の器としての〈かたち〉です（4～6節に前述しました）。全体を構成する秩序と組成がもとになって、感覚や意識が以上のような〈かたち〉のもとに成立しているのです。つまり、多数のもの・無数のものが集まっているのではなく、一つのものとしての意識です。

以上から出てくる結論はこうです。人間のなかで一つにまとめられている、多数のもの・無数のものは、神であり人である方の中にあっては、はっきり区別され、しかもきわめて明確に区別されつつも、一つのものであるということです。

7 唯一の神人がましますこと。万物はそこから生まれる

23. 神は唯一の創造主です。これは、人の理性のあらゆる力がい

っしょになって、あたかもそれを集中的に言明しているようです。理性を持った人は、自分に備わった共通の理解力から、それ以外のことを考えませんし、考えることもできません。健全な理性をもつ人に向かって、宇宙の創造主が二人ましますと言ったとします。すると、たちどころに反撃をくらうでしょうし、おそらくは、たんに一言耳に響かせるだけで終わりでしょう。人の理性の全部をひっくるめて、神はただ一人であることは、あきらかな結語であり結論です。それには二つの理由があります。

まず、合理的に考える能力は、そのものとして見ると、人間のものではなく、人間のうちにまします神のものです。人間の理性の共通性は、ここからくるわけで、その共通性があるって、それが人間自身の力で働いているように感じます。もう一つは、人間は理性の能力があるからこそ、天界の光のうちにあり、それが原因で、自分の考えにある共通項を吸収し、神がひとりであると分かります。これも天界の光による普遍命題なのです。

ただし、人がその理性をつかって、理性に従属する下層部を駄目にするると、理性は存在しても、その下層部をひん曲げられていますから、ゆがんだ能力になります。したがって、その本人の合理性 ratio は健全ではありません。

24. 人は、無意識に、グループを一個の人間のように考えています。したがって、国王が頭部で、国民が体であるとか、ある人が、共同体つまり王国のなかで、頭であると言えば、すぐぴんときます。この世の社会とおなじく、霊の共同体でもそうです。霊の共同体という

と、教会のことで、その頭は神人 *Deus Homo* です。

もし、創造主なる神、宇宙の保持者である神がおひとりでないとしたら、つまり多神だとすると、一人の人間として見えるはずの教会は、どうでしょう。一個の体のように見えても、それに多くの頭が載っています。これでは人でなく、怪物です。

本質が一つであっても三つの頭があるとか、その結果、頭も一つになるなどと言えば、一つの頭部に三つの顔があるとか、三つの頭部に一つの顔がついているということになります。そうすると、教会の実像もゆがんで見えます。しかし実際は、唯一の神は頭をなし、教会は体です。人間も同様に、体の指示で動いているのではなく、頭の指示で動いています。

それは、一つの王国には一人の王が存在するのと同じです。国王がたくさんいたら分割されてしまいます。一人の国王であれば存続するでしょう。

25. この地上全体にひろがって、聖徒の交わり *communio* と呼ばれている教会も同じです。一つの頭の下にあって一つの体をなしています。頭部は、自分の下にある身体を思いのままコントロールしているのは周知です。その頭部には、理性と意志が宿っていて、その理性と意志のもとで身体は動きますが、身体は服従しているにすぎません。体は、頭部にある理性と意志によらなければ何もできません。人間も同じく、主によらなければ何もできません。

身体は、それ自身が出発点になって、何かをやっているように見えます。手や足なども動いているときは、自分で自分を動かしているよ

うに見えるし、口や舌も、しゃべっているときは、自分で自分を振動させているように見えます。ただし、自分では何もやっていません。むしろ、頭脳にある意志の情愛、および理性の思考力が働いています。

さて、ここで一つの体に複数の頭があったらどうでしょう。それぞれの頭にある理性と意志が勝手に働いたら、一つの体として存続できるでしょうか。一つの頭だけならできますが、複数の頭で統一された心をもつことは不可能です。

教会と同様、天界でもそうです。天界は、何百万何千万という天使からなっています。全天使がそれぞれ唯一の神に心を向けていなくては、みな別れ別れになって、天界は滅びてしまいます。万一、天界の天使のひとりでも複数の神を考えようものなら、即座に分けられ、天界の端に追いやられ、やがて沈んでいきます。

26. 全天界は、あまねく一つの神にむかっています。天使たちの〈ことば〉も、天界の調和からあふれてくるそれなりの合意で、一致したものになります。唯一の神以外の神を考えることができないという証拠です。〈ことば〉は、考えから生まれてくるからです。

27. 健全な理性をもっていながら、神が分割されると思う人がいるでしょうか。無限な方、創造されない方、全能な方、つまり神が、複数で存在すると思えるでしょうか。無限な方、創造されない方、全能な方、つまり神が、複数で存在しても、それぞれの神が同じ本質をもつ *una eadem essentia* から、結局は神は一つであると言うかも知れません。しかしそれは、健全な理性の持ち主の言うことではあ

りません。同じ本質であることは、同一の方であることです。同一であるとは、多数ではないということです。万一、その同一なるものが、他からの力に依存するとすれば、その依存する者は、それ自身として、神ではありません。それ自身として神である方 *Deus in Se* は、万物が生まれる源としての神です（前16節参照のこと）。

8 愛と英知は、神の本質そのものである

28. すでに知っていることがらを全部あつめ、ご自分の精神の直感力で眺め、霊を高めて調べてみてください。その中で普遍的なものは何でしょうか。それは、愛と英知 *Amor et sapientia* 以外の何ものでもないことが分かります。

人の〈いのち〉にあるものは、すべてこの二つが本質です。公的なもの、道徳的なもの、霊的なものすべては、この二つにかかっています。この二つがなかったら、何もありません。集団としての人間がいとなむ〈いのち〉もすべてそうです。つまりそれは、前述したように、大小の社会であり、王国であり、帝国であり、教会であり、また天使のいる天界です。その中から、愛と英知をとり除いて、何が残るか考えてみてください。それを除くと、またそれから成っているものを除くと、何もないことが分かります。

29. 愛と英知の本質は神のうちにありますが、これはだれも否定できません。神はすべての人を愛しておられ、それは、ご自身のうち

の愛から出たものです。またすべての人を導いておられますが、それは、ご自身のうちの英知から出たものです。全宇宙は、一定の秩序をめぐして造られています。しかもそれは、愛から生まれる英知にみまがり、万物をその全体像から見ると、英知そのものです。秩序の点では、不定 *indefinita* でも、全体としては一つのものとしてまとまるように、順序よく足並みをそろえています。だからこそ、内部包括的で、永久にまで保持・持続できるようになっています。

30. 愛と英知が神の本質であるからこそ、人間には二つの生命力 *facultates vitae* があることとなります。一つは理性、もう一つは意志です。理性とは、神からの英知の流入を、自分なりに全部受けとめる能力です。意志とは、神からの愛の流入を、自分なりに全部受けとめる能力です。英知を味わうにしても、愛するにしても、正しいやり方で行わない場合、人の能力は失われるわけではありませんが、閉じられてしまいます。閉じられると、理性は、たとえあい変わらず「理性」と呼ばれ、意志は、あい変わらず「意志」と呼ばれていても、本質的には機能しなくなります。その二つの能力が働かなくなると、人間性の全部が駄目になってしまいます。つまり、思考すること、思考にもとづいて話すこと、また意志すること、意志にもとづいて行動することが、できなくなります。

したがって、ここで明らかなのは、神が人間に臨在なさるとすると、以上の二つの能力、すなわち英知を味わう能力と、愛する能力の中に臨まれます。そして人間は、それが可能なのです。英知を味わったり

愛したりすることはできるのに、行わない場合があります。しかし人間には、英知を味わい、愛することを自分で行う可能性（能力）があることは、わたし自身いろいろの経験で分かりました。それについては、いずれ詳しく触れていくつもりです。

31. 神の本質が愛と英知であることから、宇宙の全体が、善と真理にかかわりをもっていることが分かります。愛から出てくるものを「善」と言い、英知から出てくるものを「真理」と言います。それについてはあとで詳述します。

32. 神の本質は愛と英知です。だからこそ、宇宙および宇宙にある万物は、生物・無生物を問わず、熱と光によって存在していることが分かります。熱は愛に対応し、光は英知に対応しています。つまり、愛は霊の熱であり、英知は霊の光です。これについては、追って詳述します。

33. 神の本質はその愛と英知です。そして、その愛と英知から、人間のあらゆる情愛 *affections* と思考 *cogitations* が生まれます。神の愛から情愛が生まれ、神の英知から思考が生まれます。人間にある個々全体は、情愛と思考以外のなにもものでもありません。この二つは、人間にあるあらゆる生命の源です。人間にある〈うれしさ *jucunda*〉のすべてと、〈愛らしさ *amaena*〉のすべては、それが源となって出てきます。〈うれしさ〉は愛の情愛から生まれ、〈愛らしさ〉は思考から生まれます。

人間は、何かの器として造られています。つまり、神を愛するための器です。そして、その神への愛から、英知を味わう器になります。神からの影響力で、情愛が動かされれば動かされるほど、またその情愛に応じて、思考が働けば働くほど、それだけ神の器に化していきます。したがって、創造主としての神がもっておられる本質は、その愛と、その英知です。

9 神の愛は、神の英知により、神の英知は、神の愛による

34. 神人にあっては、神の存在 *Esse* と神の実在 *Existere* は、一つであると前述しました（14～16節）。神の存在とは神の愛を指し、神の実在とは神の英知を指します。したがって、この二つは、区別されながらも一つです。区別されながらも一つであるというのは、愛と英知の二つは、ひとまず区別されつつも、愛は英知のものであり、英知は愛のものであるというふうな、一つになっています。愛は英知のうちに存在し、英知は愛のうちに実在します。すなわち、英知はみずからの実在を愛から引き出します（前15節を参照）。それと同時に、神の英知は存在でもあります。以上のことから、神の愛と神の英知を同時に眺めると、〈神の存在 *Divinum Esse*〉ですが、区別して眺めると、神の愛は〈神の存在〉であり、神の英知は〈神の実在〉であることが分かります。以上が、神の愛と神の英知にかんする天使の思い *idea angelica* です。

35. 愛と英知、英知と愛は、以上のように一つになっています。しかもその一体性は、神人 *Deus Homo* のうちにあり、一つの本質 *Divina Essentia una* になっています。その神の本質は、神の英知によるものだからこそ、神の愛です。またその神の本質は、神の愛によるものだからこそ、神の英知です。そして両者は一つだからこそ、神の〈いのち〉は一つです。〈いのち〉こそ神の本質です。神の愛と神の英知は一つ *unum* です。この一体性 *unio* は、相補的 *reciproca* です。この相補的一体性こそ、一つ *unum* の根拠です。この相補的一体性については、多くを後述するつもりです。

36. 愛と英知の一体性は、また神のみわざすべてにわたっています。その一体性があるため、永続性 *perpetuitas* があり、永遠性 *aeternitas* があります。神が造られたものの中で、神の英知よりも神の愛が大きかったり、神の愛よりも神の英知が大きかったりした場合、その被造物は存続しません。両者が同等に内在してこそ存続します。一方が他方を凌駕することはありません。

37. 人間が自己改革し、再生し、救われるよう、神は配慮しておられ、その場合も、神の摂理 *providentia* は、神の愛と神の英知の両者に等しくかかります。神の英知よりも、神の愛が大きかったり、神の愛より神の英知が大きかったりすると、人は、自己改革し、再生し、救われることはできません。神の愛は、全人類を救うことを望んでおられますが、神の英知にかなうものでなくては救えません。人が救われるためのルールは、すべて神の英知によるものです。神の

愛も、そのルールを踏みはずすことができません。なぜなら、神の愛と神の英知は一つのもの、つまり一体性のうちで働くものだからです。

38. 神の愛と神の英知は、〈みことば〉の中では、「正義と公正」によって表わされます。「正義 justitia」は神の愛を、「公正 judicium」は神の英知を示します。したがって、〈みことば〉の中では、神について「正義」また「公正」という〈ことば〉で表されます。ダビデは言っています。

「正義と公正は、あなたのみ座をささえる台である」（詩 89・14）。

また、ダビデによると、

「エホバよ、あなたは光のように正義を示し、・・・ま昼のように・・・公正を表される」（詩 37・6）と。

ホセアも言っています。

「わたしは、正義と公正のもとで、・・・永遠にあなたに約束する」（ホセア 2・19）。

エレミヤは言います。

「わたしは、ダビデの子孫として、正しい者を起こす。かれは王となって治める、・・・そして、地上に公正と正義を行う」（エレミヤ 23・5）。

イザヤは言います。

「かれは、ダビデの王座にあって、その国を治め、・・・公正と正義のうちに・・・しっかりと保たれる」（イザヤ 9・7）と。

同じく、

「エホバは、・・・地上に公正と正義をいっぱい満たされる」
(イザヤ 33・5)。

ダビデは、

「あなたの正義による定めを口にするとき、・・・わたしは一日
に七度、あなたの正義による定めをたたえます」(詩 119・7、
164)と。

おなじく、ヨハネによると、「いのち」また「光」は、

「そのうちに〈いのち〉があった。その〈いのち〉は、人々の光
であった」(ヨハネ 1・4)とあります。

〈いのち〉とは、ここでは、主に属する神愛を、「光」とは、主に
属する神知を指します。また、ヨハネによると、〈いのち〉また
「霊」は、次のとおりです。

「イエスは言われた。わたしがあなた方にたいして語る〈こと
ば〉は、霊であり〈いのち〉である」(ヨハネ 6・63)と。

39. 愛と英知は、人間の場合、それぞれ別個のもののように見え
ますが、それ自身としては、区別されながらも一つです。つまり、人
間の場合、愛がある程度に応じて英知があり、英知がある程度に
応じて愛があります。英知があるように見えても、それに自分の愛が一致
しないときは、本物の英知ではありません。英知の愛があるように見
えても、自分の英知に一致しないときは、本物の愛ではありません。
その一体性の本質と〈いのち〉は、愛と英知の双方で補いあっています。

人の英知と愛の両者は、別個のもののように見えます。それは、人間の理解力が天界の光にあげられる反面、人間の愛の能力は、理解した分を実践する程度にしか、あげられないからです。したがって、見かけ上の英知があっても、〈英知による愛〉と一体化しない場合、それなりに一体化しただけのもの、つまり〈英知によらない愛〉や〈不健全な愛〉のうちに落ちこんでいきます。人は、自分がしなくてはならないことを、あれこれと英知によって知ることが可能です。ただし、それを愛していないなら、実行しません。英知にもとづくことがらを、愛をもって実践した分だけ、神の像 *imago Dei* になっていきます。

10 神の愛と神の英知は、実体である。その実体は、形相でもある

40. 通俗的には、愛とか英知を、いわば稀薄なエーテルの中に浮遊し、流れているもののように考えます。せいぜい何かの発散として考えているでしょう。したがって、これが事実上、実体や形相として考える人はごくまれです。愛や英知が実体であり、形相があると分かっている人でも、その愛や英知が主体の外にあって、主体から流れてくるもののように考えています。主体の外に向かって、主体から出てくるものであれば、結局は浮遊していて、流れ出てくるものと同じですが、それを実体または形相と呼んでいるに過ぎません。

ところが、愛や英知は、主体そのもの *ipsum subjectum* です。主

体から外へ向かって浮遊し、流れ出るものは、主体それ自身がつ状態の外見であって、それを見まちがえているのです。

今までそれがよく分かっていなかったのも、多くの理由があります。まずは、人間の精神にとって理性形相の出発点が、外見 *apparentiae* にあるためでしょう。しかも、外見から奥へは原因の追求という作業がなかったら入れません。その原因が奥深く隠れていれば、追求もいっそうできなくなります。その追求には、霊的光のなかで、理性をしっかりと固定させなくてはならないのに、それさえできません。いつも後ろに引っ張る自然の光があるため、それに邪魔されて理性がしっかりしません。

いずれにせよ、真理は次のとおりです。つまり、愛や英知は、事実上・実際上の実体であり形相です。そして、その実体や形相が、主体そのものになっています。

4 1. とは言っても、以上が信用されるには証明が必要です。見かけだけでは分からないからです。しかしながらこの証明も、肉体がもつ感覚をとおして、ぴんとくるものによらなくては分かりません。それで、感覚経験から証明してみましよう。

人間には、五つの外的感覚があります。触覚、味覚、嗅覚、聴覚、視覚です。触覚の主体になるもの *subjectum* は皮膚です。人は皮膚で表面が覆われています。皮膚は実体であり形相でも、それには触れられるものを感じとる働きがあります。ただし触覚は、触れられるものの中に存在しているのではなく、皮膚自身の実体と形相のなかに存在していて、それが触覚の主体です。触覚は、触れられた物体によっ

て及んできたものを感じとったに過ぎません。味覚もそうです。この感覚は、舌という実体または形相の感じとり *affectio* です。舌こそ主体です。嗅覚も同じです。周知のとおり、臭いは鼻を刺激し、鼻の中にあるものとして感じられます。また、臭いのあるものに触れて、鼻がそれに反応して感じとります。

聴覚についても言えます。聴覚は、音が発する場所にあるように見えますが、聴覚は耳の中にあり、しかも耳という実体または形相の感じとりなのです。聴覚が、耳から遠くにあるように思えるのは、見かけに過ぎません。

視覚についても言えます。人が何か対象物を遠くに見るとき、視覚がその物体のなかにあるかのように錯覚しますが、実は、眼の中にあり、眼が主体になっています。

同じように、眼の感じとり *affectio* が、視覚です。距離感があるのは、空間概念のもたらすものです。また、媒介物があったり、小さく見えたり、対象物の姿が不明瞭だったりして、そうなります。対象物についてのイメージは、そのものからくる映像のアングルにしたがい、眼のなかに意識されます。

以上でうなずけることでしょう。視覚は、眼から対象に向かうのではなく、対象物のイメージが眼の中に入り、眼の実体と形相に影響を及ぼすわけです *afficiat*。視覚の場合も、聴覚の場合とおなじようです。聴覚が音をキャッチするとき、耳から出ていくのではなく、音のほうが入り、耳に影響をあたえます。

以上によって、次のように理解できます。実体また形相は、主体を構成するわけで、その主体の感知力 *affectio* は、主体と離れた

別のところにあるわけではありません。主体はあい変わらず主体として、前後をとおして同じです。ここで言えることは、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚は、それらの器官から流れ浮遊するようなものではなく、器官はそのまま実体であり形相ですが、それが外部から刺激されて感覚として働くわけです。

42. 愛や英知についても、同じことが言えます。愛また英知は、実体または形相であって、感覚器官が外へ向かって働いているように、眼前に現れてくるわけではありません。それだけの違いは、だれもが認めるところですが、実体や形相は、英知や愛の実体であり形相です。それは思考 *cogitations* であり、感知 *perceptions* であり、情愛 *affections* です。虚無から流れ浮遊してくるものではないし、主体をなしている現実の実体・形相から、抽象されたものでもありません。

脳の中には、数知れぬ実体や形相があり、それにはみな内的な意味 *interior sensus* があります。つまり、理性や意志に対応した意味をもっています。情愛にしても、感知力にしても、思考力にしても、脳から吐き出される息のようなものでなく、實際上・現実上の主体です。その主体がその中から何かを放出するのではなく、外部の感覚について前述したとおり、刺激によって起こる流動にともない、主体みずからが変化します。刺激によって起こる流動 *alluentia quae afficiunt* については、くわしく後述します。

43. ここで初めて、神の愛と神の英知みずからが、実体であり、

形相であることがはっきりします。神の愛は存在自身 ipsum Esse であり、神の英知は実在自身 ipsum Existere です。もし、この存在自身および実在自身が、実体や形相でなかったとしたらどうでしょう。まるで虚構でしかありません。それは、そのものとして、なにものでもないことになります。

11 神の愛と神の英知は、みずからの中にあって実体であり、形相である。したがってみずから在り Ipsum、独一的 unicum である

4 4. 神の愛と神の英知は、実体であり形相であることは、以上の説明で明らかになったと思います。また神の存在および実在は、みずからのうちにあつての in se 存在であり、実在であることも前述しました。

神の存在・実在は、みずからの力による a se 存在の実在ではありません。そうなる起源があることになります。つまり、みずからの中にあつての存在・実在であるはずのものが、その中に他の起動因をもつことになります。みずからの中にあつての存在・実在は、永遠からのものです。みずからの中にあつての存在・実在は、造られたものでもありません。

造られたものはすべて、造られない方 Increatus によって造られました。造られたものは、また有限です。そして有限なものは無限な方によらないかぎり、実在することはありません。

4 5. みずからの中にあつての存在とか実在について、少し考えれば理解できるし、把握できる人なら、その方が、みずから在り、独一的である Ipsum et Unicum ことも理解できるし、把握できます。みずから在る Ipsum とは、唯一であること、独一的 Unicum とは、他のものはすべて、その方に由来することです。

みずから在り、独一的である方が、実体とか形相であるとすれば、その方は当然、〈みずから在り、しかも独一的な〉実体・形相であるはずで、そして、そのような実体・形相が、神の愛・神の英知であれば、その愛は当然〈みずから在って、独一的な〉愛であり、〈みずから在って、独一的な〉英知です。同時に、〈みずから在って、独一的な〉本質、〈みずから在って、独一的な〉生命です。これは、愛また英知は生命だからです。

4 6. 以上で説明できたと思います。したがって、自然はみずからの力で存在する a se esse と主張する人は、なんと感覚的に考えていることでしょうか。肉体がもつ感覚器官をもとにして、霊的なことは闇夜の中で考えていることになります。眼をつかって考えてはいませんが、理性をつかって考えていません。

肉眼をもとにして考えると、理性は閉じますが、理性をもとにして考えると、眼は開きます。

みずからの中に在る存在または実在とは、永遠なる方、造られない方、無限な方です。ただし、そのような方について考えが及ばない人は、〈いのち Vita〉と言っても、虚無に向かって消えていく浮遊としか、思いが及びません。愛と英知についても、そのようにしか考え

ないし、自然界全体が、愛と英知によって造られたといっても分かりません。

自然界全体が、愛と英知によって造られたことは、自然界を一連の役立ち、つまり役立ちの秩序のもとで見ないかぎり、分からないでしょう。自然を単に肉眼の対象としての〈かたち〉から見ていたのでは駄目です。役立ちが分かるには、生命の糸を知ることです。一連の役立ちの秩序が分かるには、英知と愛があると認めることです。自然界にある形相は、役立ちを含みもっています。ただ、その形相だけを見ていると、自然の中にある生命が見えてきません。愛と英知も分かりません。つまり、神については、何も分かりません。

12 神の愛と神の英知は、みずからによって創造されたものの中に当然、存在し、実在する

47. 愛自体は、自分を愛するのではなく他者を愛すること、そして、愛をとおして他者と結びつくことです。愛自体はまた、他者から愛され、結びつけられることでもあります。

どんな愛でも、その本質は結びつき *conjunctio* です。あるいは〈いのち〉です。それは、うれしさであり、愛らしさであり、楽しさであり、うるわしさであり、至福であり、祝福であり、幸福です。愛とは、自分のものが相手のものになるようにすることです。あるいは、相手の〈よろこび〉を〈よろこび〉そのものとして感じること、つまり相手の〈よろこび〉を愛することです。それにたいし、相手の

うちに自分の〈よろこび〉を感じないこと、つまり相手の〈よろこび〉をそのものとして喜ばないことは、愛していないこととなります。前者は隣人愛になりますが、後者は自己愛です。

以上二つの愛は、それぞれまっ向から対立しています。二つとも、自分と相手をつ結びつけてはいるのですが、自己愛、つまり相手のうちにあって自分を愛している場合は、相互に分離していることが表面に出ません。ところが、ある人が相手をこのような愛で愛していればいほど、あとで相手を憎むようになります。だから実際は分離しているのです。このような結びつきは、本人の側から次第に解消していき、やがて愛は、同程度の憎しみにかわっていきます。

48. 愛の本質を見とおせる人なら、以上の事柄が分からないはずはありません。自分しか愛せないとしたら、また自分以外のだれからも愛し返されたくないとしたら、それは一体なんでしょう。これは、結びつきと言うより、分解 *dissolutio* です。愛の結びつきは相補的なものです。相補的關係 *reciprocum* は、自分の中だけでは成立しません。成立すると思ってみたところで、何か他の人のうちに、相補的なものがあるだろうと、想像しているだけです。

そこで、神の愛が何か分かります。それは、神が愛しておられる他者、愛されたいと思われる他者のうちに、存在すること、実在することに、ほかなりません。

どんな愛にも、以上のような性格があります。したがって、愛そのものにまします方のうちには、最大限に、すなわち無限に、以上の事柄があてはまります。

49. 神については、何か無限なものがある、それが神以外の他者のうちにあると想定し、神とその他のあいだで、愛し、愛される相補関係が成立すると思いがちですが、そうではありません。つまり、他者のうちに、みずからの中での愛の〈本質および生命〉があるとし、他者のうちに神の性格があるとする想定です。

他者のうちに何か無限なもの、みずからの中での愛の〈本質と生命〉、つまり神の性格があるとしめます。そんな場合、神はその他者によって愛されることはなく、むしろ、ご自分自身を愛していることになります。

無限なもの、また神の性格 *Divinum* などは、独一的 *unicum* です。そのような性格が他者のうちにあるとすれば、それはご自分自身の表れです。それは自己愛 *amor sui* になってしまいますから、神のうちにあろうはずはありません。神の本質にも、まっ向から対立します。したがって、他者には、それみずから神の性格になるものは、何もありません。

神のみ力で被造物のうちに、このような愛が、はたしてあるかどうかは後述します。もしあるとすれば無限の英知になります。これは無限の愛と一つです。すなわち、神の〈英知の愛〉であり、神の〈愛の英知〉です（前34～39節参照）。

50. あらゆる実在についての感知と認識、つまり創造についての感知と認識は、上述の秘義が感知・認識できるかどうかによります。また、あらゆる実体についての感知と認識、つまり神の被造物保持 *conservatio a Deo* についての感知・認識は、同じく上述の秘義

が感知・認識できるかどうかによります。いずれにせよ、それは、被造宇宙における神のあらゆるみ業を感知・認識できるかどうかでもあります。これについては後述するつもりです。

51. ただし、ここでお願いしたいのは、以上について自ら考えることを、時間や空間の概念に混同させないことです。一定の法則で事物が推移していくと思って、時間・空間の概念を含ませて考えれば、それだけ分からなくなります。神は、時間と空間のなかにはおられません。そのことは、本書がすすむにつれ、とくに、「永遠について」、「無限について」、「遍在について」の箇所、明らかになっていきます。

13 宇宙にあるすべてのものは、神人による神愛と神知によって造られた

52. 宇宙は、その最大のものから最小のものまで、とりわけ末端的なもの *ultima* にいたるまで、神の愛と神の英知で満ちみちています。したがって宇宙は、神の愛と神の英知を反映するものと言えます。それは全宇宙が、人間にある全体に、相応関係をもっているからです。

被造宇宙の中に存在する個々全体は、人間にある個々全体と、相応関係 *correspondentia* にあると言いました。それはまた、人間は一個の宇宙であるとも言えます。人間がもっている情愛とそれからく

る思考は、動物界にある全体と相応関係をもっています。人間がもっている意志と、それからくる理性は、植物界にある全体と相応関係をもっています。人間がもっている末端的な生命は、鉱物界の全体と相応しています。

このような相応があることは、自然の世界では、だれの目にも映りません。でも霊界では、気をつけて見れば、だれにも見えてきます。霊界では、自然世界の三界にあるすべてのものが存在しています。それは、情愛と思考の相応ですが、その情愛は意志から出たもの、思考は理性から出たものです。

それから、生命の末端的なものや、それに付随したものがあります。その情愛や思考が、意志や理性をとりまいて姿を見せます。それはちょうど、全宇宙を見ているようですが、もちろん雛形の宇宙です。

以上によって、天使たちにとり、被造宇宙が神人を表象していること、神人の愛と英知が、宇宙にあって結晶していることが分かります。もちろん、被造宇宙が神人であるというのではなく、被造宇宙が神人の力に依存しているということです。

被造宇宙のなかには、実体そのもの *substantia in se* や、形相そのもの、生命そのもの、愛そのものや英知そのもの、さらに人間そのもの *homo in se* などいっさいなく、すべては神ご自身の力によって成り立っています。

その神こそ、人間そのもの、英知そのもの、愛そのもの、形相そのもの、実体そのものなのです。そのものであるとは、造られていない方、無限なる方という意味です。それにたいし、その方の力で成り立っている場合、「そのもの」と言えるものは何もないから、被造物で

あり有限です。そして、その方のイメージを表しており、その方の力で存在し、実在しています。

53. 存在 *Esse* また実在 *Existere* という〈ことば〉は、有限の被造物にもあてはまります。また実体、形相、生命、それに愛または英知などもあてはまりますが、みな有限の被造物であることには変わりません。それがあてはまる理由は、被造物に神性が宿っているというのではなく、被造物が神のうちにあり、神が被造物のうちにいるためです。

造られたものは、みなそのものとしては、魂がなく *inanimatum*、死んだものです。とは言え、神 *Divinum* が被造物のうちにいまし、被造物が神のうちに存在しているという点で、魂が入って動き、生かされてきます。

54. 神が被造物のうちにいます場合、受け皿としての主体に甲乙はありません。ただし、その主体は、それぞれ違って造られています。まったく同一の主体はありません。ちがった受け皿です。そういうことから、神については、そのイメージの面では各種各様に映ります。神に反対する場合、神がその中にどう臨在しておられるかは後述いたします。

14 被造宇宙にあるものは、どれも神人の〈神愛と神知〉の
受け皿である

55. ご存じのとおり、宇宙にある個々全体は、神によって造られています。そのため宇宙は、そこにある個々全体を含め、〈みことば〉では、「エホバのみ手のわざ opus manuum Jehovahae」と言われています。

全体的に見て、世界は、無から *ex nihilo* 造られたと言う人がいます。この無という〈ことば〉から「まったくの無 *plane nihilum*」の考えが侵入してきました。ところが、まったくの無からは何も出てきません。それがもとで、何かが生じることはありません。以上は変わらない真理です。

したがって、神の像としての宇宙は、神の充満でもありますから、神のうちにあり、神によって造られたとしか言いようがありません。神は存在自身です。そして、在るものは、その神の存在がもとになっています。何も存在しないと言う意味の無から、存在するものを造るということは、とんでもない矛盾です。

とは言っても、神のうちにあって、神によって造られた被造物が、神のみ力の延長 *continuum ab Ipso* であるわけではありません。神は存在そのものです。被造物のうちには、そのような存在そのもの *Esse in se* はありません。被造物のなかに、何か存在そのものがあるとすると、神の延長ということになり、神の延長なら、神だと言うことになります。

これについて、天使たちは次のように考えています。被造物は神のうちにあり、神によって造られたものです。それはちょうど、人間が神の〈いのち〉にあずかるようなもの、〈いのち〉が引き出された *extracta* ようなものです。または、神の〈いのち〉に似てはいて

も、神の〈いのち〉ではない〈いのち〉です。

天使たちは、自分たちの天界にある数多くのことがらを例にとって、確信しています。天界では天使たちは、自分たちが神のうちにあり、神は自分たちのうちにある、と言っています。ただし、神の存在、神の在り方そのものにあずかっているのではないと言います。それが分かるよう、いずれ後述しますが、とりあえずの知識とってください。

56. 以上のような起源から見て、被造物はみな神の受け皿のような本性をもっています。その受け皿は、神の延長としてでなく、神に隣接した *per contiguum* ものようです。神に結ばれているといっても、延長的な結合でなく、隣接した結合です。神のうちにあり、神によって造られている以上、それなりの身近さをもっています。そのような被造物だからこそ、類比的存在 *analogon* です。神とのあいの結びつきは、鏡でみた神の像のようだと言えるでしょう。

57. 以上のことから、次のことが分かります。すなわち、天使たちは自分の力で天使になっているのではなく、神人との結びつきで天使になっています。その結びつきは、神である〈神の善〉と〈神の真理〉を受けの程度によってちがってきます。〈神の善〉と〈神の真理〉は、神ご自身のうちにあるのですが、神ご自身から発出しているように見えます。

天使たちには、主のみ力によって、理性 *ratio* が、あたかも自分のものであるかのように与えられています。その理性にのっとって考えたり、意図したりする自由があります。その自由をもとにし、神

の真理という秩序の法を、みずからに適用すればするほど、受け皿になってきます。〈神の善〉と〈神の真理〉が、あたかも自分の力で生まれてくるかのように、天使たちに与えられ、愛が相補的になってくるのも、そのためです。前述したように愛は、相補的でないかぎり与えられないわけです。これは、地上の人間の場合もおなじです。

以上述べたことから、宇宙の全被造物は、神人の〈神の愛〉と〈神の英知〉をうける受け皿になっていることが、初めて明らかになります。

58. その他、宇宙には天使や人間とは違ったものがあり、それもまた、神人の〈神の愛〉と〈神の英知〉を受ける受け皿になっています。人間の下には動物界があり、動物界の下には植物界があり、植物界の下には鉱物界がありますが、それについては、まだ理解できるようには、述べていません。そのまえに、〈いのち〉の段階および〈いのち〉の受け皿の段階について、いろいろお話ししなくてはなりません。

そのようなものが神と結ばれるのは、役立ち *usus* によります。よい役立ちであれば、それはみな神との結ばれ方が似ているところから来ます。ただ、段階に応じて違った結ばれ方をしています。神との結ばれ方も、程度がだんだん下って、理性が何もないから自由もないという状態、さらに、〈いのち〉の外観もなく、ただ受け皿になっている状態もあります。受け皿であるため、反応体 *reagentia* とも言えます。それは、反応体であるということで、含みもつ性格があるわけです。よくない役立ちについては、悪の源について述べたあと、

それが神とどのように結びついているかに触れます。

59. 以上から、神 *Divinum* は、被造宇宙の個々全体のうちにいますことが分かります。だからこそ、被造宇宙は、〈みことば〉にもあるように、エホバのみ手の業です。すなわち、〈神の愛〉と〈神の英知〉の業です。「エホバのみ手」とは、そのことです。神は被造宇宙の個々全体のうちにいますと言っても、その存在の中に、神そのものの *Divinum in se* がいますわけではありません。被造宇宙は、神ではありません。神のみ力によるものです。神のみ力によるものですから、被造宇宙には神の像があります。それは、鏡に映った人間の姿のようなものです。鏡には人が映って見えますが、その映像の中には、人が存在しないのと同じです。

60. わたしは霊界で、わたしのまわりで、多くの人が次のように話しているのを耳にしました。「宇宙にある個々全体のうちに、神がいらっしゃるのを認めたいと思います。なにしろそこに、神の驚くべき業が見えるし、内奥部に入って眺めれば眺めるほど、驚嘆しますからね」と。

ところが、被造宇宙の個々全体に、現実的に *actualiter*、神が内在されると聞いて、憤慨している様子です。それは、口では言っても信じていない証拠でした。それで、かれらには次のように言われました。

「植物のタネの一粒一粒には、また次代の新しいタネを生み出していく秩序が含まれていますが、そのようなすばらしい力を見ただけで

も分かりますよ。タネの一粒一粒には、無限と永遠のアイデアがあります。つまり無限まで、しかも永遠まで、自己増殖を続けていく推進力 *nisus* がかくされています。また、ひじょうに小さな動物をとってみても、感覚器官、脳、心臓、肺臓その他があり、それに動脈に静脈、繊維、筋肉があり、それが実際に動くのです。そんな動物がもっている本性には驚嘆に値するものがあり、それについて書かれているものもそろっています。その不思議は、みな神から出たものです。かれらが備えている形相 *formae* は、地の質料 *materiae terrae* がもとになっています。その質料から植物ができます。人間もそれなりの秩序をもって、さかのぼることができます。人間については、次のようにあります。

『人は土、すなわち、地の塵から造られた。そして、生命の魂 *anima vitarum* が吹きこまれた』（創世2・7）と。

以上のことから、神性が人間にあるというのではなく、人間に添加されている *adjunctum* ということがはっきりします」と。

15 被造物はすべて、ある種のイメージのもとで、人間に関係がある

61. 表題にあることは、動物界の個々全体から、植物界の個々全体から、鉱物界の個々全体から、はっきりします。

動物界の個々全体には人間との関係があります。それは次のようなわけです。どんな種類の動物にも、自分で動くための肢節、感覚をは

たらかせる器官、人間と共通する機能を働かせる内臓があります。また、人の本性に備わっているのと同じような欲望や情愛があります。それに、かれらの情愛に見合った生来の知識があります。その知識は、ある点で霊的なものとして映ります。それは、地上のケモノ、空を飛ぶトリ、ハチ、ムシ、アリなどを見ると、大なり小なりこの霊的なものがあるのが分かります。自然的でしかない人が、動物界の生き物が自分たちに似ていると思うのはそのためです。

植物界の個々全体には人間との関係がありますが、それは次のとおりです。タネがもとで存在し始め、それからだんだん年を重ねていきます。人間の結婚に似たものがあり、そのあと繁殖します。植物魂 *anima vegetativa* となるものは、役立ちです。人間との関係をもつのは、とりわけ役立ちの形相です。それについては、いくつかの著書があります。

鉱物界の個々全体は人間に関わりをもっています。それは、ある種の形相をつくりだし、それを役立てていく推進力 *conatus* のうちに見られます。その形相とは前述したように、植物界の個々全体のこと、それに関わってくるもののことです。一粒のタネが地中に落ちると、まずそれを温め育て、四方八方から養分を与えて、発芽成長するようにします。そして、人間を表象する形相をつくり出します。このような推進力は、ひからびた土にもあります。それは、海底の珊瑚にも見られるし、鉱山の花からも見られます。それは鉱物や金属から成っています。植物的自己発展と、役立ち提供は、究極的には被造物にある神の力です。

62. 地中の金属類には、成長させる推進力が内在しているように、植物には成長していく推進力が内在しています。さらに、いろいろな種類の昆虫は、芳香を放つ草木と相応関係をもっています。以上は、自然世界にある太陽の熱がもとになっているというより、太陽の熱を介して、受け皿に応じた〈いのち〉がもとになっています。ただ、それについては次に述べることにします。

63. 被造宇宙に存在するあらゆるものは、人間に関係があることは、以上の内容から察知できると思いますが、多少漠然としていることでしょう。しかし、霊界では、それがはっきり見えてきます。

霊界でも、動・植・鉱物三界のあらゆるものが揃っています。そして、その中央に天使がいます。天使は、自分のまわりにそのようなものが存在しているのを見、しかもそれが自分を表象していることを知ります。むしろ、自分の理性の内奥部がひらけてくると、自分のことが分かり、まわりの物の中に、自分のイメージをみとめるようになります。これは鏡にうつして見るようなものです。

64. 以上およびその他、思い起こすことがたくさんありますが、ここでは割愛します。

そこで、神は人間であること、被造宇宙はその神人の像であることが分かります。万物がこの神人にたいして共通してもっている関わり方は、部分的にそれらが、人間にたいしてもっている関わり方と似ています。

16 全被造物がもっている役立ちは、末端的なものから始まって、段階的に人間にまでのぼってくる。そして、人間をとおして創造者である神にまでいたる

65. 末端的なもの *ultima* とは、前述したように、鉱物界にある個々全体です。それには、各種各様の物質があります。岩石状の実体があり、塩状のもの、油状のもの、鉱石状のもの、金属状のものもあります。それに植物や動物が死滅したあと、こまかい塵に化した土がつけ加わります。このような物質には、生命から発する役立ちの、あらゆるものの目的と原理がかくされています。役立ちのすべての目的は、役立ちを生み出していく推進力です。またその原理は、その推進力から出る活動力 *vis agens* です。以上が鉱物界です。

中間的なもの *Media* とは、あらゆる種類の草、あらゆる種類の灌木、あらゆる種類の樹木です。それは未完成なものから完成したものを含め、動物界の個々全体のために役に立っています。つまり、動物を養育し、楽しませ、生かします。養育するとは、動物の体のための飼料になることです。楽しませるとは、味や香りや美しさで、動物の感覚をよろこばせることです。そして生かすのは動物の情愛です。このような傾向への推進力は、植物の生命に内在しています。

最も身近なもの *Prima* は、動物界の個々全体です。その中でも下等のものとして、ムシ類があります。中等のものとして、トリやケモノがあります。高等なものは人間です。三界にはみな、下等・中等・高等があり、下等類は中等類に役立ち、中等類は高等類に役立ちます。

以上のように被造物全体は、末端的なものから人間まで、役立ちが順序よく上昇していきます。そして、その秩序の最高部に人間がいます。

66. 以上の三段階上昇は自然界のものですが、そのような三段階上昇は霊界にもあります。動物はすべて〈いのち〉を受ける器です。動物の中でも完成されたものは、自然界の三つの段階の〈いのち〉を受ける器ですが、より未完のものは、自然界の中の二つの段階の〈いのち〉を受ける器です。さらに、未完のものは、自然界の一つの段階を受けるだけです。そして、人間だけは、自然界の三つの段階の〈いのち〉を受けるだけでなく、霊界の三段階の〈いのち〉を受けることができます。このように、人間は自然を越えて高くのぼることができますが、動物はそれできません。

人間は自然の世界のうちにあつて、民事・道徳的なことについて、分析的・合理的に考えることができるだけでなく、自然を越えて霊的なことがら、天的なことがらも考えることができます。人間は英知のうちに高められ、神を見ることさえできます。以上、六つの段階があつて、すべての被造物はそれなりの秩序をもって、創造主である神にまで、みずからの役立ちを上昇させることができますが、この六段階については、該当の箇所でも取り扱います。

要約すれば、被造物は、すべて唯一の〈いのち Vita〉である最初の方 *primus* にのぼっていくこと、また万物は、〈いのち〉の受け皿として役立ちを果たしていること、そのため、役立ちの形相が存在することが、明白になります。

67. 人がどのようにして、最低・末端の段階から、始源的な段階にまで上昇していくか、つまり高められていくかについて少し触れておきます。自然世界にあって、生まれてくるのは最低の段階です。そして知識を得ることによって、第二の段階に上昇します。さらに、知識・学問 *scientiae* をとおして理性を完成させていくにしたがい、第三の段階に高められ、こうして合理的になっていきます。

霊界における三段階上昇は、以上の自然世界の三段階が終わって始まるもので、地上の肉体をぬぎすてなくては外面に現れてきません。肉体をぬぎ去るとともに、霊の第一段階がひらかれ、そのあと第二段階がひらかれ、最後に第三段階になります。でもそれは、第三天界の天使になる人にかぎられます。第三天界の天使たちは神を見ます。第二段階または最低の段階がひらかれている人は、第二天界または最外部天界の天使になります。

人の霊的段階は、すべて主のみ力によって〈神の愛〉と〈神の英知〉を受けるに応じてひらかれます。ある程度受けると、霊の第一、すなわち最低段階に来ます。さらにそれを受けると、霊の第二、すなわち中間段階にいたり、多く受けると、第三、すなわち最高の段階に来ます。何も受けない場合は自然的段階にとどまり、霊の段階から吸収するものは、思考力と話す能力、それから、意図をもって、そこから行動することですが、それも理性的 *intelligenter* とは言えません。

68. 人の精神の内部が高められることについて、一言述べておきます。神によって造られたものには、反応力 *reactio* が内在して

います。活動 *action* は、神の〈いのち〉にしかありません。反応力は、この〈いのち〉の活動をとおして刺激されます。反応が現れるのは、被造物が起こしているように見えます。しかもその反応は、動かされて初めて表面化するものです。

そのため、人間にとっては、自分で行為を起こしているように見えます。つまり〈いのち〉は、自分の〈いのち〉であるとしか感じられません。しかし実際は、人は〈いのち〉を盛る器にすぎません。

人は自分のうけついで遺伝悪がもとで、神に反抗して反応を起こすのは、それが原因です。ところが、〈いのち〉はみな神のみ力によるものですし、〈いのち〉の善はみな神の活動から起こるもの、〈いのち〉の悪はみな人の反応力から起こるものです。このように信じれば、反応 *reactio* は活動 *action* になり、人間は神とともに行為をしても、あたかも自分の力によってやるように行為します。あらゆるものについての均衡 *aequilibrium* は、活動とそれへの反応によって起こり、そこで万事が均衡を保ちます。

以上申しあげたのは、人は自分の力で神にのぼっていくのではなく、主のみ力によってのぼっていくのを信じていただくためです。

17 神は空間の中には存在しないが、宇宙の全空間を満たしている

69. 自然には、空間 *spatium* と時間 *tempus* という二つの固有な性格があります。自然的世界にある人間は、ここから自分の思考

概念を形づくり、その結果、理性も形成していきます。ただし、その概念にとどまった状態では、それから上へ精神を飛躍させることができませんし、霊的なもの、神的なものを感じることができません。

時間と空間から抽象した概念をつかって、思ったことを発展させていっても、本人がもっている理性の光明 *lumen intellectus* は、自然的なものに過ぎません。霊的なもの、神的なものについて、推理を働かせて考えても、日中にしか姿を見せないものを暗闇の中で思いめぐらしているようなものです。それがもとで自然主義 *naturalismus* が起こります。

それにたいし、時間や空間から抽象した思考概念を越えて、精神を高くあげることができる人は、その暗闇から脱して光の中に入ります。霊的なもの、神的なものを英知で味わい、やがては〈霊的・神的なものの中にあり、それから出てくるもの〉を見ます。そして、その光をもとにして自然の光がもつ暗闇を追いはらい、心の中心にあった迷いを側面に押しやります。

理性の備わる人なら、みな自然固有のものを乗り越えて、考えをめぐらすことができます。それで初めて、神は遍在 *omnipraesens* であって、空間のなかには存在しないことがよく見えてきます。それと同時に、前に述べてきたことも見えてくるし、肯定できるようになります。それにたいし、神の遍在を否定し、万事を自然のおかげだとする人は、何かできたとしても、自然より心を高くあげることができません。

70. この世を去って天使になる人は、みな前述したように、空

間・時間という二つの自然固有のものを脱ぎ去り、霊の光のなかに入ります。その光のなかでは、まさしく本物 vera が思考の対象になります。視覚対象は自然世界とよく似ており、それは天使たちの考え方に相応したものです。

かれらの思考の対象は、前述したように本物です。そして、空間・時間からは、全く何もひき出しません。視覚対象も、空間や時間のうちにあるように見えても、それをもとにして考えるのではありません。その理由は、霊界での空間や時間は、自然世界のように固定したものではなく、それぞれの〈いのち〉の状態によって流動的だからです。したがって、かれらの考えのなかには、〈いのち〉の状態があります。空間に代わって、愛の状態があり、時間に代わって、英知の状態があります。

こうして、霊による思考とか、霊による〈ことば〉遣いは、自然の思考や自然の〈ことば〉遣いと、ずいぶん違ってきます。そこには、万事が霊的である事物の内部を除いて、共通のものは何もありません。この相違点については、他の箇所でいろいろ述べるつもりです。

天使たちは、空間や時間をもとにして考えているのではなく、〈いのち〉の状態をもとにして考えています。だから神が空間を満たしていると言っても、何のことかよく分かりません。空間とは何か分からないからです。それにたいし、空間の概念はいっさい使わないで、神がすべてを満たしていると言えば、よく分かります。

71. 自然的な人間は、霊のことや神について、空間をもとにして考え、霊的人間は、空間をもとにしないで考えます。それを分かりや

すく説明すると、次のようになります。

たんに自然的な人間は、視覚対象から得た概念をつかって考えますが、その視覚対象はみな、長サ・広サ・高サなどをもとにした像、または、その像によって限定された角状・球状の形があります。地上で見えるものについて考えるときは、いつもそれがはっきりしています。また、見えないものであっても、民事的・道徳的なことについて考えるときには、いつもそれがありません。目には見えなくても、その延長として考えているのです。

霊的人間になると、とくに天界の天使になるとそれが違ってきます。かれらの考えには、空間上の長サ・広サ・高サからくる像や形は関係ありません。むしろ、事物の状態とか、〈いのち〉の状態と関係があります。空間上の長サに代わって、〈いのちの善〉をもとにした〈事物の善 bonum rei〉を考え、空間上の広サに代わって、〈いのちの真理〉をもとにした〈事物の真理 verum rei〉を考え、空間上の高サに代わって、〈善と真理の段階 gradus〉を考えます。

霊的なものと自然的なもの相互のあいだにある相応について考えてみると、どうでしょう。その相応から、〈みことば〉における「長サ」は〈事物の善〉をあらわし、「広サ」は〈事物の真理〉をあらわし、「高サ」は〈善と真理の段階〉をあらわします。

天界の天使は、神の遍在については、神が万物を、空間に関係なく満たしておられるとしか、考えが及びません。天使が考えていることは真理です。天使の理性を照らしている光は、神の英知だからです。

72. 以上が、神についての基本的な考え方です。それが理解でき

ない場合、神人による宇宙の創造、そのみ摂理、全能、遍在、全知と言っても、おおよそは理解はできても、その考えをもち続けていくことはできません。なぜなら、単に自然的な人間の場合、理解はしても、自分の意志がもっているみずからの生命の愛に埋もれてしまうからです。そのような人は、この考えを解消させてしまいます。そして、いわゆる合理の光明が支配する空間概念の中に、自分の考えを押し沈めてしまいます。以上の考えを否定すれば否定するほど、非合理になっていくことを忘れているのです。

そのようなことも、神は人間である *Deus est Homo* という真理を知っていれば、確信をもって肯定できます。前11～13節と、その後に記されたことを、どうぞ熟読してみてください。それが本当であると分かります。空間に根をもつ〈自然の光明〉のうちにある考えを除くと、それが逆説として見えてきます。除いていけば、それだけその矛盾を排するようになります。

神が宇宙の全空間を満たしているとは言いながら、神人が満たしていると言わないわけはこれです。神人が満たしていると言ってしまうと、単なる自然的光明なるものが満足しません。神が満たしていると言えば、神は遍在で万事を聞き知りたもうという神学者たちの言い分に、うまく一致します（これについては7～10節を参照してください）。

18 神は、時間には関係なく、あらゆる時間のうちに存在している

73. 神は空間には関係なく、あらゆる空間のうちに存在しているように、神は時間には関係なく、あらゆる時間のうちに存在しています。神については、自然固有の概念をあてはめて考えることはできません。自然固有の概念とは、言い換えれば空間と時間です。

自然界の空間は、計量することができ、時間も同じくそうです。時間は、日・週・月・年・世紀ではかります。一日は時刻ではかり、週や月は日数ではかり、一年は四季ではかり、一世紀は年数ではかります。自然界にこのような計量があるのは、この世界の太陽が見かけ上、回転しているからです。

霊界ではちがいます。そこでは、生活の進展は、時間のうちで行われているようには見えません。この世の人間がおたがいに生活しているように、やはりおたがいに生活しています。これも見かけ上の時間があつてのことです。ただし霊界での時間は、この世と同じような時間で分けられているではありません。霊界の太陽は、そのあるべき東にじっとしていて、沈んだりはしません。太陽としてかれらの目に映るのは、主の〈神的愛〉です。

かれらには、日・週・月・年・世紀はなく、その代わりに〈いのち〉の状態があり、その状態にもとづく違いがあります。その違いは時間のなかでの違いではなく、状態の中での違いです。したがって天使たちは、時間が何か知りませんし、たとえ「時間」と口で言っても、その代わりに状態を意識します。たしかにその状態が時間を決めていくのですが、時間はただ外見です。なぜなら、ある状態がよろこばしいときは、その時間が短くあらわれ、ある状態がつまらないときは、その時間が長くあらわれます。そのため、霊界での時間は、状態の性

格以外の何ものでもないことが分かります。

〈みことば〉の中で、「時間」、「日」、「週」、「月」、「年」というときは、状態を指します。また、全体から見た一連の状態進展を指します。時間が教会について言われる場合、「朝」とは、教会の状態のはじまりです。「昼」とは、教会が成長したことです。「夕」とは、教会の衰退を示します。「夜」とは、教会の終末です。春・夏・秋・冬であらわされる年の季節についても、同じことが言えます。

74. 以上から、時間が、〈情愛をもとにした思考〉と同じであることが分かります。人の状態の性格はそれに由来するからです。霊界では空間を通過する *progressio* ときの距離感は、時間の進展 *progressio* と一つになっていますが、それはいろいろ説明することができます。

霊界では、情愛にもとづく思考があつて、それから出た願望があれば、それにしたがって、実際にある道程が短縮されたり、反対に延長することもあります。そのため「時間の空間 *spatia temporis*」と言われたりします。思考が、人間固有の情愛とつながらないときは、夢の中と同様に、時間があらわれてきません。

75. この世では、時間は自然固有 *propria naturae* のものです。それが霊界では、純粹の状態であるとともに、進展していくものです。天使も霊も有限なので、そうなります。それにたいして、神のうちには、進展的な *progressivi* 状態はありません。なぜなら、神は無

限であって、ご自身の中にある無限なご性格は、以前（17～22節で）証明したように、一つになっているからです。以上のことから、神はあらゆる時間のうちにありながら、時間とは関係なく存在していることが分かります。

76. 以上が理解できない人、しかも時間に関係なく存在する神について、ある種の感じとりで思いめぐらすことができない人は、永遠 *aeternum* といっても、時間における永遠しか考えに浮かびません。そして、永遠の昔から存在する神 *Deus ab aeterno* を考えて、頭が狂ってきます。つまり、神を存在し始めの時点から考えます。すなわち時間の中での独自の最初を考えます。

これは、神がみずからの力で実在する *Deus a se existit* とし、さらに自然自身が自然の力で始まったという考えに、はまります。これが混乱のもとです。このような気違いじみた考えから脱するには、「永遠とは何か」の霊的・天使的考え方によらなくてはなりません。その永遠には、時間がありません。時間がないという点では、永遠 *aeternum* と神性 *Divinum* は同じことです。神は、〈みずからのうちにまします神 *Divinum in se*〉であり、〈みずからの力による神 *Divinum a se*〉ではありません。

天使たちは、〈永遠の昔からまします神〉について感じることができても、〈永遠の昔からある自然〉など考えられないと言っていました。まして、みずからの力による自然 *natura a se* も分からないし、みずからの中にある自然 *natura in se* は、全く分からないそうです。

みずからの中にあるとは、存在そのもの ipsum Esse のことで、万物の源です。みずからの中にある存在とは、〈いのちそのもの〉です。〈神の英知〉による〈神の愛〉であり、〈神の愛〉による〈神の英知〉です。天使たちにとって「永遠」とは、その意味で使われています。つまり、時間から抽象されたものです。これは、被造物から抽象された創造主、有限なるものから抽象された無限なる方のことです。その間には、比較できるような比率はありません。

19 神は最大のものの中にあっても、最小のものの中にあっても同じである

77. 神は空間に関係なく、あらゆる空間のうちにあり、また時間に関係なく、あらゆる時間のうちにあると言いました。その二つの命題から帰結できることについて、記します。

空間には、より大きいもの、最大のものがあるとともに、より小さいもの、最小のものがあります。前述したように、空間と時間は一つになっていますから、時間についても同じことが言えます。神は、時間のうちにあっても同一です。それは、神は変化や変動のある存在ではないからです。すべて空間・時間にあるもの、すなわち自然のものとは違い、神は普遍・不動です。したがって、どこでもいつでも同一なのです。

78. ひとりの人間と、もうひとりの人間では、神の内在がちがう

ように見えます。無学単純な人と、知恵のある人とは違って見えるし、幼児と老人は違って見えます。ただし、これは見かけからくる錯覚です。人はそれぞれ違いますが、神は別様ではありません。

人間は容器です。しかもその受ける器、すなわち受け皿は種々様々です。知恵のある人は無学単純な人より、〈神の愛〉と〈神の英知〉を、よりの確に *adaequatius*、あるいはより完全に *plenius* 受けとめています。また、知恵のある老人も、幼児や少年以上に受け皿になっています。とは言っても、神はこの人の中でも、あの人の中でも同じです。

また同様に、天界の天使の場合と、地上の人間の場合で、神が違ったふうに存在すると考えるのは、見かけからくる錯覚です。天界の天使たちは、口では言い表せない英知をもっているのにたいし、人間はそうではないと思うからでしょう。ただし、これは神を受けとめる性格に応じて、その主体のうちにいろいろ違って現れるからであって、主の中には何の違いもありません。

79. 神は、最大のものの中でも、最小のものの中でも同じです。

これは天界と、そこにいる天使から明らかになります。全天界のうちにいます神と、一人の天使のうちにいます神は同じです。したがって、また全天界は一人の天使のようにも見えます。

これは教会についても、教会に属する人間についても言えることです。全天界とか全教会は、神が内在する最大のもですが、天界の一天使や教会に属する一員は、最小のもです。天界にある全社会が、一人の人間・天使 *homo angelus* として、何回かわたしの目に映り

ました。また、大きな人間つまり巨人のように見えたり、幼児のように、小さな人間に見えたりすることがあると言われました。その理由も、神は、最大のものの中でも、最小のものの中でも、同じであるところからきます。

80. 被造物中、生き物でない場合、最大のもの・最小のもの全部にわたって、神の内在は同じです。生きていないということは、〈いのち〉の形相はないけれど、役立ちの形相はあるわけです。その形相は、役立ちの善にしたがって、各種各様です。ただし、神がその被造物の中で、どのように存在するかは、「創造」を扱うところで後述します。

81. 空間を抽象して考えてみてください。それから、空虚の概念をとり去ってみてください。それから、〈神の愛〉と〈神の英知〉について考えてみてください。それこそ神の本質です。空間は抽象され、空虚は否定されています。それから、空間をもとにして考えをすすめてください。神が空間の最大のものにも、最小のものにも同一であることが明らかになります。空間から抽象された神の本質には大小がありません。同一です。

82. ここで、空虚 vacuum について触れておきます。わたしは、ある天使たちがニュートンと「空虚」について話しているのを耳にしましたが、天使たちは「空虚」の概念は「無 nihilum」の概念と同じく賛成できないということです。その理由は次のとおりです。霊界

は、自然界にある空間や時間の、内にか上にか *intra seu supra* あるわけですが、その霊界でも、かれらは同じように感じ、考え、感動し、愛し、意図し、呼吸し、また話しをし、行動しています。それは、無としての空の中での出来事ではあり得ません。無は、あくまで無であって、無については、何も述べることはありません。

それにたいして、ニュートンは次のように言いました。

「神は存在し、万物を満たしているのを知っていますが、空虚については、無の概念をあてはめるなど、とんでもないことです。無の概念は、あらゆる意味を破壊してしまう *destructiva omnium* ものです」と。

またニュートンは、空虚について自分と話している人たちに向かい、

「無の概念に触れないよう注意してください。その概念は、人を気絶させるもの *deliquium* のようなものです。無の概念には、精神の現実的な行動 *mentis actualitas* は何もありません」と言って、注意を促していました。



第 二 部

1 神の愛と神の英知は、霊界では太陽に見える

83. 霊界・自然界という二つの世界がありますが、霊界は、自然界から何かを引き出しているわけではありませんし、自然界も、霊界から何かを引き出しているわけではありません。両者は、はっきりと区別され、相応 *correspondentiae* によって交流しています。その相応については、他の幾多の箇所ですべてしてきました。次のような例をつかって説明すると、よく分かるでしょう。

自然界の熱 *calor* は、霊界の〈仁愛による善〉に対応し、自然界の光 *lux* は、霊界の〈信仰による真理〉に対応します。熱と〈仁愛の善〉のあいだ、および光と〈信仰の真理〉のあいだは、おたがいに、はっきり区別されることは、だれもが知っています。この二つが全く別物であることは、最初の直感で、はっきり見えてきます。〈仁愛の善〉が熱と比べ、何の共通点があるか、また〈信仰の真理〉が光と比べ、何の共通点があるかなどを思いめぐらせば、それが見えてきます。

ところが、実際、霊の熱は〈仁愛の善〉であり、霊の光は、〈信仰の真理〉を指しています。両者はそれぞれ区別されながらも、相応によって一つになっています。人が〈みことば〉の中で、「熱」また

「光」を読みとるとき、人のそばにいる霊や天使は、「熱」を「仁愛 charitas」と読みとり、「光」を「信仰 fides」と読みとります。

以上の例えを出したのは、霊界と自然界の二つの世界は、おたがい何の共通点もないほど違っていることを知っておくためです。ただ、相応をとおして交流するため、あるいは結びつくために、この二つの世界は創造されました。

84. 以上の二つの世界は、はっきり違っているため、霊界は、自然界とは違った別の太陽の下にあることが明確に分かります。霊界にも自然界におけるのと同じような熱と光があります。ただ、霊界の熱は霊の熱であり、光も霊の光です。そして霊の熱は〈仁愛の善〉で、霊の光は〈信仰の真理〉です。

さて、熱も光も、その源は太陽以外のなにものでもありません。すなわち、霊界には自然界とは違った別の太陽があり、その霊界の太陽は、〈霊の熱〉と〈霊の光〉が出てくるような本質をもっています。反面、自然界の太陽は、自然の熱が出てくるような本質をもっています。

霊的なものはみな、善と真理に関係があり、その源は〈神の愛〉と〈神の真理〉以外の何ものでもありません。善はすべて愛にかかわり、真理はすべて英知にかかわっています。知者が何か見ることがあるとすれば、それが源になっています。

85. 自然の世界にある太陽以外に、太陽があるなど、今まで及びもつかなかったことです。その理由は、人間の霊的なことがらは、

人間の自然へ流れ込んでいても、人間にはそれが何なのか分からなくなってしまうためです。しかも、霊や天使のいる霊界が、自然の世界とは違った別の世界であるのも、分からなくなりました。

自然の世界に住んでいる人にとって、霊の世界はまったく隠れてしまいました。それで、主は思しめしによって、わたしの霊の視力を開いてくださり、霊界にあるものが見えるようになりました。自然世界にあるものを見ていると同じように見えるのです。そして、霊界のことを記録させて下さいました。それが、小著『天界と地獄』であり、その中のある一節には、霊界の太陽について記してあります。

霊界の太陽は、自然界の太陽と同じ大きさに見えます。燃える火のようであり、さらに赤々としています。同時に、天使のいる全天界は、その太陽の下にあるのが分かりました。第三天界の天使たちは、その太陽が絶えず見られ、第二天界の天使たちは頻繁に見えます。第一の最外部天界の天使たちには、ときどき見えます。天使たちにそそがれる熱も光も、霊界に現れるものはすべて、その太陽が源になっています。それについては、また後述します。

86. その太陽は、主ご自身ではありませんが、主から出ています。霊界の太陽として姿をあらわしているのは、〈神の愛〉と〈神の英知〉の発出です。主にあっては、愛と英知は一つです（これは第一部で述べました）。したがって、その太陽は、神の愛であるとされています。神の英知は、その神の愛からのもので、〈神の英知〉は、また〈神の愛〉です。

87. 霊界の太陽が、天使たちの眼には火のように見えるのは、愛と火が相応の関係にあることからきます。かれらとて、愛を自分の眼で見ることはできませんが、愛の代わりに、愛に相応するものを見ます。

人間とおなじく、天使も内部と外部があります。かれらの内部は、考えたり、味わったり、意図をもったり、愛したりする主体です。かれらの外部は、感じたり、見たり、話したり、行動したりする主体です。天使たちの外部は、すべて内部に相応するものであり、その相応は霊的相応であって、自然的相応ではありません。

〈神の愛〉はまた、霊的な人にとっては、火として感じられます。〈みことば〉で用いられる「火」は、愛を意味するもの、そのためです。イスラエルの教会では、神聖な火は、その愛を意味しました。それで、神にたいする祈りの中で、天上の火が、つまり〈神の愛〉が、心を燃やすようにと祈る習慣があります。

88. (83節で記したように)、霊的なものと、自然的なものとのあいだには、これほど大きな違いがありますから、自然世界の太陽から、霊界に入っていくものは何ともありません。すなわち、地上の光も熱も、そのほか地上のものは、いっさい入っていきません。霊界では、自然世界の光は暗黒です。自然世界の熱は死です。それにもかかわらず、この世の熱は、天界の熱の流入があって生かされ、この世の光は、天界の光の流入があって照らされています。この流入は、相応をとおしての流入であって、連続しているわけではありません。

2 熱と光は、太陽から発出する。その太陽は、〈神の愛〉と〈神の英知〉がもとになって実在する

89. 天使や霊がいる霊界には、人間がいる自然世界にあるような熱と光があります。熱は、熱として感じられ、光も同じく、光として見えます。ただし霊界の熱と光は、自然界の熱と光とは全く違って見えます。前述したように、そこには共通したものが何もありません。生きているのと、死んでいるのとの違いです。

霊界の熱は、そのものとして生きており、光も同じです。それにたいし、自然界の熱は、そのものとして死んでおり、光も同じです。霊界の熱も光も、純粋な愛である太陽から発出します。自然世界の熱と光は、純粋の火である太陽から発出します。

愛は生きており、〈神の愛〉は生命そのものです。それにたいし火は死んでいます。つまり太陽にある火は、死そのものです。すなわち、そこには何の生命もありません。

90. 天使たちは霊ですから、霊的な熱と光の中で生きる以外にはありません。人間は自然の熱と光の中で生きる以外にはありません。それは、霊的なものは、霊的なものと適合し、自然的なものは、自然的なものに適合するという意味です。もし天使が、自然の熱と光から、ほんの少しでも何かを吸収したとすると、死んでしまいます。天使の〈いのち〉に全くそぐわないからです。

人はみな、その精神の内部では霊です。人が死ぬと、自然の世界から完全に脱します。そして、自然世界にあるものをすべてそこに残し

たまま、自然のものは全く何もない世界に入ります。その世界では、自然とはっきり分離されていて、連続した意味での交流、たとえば、純度の濃淡のちがいのような連続した交流はありません。ただ、より以前のもの prius と以後のもの posterius とのあいだの交流です。その面での交流は、相応による以外の何ものでもありません。そのように、霊の熱は、自然の熱を純化したものではありませんし、霊の光は、自然の光を純化したものでもありません。全然別個の本質から生じたものです。

要するに、霊の熱と光とは、純粹の愛である太陽から、その本質をうけとっています。その愛は、〈いのちそのもの〉です。自然の熱と光は、純粹の火である太陽から、その本質を受けとっています。それには、何の生命もないことは前述したとおりです。

9 1. 一つの世界と、もう一つの世界では、その熱と光にこれほど大きな違いがありますから、一方の世界にいる者は、他方の世界にいる者を見ることができないことは明らかです。人の眼は、自然の光で見るため、この世の実体でできていますが、天使の眼は、かれらの世界の実体からできています。つまり、双方ともそれぞれの光を受けるにふさわしく造られています。肉眼で見えないからと言って、天使や霊が人間であることを信じないのは、その考えがいかに愚かであるか、以上でよく分かります。

9 2. 天使や霊が、この世の人間とはすべて違った光と熱のうちにあることは、今まで知られていませんでした。むしろ、他の光や

他の熱のあることなども、知られていなかったわけです。人の考えは、自然的な次元で内奥を極め、純粋なものを求めますが、それより高くはなりません。天使や霊たちの住まいがエーテルの中だったり、星々だったり、自然の内部だったり、あれこれ考える人がいても、自然を越え、自然の外へ飛躍することはありません。

ところが実際は、天使や霊は、自然を完全に越え、自然外です。かれら独自の世界があり、別の太陽の下にいるわけです。前述したように、その世界にあっては、空間は見かけに過ぎず、エーテルの中だったり、星々に住むことなどあり得ません。むしろ、人といっしょになっていて、その人の霊がもっている情愛と思考につながっています。人間は霊です。霊をもとにして考えたり意図したりしています。ですから霊界といっても、人がいるところにあるわけで、人とは別のところにあるわけではありません。

一口で言うと、人間はみな、その精神の内部では霊の世界にいます。霊たち・天使たちのまん中にいます。そして、その霊界の光をもとにして考え、霊界の熱をもとにして愛しています。

3 その太陽は神ではないが、神人に属する〈神の愛〉と
〈神の英知〉から発出している。熱と光も同じく、そ
の太陽から出る

93. この太陽は、天使たちの眼前にあり、天使たちに熱と光を提
供しています。とは言え、この太陽が主ご自身ではなく、主ご自身か

ら発出する最初のもの、靈的熱の最高源です。靈的熱の最高源は靈的
火です。それには、〈神の愛〉と〈神の英知〉が、何よりも最初に対
応しています。

したがって、その太陽は燃える火のように見えるし、天使たちにと
って火となりますが、人間にとって、そうではありません。人間にと
って火といえ、靈的火ではなく自然的な火です。そのあいだには、
生と死とのあいだくらいの違いがあります。靈の太陽はその熱で、靈
的な人たちを生かし、靈的なものを再生させます。自然的な太陽も、
自然的な人間と自然的なものを生かし、再生させますが、自然的太陽
みずからが行なっているのではなく、靈的な熱の流入をとおして行な
われており、自然の熱は、きっかけに過ぎません *succenturiatam*
opem fert。

94. 靈的火の中には靈的光の源泉があつて、その靈的火こそ、靈
的熱と靈的光になります。両者とも発出していくにつれ、減少します。
その減少には、段階がありますが、それについては後述します。古代
の人たちは、それを神の頭のまわりにある輪で表わしました。燃える
火とかがやく光の輪です。この種の表象は、神を人間として描く場合、
現在でも普通に使われています。

95. 愛が熱を生み出し、英知が光を生み出す事実は、経験からも
明白です。愛していれば、人は熱をもってきますし、英知をもとにし
て考えれば、光の中に物を見ているようです。そこで、愛が発出する
最初ものは熱であり、英知が発出する最初ものは、光であること

が分かります。それには相応があります。

つまり熱は、愛それ自身のうちに実在するものではありません。その愛がもとで、意志にあらわれ、それから肉体にあらわれます。光は、英知のうちに実在しているのではなく、理性による思考の中にあらわれ、それから〈ことば〉にあらわれます。言うまでもなく、愛と英知は〈熱と光〉にとつての〈本質・生命〉です。熱や光は、それから発出するものです。発出するものであるからこそ、相応しています。

96. 注意して考えれば、霊の光は自然の光とまったく違うことは、だれでも分かります。人が考えるとき、精神は光のうちに対象を見ます。霊的に考える人の場合、真理を見ます。それは日中でも真夜中でも同じです。

理性の理解力にかんして、光があった、見える、などと言います。ある人が、そのように「見える」と言うと、他の人はそれが「分かる」の意味で使っていると言います。理性は霊であり、自然の光で見ているではありません。自然の光は太陽からくるもので、人に備わったものではありません。そのように、理性は肉眼とはちがって、別の光をうけています。そして、その光は別の起源からきています。

97. 霊界の太陽が神ご自身だと思わないように注意してください。神ご自身は人間です。〈神の愛と英知〉から発出する最初のものは霊的火です。その火が天使たちの眼前に太陽として現れています。したがって、主がご自身を個人として *in Persona* 天使たちに現される時、人間として現されます。主は太陽の中におられる場合もあるし、

太陽の外におられる場合もあります。

98. 〈みことば〉の中で、主が「太陽」、「火」、または「光」と言われているのは、以上の相応がもとになっています。「太陽」とは〈神の愛〉と〈神の英知〉の双方を同時に見た場合の主を指しています。「火」とは〈神の愛〉から見た主です。「光」とは〈神の英知〉から見た主です。

4 霊の熱と光は、太陽である主から発出する点で一つになっている。それは、主の〈神の愛〉と〈神の英知〉が一つになっているのと同じである

99. 〈神の愛〉と〈神の英知〉が、どのようにして主において一つになっているかは、第一部で述べました。同じように、発出している熱と光も、一つになっています。つまり、発出している熱と光は、相応をとおして一つになっています。熱は愛に相応し、光は英知に相応します。

したがって〈神の愛〉は〈神の存在〉であり、〈神の英知〉は〈神の實在〉です（前14節～16節参照）。同じく霊の熱は〈神の存在〉から発出する神性であり、霊の光は〈神の實在〉から発出する神性です。また相互の一致があることで、〈神の愛〉は〈神の英知に属する愛〉であり、〈神の英知〉は〈神の愛に属する英知〉であるため（前34～39節参照）、〈霊の熱〉は〈霊の光に属する熱〉であ

るとともに、〈靈の光〉は〈靈の熱に属する光〉です。

以上のような一体化があるため、熱と光は、太陽としての主から発出する点で一つです。ところが、天使や人間にとって、これが一つのものとして受けとめられません。それについては後述します。

100. 主から、太陽を起源にしているように、発出している熱と光は、それが優れたものであればこそ、「靈的なもの（または靈性）*spirituale*」と言われます。また、一つ一つをとってみても、全体が一つになっているからこそ、「靈的なもの」です。

したがって、次に述べる「靈的なもの」の場合、熱と光の両者が一つとして考えられます。すなわち、その靈的なものがあるからこそ、靈界全体が「靈的」になります。この靈的なものの中に、靈界にあるものの全部の出発点があり、「靈的」という名を与えられています。また、その熱も光も「靈的」と言われています。

それは、神は「靈」と呼ばれていているからです。「聖靈」という場合の神は、発出する神を指します。神はおん自らの本質からして、「エホバ」と言われますが、その「発出される神」によって、天界の天使と教会の人間を生かし、照らされます。

101. 熱と光は、太陽から出るときのように、靈的なものとして主から発出し、この二つが一つになっています。それは、自然界の太陽から出る熱と光をとおして、はっきりします。この熱と光の二つも、太陽から出るときは、一つです。もちろん、地上において一つにならないのは、太陽が原因ではありません。むしろ地球が原因です。地球

は毎日、地軸のまわりをまわっており、毎年、黄道にそって公転しています。したがって、熱と光が一つになっていないように見えます。真夏になると、光よりも熱の方が多く、真冬になると、熱よりも光の方が多く見受けられます。

霊の世界もよく似ています。ただ霊界にあつては、地球は自転も公転もしません。天使たちは、程度の差はあつても、主に体を向けます。主に向いていれば向いているほど、熱をより多く、光はより少なく受けます。主に向いている程度が下がると、光をより多く、熱をより少なく受けます。

したがって、天使たちからなっている天界は、二つの王国がはっきり区別されています。一つは天的王国であり、もう一つは靈的王国です。天的天使たちは、熱のほうを多く受けますが、靈的天使たちは、光のほうを多く受けます。天使たちが、その熱と光をどのくらい受けるかによって、かれらが住んでいる土地も現れてきます。天使たちは、状態の変化でこれが起こりますが、これを地球の自転・公転に代わるものと考えれば、相応がはっきりします。

102. 靈性 *spiritualia* はすべて、靈界の太陽からくる熱と光がもとになっています。そして、この熱と光は、それなりに見ると、同じように一つになっています。ただし、天使たちの情愛から発したものとして見ると、熱と光は一つになっていません。それについて述べると、次のようになります。

天界で、熱と光が一つになっているとすれば、それは天使たちのもとでは春季です。熱と光が一つになっていないとすれば、それは夏季

か冬季です。冬季と言っても、寒冷地帯の冬季でなく、温暖地帯の冬季です。

愛と英知の双方が同じ程度に受けとめられると、それが天使にとって最適です。ですから天使は、その本人がもっている愛と英知の一体化にしたがって、天界の天使になります。これは教会に属する人にとっても同じで、その本人の愛と英知、あるいは仁愛と信仰が、一体化しているかどうかによります。

5 人が自然界の太陽を眺めるのと同じく、霊界の太陽は、天使たちにとっては、中空の位置にあらわれる

103. この世を去るまで、人はよく、神が頭上高くましますとか、主は、天界で天使たちのまん中にましますと考えがちです。神が頭上高くましますと考えるのは、〈みことば〉の中で、神は「いと高き者」と呼ばれたり、「高きに住まいたもう」と言われているためです。だからこそ、祈ったり、礼拝したりするとき、眼をあげたり、手を上にあげたりします。実は、「いと高き者」とは、最も内部にある者 *intimum* の意味ですが、それが分からないためでしょう。

主が天界では、天使たちのまん中にましますと考えるわけは、主が他の人間と何の違いもないとか、天使と同じくらいの方と考えているからでしょう。主は、宇宙を支配される唯一の神そのものですが、それを知らないためです。天界で、天使たちのあいだにいたのでは、ご自分の一瞥で、宇宙を見、ご自分の配慮と統治のもとにおかれること

はできません。霊界にいる者たちの眼前にあつて、太陽のように照っていないとすれば、天使たちに光を送るわけにもいきません。天使たちは霊的存在ですから、かれらには本質的に霊的光しか適合しません。天界における光は、地上の光をかぎりなく越えています。それについては、段階について述べるところで触れます。

104. 天使たちが、光と熱をいただいている太陽について述べておきます。その太陽は、天使の住む地上高く姿を見せ、ほぼ四十五度の角度で中空にあります。また、この世の人間が太陽を見るような距離で見えています。その太陽は、同じ高さと同じ距離を保っていて、たえず姿をあらわし、沈むことはありません。

その結果、天使たちにとっては、一日とか一年のような時間区分はありません。また、朝・昼・夕・夜のような一日の推移もありませんし、春・夏・秋・冬のような一年の推移もありません。むしろ、永久の光と永久の春です。時間に代わるものとして、状態があることは前述しました。

105. 霊界の太陽は中空の高さに見えますが、それにはまず次の理由があります。

第一の理由。その太陽から発出する熱と光は、中程度で万遍なくそそぎ、ちょうどいい具合です。もしこの太陽が中空よりもっと高くなると、光よりも熱を多く放出するでしょうし、中空より低くなると、熱よりも光を多く放出するでしょう。これは、この世でも同じです。天空の上方と下方ではちがってきます。上方に行くと、光よりも熱が

多くなり、下方に来ると、熱よりも光が多くなります。すなわち光は、夏も冬も変わりません。熱のほうが、太陽の高さによって、増えたり減ったりします。

第二の理由。霊界の太陽が、天使たちのいる天界にあって、中程度の高さに現れる理由は、天使的天界の全体にわたって、とこしえの春が生まれるためです。天使たちは、それによって平和の状態を保てます。つまりこの状態は、この世での春季に相応しています。

第三の理由。これによって天使たちは、いつも主に顔を向け、主を眼で見ることができます。天使たちは、体をどの方向にむけても、顔は東、つまり主の方向です。霊界では、このような特殊なことがあります。もし霊界の太陽が、中空より上か下に姿を現すなら、そのようなことはありません。もし頭上の天道に位置したら、決してそのようなことは起こりません。

106. 自然の太陽は人間から離れて見え、同じように、霊界の太陽は、天使たちから離れて見えます。万一、そのように離れていないとしたら、天使のいる全天界も、その下にある地獄も、さらにその下

にあるわれわれの地球も、主の直観・配慮・遍在・全知・全能・摂理を受けられなくなるでしょう。

わたしたちの世界にある太陽も、それに似ています。現在そう見えているように、地球からの距離がなかったらどうでしょう。熱と光をとおして全地にあまねく姿をあらわし、威力をもつことができないでしょう。つまり、霊界の太陽の代わりになることはできないでしょう。

107. 太陽は二つあって、一つは霊の太陽、一つは自然の太陽で、これを知っておくことは、ひじょうに大切です。霊の太陽は霊界にいる人たちのため、自然の太陽は自然界にいる人たちのためです。いずれ後述しますが、これが分かっていると、創造についても人間についても、正しく理解できないことになります。結果は実にはっきり見えています。ただ、このような結果の原因については、同時に考えない場合、闇夜に包まれ、結果が見えなくなります。

- 6 霊界における太陽と天使たちとのあいだの距離は、天使たちがどの程度〈神の愛〉と〈神の英知〉を受けるかによって決まる

108. 錯覚 fallaciae はすべて悪人や無学な者にあり、見かけを本物と思うところから起こります。見かけ apparentiae が、見かけである間は、見かけ上の真理です。それに基づいて、人はそれぞれ考えたり話したりします。ところが、それを真理そのものと受け取り確信してしまうと、見かけ上の真理が、虚偽や錯覚になります。

例えば見かけ上、太陽は地球のまわりを毎日回転し、毎年、黄道に沿って進んでいます。それがそのとおりでと確信していないあいだは、見かけ上の真理で、それに従って人は考え話すことができます。太陽が昇ったり沈んだりすると言えるし、それによって朝・昼・夕・夜があるとと言っても、差し支えありません。太陽は今、黄道の進行度から言えば、どこにあり、高さはどのくらいかとも言えますし、それに

よって、春・夏・秋・冬があると言えます。ただし、その見かけが、そのまま真理だと確信してしまうと、その本人は偽りをもとにして考え、話していることとなります。これは、自然界や、民事・道徳上の事柄だけでなく、それに霊的な事柄についても、限りなく多くの〈見かけ〉について言えます。

109. 霊界の太陽がもっている距離感についても、同じことが言えます。この太陽は、主にある〈神の愛〉と〈神の英知〉の発出した最初のもので、真理には、いっさい距離感はありません。距離感とは、天使たちが〈神の愛〉と〈神の英知〉を自分なりに受け入れることによって生じる見かけです。

霊界における距離感とは、見かけです。これは、神は空間のうちには存在していないと述べた7～9節、および、神は空間に関係なく、すべての空間を満たしておられると述べた69～72節から、汲み取れるでしょう。空間がないところには、距離もありません。同じように、空間が見かけだとすると、距離感も見かけです。距離は、空間があって生じるものだからです。

110. 天使たちにとっては、霊界の太陽は距離感をもって見えませんが、それは、〈神の愛〉と〈神の英知〉が、天使たちにとって適度の熱と光にあんばいされて、受けとられているからです。

天使は被造物であり有限であるため、太陽にある根源的段階の熱と光を伴う主を、そのままお受けすることはできません。そんなことをすると、たちまち燃え尽きてしまいます。したがって天使たちは、自

分たちの〈愛と英知〉に呼応した熱と光をとおして、主をお受けします。

これは、次のように考えれば理解できます。最外部天界の天使は、第三天界の天使たちのもとへ、のぼって行くことができません。万一のぼって、第三天界に入ったとしても、失神したようになって倒れ、その天使の生命は、死んだように疲れ果てます。その原因は、愛と英知の程度が低いからです。〈愛がもっている熱〉と〈英知がもっている光〉が、ついていけないからです。もしその天使が、太陽にまでのぼって行き、その火の中に入ったら、どうなるでしょう。

天使たちは、主を受け入れる度合いが違うように、おたがいが違って見えます。第三天界と呼ばれている最高の天界は、第二天界の上に現れ、第二天界は第一天界の上です。天界それ自身に距離があるわけはありませんが、距離があるように見えます。主ご自身は、最外部天界にいる天使たちにも、第三天界にいる天使たちと同じように、現存しておられます。距離感をあたえるのは、その受ける主体、つまり天使の側にあるので、主の側にあるものではありません。

111. 以上は、自然的な考え方では、なかなか分かりません。自然的考え方には、空間がつきものだからです。でも、空間を含んでいない霊的な考え方をすれば、よく分かります。天使たちは、このような霊的な考え方をします。

それになお、愛と英知が、空間を通して発展するものではないことは、自然的な考え方によっても理解できます。〈神の愛〉と〈神の英

知)にまします主は、空間を必要としません。一人ひとりの受け皿次第なのです。なお、主はだれのもとにもましますと、ご自身教えられました(マタイ 28・20)。また、主を愛する人たちのもとに、住まいを設けられます(ヨハネ 14・21、[23])。

112. 以上は、天界にとっても、天使たちにとっても、明白ですが、高度の英知によって考えなくては分かりません。それは、人間についても同じことが言えます。人はその精神の内部は、同じ霊界の太陽で温まり照らされます。主から愛と英知とをいただく分だけ、その太陽の熱で温まり、その太陽の光で照らされています。

天使と人間との違いは、天使たちが、ただ霊界の太陽の下にしかないのにたいし、人間は、霊界の太陽の下にだけでなく、この世の太陽の下にもいます。人間の肉体は、双方の太陽の下にいないとしたら、実在し存続することはできません。天使たちの場合、その体は霊的体ですから、そのようなことはありません。

- 7 天使たちは、主のうちにあり、主は天使たちのうちにある。
なお、天使たちは受け皿であるという点で、主おひとりだけが天界である

113. 天界は「神の住まい」また「神のみ座」と呼ばれています。それで、国王が自分の王国にいるように、神はそこにましますと信じられています。しかし、神つまり主は、天界の上にある太陽のうちに

おられます。

前二節をとおして、天界では、神ご自身の臨在は、熱と光のうちにあらわれると述べてきました。ただし主が天界にましますのは、天界にあつて、自らの中にいますかようです *est ibi ut in Se*。なぜなら、(108～112節でちょうど前述したように)、太陽と天界とのあいだの距離は、距離とはいえ、見かけ上の距離でしかないからです。

そして、その距離感なるものが、見かけでしかないわけですから、主おん自ら、天界にましますということは、天界の天使たちの愛と英知のうちにあることとなります。しかも、主は全天使の愛と英知のうちにおり、天界は天使たちによって成っているため、主は、全天界にましますということとなります。

114. 主は、天界にましますというだけではなく、主は天界そのものです。実際、天使を天使にしているのは、愛と英知であつて、その二つは、天使のうちにあつても、主からのものです。したがって、主は天界であるということになります。

天使たちは、自分たちにあるエゴ *proprium* をもとにして、天使になっているではありません。天使のエゴも、人間のエゴとまったく同じく悪です。天使たちといつても、かつてみな人間でしたし、そのエゴは生まれつき人間にこびりついたものです。それが、ただ遠くへ追いやられるだけで、いいわけです。つまり、脇へ追いやられれば、それだけ愛と英知を受けます。すなわち、自分たちの中に、主をお迎えすることになります。

だれでも、理性を少々高めて考えれば分かります。主は、天使たちの中でも、ご自分の固有のもの *proprium suum*、すなわち愛と英知のうちには、お住まいにはなれません。ですから天使たちの中とは言え、エゴの中に住まわれるわけではありません。エゴは悪だからです。したがって、悪が脇に移されれば移されるほど、主は人の中にお住まいになり、またその人は、それだけ天使になっていきます。

〈神の愛〉と〈神の英知〉こそ、天界の天使を天使にします。この神性こそ、天使のうちにある「天使性 *angelicum*」と言われます。そして天使が天使であるのは、自分の力によるのではなく、主のみ力によります。同時に天界が天界であるのも、主のみ力によります。

115. 主が天使のうちにましまし、天使が主のうちにあるといっても、その結合がどんなものか知らないなら、よく分からないでしょう。この結びつきは、主が天使に結びつくこと、天使が主に結びつくことであり、相補的な結合関係です。それを天使の側からみると、次のとおりです。

天使は、人間と同じように、愛や英知が自分から出ているようにしか感じません。それゆえ自分の愛であり、自分の英知だと思ってしまう。たしかに、そのように感じることで、結びつきも生まれます。その結びつきがあつて、主は天使のうちにいまし、天使は主のうちにいますことになります。愛と英知を感じとる天使は、それを自分から出たものと感じとらないかぎり、主が天使とか人間の中に存在することはありません。こうして初めて、愛や英知が受けとめられ、受けとめられたあと、そのまま維持され、愛し返されるようになります。こ

のようにして、英知をもった天使になり、英知を味わう状態が続きます。

愛していること、学んでいること、吸収していることを、自分のものとして感じとって、初めて、神や隣人を愛したいと思い、英知を味わいたいと思うものです。それを自分のものとして維持することができると、その自覚があつて始まります。それがなかったら、愛も英知も、その流入の納まるどころがなく、流れも逸れていたり、何の影響もなく終わってしまいます。そうなれば、天使も天使でなく、人間も人間ではなくなります。むしろ魂のない存在に化してしまいます。したがって、結びつきには、どうしても相補性が必要であることが分かってきます。

116. それでは、天使が自分のものとして感じとり、それを受け、保有しながらも、それが天使からのものではないとは、どんなことなのでしょう。（前述したように、天使が天使であるのは自分の力によるのではなく、自分の身にある〈主からのもの〉によります）。それについて述べると、実は、次のようになります。

天使には、それぞれ自由意志 *liberum* と合理性 *rationalitas* があります。この二つの能力が備わっているのは、主からの愛と英知を受け入れる器になるためです。ところが、この自由と理性の二つは、天使のものではなく、天使に備わる主よりのもの *est Domini apud angelum* です。ところが、この二つは、天使の〈いのち〉に深く密着していて、あたかも天使の生命のつなぎ *injuncta* とも言えるほどで、結局は自分固有のエゴにさえ見えます。それで、この二つ

の能力をつかって、考え、意図し、話し、行動します。その二つをつかって、考え、意図し、話し、行動するとき、それが自分の力によるものと思われます。これが相補性 *reciprocum* を生み、そこから結合ができます。

ただし、天使が愛と英知は自分のうちにあると信じ、それを自分の所有するものとして、自分に帰すれば帰するほど、その天使の中にある天使性が失われ、それだけ天使は、主と結びつかなくなります。天使は、真理のうちにとどまらなくなるからです。真理は、天界の光と一体であるため、それだけ天界のうちにもいられなくなります。そこから、主をもとにして生きていることを否定し、自分から生きているものと信じ、さらに、自分には神の本質が備わっていると思います。以上、二つの能力、自由意志と合理性のうちに、天使的生命、人間の生命があるわけです。

以上、天使には、主と結びつくために相補性が存在し、その相補性もそれなりの能力として見れば、天使のものではなく、主のものであることが分かります。したがって、主のものを自分のものとして感じとる相補性を悪用すれば、そこに主のものを着服するわけで、天使性を失い墮落します。

以上の相補的結びつきについては、主ご自身がヨハネ福音書をとおして教えておられます(14・20～24、15・4～6)。同時に、主が人と結びつくことも、人が主と結びつくことも、主の〈みことば〉と呼ばれている〈主からのもの〉です(ヨハネ 15・7)。

117. アダムは、自分の力で神を愛し、英知を味わう自由、すな

わち自由選択力をもっていたけれど、その自由選択力がアダムの子孫をふくめて、墮落してしまったと考える人がいます。しかし、それは誤りです。人間は、〈いのち〉ではなく、〈いのちの器〉です（前4～6、54～60節を参照）。

〈いのちの器〉は、何か自分のうちから出る力で、愛したり英知を味わったりはしません。ですから、自分の力を源にして、英知を味わい、愛そうと思う場合、人は英知と愛の城から下落し、樂園から追われる結果になりました。

118. 天使について今まで述べたことと同じことが、天使たちから成っている天界についても言えます。神は、最大のものの中にも、最小のものの中にも、同じように存在する方です（前77～82節で述べました）。

また、天使や天界について言われたことと同じことが、人や教会についても言えます。天界の天使と、教会に属する人は、結びつきをとおして行動をともにしています。しかも、教会に属する人は、その精神の内部では天使です。教会に属する人とは、教会が心の中に内在している人を指します。

**8 霊界では、太陽として主が姿を現されるところが東である。
その他の方位は、そこから決められる**

119. 霊界の太陽と、その本質、その熱と光、そして主の臨在

について述べてきました。さて、ここで霊界の方位について記します。霊界の太陽や、霊界について述べるわけは、神について、その愛と英知について述べているために、ほかなりません。〈神の愛と英知〉という源泉から触れていくのではなく、霊界の太陽について触れたとすると、原因からではなく、結果から学んでいくことになります。

ところが結果は、その教えるところは、結果に過ぎません。結果が明らかになったとしても、原因は明らかになるとは限りません。それにたいし、原因は、結果を明白にします。原因から結果を知ることこそ、英知の味わいです。結果から原因を探求しても、英知を味わうことにはなりません。なぜなら、探求する人が「原因」と呼んでいるとしても、それが虚偽として姿を現すわけで、これこそ英知をあざむいていることになります。

原因は先にあるもの *priora* であり、結果は後からつくるもの *posteriora* です。後からくるものをもとにして、先にあるものを見通すことはできません。先にあるものを出発にして、あとからくるものを知ります。これが秩序です。まずは霊界について、ここで述べますが、それは霊界が原因だからです。あらゆる原因はそこにあります。自然世界については、そのあとになります。ここで見えてくるものは、すべて結果だからです。

120. ここで、霊界における方位について述べることにします。霊界には、自然世界と同じように方位があります。ただし、霊界の方位は、霊の世界であるため、霊的方位です。自然世界の方位は、自然の世界であるため、自然的方位です。両者には、共通点が全くないほ

ど違っています。

両者とも、東・西・南・北と呼ばれる四方位があります。自然界の四方位は南に太陽があることで、恒常的に決められています。その反対に北があり、一方の側面が東で、他方が西です。方位はすべて、その場所の南を基準にして決められていきます。どこにあっても、太陽が真昼に位置するところは、いつも同じで固定しています。

それにたいし霊界では、方位は太陽によって決められますが、その太陽はいつも特定の位置にあり、姿を現すのは東です。したがって、霊界における方位の決定は、自然界におけるように、南を標準にするのではなく、東を基準にします。それに対するのが西です。そして、一方に南があり、その反対側に北があります。以上の方位は、霊界の太陽をもとにしているのではなく、霊界の住人つまり、天使と霊たちをもとにしています。それについて今から述べることにします。

121. 霊界の方位は、太陽である主を源にしているからこそ、霊的方位です。また、その方位にしたがって生きているのは、みな天使や霊で、その住まいも霊的住まいです。かれらは主からくる愛と英知をうけることによって、住まいを定めています。愛の段階が高い人は、東に住み、愛の段階が低い人は、西に住み、英知の段階が高い人は、南に住み、英知の段階が低い人は、北に住んでいます。

そのため〈みことば〉で、「東」は、その最高の意味では主を指します。相対的な意味では主への愛です。「西」は、主への愛が減少しつつあることを指し、「南」は、光のうちにある英知、「北」は、陰のうちにある英知です。また、その状態に似ているものについては、

次に述べます。

122. 霊界では、方位はすべて東によって決められています。そして「東」は、その最高の意味では主を指し、〈神の愛〉の意味です。したがって東は、万物の源である主のこと、主ご自身への愛の意味です。また、人がその愛のうちになければ、それだけ主から遠ざかり、西に住んだり、南に住んだり、または北に住んだりします。そして、愛を受ける度合いに応じて、その距離を決めます。

123. 主は太陽として、たえず東におられます。古代の人たちは、信心にかんしては、すべて霊性の表象を用いていました。それで礼拝をするときは、顔を東に向けていました。同じようなことが、あらゆる信心業で行われていたため、神殿も東のほうを向いています。現在でも神殿が東に向いて建てられるのはそのためです。

9 霊界における方位は、〈太陽としての主〉がもとになっているのではなく、それを受ける天使たちがもとになっている

124. 前述したように、天使たちは、それぞれ区分けして住まいを設けます。東方位に住んでいる者、西方位に住んでいる者、南方位に住んでいる者、北方位に住んでいる者がいます。東方位に住んでいる者は、愛の段階が高く、西方位に住んでいる者は、愛の段階が低く、

南方位に住んでいる者は、英知の光のうちにあり、北方位に住んでいる者は、英知の陰にいます。住んでいるところが違うのは、太陽である主によるように見えながらも、実際は天使たちによります。

主は、愛と英知の段階で大小はありません。それはちょうど、太陽としても、熱と光の度合いが、人によって大小があり得ないのと同じです。主はどこでも同じです。でもその受け入れる度合いが、それぞれちがった段階をもっています。その度合いによって、おたがいに遠近の距離があらわれ、方位によってそれぞれ違って見えてきます。

要するに、霊界における方位は、愛と英知の受ける度合いによる相違であり、太陽である主からの熱と光を受取る度合いです。霊界における距離感は、見かけであると前述したのは、その意味です（108～112節）。

125. 方位は、天使たちが愛と英知を受取る度合いによって、様々に違ってきます。そこから、見かけ上での多様性がうまれることについて触れていきます。

前述したように、主は天使のうちにましまし、天使は主のうちにいます。ところで、主は太陽として、天使の外に現れます。そのため主は天使を、太陽からごらんになり、天使は主を、太陽のうちに仰ぐように見えています。それは鏡の中の姿に似ています。

したがって、以上の見かけから話す場合、次のようです。主は一人ひとりの天使を、顔と顔を合わせるように見つめ、ご覧になりますが、天使たちは主をそのようには見ません。主のみ力によって、主への愛のうちにある人は、まともに主を見ます。東方と西方にいる人たち

はそのように見ます。英知が増してくると、主を斜め右の方に見ますが、英知が減ってくると、主を斜め左に見ます。前者は南にいますが後者は北です。主を斜めに見るというわけは、愛と英知が一つのものとして主から発しているにもかかわらず、前述したように、天使によって、一つのものとして受けとめられていないからです。また愛の域を越えるような英知は、英知のように見えますが実際にはそうではありません。余分の英知には、愛からの〈いのち〉が宿っていないから、英知ではないのです。

以上のような事情から、霊界では、天使たちの住まいは、方位にしたがって現れ、しかもそれが、受ける側の相違によることが、明らかになります。

126. 霊界では、愛と英知をさまざまな器で受けることで、方位が決まります。それで、天使は自分もっている愛の増減によって、方位を変えていくことが分かります。すなわち、方位は太陽である主が決められるのではなく、天使の器が決めます。これは、人の霊の面でも同様です。自然世界でどの地域に住んでいても、霊界ではその人の霊は、特定の方位にいるわけです。前述したように、霊界での方位は、自然の世界での方位とは、何の共通性もありません。この世では、肉体の居場所を言いますが、あの世では霊によって決まります。

127. 天使も人間も、愛と英知は一つになって働きます。それは体のあらゆる部分に対となって存在します。眼・耳・鼻腔は対になっています。手・腰・足も対になっています。脳も両半球に分かれてい

ます。心臓には室が二つあります。肺臓には葉が二つあります。その他にも同じことがあります。

天使も人間も、右の部分と左の部分があります。右の部分は、すべて英知の出所である〈愛〉に関係があり、左の部分は、すべて愛の出所である〈英知〉に関係があります。同様に、すべて右の部分は、真理の出所である〈善〉に関係があり、左の部分はすべて、善の出所である〈真理〉と関係があります。〈愛と英知〉また〈善と真理〉は、天使にも人間にも対になっていて、一つになって働きますが、それは主に向かって、一方向を目ざしているためです。これについては、いずれ後述することが多々あります。

128. 以上から、主が天界へ行く恵みをほどこされるのは、気ままな思召しによると考える人は、どれほどのあやまりと虚偽に落ち込んでいるかが分かるでしょう。ある人が他の人より英知を味わい、愛することができるとしても、それは、主の気ままな贈物ではありません。主は、人それぞれが英知をもち、救われることを、平等に望んでおられます。主は、あらゆる人にその手段を提供されます。人それぞれその手だてを受け、それに従って生活し、それに従って英知を味わい、救われていきます。主は、あの人にたいしても、この人にたいしても同じです。ただし天使なり、人間なりが、それを受けるとき、受けとり方と生命が違うため、おたがいが違ってきます。

さて方位について、それに応じて決める天使たちの住まいについて記しました。それで多様性は、主の側からくるのではなく、受ける側からくることが分かります。

10 天使たちは、太陽である主に、たえず顔を向けている。

こうして、南は右、北は左、西は背後ということになる

129. ここで天使たちについて、また太陽としての主に、天使たちが顔を向けることについて述べたことは、すべてその霊の面で、人間にもあてはまります。人は、その精神の面では霊です。そして、愛と英知のうちにあれば天使です。したがって死が来て、この世の自然から吸収した外部のものが剥がれたあとは、霊または天使になります。天使たちは、太陽のある東の方、つまり主にいつも顔を向けていますが、それと同じことが人についても言えます。

主のみ力で、愛と英知のうちにいる人は、主を見、主の方に心を向け、主を眼の前においています。つまり、天使として生きているのです。現実的に天界のうちに存在し、また、現実的に人の霊の面で存在しているので、この世でも、このようなことがあるわけです。人は祈るとき、どの方位にいても、顔を主の方に向け、自分の眼前に主を見るのではないのでしょうか。

130. 天使たちは、太陽としての主に向かって、たえず顔を向けています。その理由は、天使たちは主のうちにあり、主はかれらの中にあって、主が内部で、天使たちの情愛と思考をみちびき、それをいつもご自分の方に向けておられるからです。したがって天使たちとしては、太陽としての主がおられる東の方を見ないわけにはいきません。だから天使たちは、主の方向に自分の体を向けるというより、主がか

れらを自分の方へ向けておられるのが分かります。

天使たちが心の中で主について思うとき、主について自分の中で思っているわけです。そして、このような内部の思考には距離感がありません。距離感をつくるのは、視覚といっしょに働いている外部思考です。理由は、外部思考は空間のうちにあるのにたいし、内部思考は、そうではないところからきます。霊界ではそうなりますが、空間のうちにはない場合でも、見かけ上の空間はあります。でも人は、神についても空間をもとにして考えますから、以上のことは、なかなか分かりにくくなります。

神はどこにでもおられます。ただし、空間の中におられるわけではありません。ですから、天使の中にも、天使の外にも、おられます。したがって天使は、自分の中にも自分の外にも、神、すなわち主を見ることができます。愛と英知をもとにして *ex amore et sapientia* 主を思うとき、自分の中に主を見ますが、愛と英知について *de amore et sapientia* 主を思うとき、自分の外に主を見ます。ただし、以上については、とりわけ「主の遍在・全知・全能」を扱うところで記します。

ただ、かのいまわしい異端に陥らないように注意することです。神は人間にご自分を注ぎ込まれるとか、人間のうちに内在する一方、そのため、ご自分のうちの内在が減るといった考え方です。むしろ、神はどこにでも存在し、人の内部にも外側にも存在します。（前7～10、69～72節で前述したように）、神は空間に関係なく、あらゆる空間に存在しています。人間のうちに存在するとすれば、分割できるものになったり、空間に限定されるものになったりします。

そして人は、自分が神であると思ってみたりもします。この種の異端は、霊界では死骸のような臭いがするほど、いまわしいものです。

131. 天使たちが主の方を向くとは、自分の体をどの方向に向け、太陽としての主を、自分の前に見ます。天使は自分の体を周囲に向け、自分のまわりにあるいろいろなものを見るとき、太陽としての主が、いつも天使の顔の前方に現れます。これは、不思議と思われませんが、本当です。わたしは、主を太陽として見る機会が与えられましたが、そのとき自分の顔の前方に主を見ていました。わたしは長年のあいだ、この世でどの方位に体を向けても、同じように主を見てきました。

132. 主は太陽として東にあります。天界にいる全天使の顔の前面です。したがって天使たちにとって、右が南、左が北、後ろが西です。これは、体をどちらに向けてもそうなります。なぜなら前述したように、霊界では、方位はすべて東を基準にして決められるからです。そういうわけで、天使たちには、東はいつも眼前にあって、その方位そのものの中にいます。むしろ、自分自身が方位を決定しているわけです。したがって、（前124～128節で述べたように）、方位は太陽である主によって決まるのではなく、天使たちが自分たちの受ける側によって、決めていることとなります。

133. 天界は天使たちからなっており、天使たちは、以上のとおりです。すなわち、全天界が主の方を向いており、その向きにしたが

って、主は天界を一人の人間として、しかも主のご覧になるまま、治めておられます。天界は主のおん目には、一人の人間として存在することについては、小著『天界と地獄』（59～87節）をごらんください。そこに天界の方位についても記されています。

134. 天使には、以上のような方位があり、それが全天界にもあって、あたかも刻印されたようになっていきますから、天使はどこへ行っても、自分の家、自分の住まいが分かります。これは、この世の人間と違うところです。人は、それ自身の方位から、家や住まいを知るわけではありません。それは、空間をもとにして考えるからです。つまり、霊界の方位は、まるで共通点のない自然世界の方位から考えると、そうなります。

ところが、トリやケモノには、以上のような知識が内在していることが、数多くの実験で知られています。つまり、みずからに備わったもので、自分の家や住まいを知ります。これは、霊界にもあることを示すしるしなのです。たしかに、自然の世界に実在するものは全部結果です。そして霊界に実在するものは、全部その結果をもたらした原因であるわけです。霊界が原因になっていないものは、自然世界には存在しません。

11 天使たちの心も体も、すべてその内部にあるものは、太陽としての主に向かっている

135. 天使たちにも、理性と意志、顔と体があります。また、理性と意志の内部のもの、顔と体の内部のものがあります。理性と意志の内部のものとは、天使たちの情愛と思考の内部にあるものです。顔の内部のものは脳です。体の内部のものは内臓です。その内臓の最初のもの、心臓と肺臓です。

ひとことで言うと、地上の人間にある個々全体は、天使にもあります。したがって天使とは、人間のことであります。内部のものが欠けた外部の形相 けいそう forma では、人間にはなりません。むしろ外部の形相は、内部のもの一つになり、または内部のものが原因になって出来ています。そうでなければ、人間のイメージでしかありません。内部に〈いのち〉の形相がないので、〈いのち〉がないわけです。

136. 周知のとおり、意志と理性は思いのままに体をコントロールしています。理性で考えたことを口が話し、意志が欲することを体が実行します。以上から、体は理性と意志に相応関係をもつ形相であることが分かります。また、理性や意志も形相です。したがって体の形相は、理性の形相、および意志の形相に、相応関係をもっています。ただし、ここでは体の形相と、理性・意志の形相がどのようになっているかについては触れません。

ただ、双方の形相には数え切れないほどの複雑さがあり、しかも、それがおたがい相応関係をもっているため、双方が協力し、一つになって働きます。精神、すなわち意志と理性が、体を思いのままコントロールするのはそのためで、まるで自分のもののようにします。

以上により、精神の内部のものは、体の内部のもの一つになって

働き、精神の外部のものは、体の外部のものと一つになって働く関係がわかってきます。〈いのち〉の段階については前述したとおりですが、精神の内部のものについては後述します。体の内部のものについても、いずれ後述します。

137. 精神の内部のもの *interiora mentis* は、体の内部のもの *interiora corporis* と同調して働きます。その結果、精神の内部のものが太陽としての主の方向に向くと同時に、体の内部のものも主に向かいます。それにたいし精神の外部のもの *exteriora mentis* と、体の外部のもの *exteriora corporis* は、それぞれの内部のものに依存しているため、内部のものと同調して働きます。外部の働きは内部にかかっています。なぜなら共通のものは、共通といえるものすべてを個々の部分から得、個々の部分に依存しているためです。

以上で明らかになります。天使は太陽としての主に顔と体を向け、同時に、自分の精神と体のすべてを主のほうへ向けます。人間についても、同じことが言えます。人は愛と英知のうちにある時そうなりますが、自分の眼前にたえず主を据えることです。つまり、自分の両眼と顔面を主ご自身に向けているだけでなく、全心全霊で、つまり意志のすべてと理性のすべてをもって、しかも同時に体のすべてをもって、主に眼を注ぎます。

138. このようにして主の方に向かうことは、実際上の方向づけであるとともに、一つの高揚です。内部がひらかれることによって、天界の熱と光のうちにあげられます。内部がひらかれると、精神の内

部のものの中に、愛と英知が流れ入り、体の内部のものの中に、天界の熱と光が流れ入ります。そこで、高揚 *elevatio* が起こるわけで、これは、霧の中から大気中に、大気からエーテルへとぼっていきようなものです。〈熱と光〉にともなった〈愛と英知〉こそ、主が人のそばにおられることです。前述したように、人はそこで、主ご自身に方向づけをします。

愛と英知のうちにはない人の場合、反対のことが起こります。まして、愛と英知に反する人の場合は、なおさらです。そのような場合、本人の精神と体の内部は閉ざされます。いったん閉ざされると、外部のものは主に反抗するような方向に動きます。それこそ人の本性なのです。そして、主から後ろの方へ向きなおります。背後に向かうことは、地獄の方へ向かうことです。

139. 主の方に向かう実際の方向づけまたは改心 *conversio* は、愛と同時に英知から始まります。愛からだけでなく、英知からだけでもありません。愛だけでは、みずからの実在を失なった存在のようです。愛は、英知のうちにあって初めて実在するようになるから

です。また、愛のない英知は、その存在を失なった実在のようです。英知は愛を出所にして、初めて実在するようになるからです。

たしかに、英知のない愛がありますが、それは、人のもつ愛であって、主の愛ではありません。また、愛のない英知もありますが、その英知は、たしかに主のみ力によりながらも、主をそのまま受けていません。ちょうど冬の光のようです。太陽による光であっても、太陽の本質である熱が、その中にはありません。

12 どんな性格の霊であっても、霊はそれぞれ自分の支配的愛のほうに、いつも向いている

140. 霊とは何か、天使とは何かを、あらかじめ記します。人はみな死んでから、まず霊たちの世界に行きます。これは、天界と地獄の中間であって、人はそこで自分なりの時間、あるいは状態をすごし、自分なりの〈いのち〉にもとづいて、天界あるいは地獄にむけて準備します。

この世界にいるあいだ、人は「霊」と呼ばれます。この世界から天界に引きあげられた場合、人は「天使」と呼ばれ、地獄に投げ込まれた場合、人は「サタン」または「悪魔 diabolus」と呼ばれます。

霊たちの世界にいるあいだ、天界に向けて準備中の人は「天使的霊」と呼ばれ、地獄に向けて準備中の人は「地獄的霊」と呼ばれます。天使的霊は、そのあいだ天界とむすばれているのにたいし、地獄的霊は地獄とむすばれています。

霊たちの世界にいる霊は、みな人間につき添っていますが、それは、人間もおなじく自分の内部が天界と地獄とのあいだにいるからで、しかもつき添いの霊を介し、自分のもつ〈いのち〉にしたがって、天界または地獄と交流します。忘れてならないことは、「霊たちの世界 mundus spirituum」〔訳注：「精霊界」と訳すこともある〕は、「霊界 mundus spiritualis」とは、別であることです。今まで述べたことは「霊たちの世界」についてであって、「霊界」とは、

霊たちの世界・天界・地獄の総称です。

141. 愛について少々触れておきます。天使や霊たちは、自分のもつ愛にはじまって、自分のもつ愛に向かって進みます。全天界は、すべて愛の相違にもとづいて、ちがった社会を形成しています。地獄も同じです。また霊たちの世界も同じです。ただし、天界は天上の愛の相違にもとづいて、いろいろな社会を形成しています。地獄は地獄的愛の相違にもとづいて、いろいろな社会を形成しています。霊たちの世界は、いろいろな愛にもとづいていますが、その中には天界的な愛と、地獄的な愛があります。

あらゆる愛の中で、頭になる愛が二つあります。あらゆる愛が帰一していくところが、二つあるとも言えます。つまり、すべて天界的な愛が帰一していく頭部になる愛であり、これは〈主への愛〉です。そしてすべての地獄的な愛が帰一していく頭部になる愛があり、これは〈自己愛から出る支配への愛 amor dominandi〉です。この二つの愛は、真向から対立しています。

142. 以上の二種類の愛、すなわち、〈主への愛〉と〈自己愛から起こる支配への愛〉は、まったく相対立しています。そして前節で述べたように、主への愛のうちにいる者は、みな太陽としての主のほうに向いており、自己愛をもとにした支配への愛をもっている者は、主を背にして後退していきます。

このように相反してくるにも、わけがあります。つまり、主への愛のうちにいる者は、主によって導かれたいとしか考えませんし、主お

ひとりが支配されることを望みます。自己愛からの支配愛のうちにある者の場合、自分の力によって導かれたいとしか考えず、自分だけが支配したいと思います。

自己愛から起こる支配への愛 *amor dominandi ex amore sui* といっても、〈役立ちを果たしたいという愛〉からくる〈支配への愛〉をもっている人もいます。この種の愛は、隣人と一つになっているため、霊的愛です。この種の愛は、支配への愛 *amor dominandi* と言うより、役立ちへの愛 *amor faciendi usus* と言えるでしょう。

143. どんな性格をもった霊でも、一人ひとりの霊は、みな自分なりの支配的愛 *amor regnans* へ向かって行きますが、それは、愛はそれぞれの〈いのち〉だからです（第一部、1～3節で前述しました）。〈いのち〉は、それなりの器になっていて、その器は、肢節・器官・内臓と呼ばれています。そしてこの器、すなわち全人間は、その〈いのち〉の力で、自分と同じような愛をもつ社会、つまり自分の愛が宿っている社会へ向かっていきます。

144. 自己愛から起こる支配への愛は、主への愛と真向から対立しています。したがって、そのような支配への愛をもっている霊は、顔を主からそむけ、その世界の西のほうに目をおきます。体も同じように反対方向をとり、東を背にし、北が右、南が左になります。東を背にしているわけは、主を憎んでいるからです。北が右にあるわけは、虚偽・虚像を愛しているからです。南が左にあるわけは、英知の光

を軽蔑しているからです。周囲を見わたすこともできても、自分のまわりに見えるものは、すべて自分のもっている愛に似通っているように見えます。このような者は、自然的・感覚的です。まるで自分だけが生きているように思っている者もいます。他の人はみな姿だけしかありません。自分が他の人より知恵があると思っていますが、実は気が狂っているのです。

145. 自然の世界に道があるように、霊界にも道が見えてきます。ある道は天界に通じており、ある道は地獄に通じています。ただし、地獄に向かっていく道は、天界に向かう人には見えませんし、天界に向かっていく道は、地獄に向かう人には見えません。このような道は無数にあって、ある道は天界のある社会へ、ある道は地獄のある社会へと通じています。霊はそれぞれ、自分がもっている愛がのびる社会へ向かう道に入り、他の方へ行く道は見えません。このようにして、一人ひとりの霊は、自分の支配的愛がおもむく方向に身を向け、そちらへ進んでいきます。

13 太陽として主から発している〈神の愛〉と〈神の英知〉は、天界においては熱と光になっているが、これは、発出する神性、すなわち聖霊である

146. 『主についての新エルサレムの教義』の中にあるように、神は、人格においても、本質においても唯一の方であり、それには、

三一性 trinitas があり、その神は主であるということです。その神の三一性とは、父・子・聖霊です。源になる神性 Divinum a Quo が「父」と呼ばれ、神人性 Divinum Humanum が「子」と呼ばれ、発出する神性 Divinum Procedens が「聖霊」と呼ばれます。

ここで、「発出する神性」と言われていますが、この「発出する」がどんな意味であるか、よく分からないままでした。それが分からないわけは、主が天使たちに太陽として現れていること、その太陽から〈神の愛〉を本質とする熱と、〈神の英知〉を本質とする光が発出していることが、今まで知られていなかったからです。それが分からないと、発出する神性が、それ自身神である Divinum per se と思ってしまう。そのため、アタナシオス信条の中で、父には別個の人格があり、子にも別個の人格があり、聖霊にも別個の人格があると言われています。

ところが、主が太陽として現れておられるのが分かれば、聖霊と呼ばれている「発出する神性」について、正しい考えをもつことができます。これは主と一つになっています。太陽から熱と光が発出するように、主ご自身から発出するわけです。天使たちが愛と英知のうちにいればいるほど、神の熱と神の光のうちにいることにもなります。

主が霊界で太陽として現れることを知らない場合、「発出する」が何のことか、だれにも分かりません。それが、父と子に属する何かを伝達させるだけなのか、照らしたり教えたりするだけなのかと思います。しかし理性が目覚めてくると、聖霊が神自身と思ったり、ひとりの神として区別して呼んだりしません。神はお一人であって、あまねく存在している方であると知っているからです。

147. 神は空間のうちには存在せず、むしろ遍在であることは前述したとおりです。神は、どこにあっても同一の方ですが、天使や人間にとっては、その受けとる側の多様性がもつて、神ご自身がさまざまに見られます。

さて、太陽としての主から発出する神性は、光と熱をともなっています。そして光と熱がまず最初に流れ入る、ごく一般的な器があります。これをこの世では「大気」と呼んでいます。これは雲を含む器です。それで分かると思いますが、人や天使の場合、内部に理性があり、その内部が以上のような雲でおおわれています。つまり、発出する神性を受け入れる器になっています。雲と言っても、ここでは霊的雲を意味し、思考を指します。その思考が真理から出ていれば、神の英知とうまく調和しますが、偽りから出ていれば不調和になります。霊界では、真理から出ている思考があつて、それが眼に映ると白くかがやく雲になり、偽りから出る思考だと黒雲になります。以上から、発出

する神性は、人みなに依存し、人によってさまざまな様子で、つつみ覆われていることが分かります。

148. 神ご自身 ipsum Divinum は、靈的熱と光をとおして、天使や人間の中に臨在されます。したがって〈神の英知に属する真理〉および〈神の愛に属する善〉のうちにある人の場合、それに感じ、その情愛をもとにして、真理や善を源にして、真理や善について思いめぐらすとき、神によって熱をもったとか、あるいは、説教家が熱心に話しているときのように、よく人の感知力や感覚性に訴えるようになります。そのような人を、神によって照らされた人とも言います。それは、主がご自身の〈発出する神性〉によって、靈的熱を人の意志の中に高められるだけでなく、熱的光を人の理性の中に照らされるわけです。

149. 聖霊とは、主と同じ意味です。それは、人を照らす真理そのものです。〈み〈ことば〉〉のある箇所を引用します。

「イエスは言われた、『真理の霊がくるとき、・・・あなた方をあらゆる真理に導くことになる。その霊は、みずからの力で語るのではなく、聞いたところを語る』」（ヨハネ 16・13）。

「その霊は、わたしの栄光を輝かせる。わたしから受けて、あなた方に伝えるからである」（ヨハネ 16・14、15）。

「その霊は、弟子たちのもとにあり、弟子たちの中にあるであらう」（ヨハネ〔14・17〕、15・26）。

「イエスは言われた、『わたしがあなた方に語ることは霊であり生命である』」（ヨハネ6・63）

以上から、主から発出する真理こそ、聖霊と言われていることが、明確になります。その真理は、光のうちにあるからこそ、照らす働きをします。

150. 照らしは聖霊によるものであり、その照らしは、主のみ力によって人の中にもあります。それは霊たちや天使たちを仲介にします。その仲介とは何か、今まで記しませんでした。ただ、天使や霊とて、自分の力で人を照らすようなことは絶対にないと言えます。天使も霊も人間と同じように、主のみ力によって照らされているわけです。

照らされているという点で、みな同じです。したがって照らしは、すべて主おひとりのみ力によることが分かります。ところが天使や霊を仲介にするわけは、人が照らされているとすると、それは主だけのみ力でありながら、他の者以上に照らされている天使や霊の中に、入ることだからです。

**14 太陽は、〈神の愛〉と〈神の英知〉が発出する原点である。
そして、主はその太陽を介して、宇宙・万物を創造された**

151. 「主」と聞けば、永遠の昔から存在する神、すなわちエホバを指します。この方は「父」または「創造主」と呼ばれます。以上は、おひとりです。それは、『主についての新エルサレムの教義』に述べられていることです。したがって、「創造」について扱っている後述の部分では、「主」と命名されています。

152. 宇宙にある万物は、〈神の愛〉と〈神の英知〉によって造られたことは、第一部（とりわけ52、53節）で充分説明しました。今ここでは、媒体となる太陽について述べます。これは、〈神の愛〉と〈神の英知〉が発出する原点になるもの *primum procedens* です。

人は、原因をつきとめて結果を見ます。つまり、それなりの順序と系列のもとで、原因から結果を見るわけです。したがって、太陽が創造の原点 *primum* であることは疑えません。霊界に存在するもの

は、すべてその太陽によって存続し実在しています。いったん一方を断定すれば、他方も証明されます。すなわち、すべてのものは太陽の照覧のもとにあり、その太陽があつて存在しています。太陽の下で持続しているとは、たえず存在させられていることです。だからこそ、存続とは永久の実在である *subsistentia est perpetua existentia* と言われます。

何ものかがあつて、それが大気をとおってくる太陽からの流入が失われたとすると、たちまち消滅してしまいます。大気は、純粹になればなるほど、太陽の力によって活動力を帯びてきますが、この大気が万物を系列立てて、つなぎとめています。

このように、宇宙と宇宙にある万物が存続するのは、太陽の力によるわけで、太陽こそ創造の源としての原点です。ここで太陽の力によると言ったとしても、実は太陽をとおしてなざる主のみ力を指します。なぜなら、太陽もまた、主によって創造されたものだからに他なりません。

153. 太陽は二つあり、この二つの太陽を媒介にして、主は万物を創造されました。霊界の太陽と、自然世界の太陽です。主が万物を

創造されたのは、この霊界の太陽によるわけで、自然世界の太陽によるものではありません。自然世界の太陽は、霊界の太陽よりはるかに下にあります。それも、ほどほどの中間距離です。その上の方に霊界があり、その下の方に自然世界があります。そして、この自然世界の太陽は代理をつとめる *sucenturiatam opem ferat* ために造られました。この働きについては後述することになります。

154. 宇宙と宇宙にある万物は、霊界にある太陽を介して、主によって造られました。前述したように（52～82節）、霊界の太陽は、〈神の愛〉と〈神の英知〉の発出する原点です。万物は、〈神の愛〉と〈神の英知〉から生まれました。

最大のものから最小のものを含め、全被造物の中には三つのもの、つまり目的 *finis*・原因 *causa*・結果 *effectus* があります。この三つがそろっていない被造物は存在しません。この三つは、最大のもの、すなわち宇宙全体の中で一定の順序で実在します。

まず、〈神の愛〉と〈神の英知〉が発出する原点である太陽の中に、あらゆるものの目的が存在しています。そして霊の世界の中に、あらゆるものの原因が存在しています。そして、自然の世界の中にあらゆるものの結果が存在しています。以上の三つが、出発点から終着点まで、どのように存在するかは次に述べます。以上の三つが備わっていない被造物はありません。したがって、宇宙とそこにある万物は、万物の目的を含みもつ太陽をとおして、主のみ力で創造されています。

155. 空間とか時間の考えが排除されなければ、創造そのものは理解できないことになります。これが排除されれば分かってきます。もしできれば、時間・空間の考えをできるだけ取り去ってみて下さい。そして、時間・空間のない場合を想定してみてください。すると、最大の空間であろうが、最小の空間であろうが、何の違いもないことに気づくでしょう。そうすると、宇宙の創造について考えてみても、それが宇宙にある個々のものの創造についての考えと、何も変わらないことが分かります。そこで、被造物には多様性がありますが、それは神

人 Deus Homo のうちにある無限性 infinita の表れであることが分かります。そして、靈界の〈太陽〉は、神人から発出する最初のもの primum procedens ですから、その〈太陽〉の中に無限定 indefinita が存在し、その無限定的なものが、被造の宇宙の中にイメージとして実在しているわけです。それで、宇宙には一つのものが他のものと、全くの同一存在にはなりません。そのため、万物には多様性があって、それが自然の世界の中で空間といっしょに眼前に現れ、靈界でも見かけ上の空間をともなっています。

以上は、第一部でも述べたと思います。たとえば「神人のうちにあつて、無限なるものが区別されながらも一つになっている」（17～22節）、「宇宙にある万物は、〈神の愛〉と〈神の英知〉によって創造された」（52、53節）。「被造宇宙にあるすべてのものは、神人に属する〈神の愛〉と〈神の英知〉を受ける器になっている」（54～60節）。「神性は空間のうちには存在しない」（7～10節）。「神性は空間には関係なく、全空間を満たしている」（69～72節）。「最大のものの中でも、最小のものの中でも神性は同一である」（77～82節）。

156. 宇宙とそこにある万物は、空間に始まって、空間に向かって創造されたのではないし、時間に始まって、時間に向かって創造されたのでもありません。つまり、経過と進行をともなつて創造されたのではありません。むしろ、永遠なる者によって、無限なるものの力で、創造されました。時間的永遠に始まったとも言えません。そんなものは存在しないからです。むしろ、時間とは関係のない永遠なる方

によって創造されました。つまり、神性そのものでもあります。

以上のような考え方は、自然の光のうちにある思考概念を越えていることは知っています。しかし、靈的光のうちにある思考概念を越えているわけではありません。靈には空間や時間はないからです。

けれども、自然的光のうちでも完全に越えているわけではありません。空間には、無限 *infinitem* がないと言ったら、だれしも理性で考えて納得がいくからです。永遠 *aeternum* についても同じです。これは時間における無限です。もし、「永遠にいたるまで *in aeternum*」と言えば、時間をもとにして考え理解できますが、「永遠のむかしから *ab aeterno*」と言えば、時間の概念を捨て去らなくては分かりません。

15 自然世界の太陽は、純粹の火であるから死んだものである。

したがって、その太陽に源をもつ自然は死んだものである

157. 創造のみわざは、自然世界の太陽のおかげではなく、すべて靈界の〈太陽〉のおかげです。自然世界の太陽は、完全に死んだものですが、靈界の〈太陽〉は生きています。〈神の愛〉と〈神の英知〉の発出する原点 *primum* だからです。死んだものであるとは、みずからの力で動いているのではなく、動かされているという意味です。

もし万一、創造のみわざを自然の世界の太陽のおかげだとすると、芸術家が作った作品を、その芸術家の手にある道具のおかげだと言っ

ているようなものです。自然世界の太陽は純粹の火であって、そこから生命に必要なものをすべて吸収します。それにたいして靈界の〈太陽〉は、〈神のいのち〉をもつ火です。自然世界の太陽の火と、靈界の〈太陽〉の火について、天使たちは次のように考えています。つまり、〈神のいのち *vita Divina*〉は、靈界の〈太陽〉の火の内 *intus* にあるけれど、自然世界の太陽の火の外 *extus* にあるということなのです。

すなわち自然の太陽は、みずからの力で活動しているのではないことが分かります。むしろ、靈界の〈太陽〉から発出する生命力 *Vis viva* によります。したがって、この〈太陽〉の生命力がとり去られたら、自然の太陽は崩壊してしまいます。したがって太陽礼拝は、あらゆる種類の神礼拝の中でも最低のものです。その太陽と同じく全く死んだものです。〈みことば〉では、そのような礼拝を「忌むべきもの *abominatio*」と言っています。

158. 自然世界の太陽は純粹の火で、その結果死んだものです。したがって、その太陽が発出する熱も死んだものですし、同じくそこから発出する光も死んだものです。また「エーテル」あるいは「空気」と呼ばれる大気 *atmospharæ* があって、その太陽が発する熱と光を吸収・反射しますが、これも死んだものです。太陽も大気も死んだものであるため、その下にあって、「大地 *terrae*」と呼ばれる土地の中にある個々全体は、すべて死んだものです。

ところが、その個々全体が、靈界の〈太陽〉から発し流れてくる靈

性 *spiritualia* によって、とり巻かれています。もし、このような霊的なもので取り囲まれていないとすれば、土地は、活動を起こすことができません。つまり、植物を生育させる用途をもった形相、動物を生育させる用途をもった形相を生みだすことができません。つまりは、人間が実在・存続するために必要な材料をうることができません。

159. さて自然はその太陽から始まり、その太陽がもとになって実在・存続するようになります。それで「自然的なもの *naturale*」と呼ばれます。したがって自然は、その個々全体を含めて、死んでいることになります。自然は、人間の中でも、動物の中でも、生きているように見えても、自然につきそい、自然を動かしている〈いのち〉があるからです。

160. 土地を構成している自然の最底部は死んだものです。この部分は、霊界が情愛や思考に応じて変転するのとは違い、不動で固定しています。したがってここには空間があり、空間による距離も生まれます。その部分で創造活動は終わりを告げ、静止して存続しています。したがって空間は、自然のもつ固有な性格 *propria naturae* と言えるでしょう。この空間は、霊界で〈いのち〉の状態にしたがってある、見かけ上の空間とはちがいます。それで自然の空間は死んだ空間とも言えます。

161. 同じく、時間もたえず一定の状態を保っています。これも

自然のもつ固有な性格です。一日は常に二十四時間あり、一年は、常に三百六十五日プラス四分の一日です。光と陰の状態および、その変化をつくる温暖と寒冷の状態は、いつも同じように繰り返されます。毎日繰り返すものとして、朝・昼・夕・夜があり、毎年繰り返すものとして、春・夏・秋・冬があります。また、年間の状態は、その日その日の状態変化を起こさせます。

以上のような状態は、霊界にあるような〈いのち〉の状態ではないため、これもまた死んだものです。しかし、霊界では、光はずっと持続するし、熱もずっと持続します。そしてこの光は、天使がもっている英知の状態に対応しており、この熱は、天使にある愛の状態に対応しています。したがって、この状態は生きていけると言えます。

162. 以上から見ると、万物を自然のおかげだとする人たちの愚かさが分かります。そのように自然で心を固めてしまうと、自分の心を自然から上のほうへ向けることができなくなります。すると、その人たちの精神は、上のほうでは閉じ、下のほうは開いていて、感覚的・自然的人間になりますが、霊的には死んでいます。そうになると、肉体上の感覚から吸収したものに依存して考えているだけで、この世界をもとにして、感覚をとおしてしか考えません。また心の中では、神の存在を否定しています。

その結果、天界との結びつきが途切れ、地獄との結びつきが生まれます。もちろん、考えたり意図したりする能力だけは、そのまま残ります。合理性をもとにして考える能力、自由選択力をもとにして欲する能力は、双方ともに、主が人間みなに与えられているもので、それ

れは取り去られません。この二つの能力は、悪魔にも天使と同じように備わっていますが、悪魔はその能力を、狂気と悪行のために使い、天使はその能力を、英知を味わい善行をするために使います。

16 太陽は二つあり、一つは生きており、もう一つは死んでいる。そして、この二つの太陽がなかったら、創造もあり得ない

163. 宇宙一般 *Universum in genere* は、〈霊界〉と〈自然世界〉の二つに区分されています。霊界には天使と霊がおり、自然世界には人間がいます。この二つの世界は外観ではひじょうによく似ていて、区別しにくいほどです。ところが内面を見ると、ひじょうに違います。前述したように、霊界にいる人間を、天使または霊と言いますが、霊的な存在です。つまり、霊的な存在であることは、霊的に考え、霊的に話すということです。それにたいして、自然の世界にいる人間は自然的です。それで自然的に考え、自然的に話します。なお、霊的な考えや〈ことば〉は、自然的な考えや〈ことば〉に共通するものがありません。以上で、霊的世界と自然的世界の二つの世界は、ひじょうに違っていて、これをいっしょにすることができないのが分かります。

164. さて、この二つの世界がひじょうに違う世界であることから、太陽も二つ存在しなくてはなりません。一つは、霊的なものすべ

ての存在の源である太陽、もう一つは自然的なものすべての源である太陽です。

そして霊的なものは、すべてその根源にあって生きているのにたいし、自然的なものは、すべてその根源にあって死んでいます。その根源とは、それぞれの太陽です。一つは生きている〈太陽〉、もう一つは死んでいる太陽です。その死んでいる太陽は、主のみ力によって、生きている〈太陽〉をとおして造られました。

165. 死んでいる太陽が創造された理由は、万物がその末端部 *ultima* にあって、恒常的に決まった形で固定するためです。しかもそれによって、いつまでも永続する本性が生まれてくるようになります。このようにしなければ、創造は安定しません。

地球の中、地球の表面とそのまわりは、以上のような性格をもっているのです。地球がいわば基礎・土台のようになっています。これこそ、万物がその存在を終え、その上に安らぐための最終のみわざです。また、創造の終わりとしての結果を生む母胎のようなものです。これについては後述します。

166. 主は、生ける〈太陽〉をとおして万物を創造されました。死んでいる太陽をとおしてではありません。つまりそれは、生きているものは、死んでいるものを従わせることができるだけでなく、みずからの目的に役立たせるため、形づくることのできるからです。その逆ではありません。

万物は自然から生じたとか、その自然から生命が生じたなどと考え

るとすると、あまりにも合理性が欠けています。それでは、生命が何か分かっていないことになります。自然は、何ものかに〈いのち〉を植えつけることはできません。自然にはそのような力はまったくありません。

死んだものが生きたものに働きかけたり、死んだ力が生きた力に働きかけたり、また自然的なものが霊的なものに働きかけたりすることは、まったく秩序に反します。そのような考えは、健全な理性の光にも反します。

死んでいるもの、つまり自然的なものは、外からくる偶然の出来事によって *ab externis accidentibus*、さまざまに変形したり変質したりしますが、〈いのち〉に働きかけることはできません。それにたいし〈いのち〉は、形相がひき起こす変化に応じ、死んだものに働きかけることができます。

物理的な流入をつかって、靈魂の霊的な作用をひき起こすことは、到底不可能なため、あり得ません。これは周知のことがらと思います。

17 創造の目的は末端にある。すなわち、万物が創造主に帰っていくこと、そして、結びつきが生まれることである

167. まず、目的について少し触れておきます。秩序正しく物事が運ばれていくためには、三つが必要です。第一目的、中間目的、最終目的です。これはまた、目的、原因、結果とも言えます。何かが存在するためには、何事にも、この三つがあります。第一目的は、中間目

的なくしてはあり得ず、最終目的なくしてもあり得ません。同じく、目的だけで原因も結果もないなどあり得ません。同様に、出発点になった目的も、生じる結果もなく、原因だけということもあり得ません。同様に、原因も目的もない結果、つまり結果だけでもあり得ません。

したがって、結果のない目的や、結果から分離した目的が実在しないことは、考えてみれば分かります。それはかけ声でしかありません。なぜなら、目的が事実上、目的になるには、限定づけられる必要があります。結果のうちに限定づけられることです。その結果のうちにあった最初のものは目的です。目的が結果になりました。

行為をするもの *agens*、すなわち、やり遂げるもの *efficiens* は、そのままで実在しているように見えますが、それは見かけです。招来する結果からそのように見えるのです。でも、結果から切り離すとたちまち姿を消します。

そこで、目的・原因・結果は、ものが存在するためには、必ずなくてはならないことが分かります。

168. 目的はすべて原因の中にあり、また、目的はすべて結果の中にもある事実を忘れてはなりません。また、目的・原因・結果は、第一目的・中間目的・最終目的と呼ばれます。

目的はすべて原因の中にあると言いましたが、それは、目的のうちにありながら、目的から生じるものがあるという意味です。また、目的はすべて結果の中にあると言いましたが、それは、原因の中にありながらも、その原因を介して、目的から生じるものがあるという意味です。目的は、みずからの中にだけ存在するというのではなく、目的

自身の力で実在するようになったものの中にも存在します。

つまり、目的はその中にみずからの全部を内在させることができます。つまり、行為することで結果をもたらし、やがてそれを存続させるようにします *agendo efficere, usque dum subsistit*。存続するようになったとき、それが最終の目的で、これを「結果」と言います。

169. 被造宇宙の中では、その最大のものから最小のものにいたるまで、目的・原因・結果という三つの要因があります。被造宇宙の最大のものから最小のものにいたるまで、その中に三要因がある理由は、永遠のむかしから、主にまします創造神のなかに、この三要因があるためです。この方は無限な方です。そして、その無限な方の中に、無限なご性格があり、それが区別されながらも、一つになっています（17～22節で説明しました）。したがって、自らの中に三要因があり、またその無限のご性格の中に三要因があって、それが区別されながらも一つになっています。

それで次のようになります。宇宙は、その方の存在 *Esse* によって創造されたこと、宇宙は、役立ちから見て、その方の像になっていること、宇宙にある個々全体のうちに、その三つの要因があるということです。

170. 宇宙あるいは万物創造の目的は、創造主が、被造宇宙と永遠にむすばれることです。それも、受け皿になる主体が必要です。創造主の神性が、あたかも自らの中にあるように、その主体のうちにあり、その中に住まいを設け、とどまることができるためです。このよ

うな主体 *subjecta* が、創造主の住まい・家になるためには、自分の力でするように、創造主の〈愛と英知〉を受けとめるようになり、自分の力でするように、創造主にまで高められ、その創造主と結ばれるようにならなくてはなりません。このような相補性がなくては結びつきもありません。

このような主体とは、人間を指します。自分の力でするように、自分を高め、結ばれていくことができることです。人間が以上のような主体であり、自分の力でするように、神性を受けとめる受け皿になれることについては、再三前述しました。

このような結びつきがあって、主は、ご自身が創造されるみわざすべてにわたって臨在なさいます。それは、すべての被造物は、最終的には人間のためだからです。創造されたものはすべて、その役立ちが、段階を経て、末端的なものから、人間へとぼっていきます。人間をとおして、創造主である神へのぼっていきますが、それについては、前（65～68）節で述べました。

171. 創造は、以上のような最終目的に向かって、しかも、目的・原因・結果という三段階を経て進んでいきます。創造主である主のうちに、この三要因（段階）があることは前述しました。また、神性は空間に関係なく、すべての空間のうちにあり（69～72節）、最大のものから最小のものの中まで、同一です（77～82節）。

そこで、被造宇宙は、最終目的に向かって、通常の前進を続けていますが、相対的に見ると、中間目的であるということに気づかせられます。創造主である主のみ力によって、役立ちの形相は、それなりの

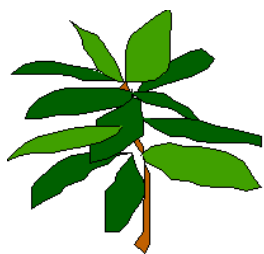
順序を経ながら、土から始まって人間にまで高められます。人間は肉
体面では土から成っています。

こうして人間は、主のみ力による〈愛と英知〉を受けるに応じて高
められます。その〈愛と英知〉を受け入れるようになるためには、中
間的なものはみな配慮提供されています。つまり、欲しささえすれば、
手に入れられるようになっています。

さて、以上述べたことから、明らかになると思います。すなわち、
創造の目的は、末端的なものに実在することです。また一般的にしか
言えませんが、その目的は、万物が創造主へ向かって帰っていき、結
びつきが生まれるためです。

172. 被造物には、個々全体にわたって、目的・原因・結果の三
つの要因があることは、次のことから明らかです。すなわち、最終
目的と言われる「結果」にしても、これは第一目的が新しく受け継が
れていく系列です。それは創造主である主が、最初の源 *primus* に
なって、それから最終の究極まで、つまり創造主と人間との結びつき
にまで、いたることです。

すべての最終目的は、また新たに、第一目的になります。そして、
みずから何の結果も生まず、力を失い、死んでしまったものは、何も
存在しないことが分かります。真砂さえ、何かを生みだす働きをする
ものを発散しています。つまり何か結果を生み出すものです。



第 三 部

- 1 霊界にも、自然世界のような大気・水・土地が存在する。
ただし、霊界にあるものは霊的であるのにたいし、自然世界にあるものは自然的である

173. 霊界と自然世界は似ています。ただ違うところは、霊界にある個々全体が霊的であるのにたいし、自然世界にある個々全体は自然的であることです。これは前にも触れてきましたし、『天界と地獄』にも記しました。この二つの世界は似ているため、双方の世界には、それぞれ大気・水・土地があります。これが共通にあつて、個々全体が、かぎりない多様性をもって出現してきます。

174. エーテルあるいは空気と呼ばれている大気については、霊界の大気も、自然界の大気も、似ています。ただ違うところは、霊界の大気は霊的ですが、自然界の大気は自然的です。霊的であるわけは、主への〈神的愛〉と〈神的英知〉の発出源である、〈太陽〉の力で実在しているからです。その〈太陽〉から、愛を意味する〈神の火〉を吸収し、英知を意味する〈神の光〉を吸収します。そして、霊界の大

気は、天使たちのいる天界に降り注いでいます。それによって、天界にある最大のものから、最小のものにいたるまで、その中に太陽が現存するようになります。

霊の大気は段階的に異なった実体、あるいは微少な形相から成っています。これは〈太陽〉から生まれるものです。その一つ一つが〈太陽〉を吸収し、その結果、〈太陽〉の火は一つ一つの実体あるいは形相に分かれ、あたかもその実体、または形相で包まれるようになります。そのように包まれることで調節されます。このようにして天界では、天使たちの愛に適合する熱が生じ、天界の下にいる霊たちの愛に適合する熱が生じます。〈太陽〉の光についても同じことが言えます。

自然界にある自然の大気は、霊の大気と似ています。つまり、段階的に異なった実体と、微少な形相から成っており、やはりこれも自然界の太陽から生じます。この一つ一つは、太陽を吸収しますが、人間が住んでいる大地に熱を来たらせ、同じく光を運ぶため太陽の火を吸収保存し、それをやわらげます。

175. 霊の大気と自然の大気には、次のような相違があります。

霊の大気は〈神の火〉と〈神の光〉、つまり愛と英知の受け皿になっていて、それを大気内部に包み込みます。それにたいして、自然の大気は、〈神の火〉と〈神の光〉の受け皿ではなく、むしろ自然の太陽の火と光の受け皿になっています。その太陽は、みずからは死んだものであることは、前述したとおりです。自然界の大気の中には、霊界の〈太陽〉からくるものはありませんが、霊界の〈太陽〉がもとになっている霊的大気によって、囲まれています。以上のように、霊の

大気と自然の大気の相違は、天使の英知によるものです。

176. 霊界には、自然界とおなじような大気が存在します。天使や霊も、自然世界の人間とおなじように呼吸し、おなじように話し、おなじように聞きます。その呼吸は、空気と呼ばれる最外部の大気をとおしてなされます。話すにも聞くにもそれが必要です。また天使や霊たちは、自然世界の人間とおなじように見ることができますが、より純粋な空気をもった大気を通して見えています。また天使や霊は、自然世界の人間とおなじように思考したり、感情をもったりします。その思考や感情も、より純粋な大気を媒介にして働きます。

また、天使や霊の身体は、外部のもの、内部のものすべてが、連綿とつらなっています。外部のものは空気の大気につつまれ、内部のものはエーテルの大気で包まれています。このような大気の気圧と活動がなかったら、身体にある内部の形相と、外部の形相はくずれ去っていくことは明らかです。

天使は靈的な存在です。そして、かれらの身体の個々全体は、その形相・秩序の面で、大気をとおして連綿とつながりを保っています。つまり、大気自身が靈的なのです。それが靈的なわけは、靈的〈太陽〉がもとになって生じているからです。この〈太陽〉こそ、主にある〈神の愛〉と〈神の英知〉が発出する始源です。

177. 霊界にある水も、また土地も、自然世界にあるものと似ていますが、違うところは、霊界の水も土地も、靈的であることは前述しましたし、『天界と地獄』の中にも記されています。靈的であるわ

けは、大気を媒介にして、靈的〈太陽〉の熱と光によって活動し、それによって調節されているからです。それは、自然界の大気を媒介に、自然の太陽の熱と光によって、水と土地が自然の世界にあるのとまったく同じです。

178. ここで、大気・水・土地の三つに言及しましたが、この三つには共通性があります。それは、この三つをとおし、この三つがもとになって、個々全体のものが、かぎりない多様性を帯びて、実在するようになります。

大気は、能動的なエネルギー *vires activae* であり、水は中間的エネルギーであり、大地は受動的エネルギーです。あらゆる種類の結果は、以上のエネルギーから生まれます。しかも、その三つは、一定の秩序で連なっていますが、このような秩序は、ただ〈いのち〉がもとにならなければ存在しません。その〈いのち〉は、太陽としての主から発出するもので、それがあって活動できるようになります。

2 愛と英知の段階が存在し、それとともに熱と光の段階が存在する。そのため、大気の段階が生まれる

179. 段階 *gradus* というものが存在すること、それがどんなもので、どんな性格のものが分からなければ、これから述べていくことも分からないでしょう。つまり、あらゆる被造物の中に、また、あらゆる形相の中に段階が存在します。そのため、天使的英知について

てのこの章節では、「段階について」学びます。

愛と英知に段階があることについては、天使たちがいる天界が、三つの層から成っていることから分かります。第三天界の天使たちは、その愛と英知で、第二天界の天使たちよりすぐれており、また第二天界の天使たちは、最外部天界の天使たちより、すぐれています。かれらは、いっしょに住むことができません。愛と英知の段階が、かれらを区別し分離します。

したがって、下層の天界にいる天使たちは、上層にいる天界の天使たちのところへ、のぼっていくことができません。万一、のぼっていったとしても、上層の天界の天使たちの姿が見えないし、天使たちのそばにあるものも見えません。見えない理由は、かれらの愛と英知は、よりすぐれた段階にあるため、感じとることができないのです。

天使たちはそれぞれ、自分なりの愛と英知です。人間の形相は、その人の愛、しかも、英知と一体になった愛です。なぜなら、神は人間であるといっているのは、愛そのもの、英知そのものだからです。

わたしは、最外部天界の天使たちが、第三天界の天使たちのところへ、のぼっていったのを何回か見ました。やっとのぼり切ろうとしているとき、第三天界の天使たちのまん中にいるのに、だれの姿も見えないと言って、文句をつけているのを耳にしました。かれらはその後、第三天界の天使たちが見えないのは、その愛と英知が感じとれないからで、愛と英知こそ天使を人間の姿にしていると教えられました。

180. 愛と英知には段階がありますが、これは、天使たちの愛と英知から、人間の愛と英知におよぶ関係を見れば、もっとはっきりし

ます。天使たちの英知は、人に比べると、口では言い表せないほどであると、よく言われています。これは、自然の愛にいる人間にとって、理解しがたいものです。それについては後述します。口では言い表せないとか、理解しがたいように見えるのは、それが上の段階にあるからです。

181. 愛と英知の段階があることは、同時に、熱と光の段階があることになります。熱と光とは、靈的熱と靈的光の意味で、それは天界にいる天使たちにあると同じく、精神の内部では、人間にもある性格です。

天界では次のようになっています。天使たちに、どんな愛がどのくらいあるかということは、どんな熱がどのくらいあるかということです。それはまた、光についても同じことが言えます。理由は、前述したように、天使たちにとっては、愛は熱をもっており、英知は光をもっています。

それは、この世にいる人間も同じことで、違いは、天使たちはその熱を感じ、その光を見ていますが、人間は感じたり見たりしません。それは人間にある熱も光も、自然的だからです。靈的な熱については、ある特定の愛のうれしさがないと感じられないし、靈的光については、ある特定の真理を感じとらないと、それが見えません。

さて、人間ですが、自然の熱と光のうちにあるあいだは、自分に備わっている靈的熱や靈的光について、何も分かりません。そして霊界からの経験がなかったら、分からないことです。したがって、天使

や、天使たちのいる天界にある熱や光について、まず述べることにします。これについて照らされるとすれば、ここでしかありません。

182. 靈的熱の段階については、経験からは描写できません。なぜなら靈的熱に対応する愛は、そのままでは思考概念にならないからです。しかし靈的光の段階については、描写が可能です。光は照らし、思考の対象になるからです。そのように、光の段階をもとにして、靈的熱の段階について理解していくことができます。それは、段階として平行しているからです。

天使たちがもっている靈的光を、わたしは自分の眼で見ることができました。上層の天界の天使たちがもっている光は、白くひかかっていて、描写できないほどです。雪の白さと言おうか、赤く映えわたった白さと言おうか、この世の太陽のまばゆさによっても、描写できないほどです。

一口に言えば、その光は、地上のま昼の光を何千倍も越えています。下層天界の天使たちにある光は、ある程度、比較によって描き出すことができますが、それも、わたしたちの世界にある最高度の光を越えています。上層の天界にいる天使たちの光は描写できません。そのわけは、かれらのもっている光は、その英知と一つになっているからです。しかも、その英知は人間がもっている英知とは比べものにならないほどで、その光についても、同じことが言えます。

以上わずかでしたが、光に段階があることは、汲みとれたと思います。英知と愛が同じ段階にあるように、熱にも同じような段階があることが分かります。

183. 大気は熱と光を受ける器であり容器です。したがって、大気にいろいろの段階があれば、それだけ熱と光の段階があり、また、熱と光の段階があれば、それだけ、愛と英知の段階があることになります。わたしは霊界での数多くの経験で分かりましたが、大気にもいろいろあり、その段階が、たがいははっきりしていることです。

そのなかでも、とりわけ気がついたことは、下層天界の天使たちは、上層天界の天使たちが住んでいる地域では、息もできないことです。それはちょうど、空気の中からエーテルの中に入った生き物、あるいは、水中から空気中に出た生き物のように、息をひきとるのではないかと思われるほどです。また、天界の下にいる霊たちは、雲の中のように見えます。大気には種々あること、また段階によってたがいに区別されていることについては、前述したところを参照してください（176節）。

3 段階には二種類ある。高サの段階と、広サの段階である

184. 段階 gradus についての知識は、事物の原因の扉をひらき、その原因の中に入っていくためのカギです。それが分からなければ、原因とは何か分かりません。霊界と自然界の双方にある対象物も主体も、同じ〈ことば〉で表わせるかのように思えます。眼に見えるようにしか存在しないと思ってしまう。ところが眼に映るものでも、その背後に隠されているものと比べてみると、一つのもので、何千何万のものに関わりあっています。内部に隠れているものについて

は、段階について分かっていないと、絶対に見えてきません。

外部のものは内部のものへと進み、そして内奥部にいたりますが、これは段階をとおして進みます。それも、連続的段階 *gradus continui* ではなく、隔離的段階 *gradus discreti* です。連続的な段階は、粗雑なものから繊細なものへ、重いものから軽いものへと移る減少過程で、はかられます。あるいは繊細なものから粗雑なものへ、軽いものから重いものへと移る増大過程でも表されます。それはちょうど、光がだんだんうすれて陰になり、熱がだんだん冷めて冷凍状態になるのと同じです。

それにたいし隔離的段階は、まったくちがっています。それはちょうど、先にあるもの *priora* ・後にくるもの *posteriora* ・最後にくるもの *postrema* 、または、目的・原因・結果の関係です。この段階が、隔離的段階と言われるわけは、先にあるものは、それなりに *per se* 存在し、後にくるものも、それなりに存在し、最後にくるものも、それなりに存在していながら、全体を見ると一つになっていることです。

大気は、最高の高サから最低まであり、太陽から地球にいたるまで及んでいますが、エーテルの層と空気の層があって、それぞれの段階に分離しています。

単一のもの *simplicia* があって、それが集まると集合体になりますが、この集合体があつまると、一つになって複合体 *compositum* になります。この段階は隔離的ですが、それは、それぞれははっきり区分けして実在するからで、これが高サの段階になります。それにたいし、連続的段階とは、たえず連続してふえていくことで、広サの段階

を指します。

185. 霊界にある個々全体も、自然界にある個々全体も、隔離的段階から成り立っていると同時に、連続的段階からも成り立っていて、両者が共存しています。高サの段階と、広サの段階の共存とも言えます。隔離的段階から成り立っている次元を、高サ *altitudo* と言います。連続的段階から成り立っている次元を、広サ *latitudo* と言います。人の眼から見た位置で、このように名づけているわけではありません。

このような段階が分らないと、三つの層からなる天界同士の区別についても、天界の天使たちの愛と英知のあいだの区別についても分かりませんし、かれらが受けている熱と光の区別も、かれらを取り巻き包んでいる大気のあいだの区別も、分かりません。

この段階について知っていないと、人間の精神にある内的な能力のあいだの違いも、自己改革や再生のときの、心の状態についても分かりません。また、天使の場合も、人間の場合も、その体にある外的な能力にある違いも分かりません。さらに、霊的なものと自然的なものあいだの違いも、相応についても、まったく何も分からないままです。

さらに、人間と動物のあいだにある〈いのち〉の違いについては、全然分からないでしょうし、より完全な動物と、より不完全な動物とのあいだの違いも分からないでしょう。また、植物界にある形相のあいだの相違、また鉱物界にある物質のあいだの相違も、分からない

でしょう。

ともかく以上から、いわゆる「段階」について知らないなら、原因を見て判断をくたせないことが分かります。結果しか見ないことになるし、結果から原因を断定してしまいます。これは、結果だけの連続した帰納 *ex inductione effectibus continua* でしかないことが、ほとんどです。

ところが、原因が結果を生むのは、連続によるわけではありません。むしろ隔離をジャンプすることです。原因と結果は別ものです。それは、先にくるものと、後にくるもののあいだの違いであり、形成するもの *formans* と形成されたもの *formatum* のあいだの違いなのです。

186. 隔離的段階とはいったい何で、どんな性格をもったものか、またそれは、連続的段階とどこが違ってくるのか、さらによく分かるよう、天使のいる天界を例えて説明します。

三層の天界があり、それぞれ、高サの段階で区別されています。したがって、一つの天界は、もう一つの天界の下にあります。そのあいだには流入がありますが、その流入は、主のみ力によって、それなりの秩序で天界をつらぬき、最下の天界にまで届きます。逆行はしません。

各層それぞれの天界は、それ自身としては、高サの段階によって相違が生じるのではなく、広サの段階で区別が生まれます。まん中、すなわち中心にいる天使たちは、英知の光のうちにあり、その周辺から境界にいたるまでは、英知にかげりがあります。つまり、英知がだん

だん減って、無知になっていきますが、それは、光がだんだん薄れて、陰になっていくようです。しかもそれは連続しています。

人間についても同じことが言えます。人の精神の内部は、天使のいる天界と同じだけの段階があって区別されています。一つの段階は別の段階の上にあります。そのように、人の精神の内部は、隔離的段階、すなわち、高サの段階で区別されています。したがて、人は最低の段階にいる場合もあるし、より高い段階、また最高の段階にいる場合もあり、その本人の英知の段階にしたがっています。

最低の段階にしかいなければ、上の段階は閉じています。それが開くと、主のみ力によって英知をいただくことになります。一人の人間にも、天界とおなじように連続的段階、すなわち広サの段階があります。人は天界に似ています。精神の内部は、天界の雛形なのです。それも、主のみ力によって、愛と英知のうちにいる程度によります。人はその精神の内部では、天界の雛形 *caelum in minima forma* であることは、『天界と地獄』（5 1～5 8節）を参照してください。

1 8 7. 以上わずかですが、述べてきたことから、隔離的段階、すなわち高サの段階が分からなければ、人の自己改革また再生の状態について、何も分からないことが、はっきりします。人の自己改革また再生は、主から、愛と英知をいただくことで実現します。それも、人の精神の内部が、それなりの秩序で開かれていくことです。また、主のみ力によって、天界をつらぬいて流入があること、創造されたものに組み込まれた秩序があることなども、分からずじまいになります。

人が、隔離（高サ）の段階からでなく、連続（広サ）の段階から、

内部について考えた場合、原因からではなく、結果だけからしか見ないことになります。そして、結果だけで見るのは、偽りから見ることになり、次から次へと誤りが入ってきます。それがまた、帰納をとおして殖えていくため、しまいには膨大な虚像ができあがり、それを真理だと言うようになります。

188. 隔離（高サ）の段階については、今まで分かっていたことは何もありません。ただ、連続（広サ）の段階についてだけです。ところが、この双方の段階について知らないと、真理の下に原因をとり出して見ることはできません。そこで、その二つの段階について、ここでとり扱っていきます。本書の目的は、まず原因を発見し、そこから結果を見ていくことです。教会に属する人たちが、神について、主について、また、霊性と言っている〈神性〉一般について宿している暗闇を打破するためにも、これは必要です。

わたしは、地上にこのような暗黒がただよっていることで、天使たちが悲しんでいることを思い出します。かれらは、この地上には、どこにも光が見えないと言います。人は虚偽をしっかりと拵んで、これで心を固めています。それが増えて、偽りにつぐ偽りです。それをさらに強化するため、虚偽をつかい、虚偽化した真理をつかって推論します。原因についての盲目と、真理についての無知を利用して、反論できないやり方を調べます。

もっとも残念なのは、信仰が仁愛から切り離されて、それを確認してしまっていること、つまり信仰による義認です。また、神について、天使や霊について、また愛と英知が何か、分からなくなっている

ことです。

4 高サの段階は、同質になっている。しかも、一つが他の一つと系列でつながり、それが、目的・原因・結果の関係になる

189. 広サ（継続）の段階とは、光と陰、温熱と冷凍、硬と軟、濃密と稀薄、粗雑と繊細などの関係で、この段階については、感覚経験でも、視覚経験でも、よく分かります。ただし、高サ（隔離）の段階についてはよく分かりません。それで、とくにこの章節でそれに触れます。なぜなら、高サの段階が分らないと、原因 *causae* が見えないからです。

まず言えることは、目的と原因と結果は、先のもの、後のもの、最後のものというふうに、系列的につながっていることです。すなわち、目的が実現するためには、目的は原因を生み、その原因をとおして、結果を生み出すことです。また、これについて言及することが、多々あります。

ただし、以上のことを知ってはいても、適用して考え、実在するものとして見なくては抽象的になってしまいます。そうなると、形而上的分析から考えているだけで、長続きしません。したがって、目的・原因・結果が、隔離的段階によって進行すると言っても、その隔離的段階については、この世では、ほとんど分からずじまいです。抽象的に考えるだけでは、空気のように宙をさまよいます。ただし、その抽

象的なことも、この世にあるものに適用してみると、地上にあるものを肉眼でたしかめるように、記憶にもとどまります。

190. この世にあるものは、みな三界のどれかに属していますし、合成されたものと言われていますが、高サ（隔離）の段階によって成り立っています。まずは実例をあげます。

肉眼で見ても分かるように、人体にある筋肉の一つ一つは、微少な繊維から成っています。この微少繊維が束になって、運動繊維と呼ばれている大型繊維が合成されています。それがまた束になって、筋肉と呼ばれているものが合成されています。

神経繊維についても同じことが言えます。極小の繊維が集まって、大型繊維がつくられています。その大型繊維は、織条 *filamenta* のように見えながら、それが集まると神経繊維ができます。

それと同じことが、その他の合成・束ね・集合などにあてはまります。そこから、器官ができ、内臓ができています。同じように多種多様な段階を経て、つくられていく繊維や器によって、そのような合成が行われています。

それはまた、植物界にある個々全体にも、鉱物界にある個々全体にも同じことがあてはまります。すなわち、樹木の中でも、織条の合成がありますが、それは三つの過程を経てできますし、金属や石でも、部分々々の集合体は、三つの過程を経てできます。

以上から、隔離の段階とはどんなものか、理解できるでしょう。すなわち第二のものは、第一のものによって出来あがり、第二をとおして第三のものが出来あがります。それを合成体 *compositum* と言い

ます。そして、一つ一つの段階は、次に来る段階と、はっきり区別されています。

191. 以上のことから、肉眼では見えないものについても、結論をくたすことができます。つまり、同じことが行われているからです。すなわち、脳の中には、思考や情愛の住まい・容器になっている、実体的な器官があります。大気についても、それが言えるし、熱と光についてもそれが言えるし、愛と英知についてもそれが言えます。

大気は、熱と光を受ける器です。そして熱と光は、愛と英知を受ける器です。したがって、大気に諸段階があれば、熱と光にも諸段階があり、愛と英知にも同じような諸段階があります。すなわち、以上のいずれにも、同じ理屈があてはまります。

192. 今述べたことから、以上の諸真理は、同質 *homogenei* であることが分かります。つまり、同じような性格と本性があります。筋肉の運動繊維は、最小のもの、より大きいもの、最大のものを含めて同質です。神経繊維も、最小のもの、より大きいもの、最大のものを含めて同質です。樹木の中にある繊維も、最小のものから、その合成されたものにいたるまで同質です。岩石や金属も、どのような種類に属していても、同じようなことが言えます。

人には、思考や情愛の器であり住まいでもある、実体的器官があります。それはつまり脳で、最も単純なものから、共通の集合体にいたるまで同質です。大気は純粋なエーテルから、空気 にいたるまで同質です。大気にある段階に応じ、熱と光にも一連の諸段階があり、それ

も同質です。また、愛と英知の諸段階も同質です。

同じ性格・本性でないものは、異質 heterogenea であり、それは同質のものとは和合しません。そして異質なものは、同質なものと協力して、隔離的諸段階を形成していくことができません。同じ性格・本性をもつもの、つまり同質のものだけでなく、隔離的諸段階をつくることができます。

193. 以上は、それなりの秩序に従って、目的・原因・結果を形成していることが分かります。すなわち、第一のもの、すなわち最小のものは、中間のものを通して原因づくりとなり、最終のものを通して、それなりの結果を生みます。

194. 忘れないでおきたいことは、次のとおりです。すなわち、一つ一つの段階は、次にくる段階と隔離していますが、それは、それなりに固有な皮膜があるためです。そして、段階という段階は、それぞれ隔離されているとすれば、それは共通の皮膜があるためです。さらに、共通の皮膜は、それなりの秩序の中で、内部のもの、そして最内部にあるものと交流します。したがって、すべてを結びつけるのは、同魂活動 unanima actio です。

5 最初の段階は、それにつづくあらゆる段階の中で、万事となる

195. その理由は、どんな主体、どんな物であっても、その諸段階は同質です。つまり、最初の段階から生じたものであるため、同質です。その同質なものが形成されていく過程は次のとおりです。すなわち、第一のものが集められ、束ねられることによって、つまり集合によって、第二のものを生むということです。さらにその第二のものをおして、第三のものを生みます。しかも、それぞれは、自分をとる巻く皮膜によって、判別されるようになっています。

それで、第一段階は主要な段階であり、後続する段階を左右する独特のものであることが分かります。したがって、最初の段階は、それにつづく、あらゆる段階の中で、万事となります。

196. 以上が諸段階の相互関係ですが、それはまた、それぞれの段階での実体のことでもあります。「段階」という〈ことば〉を使うと、ごく一般的で抽象的にひびきます。ただし、これはどんな主体、どんな物にも、それなりの段階にあれば、適用できる〈ことば〉です。

197. これは、前の章節でとりあげたもの全部に適用できます。筋肉にも、神経にも、植物界・動物界双方にある構成要素や部分、人の思考・情愛の主体となる実体的器官、大気、熱と光、そして愛と英知にも適用できます。すなわち、万事において最初のもものが、後につづくものの中では独特の支配力をもっているわけです。むしろ、後にくるすべての中で、唯一の特性 *unicum* をもっています。唯一の特性をもっているとは、それしかないということでもあります。

以上から、「目的」は、「原因」のすべてであること、「原因」をとおして、「結果」のすべてが出てくることが明らかです。あるいは、「目的・原因・結果」とは、「第一目的・中間目的・最終目的」のことでもあります。また、「原因」の原因は、ひき起こされたものの原因でもあります。それは、諸原因の中で、「目的」こそ本質的に重要であり、また運動の中で、推進力 *conatus* こそ、本質的に重要であるということです。つまるところ、実体と言える唯一のものは、それ自身のうちで実体であるものです。

198. 以上から、次のようなことが分かってきます。神 *Divinum* は、それ自身のうちでの実体 *substantia in se* であり、唯一・独特の実体です。被造物は、個々全体すべてが、その実体から生まれました。したがって、神は宇宙万物の中での万事である方です。

これは第一部で述べた通りです。つまり「神の愛と神の英知は実体であり、形相である」（40～43節）、「神の愛と神の英知は、それ自身のうちで、実体であり形相であるから、みずから在り *ipsum*、独一的 *unicum* である」（44～46節）、「宇宙にある万事は、神の愛と神の英知によって造られた」（52～60節）したがって「被造宇宙は、神ご自身の像である」、「主おひとりが、天使のいる天界である」（113～118節）ということです。

6 すべての完全性は、段階毎に、また段階にしたがって、高くなる

199. 段階には二種類あると述べました。広サの段階 *gradus latitudinis* と、高サの段階 *gradus altitudinis* です。広サの段階とは、光がだんだん陰ってくるとか、英知がだんだん無知に変わってくるような場合の諸段階のことです。それにたいし、高サの段階は、目的・原因・結果のようなつながり、あるいは、先のもの・後のもの・最後のもののような場合です。

高サの段階については、上昇するとか下降すると言えます。高低の段階だからです。それにたいし、広サの段階については、増加するとか減少すると言えます。これは幅のことだからです。以上二つの段階については、共通点は何もないほど違っているため、はっきり区別して下さい。混同はしないようにして下さい。

200. あらゆる種類の完全性 *perfectiones* は、段階毎に、また段階にしたがって、増えていったり、高くのぼったりします。なぜなら、主体（または主語） *sua subjecta* があって、いろいろな述語 *praedicata* が来ます。そしてまた、完全とか不完全は、共通の述語でもあります。すなわち、〈いのち〉について、力について、形相について、述べるわけです。

〈いのち〉の完全性 *perfectio vitae* — これは、愛と英知の完全性です。意志と理性は、愛と英知の器であり、〈いのち〉の完全性は、意志の完全性であり、理性の完全性です。また、情愛の完全性、思考の完全性です。なお霊の熱は、愛の容器を指し、霊の光は、英知の容器を指します。したがって、このような場合の完全性とは、〈いのち〉の完全性を指しています。

力の完全性 *perfectio virium* — これは、〈いのち〉をとおして、動き、活動するものすべての完全性を言います。でもその中に〈いのち〉があるわけではありません。活動力という面では、大気がそのような力になります。また、その力は人間にも、各種動物にもありますが、内部と外部の実体的な器官が、その力になります。この自然界で、直接・間接に、太陽から活動力を吸収しているものには、すべてそのような力があります。

形相の完全性 *perfectio formarum* — 力の完全性は、それと一つになって働きます。それは、力があるところには、それ相応の形相があるからです。ただ違うところは、形相は実体ですが、力は、形相がもっている活動力です。したがって、この両者には同じような完全性の諸段階があります。力にはならない形相があるにはあっても、段階に応じて、それなりに完全です。

201. 〈いのち〉・力・形相の完全性について、これから述べていきますが、広サ（継続）の諸段階に則して、増減するようなものには触れません。この世でも周知のことだからです。ここではむしろ、高サ（隔離）の諸段階にしたがって、昇降するような〈いのち〉・力・形相の完全性について触れます。この世では、まだそれが知られていないからです。

高サの諸段階にしたがって、完全性がのぼったり下ったりするといっても、自然界の中で眼に映るものからは分かりませんが、霊界で眼に映るものからは、はっきり分かります。

自然の世界で眼に見えるものから発見できることで、内部に向かっ

て調べていけばいくほど、もっとすばらしいことが分かってきます。たとえば、眼・耳・舌・筋肉・心臓・肺臓・肝臓・脾臓・腎臓を調べても、金属・鉱物・岩石を見ても分かります。鉱物にも動物にも、内部を見れば見るほど、すばらしいことが起こっているのを知ります。ところが、高サ（隔離）の諸段階にしたがって、内に入れば入るほど、より完全になっていることは、まだほとんど分かっていません。このような段階があることを知らないため、隠されたままでした。

ところが、霊界にはこの諸段階が手にとるように現存しています。霊界の全体が、最高のものから最低のものにいたるまで、明確に段階的に区分されていて、その状態から、隔離的段階について、よく呑みこめるようになります。以上から、自然界では同等の段階にある力や完全性が、どのようなものか分かってくると思います。

202. 霊界には三層の天界があり、それは高サの段階によって区分されています。最高の天界の天使たちは、中間天界の天使たちより、あらゆる点で、より完全です。中間天界にいる天使たちは、最下の天界にいる天使たちより、あらゆる点で、より完全です。その完全性の段階は、最下の天界の天使たちは、中間天界の天使たちの完全性には、最初の敷居をまたぐことさえできません。同じく中間天界の天使たちは、最高天界の天使たちの完全性には、最初の敷居をまたぐこともできません。

以上は逆説的に見えても、真実です。理由は、かれらがつくっている社会は、隔離の諸段階にもとづくもので、継続の諸段階にもとづくものではないからです。上位の天使たちと、下位の天使たちの間

では、情愛と思考、それに話し方もはっきり違っていて、何の共通点もないことが、わたし自身が経験を通して分かりました。しかも交流は、相応をとおしてしか行われていません。この相応は、主からの直接の流入をとおして、全天界にわたっています。同時に最高天界を通過し、最下の天界に及ぶ間接の流入もあります。

以上のような区分がありますが、自然的な言語能力では表現することができませんし、描写することもできません。天使たちが考えていることは、霊的であって自然的概念にあてはまりません。それを表現したり描写するとなれば、かれらの〈ことば〉、かれらの声と文字を使わなくてはなりません。人間のものでは不可能です。それゆえ、天界では口で言い表せないことを聞いたり、見たりすると言います。その隔絶した違いは、次の説明で少し分かっていただけでしょう。

最高の第三天界で、天使たちがもっているのは、「目的」的思考です。中間の第二天界で天使たちがもっているのは、「原因」的思考です。最下の第一天界で天使たちがもっているのは、「結果」的思考です。

ここで知っておいて下さい。「目的」から考えるのと、「目的」について考えるのはちがいます。また、「原因」から考えるのと、「原因」について考えるのはちがいます。そして「結果」から考えるのと、「結果」について考えるのはちがいます。下位の天界の天使たちは、「原因」について、また「目的」について考えます。上位の天界の天使たちは、「原因」から、また「目的」から考えます。「から考える」のは、すぐれた英知によります。「について考える」のは、劣った英知によります。

したがって、「目的から考える」のは英知です。「原因から考える」のは理知です。「結果から考える」のは知識です。ここで、あらゆる完全性は、諸段階とともに、諸段階に応じて、のぼったり下ったりすることが分かります。

203. 人間の内部とは、その人の意志と理性を指しますが、その内部は段階の面で天界に似ています。なぜなら、人は精神の内部は天界の雛形だからです。したがって、内部の完全性の面でも、人は天界に似ています。ただし、この世で生きているあいだ、その完全性の状態は、人の目には見えません。最低の段階にいるためです。最低の段階にあって、そこから上位の段階に気づくことはありません。でも、死んでから気づきます。人はそのとき、自分の愛と英知に対応した段階にやって来て、天使になります。そして自然的人間には、とうてい口では言い表せないことを、考えたり話したりします。

そのとき、人の精神にあるものが全部、単一の比率でなく、三層の比率にあげられます。高サの段階とは、その三層の比率 *ratio triplicata* にある場合のことで、広サの段階は単一の比率です。ただし、この高サの段階にあげられるのは、この世で真理のうちにあって、それを生活に適用した人にかざられます。

204. 〈先にあるもの〉は、〈後にくるもの〉より不完全に見え、〈単純なもの〉は、〈複雑なもの〉より不完全に見えます。しかし、〈先にあるもの〉があって〈後にくるもの〉が生じ、〈単純なもの〉

があつて〈複雑なもの〉が生じます。

その理由は、〈先にあるもの〉〈単純なもの〉は、ずっと裸 nudiora であるとともに、生命の欠けた実体や物質に隠されている部分が少ないからです。それは、より神聖であるということです。したがって、主がいます靈的太陽に、いっそう近いことになります。

完全性そのものは主のうちにあります。すなわち、主の〈神の愛〉と〈神の英知〉が発出する原点、つまり、その太陽のうちにあります。そのあと、それに、より近い者のうちにあり、そのようにして順序よく、ずっと下の方までつづき、遠ざかれば遠ざかるほど、不完全になっていきます。

このような完全性は〈先にあるもの〉また〈単純なもの〉ほど、すぐれていると言いました。そうでないとすれば、人間も動物も、タネから実在しはじめ、そのあと存続していくことはできません。樹木や果樹のタネも、生育し繁殖していくことはできません。すべて、先にあれば先にあるほど、単純であれば単純であるほど、より完全ですから、崩壊をまぬがれることができます。

- 7 「継続性」の秩序では、第一段階が最高で、第三段階が最低である。「同時性」の秩序では、第一段階が内奥で、第三段階が最外となる

205. 継続性の秩序 *ordo successivus* と、同時性の秩序 *ordo simultaneus* があります。継続性の秩序には、それなりの段階があ

り、最高から最低、または最上から最下まであります。天使たちの諸天界は、この秩序の下にあります。最高には第三天界があり、中間には第二天界があり、第一天界は最低があります。これは、それぞれの相互的位置づけです。

継続性の秩序には、天使にある愛と英知の状態があります。熱と光の状態、霊的大気の状態があります。形相や力の完全性も、すべてその秩序のうちにあります。高サ（隔離）の諸段階は、この継続性の秩序にあります。したがって、この段階は三段に分かれて立っている柱のようで、その階段を上ったり下ったりします。最上段のフロアは最も美しくて完全です。中段のフロアは美しさと完全性が少し減り、最下のフロアは美しさと完全性がさらに減ります。

同時性の秩序は、以上と同じ段階から成っていますが、外観がちがいます。継続性の秩序の最高のものがここにあつて、前述したように、最も完全で美しく、しかも内奥にあります。それより下にあるものは中央に位置し、最下部にあるものは周辺になります。

以上三つの段階からなっているという点では、不変の個体のようです。中間部あるいは中央に、もっとも繊細な部分があり、その周囲はやや繊細さが劣り、その周辺の最外部には合成部があつて、これはもっと粗雑です。前述した柱を例にとれば、それが平地に立っているとすると、最高の部分が一番内奥にあり、中間部が中央で、最下部が最外端にあります。

206. 継続性の秩序から見て最高にあるものは、同時性の秩序から見て内奥にあります。また、最下にあるものは最外にあります。

したがって、〈みことば〉で「より高く」とは、「より内面へ」むかうことで、「より低く」とは、「より外面へ」むかうことです。また、「上へ」と「下へ」、「高み」と「深み」なども同じです。

207. 同時性の秩序のもとでの隔離の諸段階は、すべて末端にあります。筋肉内にある運動繊維、神経にある繊維、内臓と器官にある繊維と小器官は、このような秩序のもとにあります。その中では最も単純なものは内部にあって、しかも最も完全です。外部にあるものは、それを合成してできています。

隔離の諸段階にあるこのような秩序は、すべてのタネの中にあります。また、あらゆる果物にもあります。また、金属・岩石には、みなあります。それらの部分部分は、全体が出来あがる部分です。部分のなかには内奥部・中間部・最外部があって、以上の諸段階をつくっています。これらの実体または物質の最初のもは、単純なものであって、その単純なものが、順次合成され束ねられ、集合体になっていきます。

208. 一口で言えば、以上の諸段階は、すべて末端、つまりはすべての結果のうちにあります。すべて末端的なもの *ultimum* は、〈先にあるもの〉から成っており、その〈先にあるもの〉は、それなりの原点になるものをもっています。

また、すべての結果は原因から成っています。そして原因は目的から成っています。また目的こそ原因のすべてであり、原因こそ結果のすべてであることは、前述したとおりです。これは目的が内奥をつく

り、原因が中間をつくり、結果が末端をつくることです。

以上は愛と英知の段階について、熱と光の段階について言えることであり、人間にある情愛と、思考の器官になる形相についても言えません。

継続性の秩序と同時性の秩序における、以上の諸段階の系列については、『聖書についての新エルサレムの教義』（38節他）にも記されています。〈みことば〉の個々全体には、同じような段階があることについて記してあります。

8 末端的な段階は、合成的になる。しかも、先にある諸段階を受け容れる土台になる

209. 本書のこの部分では、諸段階についての原理を扱っているわけですが。それについて、霊界・自然界両者に実在する、多様なものをおして、今まで説明してきました。たとえば、天使たちがいる諸天界にも段階があり、かれらの熱と光に段階があり、大気に段階があり、人体だけでなく、動物界・鉱物界にあるものなどで、多々説明しました。

しかし、この原理は、もっと広く妥当します。つまり、自然的なものだけでなく、民事・道徳や霊的なもの、その個々全体にまで妥当します。段階についての原理が、これだけ広く妥当するのは二つの理由からです。

第一は、すべてのもの、何か述べられるものの中には、目的・原因・結果と呼ばれる三つがあります。そしてこの三つは、高サの段階によって相互に関わっています。

第二は、すべて民事・道徳・靈性は、実体から遊離したものではなく、実体です。それは愛と英知が抽象的なものではなく、実体であるのと同じです（前40～43節で証明済みです）。したがって、民事・道徳や靈性にかんするものは、みな同様です。もちろん、実体から抽象して考えることはできますが、それ自身としては、抽象的なものではありません。たとえば、情愛と思考、仁愛と信仰、意志と理性はそうです。愛と英知についてもそうでした。つまり、実体としての主体がなかったら、何もありません。すなわち、主体または実体の状態を言っています。実体の変化であって、それが多種多様に現れてきます。それについては後述します。実体とは形相のことです。形相がなかったら実体もないからです。

210. 意志と理性、情愛と思考、仁愛と信仰などについて考えるとき、人々はその〈主体になる実体〉から、以上を遊離させて考えてきました。それで、実体とか形相の状態であるとする、正しい考え方が失われてしまいました。感覚作用にしても、その活動にしても、感覚器官や運動器官から遊離したものではありません。それが抽象化し遊離してしまうと、架空の存在になってしまいます。眼がない視覚、耳のない聴覚、舌のない味覚などのようです。

211. 民事的なもの、道徳的なもの、靈的なものは、すべて自然

的なものと同じように、段階を経て進展します。それは、連続的な段階を通してだけでなく、隔離的な段階を通して、進展します。隔離的段階の進展とは、原因に向かっていく目的の進展であり、結果に向かっていく原因の進展でもあります。

わたしがここで、今まで述べたことから、明らかにさせたいのは、最終・末端の段階は、先行する段階を含みもつ合成であり、土台であることです。すなわち、愛と英知、意志と理性、情愛と思考、仁愛と信仰の関係は、そのような関係になります。

212. 末端の最終的段階とは、合成的なもので、先にくる諸段階を受け容れる土台になります。これは、目的・原因・結果の連鎖的進展から見るとよく分かります。

まず結果について、これは合成的であるとともに、原因や目的を受けて立つ土台であることは、理性が照らされれば分かってきます。ただし、目的とそれにまつわるもの、原因とそれにまつわるものが、現実的に結果の中にあること、しかも結果は、以上のものが完全に充足された複合体であることは、なかなか明白になりません。

この章節で前述してきたところから明らかですが、とくに、一つはもう一つと、三層のつながりがあると記しました。また、結果とは、その末端・最終的なものの中にある目的であって、それ以外の何ものでもありません。最終的なものは複合体であることは、最終的なものは、受けてたつ器、また土台であるという意味です。

213. 次に愛と英知について述べます。愛は目的です。英知は

媒体的原因です。役立ちは結果です。しかも、役立ちは合成的であつて、英知と愛を含みもつ土台です。役立ちは、愛のすべてと英知のすべてを、現実的に内在させるような複合的容器です。しかも、愛と英知はそこで同時的に存在しています。すべての愛と、すべての英知は、同質的であるとともに同調的で、役立ちのうちに内在しています。それについては、（189～194節で）前述したとおりです。

214. それと同じような諸段階の系列で、情愛・思考・行為があります。すべて情愛は、愛と関係があります。思考は英知と関係があります。行為は役立ちと関係があります。それと同じような諸段階の系列に、仁愛・信仰・善行があります。仁愛は情愛に属し、信仰は思考に属し、善行は行為に属するものだからです。それと同じような諸段階の系列に、意志・理性・実践があります。意志は愛、つまりは情愛に属するもの、理性は英知、つまり信仰に属するもの、実践は役立ち、すなわち行いに属するものです。

したがって、英知と愛は、すべて役立ちの中に内在し、思考と情愛は、すべて行為の中に内在し、信仰と仁愛は、すべて行いの中に内在します。以下はそれに類します。いずれにしても、すべては同質です。つまり同調しているわけです。

215. それぞれの系列で最後にくるもの、すなわち、役立ち・行為・行い・実践こそ、先行するものすべての合成であり、器であることは、まだ知られていませんでした。役立ち・行為・行い・実践のなかには、動きしかないように見えますが、実は、先行するものすべて

が、その中に内在し、欠けたものは何もありません。それはぶどう酒が容器に入っており、家具が家の中に納まっているようです。

ところが、そのように見えないわけは、外側から見ただけで、外見では活動と運動しか見えないからです。腕や手を動かすと、一千本の運動繊維が、その運動に協力しているのは見えませんし、その一千本の運動繊維にたいして、何千もの思考や情愛が対応しており、思考や情愛は、運動繊維を刺激します。そして、そのようなことが内面で行われていますから、人体の感覚には現れてきません。

人体の中で、人体を使って何かをするとき、意志から始まり、思考をとおして、何かが行われていることは周知のとおりです。そして、意志か理性が働いているとき、意志の個々全体と、思考の個々全体が、行為の中に内在しなければ働きもありません。その両者は分離できません。したがって、人の意志、つまり意図を判断するには、その人がやった行いによります。

わたしには、天使たちは、人の行為や事実だけで、行なった人の意志と思考のすべてを感じとり、見わけることができることが分かりました。第三天界の天使たちは、本人の意志をもとにして、何を目的にしているかを感知します。第二天界の天使たちは、目的達成にいたる本人の原因を知ります。したがって、〈みことば〉の中で、「行い」や「わざ」が何回も命じられているのはそのためです。また、人は行いによって知られると言われています。

216. 天使的英知にもとづく、次のようになります。すなわち、意志と理性、情愛と思考、仁愛と信仰は、できるかぎり、行いや業を

身につけていなければなりません、そうでない場合、一陣の風、空中に消えていく幻影のようになります。人がそれを実行・実践していくことによって、初めてその人のもとにとどまり、本人の〈いのち〉になります。その理由は、最外部こそ複合的で、先にくるものを受け入れる器・土台になるからです。善行とは関係ない信仰や、実践をともなっていない信仰と仁愛は、以上のような風であり幻影です。それになりたいし、信仰と仁愛を身につけている人は、善いわざをしたいと思うし、それが可能なことを知っています。仁愛から切り離された信仰をもっている人は別です。

9 高サの段階で、その最終の段階は、充足された状態
in pleno であるとともに、可能性が発揮された状態
in potentia でもある

217. 前述したように、最終の段階は、先行する段階を合成し、受け入れる器です。したがって、先行する諸段階は、最終的には充足した状態であることが分かります。つまり、それなりの結果が生まれたわけで、あらゆる結果は、原因が充足したものです。

218. 〈先にくるもの〉と〈後にくるもの〉とも言われ、上ったり、下ったりする段階があります。これは、高サ（隔離）の段階を指し、その最終は、可能性が発揮された状態です。それはまた、感覚能力とか感知力の対象として、今まで豊富に確認されてきたことから、

充分知るところと思います。

今はただ、無生物や生物のなかにある「効能 *conatus*」・「活力 *vires*」・「運動 *motus*」をつかって、たしかめていくことにします。

周知のとおり、効能は、それ自身からは何もしません。それに相応する活力があり、その活力が働いて運動化します。すなわち効能は、すべて活力の中に宿っており、活力をとおして運動の中に宿ります。運動とは、最終段階での効能です。つまり運動をとおして、可能なかぎりを尽くします。

効能・活力・運動はそれぞれ、高サの段階によってしか、つながりません。したがって、そのつながりは連続 *continuum* ではなく、隔離 *discretum* されており、相応によってしか、つながりません。なぜなら、効能は活力ではなく、活力は運動ではないからです。

むしろ活力は、効能から生じます。効能が刺激されて活力が起こり、活力を介して、運動が生まれるからです。したがって効能の中だけでは、可能性は発揮されませんし、活力の中だけでも発揮されません。むしろ、効能と活力の産物である〈運動〉になって、発揮されます。

以上は自然界の中で、感覚されるものでも感知されるものでもないから、よく分からないまま、矛盾しているようにしか見えませんが、可能性が発揮されるまでの進展は、そのようになっています。

219. でも以上を、生命体の効能、活力、運動に応用してみましよう。人間のうちにある生命の効能といえば、生きている主体であり、理性と一体になっている人の意志のことです。人間のうちにある生命

の活力とは、人体を構成している内面の力です。その全面にわたって、運動繊維が種々様々に張りめぐらされています。人間のうちにある生命の運動とは、現実の活動 *actio* のことです。理性と一体化している意志の働きで、活力をとおして生まれる活動です。

意志および理性より成る内部が、第一段階を形成しています。人体を支える内部が、第二段階を形成しています。それらの複合体である身体全体が、第三段階を形成しています。周知のとおり、精神の内部は肉体にある活力を利用して、初めて可能性を発揮できますし、活力は活力で肉体の活動があって、初めて可能性が発揮できます。

以上の三つは、連続して作用しているのではなく、隔離されながらの作用であり、相応にもとづく作用です。精神の内部は、肉体と相応の関係にあり、肉体の内部は、肉体の外部と相応の関係にあります。活動が現実化するはその外部です。要するに、先立つ二つのものは、肉体の外部的な働きがあって、可能性が発揮されています。

人間の場合、夢の中や休息の状態にあれば、活動はありません。それでも、効能とか活力は、ある種の可能性をもっているわけです。しかも、その効能・活力は、心臓や肺臓という肉体の通常運動への方向づけをもっています。この肉体の活動が停止すると、活力もまた停止し、その活力の停止と同時に効能も終わります。

220. 人体全体は、その可能性（力量）の限界をもっていますが、それはとくに末端部でもある両腕と両手にあらわれます。したがって、〈みことば〉では「腕」とか「手」は、可能性 *potentia* を表わし、力量において「右」のほうが優れています。可能性が発揮されていく

段階にも、以上のような発展や進展があるため、天使たちは人の手がする活動を、本人全体の相応として見ます。つまり本人の理性と意志、仁愛と信仰、精神の内的〈いのち〉と、それからくる肉体の外的〈いのち〉が、どんなふうかが分かります。

身体の活動でも、手を使うだけで、天使たちには以上のことが分かり、わたしは何度も驚かされました。でも、生きた経験で何回か示されました。牧師職への任命で両手を置きますが、手を置くこと（すなわち按手）は、交流を意味します。その他いろいろ聞きました。

結論は、仁愛も信仰も、行いのうちに宿ることです。行いの伴わない仁愛や信仰は、太陽のまわりの虹のようで、消えてしまうか、雲によってかき消されます。ですから、〈みことば〉では、「行い」と言ったり、「わざ」と言ったりします。そして、人の救いはここにかかっています。行いを伴う者は、英知のある人間、行いを伴わない者は、愚かな人間です。

理解しなければならないことは、「行い」とは現実化する役立ちのことです。その役立ちの中に、またその役立ちにしたがって、仁愛と信仰のすべてが生まれます。それは、役立ちと相応関係にあることです。すなわち霊的相応関係です。主体となるもの、つまり実体や物質を介して、その相応が成立します。

2 2 1. 以上を耳にして、理性に入ってくる秘義が二つあります。これがここで啓示されることになります。

第一の秘義は次の通りです。〈みことば〉は、文字上の意味にあつ

ては、それなりに充足した状態、それなりに可能性の発揮された状態です。〈みことば〉には、三つの段階があって、それにもとづいて三つの意味解釈があります。天的意味、霊的意味、自然的意味です。以上三つの意味解釈は、〈みことば〉にある〈高サの三段階〉によります。おたがいのつながりは相応によります。

最終の末端的意味とは、自然的意味を指し、これは「文字上の意味」と言われます。同じくこれに相応する、より内面の意味を受け支え、合成する土台になっているだけではありません。〈みことば〉の最終的意味であり、それなりに充足し、可能性を発揮した状態です。これについては、『聖書についての新エルサレムの教義』（27～35、36～49、50～61、62～69節）に、くわしく説明し確認してあります。

第二の秘義は次のとおりです。主はこの世に來られ人間性をとられました。それは、地獄を征服する可能性を發揮し、天界と地上にあるすべてのものの秩序を回復するためでした。この人間性は、ご自身にあった先行的人間性 *Humanum suum prior* の上に、着けられたものでした。この世で身に帯びられた人間性は、この世の人間の人間性と同じようでしたが、先行的人間性に加え、両者とも神であるゆえ、天使たちや人間の限りある人間性を無限に越えるものでした。

しかも、主は自然的人間性を、その最終部まで、完全に栄化されましたから、全肉体をもって復活された点、通常の間人とは違います。この人間性を身に帯びられることによって、地獄を征服し、天界を秩序づける神的全能力を、身につけるようになっただけでなく、永遠にいたるまで地獄を征服し、人を救う力を得られました。力と威力にお

いて、神の右に座するとは、以上の力を身につけることでした。

主は、自然的人間性を身に帯びることによって、最終の末端部まで、ご自分を〈神の真理〉に化されました。そのため、〈みことば〉と言われ、〈みことば〉は肉となったと言われます。最終の末端部における〈神の真理〉とは、文字上の意味での〈みことば〉です。ご自身については、モーセと預言者の書にありますが、その〈みことば〉にあるすべてが、全うされることによって、そのようになさいました。

人はみな各自、自分なりの善と、自分なりの真理をもっています。人は人以外の何ものでもありません。それにたいし主は、自然の人間性をとられることによって、ご自身が最初から最後まで〈神の善・神の真理〉になられました。最初のものから、最終の末端まで、〈神の愛・神の英知〉になられました。したがって、天使のいる天界には、太陽として姿を現されますが、ご自身の到来以前にくらべると、この世への到来後は、いっそうのまばゆさと輝きを放っています。

以上の秘義は、諸段階についての教義を学んだあとは、理性で把握できるものと思います。この世に到来されるまえ、その全能はどんなふうだったかは、後述するつもりです。

10 創造されたものは、最大のものにも、最小のものにも、以上二種類の段階が存在する

2 2 2. 万物は、最大のものから最小のものまで、隔離的段階と連続的段階、すなわち、高サの段階と、広サの段階から成っています。

このことは、見える世界のものから、例をあげるわけにはいきません。最小のものは肉眼では見えないし、実在する最大のものは、段階的に隔離されているとは思えないからです。したがって、普遍的なもので、証明していく以外にはありません。天使たちは普遍的なものをもとにして、英知のうちにおり、その結果、個々のものについての知識をもつこととなります。それで、天使たちが個々のものについて、口にしたことを紹介します。

223. 天使たちは、次のようなことを言いました。どんな小さなものの中にも、二種の段階が存在しています。動物の中のどんな小さな部分にも、植物の中のどんな小さな部分にも、鉱物の中のどんな小さな部分にも、それがあります。なお、エーテルや、空気の微粒子にもあります。エーテルや空気は、熱と光を受ける器ですが、その熱と光の極小部 *minimum* にも、二種の段階が存在します。霊の熱と、霊の光は、愛と英知を受ける器で、その極小部にも、二種の段階があります。

天使たちは次のようにも言いました。ほんの小さな情愛にも、ほんの小さな思考にも、また、ほんの小さな思考概念にも、二種の段階があり、この二種の段階が存在しないものは、全然存在しないそうです。つまりこれがなかったら、何の形相も生まれなし、何の性格づけもないし、変化推移するような状態もないし、実在することもあり得ないとのことでした。

天使たちは次のような真理で、それを確認しました。すなわち、創造主である神、つまり永遠のむかしからまします主のうちには、無限

にあるご性格 *infinita* があり、それが明らかに一つになっています。つまり主の無限性 *infinita* の中にある無限性 *infinita* で、その限りなくある無限性のうちに二種の段階があり、その二種の段階も、主ご自身の中では、明らかに一つになっています。

主ご自身の中に、このような無限性があったからこそ、万物は主によって造られました。そして被造物は、主ご自身の中にある無限性をイメージとして映し出します。そのため、以上の二つの段階を宿していないものは、いかに極小の有限体にも、存在しません。

このような二つの段階が、極小のものにも、極大のものにも、等しく存在しているのは、神が、極大のものの中でも極小のものの中でも同一の方だからです。神人のうちにあつて、無限性がはっきりと一つになっていることについては、前（17～22）節を参照してください。最大のものの中にも、最小のものの中にも、神は同一であることについては、（77～82節）を見てください。（115、169、171節）にも説明してあります。

224. どんな小さな愛と英知、どんな小さな情愛や思考、どんな小さな思考概念にも、二種類の段階が存在しています。それは（40～43節で前述したように）、愛も英知も実体であり、形相であるからです。情愛にしても思考にしてもそうです。前述したように、二つの段階を宿していない形相は存在しないわけであり、そのようなものには、二つの段階があるということです。もし〈愛と英知〉、〈情愛と思考〉を形相のうちにある実体から切り離れたとすると、無になっ

てしまいます。なぜなら、みずからの主体 *subjecta* の外にあるものは存在しないからです。ただ人は、いろいろな様子で現れてくる場合、そのものの状態の変化として、感じとっているに過ぎません。

225. 二種類の段階を宿している最大のもものは、全容として見た場合の宇宙です。これはまた、それなりの複雑さをもった *in suo complexu* 自然世界です。それに霊界もそうです。どんな帝国でも、どんな王国でも、複合的に見てそうです。民事的なものも、道徳的なものも、霊的なものも、その複合はみなそうです。それなりの複合性から見て、全動物界、全植物界、全鉱物界はみなそうです。自然・霊両界にある大気も、一つにとらえて見れば、そのとおりですし、両界にある熱と光もそうです。

同じように、小規模になってくると、人間もそれなりの複合として見ると、そうですし、動物もそうです。樹木も、灌木も、みなそれなりに、そうなっています。岩石もそうになっているし、金属もみなそうです。以上のものは、その形相がみな二種の段階から成っているという点で同じです。

その理由は次のとおりです。最大のものも最小のものも、神によって造られましたが、その神はどこでも同一です（前77～82節で説明済み）。しかも以上のものは、どれもその最も究極の個体をとっても、二種の段階をもった形相であるという点で、その全体に対しても、最大の全体に対しても、同様にそうなっていることです。

226. 最大のものも最小のものも、二種類の段階をもつ形相であ

って、最初のものから最後のものにいたるまで、つながりがあることになります。つまり、類似性がそれらをつないでいることになります。

とは言っても、どんな小さなものでも、一つは他の一つと同じではありません。そのため、個々のものも、究極の個体も、みなそれぞれ区別があるわけです。一つの形相の中にあるどんな小さなもの、あるいは、形相と形相とのあいだにあるどんな小さなものでも、全く同じということはありません。なぜなら、最大のものの中にも、同じような段階があって、その最大のものは、最小のものから成り立っているからです。

最大のものの中に、以上の段階があること、また、その段階にしたがって、最高から最低まで、中心から周辺まで、永久にわたる区別が生じていることから、どんな小さなものの中にも、全く同じ段階から成っているということは、あり得ないことになります。

227. 天使の英知から出たことですが、被造宇宙は、その諸段階からみて、共通のものと個別のもの、最大のもの、最小のもの、類似が出発点になって、完成されていきます。それと同時に、一つは他の一つを自分の同類と見てとり、あらゆる種類の役立ちを果たすため結合し、その全目的を結果にまでもっていきます。

228. 以上は、たしかに逆説的に見えます。なぜなら、見える世界のものに例をとって示すことができないからです。とは言え、抽象的であることは、普遍的であるため、具体例によるよりも、ずっと理解がたやすくなります。具体的なものはたえず変化しており、その変

化推移があって、あいまいになります。

229. それ以上小さな形相から成ることはあり得ないほど、小さな形相をもった単一の実体 *substantia simplex* が存在すると、ある人たちは言います。すなわち、その実体から始まって、それが累積によって、合成実体が実現し、最終的に「物質 *materiae*」と呼ばれる実体が生じることです。

しかし、このようなきわめて単純な実体など存在しません。形相がなかったら、実体ではありません。形相がなかったら、何も述べる〈ことば〉もないし、何も述べる〈ことば〉もないような存在が累積しても、何も出てきません。極小であるとともに最も単純な被造実体がありますが、それは万物の中の最初のもので、その中には無数のものが存在します。それについては、形相について述べる後章で触れます。

11 主のうちには、三種の高サの段階があるが、その段階は無限であって、造られたものではない。人のうちにある三種の段階は有限であって、造られたものである

230. 前述したように、主は〈愛そのもの・英知そのもの〉で、主の中にある高サの三段階も無限であり、造られないものです。主は〈愛そのもの・英知そのもの〉であり、〈役立ちそのもの〉でもあります。愛のめざす目的は役立ちです。そして、英知をとおして、役立

ちを果たします。愛も英知も役立ちなくしては、限度もなく、目的もありません。すなわち居所がなくなります。したがって、みずから憩う役立ちがなかったら、存在するとか、実在するとも言えません。以上の三つは、生命をもつ主体のなかで、高サの三段階を構成します。

この三つとは〈第一目的〉と、原因と言われる〈中間目的〉と、結果と言われる〈最終目的〉です。目的・原因・結果が、高サの三段階を構成することについては、前述しましたし、さまざまに確認もしてきました。

231. 人間には、以上三つの段階があることは、愛と英知の段階にまで、人が心を高めていけば分かります。第二、第三天界の天使たちは、その段階の中に宿っています。

天使たちは、みな人間として生まれました。そして人間も、その内奥では天界の雛形です。天界にも段階があるように、人間にも、創造当初から高サの段階があります。

人は神の像であり、神の似姿です。したがって、その三種の段階が人に刻みこまれています。それは神人、すなわち主のうちにその三段階があるためです。主にあっては、その段階は無限であり、創造されないものですが、人のうちでは有限であり被造的で、それは第一部で説明したことからも分かります。

つまり主は、それ自身にあって愛であり、英知であること、人は主の愛と英知の受け皿であること、同時に主については、無限以外に言い表す〈ことば〉がないこと、人については、有限以外に言い表す〈ことば〉がないことなどです。

2 3 2. 以上の三つの段階は、天使たちの場合、天的段階、靈的段階、自然的段階と呼ばれます。天的段階とは愛の段階です。靈的段階とは英知の段階です。自然的段階とは役立ちの段階です。そのように呼ばれている理由は次のとおりです。天界は二種の王国に分けられており、一つは天的王国、もう一つは靈的王国ですが、それに第三の王国がつけ加わります。そこにはこの世の人間がおり、これが自然的王国です。

天的王国を構成している天使たちは、愛のうちにいます。靈的王国を構成している天使たちは、英知のうちにいます。それにたいして、この世の人間は、役立ちのうちにいます。このように、以上の王国はみなつながっています。人間が役立ちのうちにあるとは、どのようなことかは、次の部で述べることにします。

2 3 3. わたしが天界から聞いたは、エホバ、すなわち〈永遠のむかしからまします主〉のうちには、先行する二つの段階が現実として actualiter 存在していたけれども、第三の段階は可能態として in potentia 存在していたとのことです。これは天使たちの場合と同じです。

ところが、この世で人間性を身に帯びたあと、いわゆる自然的な第三の段階に入り、この世の人間と同じような「人 Homo」になられました。ただ違うところは、この第三段階も、まえの二つと同様、無限・無被造であるのにたいし、天使や人間の場合は、有限・被造である点です。空間に関係なく、すべての空間を満たしている神性（6 9～7 2 節）は、また、自然世界の末端まで貫き通しています。

ただし、人間性を身に帯びるまえまでは、神からの流入は天界の天使たちをとおして、間接的に自然的段階に流れ入りましたが、人間性をとられたあと、主みずからの力で、直接に流れ入ります。そのため主が来られる以前は、この世での教会はすべて霊的なもの・天的なものを表す表象でしたが、主が来られたあとは、〈霊的・自然的な教会〉、〈天的・自然的な教会〉になり、表象的信心は廃止されました。また、それが原因で、前述したように天使のいる天界の太陽は、主の〈神的愛〉と〈神的英知〉を発出する原点となり、人間性を身に帯びられたあとは、それ以前にくらべて、ずっとすばらしい光と輝きを放っています。それについては、イザヤが次のように言っています。その日には、

「月の光は、太陽の光のようになり、太陽の光は七倍となって、七つの日の光のようになり」（イザヤ 30・26）。

これは、主がこの世に来られたあとの、天界と教会の状態について言っています。『黙示録』には次のようにあります。

人の子の顔が見えたが、

「その威力は、太陽の輝きのようであった」（黙示 1・16）。

その他にもあります。（例えば、イザヤ 60・20、サムエル下 23・3、4、マタイ 17・1、2）。

主の到来以前には、天使のいる天界をとおして、人間は間接的に照らされていました。それは、太陽の光を仲立ちしている月の光にたとえられます。その太陽の光も、主が到来されたあとは、直接的になりました。それについては、イザヤが、「月の光は、太陽の光のようになる」と言っています。また、ダビデは記します。

「その方の日には、正しい人は栄え、月が見えなくなるまで、平和は増し加わる」（詩 57・7）。

以上は、主について述べています。

234. 永遠のむかしからまします主、すなわちエホバは、この世で人間性をとり、それによって、第三の段階を身につけられましたが、それには次のような理由があります。つまり、みずからの神性がみごもり、処女によって誕生なさいました。それで初めて人間の自然本性と同様の、自然本性をとおして *per naturam similem naturae humanae*、その第三段階に入ることができたのです。

自然本性は、それ自身としては死んでいますが、神性を受け容れる器でもあります。主は、その自然本性を脱ぎすて、神性を身につけられました。これは、この世における主の二つの状態、すなわち、自己無化 *exinanitio* の状態と、栄化 *glorificatio* の状態をあらわしています。それについては、『主についての新エルサレムの教義』に記されています。

235. 以上、高サの上昇の三段階を一般的に述べました。その三段階は、先の前節で述べたように、最大のものの中にも、最小のものの中にも存在します。それ以上は、ここでは割愛します。

ここで触れておきたいのは、次のことだけです。以上の段階は、愛の個々全体に宿っているし、英知の個々全体に宿っています。同時に、その段階は、役立ちの個々全体にも宿っています。ただしその段階は、主のうちにあるものは、すべて限りがありませんが、天使や人間のう

ちにあるものは、すべて限りがあります。以上の段階が、どのような様子で、愛のうちにあるか、英知のうちにあるか、また役立ちのうちにあるかについては、系統立てて記述し、発展させていく以外にはありません。

12 以上の高サの三段階は、人間一人ひとりに生来備わっており、順次ひらかれていく。ひらかれていくにつれて、人は主のうちにあり、主は人のうちにある

236. 人間一人ひとりには、高サの三段階が備わっていますが、それが今まで知られていませんでした。なぜなら、その段階のことがよく分からなかったからです。その段階については隠されたままであったため、それが連続の段階 *gradus continui* としか思えなかったわけです。段階と言えば、連続の段階のことと思ったため、人にある愛や英知は、ただ連続して増えていくものと信じられていました。

ところが、人間一人ひとりには、生来、高サ（隔離）の三段階 *tres gradus altitudinis seu discreti* があって、ある段階は上方にあったり、ある段階は中心にあったりすることを、忘れてはなりません。しかも、高サ（隔離）の段階それぞれには、広サ（連続）の段階があり、その広サの段階にもとづいて、連続して増えていくようになっています。そのわけは、前（222～229）節で述べたように、最大のものにも、最小のものにも、すべてのものにも、この二つの段階が存在しているからです。そして、一方の段階は、他方の段階なく

しては存在することができません。

237. (232節で) 前述したように、高サの三段階には、自然的段階と、靈的段階と、天的段階があります。人は生まれるとすぐ自然的段階に入ります。そしてこの段階の中で、人の知識、また知識で得た理解力が連続して高まっていきます。それは合理性 *rationale* といわれる理性の最高位にまでいたりします。ただし、ここにたどり着いたからと言って、靈的段階と呼ばれる〈高サの段階〉がひらけてくるわけではありません。それは、理知的なものから生まれる〈役立ちへの愛〉によって開いてきます。もちろんこれは、役立ちにたいする靈的愛であって、つまりは隣人愛の愛です。

この段階になっても、同じく、連続の段階を経ることで、その最高のところまで増えていきます。つまり、真理や善を認識し、靈的諸真理をとおして増えていきます。

ただし、ここでも、天的段階と呼ばれる第三の段階が、すぐひらけてくるわけではありません。役立ちへの天的愛、つまりは、主への愛という愛によって、ひらけてきます。主への愛とは、〈みことば〉のご命令を生活に適用していくことです。つまり、悪は、地獄的・悪魔的だからこれを避け、善は、天界的・神的だからこれを行う、ということに要約できます。以上のように、人の中での三つの段階は順次ひらいていきます。

238. 人は、この世で生活しているあいだは、以上のような三つの段階が開けてくることなど、何も知りません。要するに、自然的段

階、つまり最外部の末端にいるわけで、その段階で物事を考え、意図し、話し、行動します。霊的段階となると、内部にひそんでいるため、自然的段階とのあいだで、連続した交流をもつことができません。むしろ、相応によります。そして、その相応による交流は何も感じないのです。

ところが、人は死ぬとき、自然的段階から脱却します。そのとき、自分がこの世で開いてきた段階の中に入っていきます。霊的段階が開いている人は、霊的段階に入ります。天的段階が開いている人は、天的段階に入ります。死んだのち、霊的段階に入った人は、もう自然的に考えたり、意図したり、話したり、行動したりはしません。すべて霊的です。また、天的段階に入った人は、その段階で考えたり、意図したり、話したり、行動したりします。

そして、以上の三つの段階は、おたがいに相応によってしか、つながっていないため、愛にしても、英知にしても、役立ちにしても、それなりの段階での相違がはっきりしていて、そのあいだには、連続して交流できるものは何もありません。以上から、人には、高サの三段階があって、それが順を追って開いてくることが分かります。

239. 人には、〈愛・英知・役立ち〉の三段階があります。それはまた〈理性・意志・帰結〉の三段階で、人にはそれが備わっています。帰結 *conclusum* とは役立ちへの決定です。すなわち意志とは愛の器であり、理性とは英知の器であり、帰結とは愛と英知をもとにした役立ちです。それで明らかになるのは次の通りです。すなわち、人間一人ひとりには、生来自然的な意志と理性があると同時に、

靈的・天的な意志と理性も、可能性として備わっていて、それが開けてくると、現実化することです。

一口で言えば、人間の精神は、意志と理性から成っていますが、創造以来、つまりは誕生以来、三つの段階があります。それは、人間には自然的精神と、靈的精神と、天的精神が備わっていることです。そして、人はそれによって天使の英知にもあげられます。この世で生きているときでも、その英知をもつことができます。ただし、死んでからでなければ、その英知に入っていくことができません。死んでから天使になれば、口では言い表せないことを語ります。自然の人間には、理解不可能 *incomprehensibila* です。

この世で、ある程度の教育しか受けていない人のことをわたしは知っています。かれが死んでから、わたしはかれに会い、天界で話しあいました。その人は、天使のように話しているのをわたしは、はつきり感じました。その話している内容は、自然の人間には感じとれるようなものではありませんでした。理由は、この世で〈みことば〉を自分の生活に応用し、主を崇めていました。それで、主によって、愛と英知の第三段階まであげられたわけです。人間の精神が、こんなふう高められるのを知っておく必要があります。次に述べることが理解できるためにも、それが必要です。

240. 人間には、主から二つの能力が与えられていて、それによって、動物と区別されます。その能力の一つは、何が真理で、何が善かが分かる能力で、この能力は「合理性 *rationalitas*」と呼ばれ、またそれは、理性の能力でもあります。もう一つは、真理を行い、善

を実践する能力で、この能力は「自由 libertas」と呼ばれ、それはまた、意志の能力でもあります。

人は、自分の合理性をもとにして、自分の好きなように考えることができます。つまり、神を味方にしてもいいし、神に敵対してもいいわけです。隣人のためにすることができるとともに、隣人を害することもできます。自分が考えていることを意図したり、実行したりできます。しかし、悪を見て罰を恐れる場合、自由にそれを止めることもできます。人間は、その二つの能力があるから人間です。それが、動物とちがうところです。

以上二つの能力は、主が人に与えられており、しかも絶えず与え続けられていて、取り去られることはありません。取り去られるとすると、人は人間性を失います。主は、善人であっても悪人であっても、一人ひとりの人間に臨在なさいますが、それは以上の二つの能力の中にしかありません。つまり、主が人類のうちに住まわれるのは、その能力の中です。だからこそ、善人でも悪人でも、人はみな永遠に生きます。

人が以上二つの能力を用いて、より上位の段階をひらいていくにつれ、主は、本人の近くに住まわれます。上位の段階がひらいてくると、上位の段階に入っていく、それだけ主に近くなります。そのように、段階が開いてくると、人は主の中に住み、主は人の中に住まわれることが、よく分かります。

241. 前述したように、高サの三段階は〈目的・原因・結果〉のような関係であり、その段階に応じて、〈愛・英知・役立ち〉が

進んでいきます。それで、今ここで〈目的としての愛・原因としての英知・結果としての役立ち〉について、少し触れておきます。

人はだれでも、道理をわきまえ、しかもその道理を光の下において見れば、人の愛こそ、あらゆる事柄の目的になっているのが分かります。なぜなら、愛しているからこそ、それを考え、そう帰結し、それを実行し、いずれはそれを目的にすえているからです。

人はまた、道理に照らしてみれば、英知が原因になっているのが分かります。なぜなら、自分が目指す目的が愛であり、その愛があるから、当の目的達成のための手段を、理性で追求するからです。自分の英知に頼り、それが手段となって、方法としての原因を作りあげます。さらに、役立ちが結果となることについては説明を要しません。

ただし、ある人がもっている愛は、他の人がもっている愛と同じではありませんし、ある人がもっている英知は、他の人がもっている英知と同じではありません。また、役立ちについても同じことが言えます。なぜなら（189～194節で説明したように）、この三つは、同質なもの *homogenea* だからです。このように、その人の愛は、その人なりの英知となり、それがまた、その人なりの役立ちになります。ここで、英知と言ったのは、本人の理性の働きです。

13 霊的光は、人にある三つの段階をとおして流れ入る。

ただし、人が悪を罪として避け、主を目指さないなら、
霊的熱は流れ入らない

242. (第二部で述べましたが)、天界の太陽は、神の愛と神の英知が発出する原点です。そして、その太陽から、光と熱が出てくることは、以上の事柄からも理解できるでしょう。主の英知から、光が発出し、主の愛から、熱が放出されます。光は、英知の受け皿であり、熱は、愛の器です。人が英知の中に入れば入るほど、神の光の中に入り、人が愛の中に入れば入るほど、神の熱の中に入ります。

以上の説明から、次の事実が明らかになります。光に三段階があり、熱に三段階があります。すなわち、英知に三段階があり、愛に三段階があります。この三段階は、人が神の愛と神の英知の器になるよう、つまりは、主のものになるように、人の中で形づくられます。

それで、今はっきりさせなくてはならないのは、次のとおりです。人は悪を罪として避け、主に目を向けなければ、たとえ霊の光が三段階を通じて人の中に入っても、霊の熱は人の中に入りません。同じく、人は悪を罪として避け、主に目を向けなければ、たとえ第三段階までの英知を受けることがあっても、愛を受けることはありません。また同じく、人は悪を罪として避けなければ、人の理性が英知に高められても、人の意志は高められません。

243. 悪を罪として避け、主に目を向けなくては、理性が天界の光、つまりは天使の英知まで高められても、その意志は天界の熱、つまり天使の愛にまで高められることはありません。わたしは霊界での経験で、それがはっきり確かめられました。

神が存在するとか、主が人間として生まれられたなどは知っていても、その他のことは、ほとんど何も知らない単純な霊たちがいましたが、わたしはかれらが、天使たちとほとんど違わないほど、天使的英知の秘義を十分に理解しているのを何回も見ましたし、感じ取りました。もちろん、理解しているのは、かれらだけではなく、悪魔の群れに属する多数の者もそうでした。

かれらは、自分なりに考え始めるまえ、ただ聞いているときは理解しています。耳を傾けているあいだ、上から光が入ってきます。しかし、自分で考え始めた途端、自分の熱、つまり愛に対応する別の光が入ってきます。

そのため、秘義に耳を傾けたあと、それを感知はしても、耳を他の方に向けると、何も残っていません。むしろかれらは、悪魔の群れの出身であったため、たちまちそれを退け、全面的に否定します。それは、かれらがもっている愛の火とその光が、浅はかなものなので、暗闇を引き込んでしまうためです。そして、上からくる天界の光を消してしまいます。

244. この世でも同じことが起こります。ひどく愚かであるわけではなく、みずからの理知へのうぬぼれによって、虚偽で心を固くしてしまったわけでもない場合、高尚な話を耳にしたり、そんな書物を読んだりして、知識への情愛を宿していれば、それを理解し、心の中に納め、それをしっかり確認するようになります。これは、悪人の場合でも、善人の場合でも同じです。

また、教会に関係がある神聖なことがらを、心の底では否定し

つつも、それが理解できる悪人もいます。その高尚なことを口にしたり、説教したり、学術論文で、それを論証したりしますが、われに返って考えるときは、自分のもっている地獄の愛をもとにして、反対のことを考え、否定してしまいます。

そのように、理性は靈的光のうちにあっても、意志は靈的熱のうちにはないわけです。ここで分かるのは、理性が意志をひっぱっていくわけでも、英知が愛を生むわけでもなく、道を示し教えるだけということです。人がいかに生きるべきかを教え、どの道を歩むべきかを示します。

それにたいし、意志は理性をみちびき、意志と行動をともにするように働きかけます。意志内には愛があって、それに理性が同調する場合、これを英知と名づけます。意志みずからは、理解力がなければ何もできません。すべて、理性との結びつきがあって、すべての行動をおこします。意志は、自分と協力して働くように、理性を説得しますが、これも流入をとおして行います。意志から理性への流入であって、その逆ではありません。

245. 人間の精神的生命には三段階あって、それに光が流れ込みますが、その流入について記します。人間には熱と光、すなわち、愛と英知の受け皿として形相がありますが、その形相は前述したように、三層の段階、つまり三段階になっています。この形相は生来透明で、水晶が自然の光を通過させるように、靈の光を通過させます。人は英知の面で第三段階にまで高められることがあるのは、それによります。ただし、その形相は、靈的熱が

靈的光に、すなわち愛が英知にむすばれないかぎり、開かれません。この結びつきがあって、その透明な形相が、段階に応じて開かれていきます。

これは、地上の植物が、この世の太陽の熱と光によっているのと同じです。冬の光は、夏の光とおなじくらい明るくても、タネの中、樹木の中にあるものを開けることができません。それにたいして、春の熱は、光と結びついて開放へと向かわせます。というのは、靈的光は自然的光に相応し、靈的熱は自然的熱に相応するためです。

246. 以上の靈的熱については、人が悪を罪として避け、主に目を注ぐ以外に、いい例がありません。人が悪の中にいることは、悪を愛しているということです。つまり、悪に向かう欲望を宿していることです。悪への愛つまり情欲は、靈的愛や靈的情愛に相反する愛なのです。そして、そのような愛や情欲は、悪を罪として避ける以外には、取り除くことはできません。しかも、人が悪を避けるといっても、自分の力では不可能で、主のみ力によりますから、主の方に目を向けます。主のみ力によって悪を避けるとき、はじめて、悪の愛とその熱が除去され、その代わりに、善への愛とその熱が入ってきて、それによって上位の段階が開いてきます。

主は、上から流入を与え、その段階を開いてくださいます。そのとき、靈的愛すなわち熱が、英知すなわち靈的光にむすびつきます。すると、春季の樹木のように、その結びつきによって、人

は靈的に花を咲かせるようになります。

247. 精神の三段階のすべてにわたって、靈的光の流入がありますが、この点で人は動物と違ってきます。人が動物より優っているのは、分析的にものごとを考え、自然的なものだけでなく、靈的なことについても、真理を見とおすことができる点です。しかも、見とおして、それを真理として承認し、それにのっとり、自己改革をし、再生することが可能です。靈的光を受け容れる能力とは、前にも触れた合理性のことです。それは人間みなに主から与えられていて、取り除くことはできません。取り除かれたら、再生も不可能になります。合理性と呼ばれている能力があるからこそ、動物と違って、人は考えることができるだけでなく、その考えをもとにして話すことができます。

さらに前に触れたもう一つの能力、つまり自由意志をもとにして、人は理解し分かったことを実行できます。合理性と自由は、人間に固有な二つの能力で、これについては前（240節）に述べてあり、ここでは、触れる必要はないと思います。

14 人に備わっている上位の段階とは、靈の段階を指すが、それが開かれていないと、人は自然的で、感覚的になる

248. 前述したように人間の精神には、自然的と、靈的と、天的の三つの段階があって、それが順次ひらかれていくことが可能です。まず自然的段階が開かれます。そして、悪を罪として避け、主に目を向けると、靈的段階が開かれます。そして、最後に天的段階が開かれます。以上の段階は、人にある〈いのち〉に呼応して順次開かれていきますから、上位の二つの段階が開かれない場合もあり、そのときは、人は最外部にある自然的段階にとどまります。

人間には、自然的人間と靈的人間、すなわち外部人間と内部人間が存在することは、この世でも周知のとおりですが、自然的人間が、みずからに備わる上位段階がひらかれることによって、靈的人間になることは知られていません。しかも、靈的〈いのち〉とは、神の掟を守る生活ですが、これによって上位段階がひらかれていくこと、そのような生活なくしては、自然的人間にとどまったままであることも、知られていません。

249. 自然的人間にも、種類が三つあります。第一のグループは、神の掟について何も知らない人たちです。第二のグループは、神の掟を知っていても、それに基づいて生活することを考えようとしらない人たちです。第三は、神の掟について思いめぐらし、それを否定する人たちです。

まず、第一のグループ、すなわち神の掟について何も知らない人たちとは、自然的な状態にとどまるしかない人たちです。それは、自分自身で教わることができないから、仕方ありません。

人はみな、宗教をもち神の掟について知っている人から教わるわけで、直接啓示を受けるということはありません。それについては、『聖書についての新エルサレムの教義』（114～118節）に記してあります。

第二のグループ、すなわち、神の掟があるのを知ってはいますが、それに基づいて生活しようと考えない人たちは、やはり自然的な状態にとどまり、この世のことに肉体のことにしか注意を向けません。このような人たちは、死後、霊的な人たちに提供できる役立ちにしたがって、召使または下働きをするようになります。なぜなら、自然的人間は、召使い・下僕で、霊的人間は、主人・あるじだからです。

第三のグループ、すなわち、神の掟を軽んじて否定する人たちは、自然的状態のまま留まるだけではなく、その軽視と否定の度合にしたがって、感覚的になります。感覚的な人間とは、自然的状態でも最低です。外観、また肉の感覚のまどわしを越えて、物事を考えることができないわけです。死後、かれらは地獄にいます。

250. この世では、霊的人間とは何か、自然的人間とは何か
が知られておらず、多くの人が、自然的人間に過ぎない人を「霊
的な人」と呼んだり、また、霊的な人を「自然的な人」と呼ん
だりしています。したがって、それについて、はっきりさせてお
きます。

① 自然的人間とは何か。霊的人間とは何か。

- ② 靈的段階が開かれている〈自然的人間〉とは、どんな人のことか。
- ③ 靈的段階が開かれていないけれども、閉じてもない〈自然的人間〉とは、どんな人のことか。
- ④ 靈的段階が、まったく閉じてしまっている〈自然的人間〉とは。
- ⑤ 最後に、自然的人間にすぎない人と、動物の場合とでは、その〈いのち〉にどんな相違があるか。

251. ① 自然的人間とは何か。靈的人間とは何か。

人間が人間であるのは、その顔つきや身体にあるのではなく、理性と意志によります。したがって、自然的人間、また靈的人間は、本人の理性と意志を意味し、それが自然的であるか、靈的であるかによります。自然的人間とは、その理性と意志の面で、自然的世界のようです。それで「世界 mundus」、また「小宇宙」と呼ばれています。靈的人間とは、その理性と意志の面で、靈界のようです。それで、「靈界」とか「天界」とも呼ばれています。

それで、自然的人間は、自然世界のイメージをもっていることが明らかで、自然世界にあるものを愛します。靈的人間は、靈的世界のイメージをもっているわけですから、靈の世界や天界にあるものを愛します。靈的人間もたしかに自然の世界を愛しますが、それは、役立ちを提供するため、主人がその召使を愛している以外の何物でもありません。また、自然的人間でも、役立ちにもとづいて、靈的人間のようになります。それはとくに、自然的人間

が靈的なものがもとで、役立ちのよろこびを感じる場合です。

靈的人間は、靈的な真理を愛します。その真理を知り、理解するだけではなく、それを意図します。自然的人間もまた、靈的真理について話し、またそれを実行することを愛します。つまり、真理を実行し、役立ちを提供したいと思います。以上のような従属関係は、靈界と自然界との結びつきから生まれます。すなわち、自然の世界に現れ起こってくることは、靈界が原因になっているからです。以上から、靈的人間は、自然的人間とは、はっきり区別されていること、そのあいだには、原因と結果とのあいだにあるような交流があることが分かります。

252.② 靈的段階が開かれている〈自然的人間〉とは、どんな人のことか。

これは、前述したことから明らかです。つけ加えるならば、自然的人間は、その靈的段階がひらかれているかぎり、完全な人間 *plenus homo* であるということです。つまり、天界の天使につき添われ、この世の人々ともつき合い、その双方で、主のご配慮のもとで生活をしています。靈的人間は、主のみ力のもとで、〈みことば〉をとおして、その戒めを汲みとり、自然的人間をとおして、その戒めを実行します。

自然的人間で、靈的段階がひらかれている場合、自分に内在する靈的人間をもとにして、そこから思考をすすめ、実際行動をとります。自分をもとにして、やっているように見えても、実際

は本人がもとになっているのではなく、主が源になって行なっています。霊の段階がひらいている自然的人間は、自分にある霊的人間をとおして、天界にいることに気がついていません。ところが、本人の霊的人間は、天界の天使たちのまん中にいます。その人は、天使たちの眼にときどき映っていますが、自分にある自然的人間にもどっていくので、そこで短期間とどまっても消えていきます。

霊的段階がひらいている〈自然的人間〉は、自分の霊的精神が主によって、何千という英知の秘義に満たされ、何千という愛のよろこびに満たされているのに気づいていませんし、死後は天使になって、そのような状態に移っていくのも知りません。自然的人間がそれを知らないのは、自然的人間と、霊的人間とのあいだの交流が、相応によるものだからです。しかも、相応にもとづく交流は、理性のうちでは、光に照らされた真理を見、意志のうちでは、情愛から出た役立ちを提供することでしか感知できません。

253.③ 霊的段階が開かれていないけれども、閉じてもない い〈自然的人間〉とは、どんな人のことか。

霊の段階が開いてもいないし、閉じてもない人というと、仁愛による生活を送ってきてはいるけれど、純粹の真理はほとんど知らない人です。霊の段階が開かれるには、愛と英知、つまり熱と光の結合がなくてはなりません。愛すなわち霊的熱だけでも、英知すなわち霊的光だけでもなく、双方が結びついていないとなりません。英知すなわち光がもとで、純粹の真理が分かっている

なければ、愛だけでは霊の段階は開かれませんが、ただ開かれる可能性をもった状態です。それは、まだ閉じられていないとです。植物界でも同じです。熱だけでは、タネや樹木は成育しません。熱が光といっしょになって、成育ができます。

忘れてならないのは、次のとおりです。すなわち、あらゆる真理は〈霊の光〉に由来し、あらゆる善は、〈霊の熱〉に由来します。霊の段階は、真理をとおして善の力で開かれます。つまり、善は真理をとおして役立ちを果たします。そして、役立ちとは愛の善のことで、その本質は、善と真理との結合です。

霊の段階がひらいていないが、閉じてもない人の場合、自然的ではあっても霊的ではないため、死後は、最下位の天界にいて、そこである期間、つらいことに耐えなくてはなりません。あるいは、末端にあって、やや上位の天界に行きますが、そこは夕方のたそがれのような感じです。前述したように、天界あるいは、天界のある社会では、光は中央から末端に行くほど、うすれてきます。中央には衆にすぐれて、神の真理のうちにある人がおり、末端には、わずかな真理のうちにある人がいます。

わずかな真理のうちにある人とは、宗教については、神が存在するとか、主が人々のため苦しまれたという程度のことしか、知りません。また、仁愛と信仰が教会にとって本質的に大切であることが分かっている、信仰とは何か、仁愛とは何かを、知ろうと努力しない人のことです。

結局、信仰とは、その本質は真理です。真理も多種多様です。仁愛とは、人が主を源にして行う職務上のあらゆる仕事です。

人は、悪を罪として避けるとき、主を源にしてそれを実行します。

以前明記したつもりですが、目的とは、原因がもつあらゆるもの、結果とは、原因を介して成るあらゆる目的のことで、すなわち目的は、仁愛であり善です。原因は、信仰すなわち真理です。結果は善行であり役立ちです。以上のことから、仁愛が「信仰の真理」と呼ばれる真理に結びついた程度にしか、仁愛は行いの中に実現していかない事実が理解できたと思います。真理をとおして、仁愛は行いの中に入っていき、その行いを、ふさわしいものにしていきます。

254.④ 靈的段階が、まったく閉じてしまっている〈自然的人間〉とは。

その人の〈いのち〉が悪の中にひたっていると、靈的段階は閉じられています。また悪がもとで、偽りの中になれば、いっそうそうです。微少な神経繊維の場合も、それによく似ています。異質なものが、少しでも触れると、たちまち身を縮めます。筋肉の運動繊維はみなそうですし、筋肉自体もそうです。それはまた、硬い物体や、つめたいものにさわると、からだ全体が縮みます。靈の段階にある実体や形相が、悪と偽りをもった人に触れるときもそうです。つまりは異質なわけです。

靈の段階は、天界の形相のうちにあるため、善いものしか受け入れないし、善から出る真理しか受けつけません。善や真理は同質であるのにたいし、悪とか、悪から生まれる偽りは、靈の段階にたいして異質です。

靈の段階は、まず支配欲をもって、自己愛を出所に行っているこ

の世の人たちにたいしては、身を引き、そのあと閉じてしまします。なぜなら、このような愛は、主への愛に反するからです。他人のものを自分のものにしたいという曲がった欲望をもって、世間愛から動いている人にたいしても、閉じられますが、前者ほどではありません。以上のような愛は、悪の根源になるため、霊の段階を閉じるわけです。

霊の段階が身を引いたり、閉じたりするのは、ちょうど螺旋状のものが反対方向に巻きもどされていくような感じです。だから、霊の段階がとじられたあとは、天界の光を反対方向へもどします。したがって、天界の光に代わって暗闇が生まれます。天界の光のうちにあった真理が、むかつくものになります。

霊の段階が閉じているだけでなく、上位の自然的段階、つまり合理の段階も閉じている人は、下位の自然の段階、つまり感覚の段階は開いています。この段階は、肉体の外的な感覚や、この世に、隣接しているため、この種の人には、それからあとは、肉体の外的感覚をもとにして、考え、話し、推理するようになります。

悪と、それからくる偽りによって、感覚的になってしまった自然的人間は、霊界にあっては、天界の光をうけると、人間には見えず、むしろ怪物のように見え、しかも鼻が陥没しています。鼻は、真理を感知する力に相応しているのです、そう見えるわけです。このような人は、天界の光輝に耐えられません。かれらは、みずからは死骸のようで、燃えた石炭か木炭から発する光だけが頼りです。霊の段階が閉じられている人とは、どのような人であるか、

理解できたと思います。

255.⑤ 自然的人間に過ぎない人と、動物の場合とでは、その〈いのち〉にどんな相違があるか。

この相違については、〈いのち〉について後述するため、ここで詳しく説明します。ここではただ、その相違として、人間には精神の三つの段階があること、すなわち、理性と意志の三段階があり、それが順次ひらいていくことだけに触れておきます。

その段階は透明になっているため、人は理性の面で、天界の光のうちにあげられ、真理を眺め、民事・道徳的なことだけでなく、霊的なことも見えるようになります。しかも、いろいろ見た結果、真理が秩序正しくまとめられ、このようにして、理性を永久に完成していきます。

それにたいし、動物には、上位にある二つの段階が欠けており、自然の段階しか存在しません。上位の段階がないわけで、民事・道徳・霊性のいずれについても、考えていく能力はありません。しかも、動物の場合その自然の段階は、上位の光にたいして、開いていないし、高められていくこともありません。

したがって、順序ただしく考えていくことはできません。むしろ、同程度の繰り返しの秩序 *ordo simultaneous* のうちにあり、〈考える〉作用ではありません。動物がもっている愛に対応した知識から、行動しているに過ぎません。分析的に思考していくことも、高次元から低次の思考を見おろすこともできません。したがって、話すことは不可能で、動物の愛がもつ知識に応じた

音を出すに過ぎません。

それにたいし、最低に自然的な人間、つまり感覚人間 *sensualis homo* の場合、科学的なことがら *scientifica* で記憶のなかを満たし、そこから、考えや話しをすすめる以外には、動物と大差ありません。そのような能力も、実は人間に固有な能力、つまり欲しささえすれば真理が理解できる能力から来ます。この能力こそ、動物とちがうところです。ところが多くの人は、この能力を悪用するため、自分を動物より低い人間にしてしまいます。

- 15 人間の精神にある自然的段階は、そのものとして見ると、連続している。ただし上位の二つの段階との相応によって、高められているかぎり、隔離した段階であるように見える

256. 以上は、高サの諸段階について知らない人には、難しいため、よく分からないと思います。ただし、天使の英知によることであるため、明らかにしなくてはなりません。天使の英知は、どんな場合でも、自然的人間が、天使と同じように、いただける考え方ではありません。

ただし、天使たちを包んでいる光の段階にあげられれば、理性で分かることができます。理性は、その段階まで高められることも、その高揚にしたがった照らしをうけることもできます。

しかし、自然の精神が照らされる場合、隔離の諸段階を上昇していくわけではなく、連続の段階で増加していきます。そのさい、増加していくにつれて、上位にある二つの段階からくる内部の光によって照らされます。これがどんなふうになっているかは、高サの諸段階について、ぴんと感じとれば分かります。

つまり、一つがもう一つの上部にあり、末端の最外部にある自然的段階は、上位の二段階にも共通した被膜のようになっています。そのさい自然の段階は、上位の段階に高められると同時に、高次のものは、その内奥から、自然的な外部にむかって働きかけます。そして照らします。

このように、照らしは内奥にあるものによって、上位の段階にある光から発します。ただし、その光は、上位をとりまく自然の段階が受けとめるわけで、その受けとめ方は連続的で、上昇するにつれ、さらに明るく、さらに純粋になっていきます。すなわち、自然の段階は、上位の段階の光をもとにして、内奥にあるものの力で、隔離的に照らされますが、それ自身としては連続的な照らされ方をします。

以上ではっきりしたと思います。人は、この世で生きているあいだ、自然的段階にいるため、天使たちが味わっているような英知のなかに、高められていくことは出来ませんし、内奥から流れ照らす、上位段階の光によって、そのまま照らされることはありません。

ただしこれについては、より明確に記すことはできません。むしろ、結果から理解をすすめていくことはできると思います。なぜなら、結

果は原因を前提にするからです。そして、その原因がある程度分かれば、結果がみずから浮かびあがって、原因にたいし照らしがあります。

257. 結果については、次のとおりです。

- 1) 人の自然のままの精神は、天使たちがひたっている天界の光にまで昇っていくことができますし、天使たちが靈的に感じとっていることがらを、自然的に感じとることができますが、完全ではありません。と同時に、人の自然の精神は、天使的光そのものの中には入れません。
- 2) 人は、自分の自然のままの精神が、天界の光に高められる場合、天使たちの仲間として考えることができますし、話しあうことさえできます。ただし、そのさいは天使たちの考えや〈ことば〉が、自然的人間の考えや〈ことば〉にしみ込んでいくことはあっても、その逆は行われません。それで、天使たちは人と話すときは、人間の側の自国語、すなわち自然の〈ことば〉を使って話します。
- 3) 以上は、靈的流入が、自然の中に流れこむことであって、自然的流入が、靈性の中へ流れこむわけではありません。
- 4) 人が自然の世界に生きているあいだは、その人間的英知は自然的であって、天使的英知にまで高められることは、決してありません。ただ、本人はそれについてある種の想像をもつことができます。というのは、自然の精神はそれが高められても、連続したものだからです。陰から光へ、より粗雑なものから、より純粋なものへの移行のようなものです。

ただし、霊の段階が開いている人の場合、死んでから、天使の英知へ入っていきます。それはまた、肉体の感覚が麻痺したときにも起こることがあります。つまり、上位にあるところから、本人の精神にある霊の次元に向かって、流入が行われるときです。

5) 人の自然的精神は、霊的実体から成っていると同時に、自然的実体から成っています。思考は、その霊的実体から行われますが、自然的実体から行われるわけではありません。自然的実体は、人が死ぬと消滅していきますが、霊的実体は消滅しません。したがって死後、人の精神はそのままで。つまり人は、この世にあったときと同じ形相のうちにとどまったまま、霊または天使になります。

6) 前述したように、人の精神の自然的実体は、死後は消滅していきますが、それが霊または天使が宿するための霊体被膜 *involutum cutaneum corporis spiritualis* になります。つまり、その被膜は、自然の世界から吸収されてできたものです。それがかれらの霊的な体を構成し存続させます。自然的なものが、最外部の器になるということです。したがって、どんな霊でも天使でも、人間として、かつて生まれてこなかった者はいません。

天使的英知のこのような秘義をここに付け加えておきますが、これは人間にある自然の精神がどんなものかが分かるためです。これについては、さらに後述するつもりです。

258. 人はみな生来、真理を理解する点で、第三天界の天使たちが浸っている内奥の段階にまで行けるようになっています。

上位の二つの段階を経めぐって、人間の理性は上昇し、上位段階の光を受けますが、（256節で）前述したように、それは連続的です。すなわち、人は上昇するにしたがって、合理的になっていきます。第三段階にまでのぼっていくと、第三段階からくる合理性をもってきます。第二段階までは、第二段階からくる合理性をもってきます。上昇しないままなら、第一段階の合理性しかありません。

以上の諸段階から合理性をもってくるというのは、自然的段階が、上位諸段階の光を受ける共通の器だからです。ただし、可能とは言え、最高度の合理性をもつてこないとすると、それは意志がもっている愛が、理性がもっている英知と同じようには、上昇していないからです。意志がもっている愛は、悪を罪として避けるだけで、上昇していきます。それはまた、役立ちに向かう〈仁愛の善〉をとおして、上昇することです。人は主からいただいて、役立ちを果たします。

したがって、意志のもつ愛が、同時に上昇していかないなら、理性がもつ英知は、たとえ上昇しても、それなりの愛に逆もどりしてしまいます。したがって、愛が霊の段階にまで同時に上昇していかないなら、人の合理性は最下部の段階でしかありません。

以上から、人の合理性 *rationale hominis* は、外見では、三つの段階を兼ね備えているように映ることが明らかになります。つまり、天的段階からくる合理性、霊的段階からくる合理性、自然的段階からくる合理性です。そして、その合理性は、上昇の可能性をもった能力で、その人なりに上昇したり、上昇しなかった

りします。

259. 人はみな生来、以上の能力、つまり合理性をもっていると言いました。ただし、どんな人間とは言っても、本人に備わっている外部のものが、何かの事故で損傷を受けていない場合に限ります。それは、母胎にあったときや、出生後の病、脳に受けた傷、異常な愛が突発的に噴出して、歯止めが効かなくなったなどの傷害です。このような人の場合、合理性が上昇することはありません。

〈いのち〉は、意志と理性にあります。以上のような人には、それが規定される限界が失われています。すなわち、秩序正しく最外部の行為を果たしていくため整えられていないわけです。行為は、最終・末端の規定が原因ではありませんが、もちろんそれにもとづいて進行します。幼児・子供には、それがまだありません。これについては、（266節で）後述します。

16 人の自然的精神は、その上位の諸段階を包み含む器であるから、反応をもって作用する。そして、上位の諸段階がひらかれない場合は、それに反抗して働き、ひらかれれば、それと協同して働く

260. 前節で述べたとおり、最終・末端の段階にある〈自然の精神〉は、上位の段階にある霊的精神や天的精神をつつみ含ん

でいます。これについて、今明確にしていきましょう。自然の精神は、上位の精神すなわち内部にある精神に対抗して、反応していることです。その理由は、上位の段階をつつみ、含み、支えている以上、反応がなかったら存続し得ないからです。つまり、反応しなかったら、内部にあつて包まれている部分がくずれ、外に流れ出し、やがて分散消滅してしまいます。

人体のまわりには、それを包んでいる被膜があり、それが反応作用をもっています。その反応がなかったら、体の内部にある内臓が飛び出し流れ出てしまいます。筋肉の運動繊維のまわりにも、それを包み覆っている肢節がありますが、それが行動を起こすにさいし、その諸繊維の力に対抗して、反応しなかったら、行動が停止してしまうだけではありません。内部にあるすべての組織が解体してしまいます。

それと同じようなことが、高サの諸段階の中で、最終・末端の段階での全域で起こるわけです。つまり、上位の諸段階にたいして、自然の精神がどのようにかわるかです。

前述のように、人間の精神には、自然的・霊的・天的の三段階があつて、自然の精神が、最終・末端の段階をなしています。自然の精神は、霊的精神に対抗して反応します。なぜなら自然の精神は、霊界の実体から成っているだけでなく、自然界の実体からも成っているからです。それは（257節で）前述した通りです。しかも自然の世界の実体は、本性上、霊界の実体に対抗して反応します。自然の世界の実体は、そのものとしては死んでおり、外から霊界の実体の力で働いています。死んでいる以上、外からの

働きかけで動きます。つまり本性からすると、抵抗しています。つまりその本性から、反応を起こしています。以上から、自然の人間は、霊の人間に対抗し反応していることが分かります。そこには戦いがあります。人間には、自然的人間と霊的人間、すなわち、自然的精神と霊的精神があるとと言っても、変わりません。

261. 以上から次のことが明らかになります。霊的精神が閉ざされていると、自然的精神は、たえず霊的精神の逆を行こうとし、霊的精神からくる流入をおそれ、自分の現状を乱されはしまいかと思います。霊的精神をとおして流れてくるものは、天界から来ます。霊的精神は、天界の形相をもつものだからです。自然的精神のなかに流れ入るものは、すべてこの世からです。自然的精神は、この世の形相をもっているからです。

するところになります。霊的精神が閉ざされていると、自然的精神は、すべて天界からくるものに対抗して反応します。そして、この世的なものを提供してくれ、それを所有する手段とならなければ、みずから受け入れようとはしません。

天界的なものは、自然的精神の目的達成のための手段になってしまうと、その手段は、天界的な姿をしても、自然的なものになります。つまり天界的なものも、目的によって変質しますから、自然的人間にある科学的なものに化します。その中には、何の〈いのち〉もありません。それで、天界的なものは、自然的なものとは結びついて、行動をともにするわけにはいかないため、それから分離します。単に自然的であるに過ぎない人の場合、その

天界的なものは、内部にある自然的なものの周辺をめぐって、外に居を定めます。そこから単なる自然的人間が、天界的なことを語り、説教し、その行動を真似ても、内部では反対のことを考えているのが分かります。集会の中では前者で、独りのときは後者です。これについては、いろいろ後述します。

262. 自然的精神つまり自然的人間は、靈的精神つまり靈的人間に対して、生来の反抗的な態度をとります。自分とこの世を何よりも愛しているからです。すなわち、姦淫、偽瞞、復讐、冒瀆その他、あらゆる種類の悪につかって、うれしがります。そしてまた、宇宙を創造したのは自然だとし、自分のもっている合理の力で、万事それを肯定し、それで心を固めてから、天界や教会にある善や真理をくつがえすか、窒息させるか、はね返すかします。その結果、それから逃避するか、それを嫌悪するか、憎悪するようになります。自分の靈の中では、そう思っていますが、他の人といっしょにいるときは、名誉や利得の面で、自分の聞こえが悪くならないかぎり、自分の靈から〈ことば〉を發し、それが体にも表れます。

こんなふうになってくると、人は自分の靈的精神をだんだん固く閉じていき、まずは偽りを使って、悪を肯定し、それで心を硬化させます。そして、死んだあとも、しっかりと固くなった悪や偽りは、根こそぎにはできません。この世では、ただ悔い改めによってだけ、根こそぎにすることができます。

263. 靈的精神がひらいている場合、自然的精神の状態は、まったく違ってきます。そのさい自然的精神は、靈的精神にたいして、おとなしく従順についていくようになります。靈的精神は、上位すなわち内奥から、自然的精神に働きかけ、その反抗する部分を取り除いていきます。そして、自分と行動をともにするものを取り入れ、このようにしてだんだんと、行き過ぎた反応を除去していきます。

忘れてならないことは、次のとおり。つまり宇宙にある極大にも極小にも、生きているものも死んでいるものも、作用 *actio* と反作用 *reactio* があります。こうして、全体として均衡を得ています。作用が反作用を越えて動いたり、その反対が行われたりすると、均衡が失われます。

自然的精神と、靈的精神の場合もおなじです。自然的精神が、自己愛のたのしきとか、悪や偽りを含む考えのうれしさから、行動をとるときは、その自然的精神は、靈的精神からくるものを対抗物として取り除き、中に入れないようにドアを閉じてしまいます。そして、みずからの反作用に合致するものだけで、作用が行われるようにします。このようにして、自然的精神の作用・反作用が行われますが、これは靈的精神の作用・反作用には、対抗したものになります。これで、靈的精神は螺旋状のものが逆戻りするように、自分を閉ざしてしまいます。

それにたいして、靈的精神がひらいてくると、自然的精神の作用・反作用は、逆方向にまわります。靈的精神は、上位すなわち内奥から作用を起こします。同時に、自然的精神の中で、靈的精

神に従順なものを介して、内部または外部から働きかけます。そして自然的精神の作用・反作用がおこなわれる螺旋を、とりもどしていきます。

以上の自然の精神は、生まれつき、霊的精神からくるものに反抗していることから起こります。周知のとおり、これは両親からの遺伝です。以上のような状態の変化は、自己改革とか再生とされています。自己改革を行うまえの自然的精神の状態は、下の方へ向かってねじ曲っていく螺旋のようです。それにたいし、自己改革のあとでは、上にむかって巻きあがっていく螺旋です。自己改革のまえでは、人は下の地獄の方向に眼をおいていますが、自己改革のあとでは、人は上の天界を見あげるようになります。

17 「合理性」および「自由」と呼ばれている人間固有の能力を乱用することから、悪がはじまる

264. 合理性 *rationalitas* とは、真理とそれに反する偽りを理解する能力であり、また、善とそれに反する悪を理解する能力です。また、自由 *libertas* とは、自由に考え、意図し、実行する能力です。

今まで述べたことから、これから述べることから、創造のとき以来、あるいは誕生のとき以来、人間にはみな以上の二つの能力が備わっていることが分かります。主によって、この能力は与えられ、取り去られることはありません。

たしかに見かけでは、人はみずからを出発点にして考えたり、話したり、意図したり、実行したりしています。でも実は主こそ、その一人ひとりの能力の中に住んでおられます。そして主との結合をもとにして、人は、永遠にまで生きられます。人は、以上二つの能力があるからこそ、自己改革、再生ができるわけで、これがなかったら自己改革も再生もありません。

265. 以上二つの能力を悪用することが、悪の起こりです。次のような順序で説明します。

- ① 悪人も、善人と同等に、その二つの能力をもっている。
- ② 悪人は、悪と偽りとを確認するため、この能力を乱用するにたいし、善人は、善と真理を確認するため、この能力を使用する。
- ③ 人が確認してしまった悪と偽りは、永続し、本人の愛および〈いのち〉に化していく。
- ④ その愛と〈いのち〉から出たものは、子孫に受け継がれていく。
- ⑤ 先天的なものであっても、後天的なものであっても、悪はすべて、自然の精神のなかにどっしりと腰をすえる。

266.① 悪人も、善人と同等に、その二つの能力をもっている。

前節で述べたように、自然の精神の面で、人の理性は、第三天界の天使たちがひたっている光にまであげられ、真理を見、それ

をみとめ、それについて話すことができます。そこで、自然の精神が高められ得ることから、悪人も、善人と同じく、合理性と呼ばれている能力をもっていることが分かります。自然の精神は、これほどまで高くのぼることができるわけで、それについて考え、それを口にすることができます。たとえそれを欲したり、実行したりしなくても、欲し、実行する能力はあります。道理と経験から見て明らかです。

まず道理から見ます。自分の考えていることを、意図し実行できない人がいるのでしょうか。それを意図し実行しないのは、意図し、実行することを愛さないからです。意図したり、実行したりできる能力こそ、自由の能力で、これは各人が主からいただいています。それができるのに、善を意図し実行しないのは、それに反発を感じる愛があるからです。もちろん、このような悪い愛に抵抗することはできるし、また、抵抗している人はたくさんいます。

次は経験から考えてみます。これは霊界で何度も確証されました。わたしは、内部が悪魔と化している悪霊の言っていることを耳にしました。かれらは、この世で天界と教会の真理を捨てたということです。かれらは、知識への情愛にかられていました。それは、少年期になってから、人はみなもっていて、栄光を求めますが、その栄光は燃える輝きとなって、ある種の愛を追求していきます。ところで、かれらは、天使のもつ英知の秘義を感じとっただけではありません。実は、内部で天使となった善霊とおなじくらい、はっきり感じとっていました。

ところが、その悪魔的な霊が言うには、以上の秘義にもとづいて意志し、それを実行することができたけれど、それを意志しなかったということです。それで、悪を罪として避けるためだけに、そうしたいと思わなかったか問われて、そうしたいと思わなかったと言います。

悪人にも、善人とおなじように、自由選択力と言われる能力があることが、それでよく分かります。だれでも自分に問いかけてみると、それが本当だと気がつきます。

人には、何かを意志することができます。それは前述したように、意志能力の源である主が、人が意志を動かすことができるよう、たえず働きかけてくださっているからです。主は、人それぞれにある、以上二つの能力の中に住んでいて下さっています。つまり、何かを意志することができるよう、その人の能力、すなわち可能性の中に住んでおられます。合理性と呼ばれている理解能力については、人間の自然的精神が、一定の年令に達しないと与えられません。それは、未熟な果物のなかにあるタネのようです。土の中に入っても芽を出しませんし、茎としても成育しません。前（259節）に触れたような人にも、その能力がありません。

267.② 悪人は、悪と偽りとを確認するため、この能力を乱用するのにたいし、善人は善と真理を確認するため、この能力を使用する。

合理性と言われている理解能力、および自由と言われている意志能力をもとにして、人は、自分が欲することは、何でも確認す

ることができるようになっていきます。自然的人間でも、自分の理性を欲するままに、上位の光のなかに高めていくことができます。ただ、悪の中、偽りの中にある場合、人は自分の自然的精神のもっている上位の領域以上に、高くすることはできません。とくに靈的精神の領域には、めったに入れません。

理由は、みずからの自然的精神の愛がうれしく感じている以上、それを越えていくと、本人の愛のよろこびが失われ、さらに高く行くと、自分もっている〈いのち〉のよろこびと、まる反対の真理を見てしまいます。それは、自分固有の理知もっている原理原則にも反します。したがって、それを曲げるか、忘れ去るか、軽んじて捨て去るか、自分の〈いのち〉にある愛や、自分の固有の理知がつくる〈うぬぼれ〉を温めてくれる手段になるかぎり、それを記憶にしまい込みます。

自然的人間は、何でも自分が欲することを、心に固め確信することができます。これはキリスト教世界に、こんなにも沢山の異端があることから、実によく分かります。異端の教えはどれをとっても、信奉者たちが確信するところです。だれもが周知のように、悪にしても偽りにしても、あらゆる種類のものが、確信で固められ得るのです。

神は存在しない、自然はすべてである、自然みずからが自然を創造したといったことが、悪人も確信で固めうるし、また確信されています。また、宗教は無学単純な心をもった人を、クサリでつないでおくための手段に過ぎないと考えます。神のみ摂理と言っても、創造当初の秩序のうちに、宇宙を保持する以外のなにも

のでもなく、万事は人知によって全うされていくと思います。マキャベリやその追従者たちは、殺人・姦淫・窃盜・偽瞞・復讐さえ、許されていると考えます。

以上と似たようなことが、様々に自然的人間によって確証されますし、そのような論証を書物いっぱいに繰りひろげることができます。そして、いったん心に固めると、ウソであっても、それなりの狂った光をともなって現れ、真理はかげります。まるで、暗闇の妖怪でも見ているようにしか、見えなくなります。

一口で言えば、偽りだらけであっても、それを命題にして頭のきれる人に、「論証してみて下さい」と言うと、真理の光がまったく消え去ってしまうところまで、それを論証することでしょう。でも、その論証を中止して、われに返り、自分の合理性をもとにして、命題それ自体に注目してみれば、それがゆがんでいて、ウソ偽りであることが分かります。

そのように、主が各人に与えられた、以上二つの能力は、人があらゆる種類の悪や偽りを論証するために、悪用できることが分かるでしょう。動物にはそれができません。動物にはそのような能力がないからです。動物は、人間とちがったものとして、動物なりの〈いのち〉にある、あらゆる種類の秩序をもって生まれてきています。それは、動物なりの自然的愛がもつ、あらゆる種類の知識です。

268.③ 人が心に固めた悪と偽りは、永続し、そのまま本人の愛および〈いのち〉に化していく。

悪と偽りを心に固めることは、善と真理を遠ざけることになり、またそれが増えれば、善と真理の拒否につながります。すなわち、悪は善を遠ざけ、これを拒否するのにたいし、偽りは真理を遠ざけ、これを拒否します。したがって、悪と偽りで心を固めると、天界を閉め出すことになります。なぜなら、すべての善と真理は、天界をとおして、主から流れてきます。いったん天界が閉ざされると、人は地獄の中におり、自分によく似た悪や偽りが支配する社会にいることになり、そこから抜け出すことができません。

自分の宗教からくる偽りを、何百年もまえ、心の中に刻み込んだ人と話をしましたが、かれらは、この世でつきあっていたのと同じような仲間といっしょに、ずっといるのを見ました。その理由は、人が自分の中で確認してしまったものは、すべて本人の愛と〈いのち〉に属するものになります。すなわち、意志と理性をもとにしたものである以上、本人の愛に属するものになると同時に、意志と理性は、各自の〈いのち〉になります。人の〈いのち〉になったものは、本人の全精神にしみわたるだけでなく、本人の肉体全体にもしみわたります。

したがって、悪と偽りのうちに、自分の心を固くしてしまった場合、人は頭のとっぺんから、足のつまさきまで、そんなふうになります。いったんそうなると、それとは反対の状態に引きもどしたり、逆転させたりすることはできません。つまり地獄から引き離すことはできません。以上、および本節の冒頭に述べたことから、悪の起源がどこからくるか分かります。

269.④ その愛と〈いのち〉から出たものは、子孫に受け継がれていく。

周知のとおり、人は悪のうちに生まれついており、その遺伝的なものは、両親から受け継いでいます。それが両親からではなく、両親をとおしてアダムからくるものと信じている人がいますが、それは誤りです。

人の靈魂は父親からくるものであるため、父親から受け継いでおり、母親のもとで肉体を身にまといまいます。父親からくる精子は、〈いのち〉にとっての最初の器です。しかもその器は、父親にあるような性格の器です。すなわち、父親の愛の〈かたち〉をもち、どんな種類のものでも、その最大のものから最小のものにいたるまで、似たような愛をもっています。その愛の中には、人間の形相に向かう推進力があり、その形相に向かって徐々に進んでいきます。

そのように、遺伝的であると言われている悪は、父親からのものです。それはまた、祖父および曾祖父から、順次子孫へと流れ伝わったものです。身近な経験が教えていることで、情愛にかんして言えば、諸民族はその最初の族長と似ており、それが親戚同士であれば、いっそう似ており、家族ではもっと似てきます。このような血統は、気質からだけでなく、顔つきからも分かります。

悪い愛が父親から子孫へと受け継がれていくことについては、精神すなわち意志と理性が、肉体およびその肢節・器官と相応していることに触れる箇所、種々述べるつもりです。ここではただ、次にくる内容が理解できるため、少しだけ述べておきます。

つまり、悪は父親をとおして、順次受け継がれていき、それが次代を経るとともに累積的に増えていき、人は生来、悪以外の何ものでもないほどになります。そして、その悪がもつ悪とは、霊的精神を閉じる度合に応じて増え、同時に、自然的精神も、その上位が閉じてきます。こうして、主のみ力で、悪を罪として避ける以外には、子孫にとっては、回復の見込みはありません。つまり、それ以外には霊的精神が開かれることもないし、さらに自然的精神が、その相応する〈かたち〉に戻っていくこともありません。

270.⑤ 先天的なものであっても、後天的なものであっても、悪はすべて自然の精神のなかに、どっしり腰をすえる。

悪と、それからくる偽りは、自然的精神のなかに、どっしり腰をすえます。つまり自然の精神は、その形相つまりイメージとしては、この世です。それにたいし、霊的精神は、その形相つまりイメージとしては、天界です。天界のうちに、悪は住まいを設けるわけにはいきません。したがって、このような霊的精神は、生来開かれたものではなく、ただ可能性として開かれ得るようになっています。

自然的精神は、部分的には自然世界にある諸実体から、形相をつくりあげています。それにたいし霊的精神は、霊界にある諸実体だけで成り立っています。しかもその霊的精神は、人が人になるように、その完全性のまま *in sua integritate*、主によって保たれています。生まれたときは動物でも、人間に成るわけ

です。

自然的精神は、それに付属するものすべてを含め、右から左へとまわる螺旋的な旋回をもっています。それにたいし、霊的精神は左から右へとまわる螺旋的な回転を備えています。したがって、二つの精神はそれぞれ回転方向が逆です。これは、自然的精神には悪が根をおろしていて、みずからは、霊的精神の反対を行こうとしていることを示すしるしになります。右から左へとまわる螺旋回転は、下へ向かい地獄へ行きますが、左から右へとまわる螺旋回転は、上へ向かい、やがて天界に至ります。

わたしも経験で分かって、今はっきりしていることですが、悪人は自分の身体を、左から右へと螺旋的に回転させることができません。右から左へです。それにたいし、善人は身体を右から左へと螺旋的に回転させることができません。むしろ、左から右へは、たやすくできます。螺旋的回転は、精神に備わっている内部の流入にしたがって行われます。

18 悪と偽りは、善と真理にたいして、まっ向から対立している。なぜなら悪と偽りは、悪魔的であり、地獄的であるのにたいし、善と真理は、神的であり、天界的である

271. 悪と善はおたがい対立し、〈悪からくる偽り〉と〈善からくる真理〉も、対立していることは、だれでも聞けば分かり

ます。ところが悪にひたっていると、悪が善であるとしか感じませんし、そのようにしか、ぴんときません。悪人にとっては、悪は自分の感覚、とくに視覚と聴覚をたのしませてくれ、そこからまた、思考や感知力も愉快地にさせてくれます。したがって、かれらも悪と善は正反対であると認めます。ただし、悪にひたっている場合、人はその楽しさから、悪が善であり、善が悪であるとさえ言います。

たとえば、自由を乱用して悪いことを考えたり、行なったりする人は、それを自由だと言い、それ自身よいものである善を考える反対の立場を、奴隷的であると言います。ところが、前者の方が奴隷的で、後者の方が自由であるはずです。

姦淫を愛する人は、姦淫することを自由と呼び、姦淫できないのを奴隷状態だと言います。みだらなことが楽しく、貞操を守ることが不愉快だと感じるわけです。自己愛がもとで、支配欲をもっている人は、そのような愛のうちにあってこそ、よろこびを覚えます。つまり、他のどんなよろこびも越えた、生命のよろこびなのです。自分の愛にかなうことは、すべて善いものであると言い、それに反するものは、すべて悪いものだと言います。ただし実際はその逆です。他の悪についてもみな同じです。

したがって、たとえ人が悪と善は〈まる反対〉であると認めているにしても、悪のうちにひたっている人は、その〈反対である〉ということ逆の意味にとらえます。善のうちにある人は、もちろん正しい意味でとらえています。悪のうちにあれば、人は善を見ることができません。善のうちにあれば悪を見ることがで

きます。悪は下方にあって洞穴の中にいるようです。善は上方にあって、山の上にいるようです。

272. さて悪とは何かについて、またそれが、善にまっ向から対立していることについて、知らない人が大勢います。それは、是非とも知っておかねばならないので、次の順序で説明していきたいと思います。

- ① 悪のうち、その結果偽りのうちにいる場合、その自然的精神は地獄の形相けいそう、または地獄のイメージをもっている。
- ② 地獄の形相やイメージをもつ自然的精神は、三つの段階を経て下っていく。
- ③ 地獄の形相すなわちイメージをもつ〈自然的精神〉は、天界の形相すなわちイメージをもつ〈靈的精神〉の三つの段階と、対立している。
- ④ 地獄となった自然的精神は、天界である靈的精神にたいし、あらゆる面に対立している。

273.① 悪のうち、またその結果、偽りのうちにいる場合、その自然的精神は、地獄の形相、または地獄のイメージをもっている。

人にある自然的精神は、どんなふうにも実体的な形相のうちにあるのか、また自然的精神の始まりが刻みこまれている人間の脳の中で、自然的・靈的の両世界からくる諸実体によって、どんなふうにも形相ができあがっているのかは、ここでは述べません。いず

れ、精神と肉体の相応について述べますが、そのような形相については、そこであらましの考え方を話します。ここではただ、精神の状態とその変化に関して、その形相がどうなっているかについてだけ触れることにします。

人が感知したり、考えたり、意図をもったり、意志したり、それに類することを行うとき起こるのが、以上の変化です。そして、自然的精神は悪のうちにある、その結果、偽りのうちにあるため、その状態の変化の面でも、地獄の形相・イメージをもっています。

この形相には、主体となる実体的な形相が前提になります。つまり、主体となる実体的な形相がなければ、状態の変化もあり得ません。それは、眼がなかったら視力がないし、耳がなかったら聴力がないのと同じです。

それで自然的精神は、地獄だと言いました。それを表す形相すなわちイメージに関して言えば、自然的精神がもっている通常の状態は、当該の支配的な愛 *amor regnans* および欲情であらわされ、しかもそれが地獄のうちにある、つまり悪魔 *Diabolus* であるという意味です。そして、そのような支配的な愛から生じてくる偽りの考えは、悪魔の群れのようなものです。〈みことば〉のなかで「悪魔」、また「その群れ」というときは、それ以外の意味はありません。

同じく、地獄には、自己愛から支配したいと思う愛や、支配欲があり、それが地獄では「悪魔」と呼ばれ、その愛から起こった考えを伴って、偽りの情愛があれば、それを「悪魔の群れ」と

呼んでいます。地獄では一つ一つの社会には、それと同じことがあります。もちろんそれなりの相違があって、それが種族なりに異なっています。悪のうちにあり、その結果、偽りのうちにある〈自然的精神〉も、これと同じような形相を帯びています。

自然的人間も以上のような有様ですから、死んでからは、自分と同類がいる地獄の社会へ行き、一つ一つどんなことでも、その社会と行動をともにします。自分の形相に入ってきたわけで、それが、自分の精神の状態です。

「悪魔」と呼ばれている上述の愛にたいして、従属関係にあるのが「サタン」と呼ばれているもう一つの愛です。これは、どんな悪辣な手段を講じても、他の人たちの善益を奪いとろうとする愛です。サタンの群れとは、その悪がしこさと下心のことです。前者の地獄にいる者を、一般的に「悪魔ども」と呼んでいるのにたいし、後者のような地獄にいる者を、一般的に「サタンども」と呼んでいます。そこで、大っぴらに行動していて、その名にも抵抗を覚えない者もいます。したがって、地獄も総称で、「悪魔」また「サタン」と言われています。

以上のような愛にもとづいて、地獄は二種類あり、おおむね分離されていますが、それは、天界もすべて二つの王国があって、その愛にもとづいて、天的王国と靈的王国に分かれているからです。悪魔的地獄は、天的王国に対立した形相をもつ一方、サタンの地獄は、靈的王国に対立した相応関係にあります。天界には、天的王国と靈的王国の二つがあって、区別されていることについては、小著『天界と地獄』（20～28節）を参照してください

い。

自然的精神は、以上のように、その形相としては地獄です。それは霊的な形相はその最大から最小まで、どんなものでも自分と似ているからです。たしかに、一人ひとりの天使は、天界の雛形です。これについても、小著『天界と地獄』（51～58節）で記しました。以上からも分かりますが、人間も霊も、それぞれ悪魔またはサタンであって、地獄の雛形であるということになります。

274.② 地獄の形相やイメージをもつ自然的精神は、三つの段階を経て下っていく。

すべて、最大のものにも最小のものにも二種類の段階があって、それは高サの段階と、広サの段階と呼ばれていることについては、前述しました（222～229節）。それで、自然的精神の最大のものにも、最小のものにも、それがあります。ここでは高サの段階です。

自然的精神には、合理性と自由という二つの能力があって、この三段階を上っていくことも、この三段階を下っていくこともできます。善と真理をもとにして上っていき、悪と偽りをもとにして下ってきます。上っていくことによって、地獄に向かう下位の段階が閉じます。また下っていくことによって、天界に向かう上位の段階が閉じます。それは反作用にもとづくためです。

生まれたばかりの幼児の場合、上位の三段階にしても、下位の

三段階にしても、開かれたり、閉じたりしません。そのさい、善や真理、悪や偽りについては、何も知りません。ただし、真偽善悪に入ってくると、一方から、または他方から、ある段階が開かれたり、閉じられたりします。

地獄に向かって開かれると、どうなるでしょう。まず、意志に属する支配愛が、最高・内奥の部分をおさめるようになります。そして、その支配愛から生まれる理性のまじがった考え方が、もう一つの間にくる部分を占めます。そしてその考えにしたがって、愛が行う決定、すなわち理性にしたがって、意志が行う選択決定が、最低の部分をおさめます。

これは、前述したように、高サの段階についても同じことが言えます。すなわち順序として、目的・原因・結果のようでもあり、第一目的・中間目的・最終目的のようでもあります。

以上の三段階を下っていくことは、肉体に向かうことです。したがって、下っていくにつれ、人は愚鈍になり、物質的・肉的になっていきます。第二段階で、〈みことば〉からくる真理が本人の形成に関わろうとするやいなや、悪への愛をもつ第一段階がもとで、真理がひん曲げられ、奴隷・下僕になりさがります。

悪への愛をもっている人、すなわち、自然的精神が地獄の〈かたち〉になっている人にとっては、〈みことば〉からくる真理がどんなふうになるか、ここで分かります。真理は、悪魔に仕えるための手段として使われ、冒瀆されます。前述したように、自然的精神は地獄であって、その中で支配権をふるっている悪への愛こそ、悪魔なのです。

275.③ 地獄の形相すなわちイメージをもつ〈自然的精神〉
は、天界の形相すなわちイメージをもつ〈靈的精神〉
の三つの段階と対立している。

前述したように、自然的・靈的・天的と言われる精神の三段階があり、その三段階から成っている人間の精神は、天界の方に眼を向け、その方向に身を置くことができます。同時に明白なのは、自然的精神は下の方に眼を向け、地獄の方に身をそらせつつも、やはり三つの段階から成っていて、それぞれの段階は精神の天界的段階に対立していることです。

わたしは靈界で目撃したため、それが明白です。すなわち三層の天界があり、それぞれが高サの三段階ではっきり区別されています。また三層の地獄があり、それぞれがまた、高サすなわち深さの三段階で区別されています。

それがまた、個々全体にわたって、地獄はことごとく天界と対立しています。最低の地獄は、最高の天界に対立し、中間の地獄は、中間の天界に対立し、最高の地獄は、最下の天界に対立しています。

地獄の〈かたち〉を帯びている自然的精神についても、同様のことが言えます。すなわち、最大のものも、最小のものも、靈的〈かたち〉は、それぞれ同類に似るわけです。

天界と地獄がこんなにも対立しているわけは、そこにいる者らの愛が、対立しているためです。天界では、主への愛と、それからくる隣人への愛が、内奥の段階を形成しているのにたいし、地

獄では自己愛と世間愛が、内奥の段階を形成しています。また、天界ではそれなりの愛に由来する英知と理知が、中間の段階を形成しているのにたいし、地獄では、英知と理知に見えつつも、それなりの愛に由来する愚鈍と狂気が、中間の段階を形成しています。また、天界では、以上の二段階からくる結実として、記憶にたくわえられた知識、また肉体に表された行為などが、最終の段階を形成しているのにたいし、地獄では同じく以上の二段階の結実として、知識となったものとか、行為となったものが、最外部の段階を形成しています。

天界における善や真理が、地獄では、それに対立する悪や偽りに変わっていきます。わたしはそれを経験によって、はっきり分かりました。ある種の神的真理が、天界から地獄に向かって流れていきましたが、その真理が、段階を追って下っていく途中、偽りに変わっていき、最低の地獄に着いたときは、全く逆のことがらに変わってしまったと聞きました。

そこから、地獄は、あらゆる善や真理にかんして、段階を追って、天界とはまる反対になることが分かりました。しかも、それが悪と偽りに化していくのは、それに対抗する形相があって、流入が変化させられていくためだということです。周知のとおり、流入はすべて、受ける側の形相あるいは状態に応じて、感じとられ、受けとめられていくわけです。

それがまる反対のものに変わってしまうことについて、わたしには次のような経験で気づきました。わたしは、天界に対応した関係をもつ地獄を、その地獄の位置づけから眺め見る機会が与え

られました。その地獄にいる者たちは、頭を下に、足を上にして逆さまに見えます。でも、自分たちには足を下にして、まっすぐ立っているように見えるということです。結局は、地球の反対側にいる者同士のようなのです。

以上、経験を記したことで、理解できたでしょう。地獄の形相・イメージをもつ〈自然的精神〉は、天界の形相・イメージをもつ〈霊的精神〉にたいして、それぞれの三段階が、逆になっているわけです。

276.④ 地獄となった〈自然的精神〉は、天界である〈霊的精神〉にたいし、あらゆる面で対立している。

それぞれの愛が対立しているとき、感知することも、すべて逆になってきます。人の〈いのち〉を形成しているのは愛ですが、その愛から、他のあらゆるものが流れてきます。泉から川が流れ出るようなものです。その源から流れ出てくるものは、それから流れ出てこないものと、〈自然的精神〉の中で、はっきり分離しています。つまり、支配愛から流れてくるものは主流となり、それ以外のものは脇へそれます。〈みことば〉から出る教会の真理にしても、それが中心から脇の方へ追いやられ、やがては根こそぎにされてしまいます。そうすると、人つまり自然的精神は、悪を善であるかのように感じ、偽りを真理であるかのようにとり違えます。またその反対にもなります。

そこから、悪意を英知と思い、狂気を理知と考え、下心を賢明ととり、邪悪な術策を天賦の才とします。そうなると、教会や神

礼拝にかんする神的・天的なことがらには、何の値打ちもなくなり、肉と世俗が最大の価値をもってきます。こうして、みずからの〈いのち〉を逆転してしまいますから、頭部に属するものが足の裏になり、足蹴にするようになるわけです。そして、足の裏に属するものを頭にもってきます。ここで、人は生命あるものから、死んだものになります。人の精神が天界にあるとき、生きたものであり、人の精神が地獄になると、人は死んだものになります。

19 自然的精神の三つの段階にあるものは、肉体の行為を とおして果たされる行いの中に、すべて含まれている

277. 第三部では、「段階」について取り扱ってきました。これを知ること、一つの秘義が明らかになります。それは、人の精神すなわち意志や理性にあるものは、人の行為や行動に、すべて含まれているということです。それはタネ、果実、卵の中に、見え隠れしているものと同じです。

行為や行動そのものは、外面にあらわれたものでも、その内面には、まだ数え切れないものがたくさんあります。からだ全体の運動繊維が力を出しあいますし、その力を刺激したり、コントロールしたりする全精神があります。そこには、三つの段階があることは前述したとおりです。

人の意志に起こるものすべてと、人の愛から生じる情愛のすべては、全部精神に属するものとして、第一の段階を形成します。

また、理性の働きのすべて、その感知力からくる思考のすべては、第二の段階を形成します。また、記憶にあるものすべて、つまり思考概念で、言語化する一歩手前のものや、記憶からとられたものは、すべて第三の段階です。

以上によって、行為が決められますが、その決断がもとで、行為が表面に現れます。ただし、その行動では、外面にあらわれた形として見えた限りでは、実際に内在していた前々からのものは、表面に現れません。最外部の末端は、先行するものを包み、含みもつ土台であることについては、前述（209～216節）したところを参照してください。また、高サの段階では、その最終・末端部は、完全に開花した状態です（217～221節）。

278. 身体の行為は、肉眼で見たかぎりでは、単純で画一的です。それは、外側からの形では、タネ・果実・卵とよく似ており、また、殻の中のクルミの実やアーモンドにも似ています。つまり、それまでになる以前の過程を全部ふくんでいます。すべて最終・末端部になるものは、外側がくるまれていて、それによって以前の過程と区別されます。

それぞれの段階についても、被膜でおおわれることによって、もう一つ別の段階と区別されます。したがって、最初の段階のものは、第二の段階のものとは、外見上みわけがつかず、さらに第二の段階のものは、第三の段階のものとみわけがつきません。

たとえを挙げてみます。精神の第一段階である〈意志的愛〉は、精神の第二段階である〈理性的英知〉のうちにある場合、考えて

いることが何となく楽しい、ということくらいでしか見分けがつかずきません。また、〈意志的愛〉である第一段階は、記憶知という第三段階のうちにある場合、知っていること、しゃべっていることが、何となく気に入っているというくらいにしか、見分けがつかずきません。そこから出てくる結論は、身体的行為としての行動を見ると、外側の形からは、一つのまとまったものとして、単一に見えますが、先行するものすべてを含みもっています。

279. 以上は、次のことでも確かめられます。人間についている天使たちは、人の精神から出て行為に移されることは、みな一つ一つ感じとっています。靈的天使たちは、そこで人の理性から出てくるものを感じとり、天的天使たちは、そこで人の意志から出てくるものを感じとります。これは逆説のように見えますが、実際は真理です。

同時に、知っていただきたいことは、人の精神の中で、考察中のものや発題中のものなどは、心の中心におかれ、その他のものは、情愛に応じて、周辺におかれることです。ある人がどんな人か、その人の行為一つを見れば、感じとれると、天使たちは言っていました。それも、本人がもっている愛が多様に変化しつつも似ており、その愛の決断が情愛となったり、それから思考に移ったりすることによるそうです。

一口で言えば、天使たちの前では、靈的人間は、そのあらゆる行為・行動が、おいしく有益で美しい果物のようです。それを割って食べると、芳香が流れ、栄養になり、舌をよるこばせます。

人間の行為や行動が、天使たちにはこんなふうに感じられることについては、前述の（220節）を参照してください。

280. 人間の〈ことば〉についても同じことが言えます。天使たちは、人が発する〈ことば〉の音声によって、その本人の愛を知り、音の語調によって、本人の英知を知り、声の意味によって、本人の知識を知るとのことです。以上の三つがそれぞれの音声に含まれているのは、音声が結実となって、その中に、音と語調と意味があるからだ、つけ加えていました。

第三天界の天使たちが、わたしに言ったことですが、かれらは話している人の声から、その人の気質の通常の状態を感じとり、個々の特定状態についても分かるということです。〈みことば〉の一つ一つの単語の中には、〈神の英知〉としての霊的なもの、〈神の愛〉としての天的なものがあり、人が信心深く〈みことば〉を読むとき、天使たちはそれを感じとります。それについては、『聖書についての新エルサレムの教義』の中で、種々述べられています。

281. 以上から、次のように結論づけられます。人の自然的精神が三つの段階をとって地獄に下っていく場合、本人のあらゆる悪、悪に由来する偽りのすべては、その本人の行いのうちに現れていること、また、人の自然的精神が天界の方へのぼっていく場合、その人の善と真理のすべては、本人の行いのうちに現れているということです。また、天使たちは、前者の場合でも、

後者の場合でも、本人のたった一つの〈ことば〉、たった一つの行為から、それを感じとります。〈みことば〉の中で、人はその行いによって裁かれるとあるのは、そのためです。また、人は自分が言った〈ことば〉の一つ一つについて、責任を負わなくてはならないとあります。



第 四 部

- 1 エホバである主は、永遠のむかしからましまし、宇宙とその万物を、ご自身のみ力によって創造された。無からの創造ではない

282. 宇宙の創造主にまします神は一つです。これは全世界で知られていることであると同時に、知者なら、だれしも内心にある感知力で認めています。宇宙の創造者である神が「エホバ Jehovah」と呼ばれていることは、〈みことば〉によって知られています。

これは唯一の方であるということから、「存在者 Esse」の意味をもっています。このエホバなる方こそ、永遠のむかしからまします主 Dominus ab aeterno です。これについては、『主についての新エルサレムの教義』の中に、いろいろ述べられています。

エホバは、「永遠のむかしからまします主」と呼ばれます。それは、エホバが人々を地獄から救うために、人間性 Humanum をとられたためです。弟子たちにたいしても、ご自分を「主」と呼ぶように命じ

ておられます。新約聖書のなかで、エホバは「主」と呼ばれており、次の句からも明らかです。

「あなたは、あなたの神である〈エホバ〉を、心を尽くし、魂をこめて、愛しなさい」（申命 6・5）。

新約聖書では、

「あなたは、あなたの神である〈主〉を、心を尽くし、魂をこめて、愛しなさい」（マタイ 22・35）。

その他、旧約聖書や福音書の中から引用することができます。

283. たしかな理性で考えれば、だれでも、宇宙は無から *ex nihilo* 創造されたのではないことが分かります。無からは何も生まれてこない知っているからです。無は無です。無から何かを作ることは矛盾です。矛盾であるということは、神の英知からくる真理の光に反することです。神の英知からくるものでない以上、神の全能によるものでもありません。

正しい理解力をもって考える人は、みな〈実体そのものである方 *substantia in se*〉から、万物が造られたことが分かります。これは、〈存在それ自身〉のことです。存在するものはみな、その〈存在それ自身〉が起源になって、実在することができます。ところで、〈実体そのものである方〉とか、〈存在それ自身である方〉とは、神のことですから、あらゆる事物の実在には、神が起源になっていることが分かります。

多くの人は、以上が理屈にかなっていると気づきながら、それをあえて断言しようとしません。それは、神によって造られた被造宇宙こ

そ、神ではないかとか、自然は、みずからの力で存在するのではない
かとか、自然の内奥部にあるものを神と呼んでいるのではないかな

どと、思ってしまうからです。

たしかに、万物実在のみなもとは、神であり神の存在がもとになっています。それを多くの人には、見えているにもかかわらず、その出発点を越えて、先に進もうとしません。それは、ゴルディオスの結び目のように、理性ががんじがらめになって、それから抜け出られなくなると思うからです。

理性ががんじがらめになって抜け出られないと思う理由は、神についても、神による宇宙創造についても、時間と空間から考えをすすめるからです。時間や空間は、自然がもっている固有の性格です。したがって、自然をもとにして、神や宇宙の創造について考えることは、だれにもできません。

ただし、理性が内的光のうちにある人は、だれでも自然界とその創造を、神をもとにして感知することができます。神は、時間のうち、空間のうちには、ないからです。

神性は、空間のうちにはありません（7～10節）。神性は空間に関係なく、宇宙の全空間に満ちあふれています（69～72節）。神性は時間と関係なく、全時間のなかに存在します（73～76節）。神は宇宙とその万物を、ご自身を源にしてお造りになりました。しかし、この被造宇宙が神になったということではありません。これについては後述します。なお、他にもこのようなことについて、それなりの光をあてて、考えて見るものが多くあります。

284. 本書の第一部では、〈神の愛〉と〈神の英知〉である神について述べました。それは〈いのち〉であり、存在そのもの、独一の

存在なる実体・形相でもあるお方です。

第二部では、霊界にある霊的太陽と、自然世界にある自然的太陽について触れました。宇宙万物は、以上二つの太陽をとおして、神によって創造されました。

第三部では、創造された個々全体には、諸段階があることについて学びました。

第四部では、宇宙が神によって創造されたことについて、これから学んでいきます。

以上について学んでいきますが、その理由は、主のみまえにいる天使たちが、この世を眺め、人間には暗闇しかないのを見て嘆いているからです。神についても、天界についても、自然の創造についても、人々の英知の支えになる知識が、何もないと言います。

- 2 〈永遠のむかしからいます主〉すなわちエホバは、人間である。そうでなかったら、宇宙と、宇宙万物を創造されることができなかった

285. 神が人間であると言っても、自然的肉体をもった人間のようだと考えていると、神が人間として、宇宙とその万物をどのようにして創造されたのか、まったく分からないと思います。そうになると、次のように自問自答するでしょう。「神は人間として、空間から空間へと経めぐって、どうやって宇宙を創造されたのだろうか」、また「ご自分のいる場所から〈ことば〉を發し、その言われたとおりに、創造

が成ったとは、どういうことだろうか」と。

神が人間であると聞くと、そんなふうと考えてしまうのかも知れません。それは〈神・人 Deus Homo〉とは、この世の人間と同じと考えるからです。あるいは、神について考えるとき、それを自然と、時間・空間を備えた自然的属性をもとにして考えているためです。

それにたいして、〈神・人〉と言っても、この世の人間をもとにしたり、自然や、時間・空間をもとにしたりしない人は、神が人間でなければ、宇宙は創造され得なかったことが、ぴんと理解できます。天使たちは、神を人間と考えています。その天使的な考えに、自分の思いを浸してみてください。そして、できるだけ空間の概念をとり除き、思いを真理そのものに近づけて下さい。

霊的なものは、場所と関係なく、感知できるから、霊や天使は、空間のうちに存在しないことをよく弁えている教養人もいます。思考力一つをとってみても、たしかに人間の中に存在していますが、その思考力とおして、人は他のどこにでも、はるか遠方まで、自分をそこに存在させることができます。霊や天使たちは、かれらは人間であるため、当然それなりの身体をもっていて、以上のような状態で存在しています。かれらは、自分の思考力が及ぶところに姿を現します。霊界では、空間とか距離は見かけに過ぎません。かれらは、自分たちの情愛をもとにして、考えと行動が一つになっています。

神は霊界の頭上高く、太陽として姿を現しておられる事実も、以上で理解できると思います。そして、その太陽には、見かけ上の空間さえあてはまりませんから、空間をもとにして、神について考えることはできません。そこで、神が宇宙を創造されたのは、無からではなく、

ご自身がもとなっていることが分かります。しかも、神ご自身の人間的な身体については、空間的な表現としての大小や身長などで、思いをめぐらすことはできません。したがって、最初にあっても、最後にあっても、最大のものにあっても、最小のものにあっても、神は同一です。なお、その人間性 *Humanum* は、あらゆる被造物の中にあつて、最も内奥のものであるとともに、空間には関係がありません。

最大のものの中にも、最小のものの中にも、神は同一であることについては、前記（77～82節）を参照してください。神は空間に関係なく、空間のすべてを満たしておられます（69～72節）。神は空間のうちに存在するわけではなく、延長をもつものでもありません。自然の中の、いわば内奥 *intimum naturae* におられます。

286. 神が同時に人間でなかったら、宇宙とその万物を創造することはできませんでした。これは、理解力のある人なら、すぐ分かります。神には愛と英知があり、慈悲と慈愛があります。すべての善も真理も、神から出たものであり、神は、善そのもの、真理そのものです。それは否定できません。それが否定できなしたら、神が人間であることも否定できません。以上の性格は、人間から抽象して存在するものではありません。そのような性格にとって、人間こそ主体になるものだからです。主体から切り離すやいなや、存在しないものになります。

英知とは何か考えてみて下さい。そして、それを人間から切り離して想定してみてください。いったい何が残るでしょう。何かエーテルのようなもの、炎のようなものしか思いつかないのではないでしょう

か。主体がない場合は何もありません。主体があつて、英知は〈かたち〉をもってきます。それは人間にある英知です。それは、あらゆる点で人間の〈かたち〉です。英知が〈かたち〉をもつためには、何か欠けたものがあつてはなりません。

一口で言えば、英知の^{けいそう}形相 *forma sapientiae* とは人間のことです。人間こそ英知の形相であるということなら、愛の形相、慈悲の形相、慈愛の形相、善と真理の形相です。以上の属性は、英知と一つになっているからです。愛や英知が形相なくしては存在しないことについては、前述（40～43節）を参照してください。

287. 愛または英知は、人間を指します。これは、天界の天使たちを見ても分かるように、主のみ力によって、愛のうち、英知のうちに浸っていればいるほど、人間として美しくなります。これは、アダムについて記されている〈み〈ことば〉〉からも分かります。アダムは、神の似姿、神の像として造られました（創世1・26）。それは、愛と英知の〈かたち〉に造られたということです。

地上の人間は、体をもって、人間のかたちをとって生まれてきます。その理由は「靈魂」と呼ばれている靈こそ人間だからです。この靈は、主のみ力によって、愛と英知をいただく器であるという点で、人間です。人の靈または靈魂が、その愛と英知を受け入れれば、受け入れるほど、身にまとった物質的体が死んだあと、人間になるわけです。それを受け入れなければ、受け入れないほど、怪物になります。受け入れ能力をもっている程度に、人間らしさを残した怪物です。

288. 神は人間であるため、天使のいる全天界は、まとまったひとりの人間を映し出します。そして、人に肢節・内臓・器官があるように、全天界は、地域・領域に分かれています。天界には、頭脳の全領域をあらゆる社会、顔面の全機能をあらゆる社会、体内にある全器官をあらゆる社会があります。その地域は、人間にあるのと同じように、おたがいにはっきり区別されています。天使たちは、自分が「人 Homo」のどの領域にいるかを知っています。

神は人間です。したがって全天界は人間の姿をしています。また、神は天界です。なぜなら、天界を構成する天使たちは、主から愛と英知をいただき、その受け皿として神の像になります。天界はあらゆる点で、人間の〈かたち〉をしていることについては、『天界の秘義』の何章かにわたって、その章末に説明してあります。

289. 以上から、神を人間とは違ったものと考えたり、神の属性を、神・人間のうちにある属性と違ったものとしたりするのは、むなしい考えであることが分かります。なぜなら、「人 Homo」から切り離されたものは、純然たる架空な存在でしかないからです。神は人間そのものです。人はみな、愛と英知をいただければ、いただくほど、人間になるという事実は、それが根拠になります。以上には、前記（11～13節）を参照してください。また後述の内容確認のためにも、これは大切です。つまり、神による宇宙の創造は、神が人間であるということから分かってきます。

3 〈永遠のむかしからまします主〉すなわちエホバは、ご自身を源にして霊界の太陽を造られた。そして、そこから、宇宙と宇宙万物を創造された

290. 本書の第二部では、霊界の太陽について述べ、そこで次のようなことを記しました。神の愛と神の英知は、霊界では太陽として姿を現しています（83～88節）。その太陽から霊的熱と、霊的光が出ています（89～92節）。その太陽は神ではありません。

〈神・人間〉である方の神的愛と神的英知から出た太陽です。

同じく、その太陽から熱と光が出ています（93～98節）。霊界の太陽は中位の高さにあり、自然界の太陽が人間によって見られている距離をもって、天使たちに現れています（103～107節）。霊界では、主が太陽として姿を現されるところが東であり、その他の方位は、それを基準にしています（119～123、124～128節）。天使たちは、太陽である主の方向にたえず顔を向けています（129～134、135～139節）。

その太陽は、神の愛と神の英知から発出する最初のもので、その太陽を介して、主は、宇宙と宇宙万物を創造されました（151～156節）。自然の世界の太陽は、純粹の火であって、自然はその太陽を起源として存在しています。したがって、その太陽は死んだものです。自然の太陽が創造されたのは、創造のみわざを終了・完結させるためでした（157～162節）。以上、生きた太陽と、死んだ太陽という二つの太陽がなかったら、創造はなかったでしょう（163～166節）。

291. 第二部では、また次のようなことに触れました。〈靈的太陽〉とは、主ご自身を指すわけでなく、主の神적愛と神적英知から発出するものであることです。「発出する」とは、その靈的太陽が〈神の愛と英知〉から生まれたもので、それをとおして、神性が「発出する」という意味です。もちろん〈神の愛と英知〉は、そのものとしては、実体であり形相です。

人間の理性は、ものごとをその原因から見ないかぎり安心できません。つまり靈界の太陽は、主ご自身ではなく、主から発出していながらも、それがどのようにして生まれたかが、ぴんとこない、安心できません。それで、これについても少し触れることにします。

わたしは、これについて天使たちといろいろ話しあいました。天使たちが言うには、自分たちの靈的光によると、それが実にはっきりしていると言います。ところが、人の自然的光の下で、人にむかってそれを証明することは難しいそうです。それには、双方の光とその考え方には、大きなひらきがあるからだと言います。

さらに天使たちは、そのわけは、一人ひとりの天使をとり巻いている〈情愛と思考の靈氣 sphaera〉に似ていると言います。天使の存在は、その靈氣を介して、傍にいる者・遠くにいる者に及んでいます。ところで、その取り巻いている靈氣は天使自身ではなく、天使の体にある個々全体から発散しています。その体から、川のようにたえず実体が流れてきて、その流れ出たものが天使を囲んでいるのです。

天使の体には、天使の生命運動を起こす二つの泉をとおして、つまり心臓と肺臓をとおして、接触している諸実体があります。その諸実体は、たえず活動的で大氣を活性化し、あたかも他の者の傍に、もう

一人の自分がいるかのように、感知力をかき立てます。それでも、情愛や思考の靈気が、独立して存在するわけではありません。その体から発しつつありますが、それは情愛が天使のうちにある精神の諸形相がもっている状態にすぎないわけです。

かれらはなお続けて、一人ひとりの天使のまわりに、このような靈気があるのは、本人が主のまわりにいるためだと言います。さらに、主のまわりにある靈気は、同時に主のみ力によるものであり、その靈気こそ、かれらの太陽、つまり靈界の太陽だと言いました。

292. わたしは、天使や靈のまわりに、このような靈気があり、また、同じ社会にいる多数の天使たちのまわりにも、共通の靈気があるのを感じとる機会が与えられました。しかも、そのような靈気を、さまざまな色・形で *sub varia specie*、見られました。

天界ではときどき、繊細なほのおのような色・形をしています。地獄では重苦しい火焰のようです。天界ではときどき、やわらかくて明るい雲のような色と形をしています。地獄では、粗雑で黒ずんだ雲のようです。また、そのような靈気を、各種各様の香りや臭いで感じとることもできました。

以上のように、天界でも、地獄でも、そこにいる一人一人には、靈気がとり巻いており、しかもその靈気は、かれらの身体から発散分離した諸実体からなっていることを、わたしは確信しました。

293. またそのような靈気は、天使や靈からだけでなく、靈界に姿を見せる個々全体から発散していることが感じとれました。樹木か

ら、そこになっている果実から、灌木とその花から、各種の草類から、また土地や土壌からも出ています。以上の例証で明らかになったのは、生命のあるものも、生命のないものも、すべてのものは一つ残らず、自分の内部にあるものと似たもので、取り囲まれていること、しかも、その外部にあるものは、内部から発散しているということです。

これと同じようなことは自然界にもあり、多くの学者の経験で知られています。人間からは、流出の波 *unda effluviarum* が流れ出ています。それはまた、動物、樹木、果実、草木、花に、また金属や石にもあります。このような流出は、自然界は霊界から、霊界は神から受けています。

294. 〈霊界の太陽〉を構成しているものは、主のみ力によるものであり、主ご自身ではありません。したがって、その中に〈いのち〉はなく、生命が欠けています。また、天使や人間から流れてくるものは、そのまわりに靈気をつくっていますが、これは、天使や人間自身ではありません。天使や人間から出ているものでは、生命が欠けています。このような靈気は、かれらの生命の形相を宿す肉体の形相から発散するものであるため、同調すれば、天使や人間の行いと一つになっています。

天使たちは、みずからの靈的概念をとおして考えれば、その秘義がよく分かるし、〈ことば〉でも言い表すことができます。ただし人間は、みずからの自然的概念では分かりません。自然的概念の一つをつくるのにも、一千の靈的概念があり、また、自然的概念の一個でも、

人は靈的概念に解明していく力がありません。ましてや、それを相当する概念の数にまで解明することはできません。以上は、高サの段階による相違からきます。それについては第三部で述べました。

295. 天使たちの考えることと、人間が考えることには、こんなにも大きな違いがありますが、わたしは、経験でその違いが分かりました。

わたしは、天使たちが何かについて靈的に考え、その考えた内容を、あとでわたしに話してみてくれるように言いました。そのようにやってみたし、それをわたしに話そうとしましたができません。つまり、口にすることができないということです。

たしかに、かれらの靈的な〈ことば〉に似たものはあるし、かれらの靈的な文書 *scriptura* に似たものがあります。ところが、自然の〈ことば〉にある単語 *vox* に似た靈的〈ことば〉の単語は、まったくありませんし、自然の文字に似た靈的文字もありません。

ただかれらの場合、一つ一つの字 *littera* には、完璧な意味 *integer sensus* が含まれています。でも天使たちは、人の自然的状態と共通するものが何もなくとも、かれら自身、靈的な状態で、同様に考えたり、話したり、書いたりしていると言っては、感心している様子でした。

そのように、自然的なものと靈的なものは、高サの段階で相違しており、相応 *correspondentiae* 以外には、おたがい交流がないことがよく分かりました。

- 4 主の中には三つのものがある。それは、主すなわち、神の愛、神の英知、神の役立ちである。そして、以上の三つは、霊界の太陽のそとに姿をあらわす。熱は〈神の愛〉、光は〈神の英知〉、それを包む大気 *atmosphæra* は、〈神の役立ち〉をあらわす

296. 霊界の太陽から熱と光が放出されます。その熱は、主にある神愛であり、その光は主にある神知です。これについては前（89～92、99～102、146～150）を参照してください。ここではとくに、霊界の太陽から発出する第三のもの、すなわち大気があって、それが熱と光を包んでおり、しかもその大気は「役立ち *usus*」と呼ばれる、主の神性から発出していることについて述べることにします。

297. 愛には目的があり、役立ちをめざしていること、また愛は英知をとおして、役立ちを生み出すことは、ある程度の照らしをうけて、考えてみれば、だれでも理解できます。愛は、みずからの中から役立ちを生み出すことはできません。英知を媒介にして役立ちを生み出します。

愛とは、愛されていること以外の何ものでもありません。この愛されていることが役立ちなのです。役立ちとは愛されていることであり、それが英知を介して生み出されるものですから、その結果、役立ちとは、英知と愛を包み受けるものということになります。

以上の三つ、すなわち愛・英知・役成ちは、高サの段階にしたがい、

順序ただしく続いてくるものです。また、最終・末端の段階は、先行する段階を受けとめ、支える土台 *complex continens et basis* であることについても前述しました（209～216節、その他）。以上のことから、神の愛・神の英知・神の役立ちの三つは、主のうちにあり、しかもそれは本質上、主であることが明かです。

298. 人は、その外部的な面から見ても、内部的な面から見ても、あらゆる役立ちを果たす〈かたち〉です。しかも、被造宇宙にある役立ちのすべては、人間の役立ちに対応したものをもっています。それについては、これから入念に説明します。

ここで次のことだけは、知っておいていただきたいと思います。それは、主が人としてあらゆる役立ちの〈かたち〉そのものであり、その〈かたち〉に、被造宇宙にある、あらゆる役立ちの起源があることです。そして被造宇宙は、役立ちの面からみて、主の像をもっていることです。

「役立ち」とは、神人すなわち主によって、創造以来、秩序づけられています。それにたいし、人間のエゴ *proprium* から出てくるものは、「役立ち」ではありません。それは、地獄であり、秩序に反するものです。

299. 主のうちには、愛・英知・役立ちの三つがあります。それで、この三つは主を指します。しかも、主はどこにでもおられるため、遍在 *omnipraesens* です。主は天使や人のまえに、ご自分のあるがままに、すなわち〈靈的太陽〉のうちにましますとおりに、お現れに

なるわけではありません。むしろ、天使や人間に受け入れられるような方法で、お現れになります。つまり、熱をとおして愛を、光をとおして英知を、大気をとおして役立ちを、お示しになります。

主は、役立ちの面では、大気をとおしてご自分をお示しになります。それは、役立ちが愛と英知の容器になっているように、大気は、熱と光の容器になっているからです。光も熱も、神的太陽から放出されるもので、これも、無すなわち真空の中に放出されているのではなく、基体となる容器の中で放出されています。この容器を大気と呼んでいます。大気は太陽のまわりをとり巻いて、太陽を自分のふところに抱え込むようにしています。さらに、天使たちがいる天界にまで届き、人間がいるこの世にも及んでいます。こうして、どこでも主の現存を示しています。

300. 前述したように（173～178、179～183節）、霊界には、自然界と同じように、大気が存在します。霊界にある大気は靈的です。それにたいし、自然の世界にある大気は自然的です。

さて、靈的大気は〈靈的太陽〉のまわりをしっかりと取り囲んでいますが、大気の起源から考えて、その大気にある一つ一つは、太陽そのものの性格と、本質上おなじです。天使たちは、空間と関係のない靈的概念をつかって、それを次のように断言しました。

すなわち、万物が生まれる起源として、唯一の実体があります。そして霊界の太陽こそ、その実体です。神は空間のうちにはおられません。むしろ最大のものの中でも、最小のものの中でも同一の方ですが、それと同じように、〈神人〉から発する始源としての〈靈的太陽〉も

同一です。その太陽は唯一の実体 *unica substantia* として、連続（広サ）の段階および隔離（高サ）の段階をとおり、さらに媒介となる大気を使って、被造宇宙にあるもろもろの変化を、生み出し、支えています。

天使たちはまた、次のように言いました。以上は、頭の中から空間の概念をとり除かないかぎり、絶対に分かりません。しかも空間の概念をとり除かないと、外観によって迷わされる可能性もあります。ただ、神が万物の起源としての存在そのものと考えていれば、迷わされることはありません。

301. 天使たちの概念は、空間には関係しませんが、その他、天使たちの考えによって明らかにされたことは、次のとおりです。被造宇宙のなかで、〈神人〉すなわち、主おひとり以外には、生きているものは何もありません。そして、主のみ力による〈いのち〉によって、動かされていないものは、何も存在しません。つまり、主のみ力による〈太陽〉をとおして、存在しないものは何もないのです。わたしたちは、神のうちに生き、動き、存在するという真理は、そのことです。

5 霊界にも自然界にも、三種類の大気があって、大地に見るように、実体および物質という最後の末端部で終わっている

302. 霊界と自然界双方の世界には、三種類の大気が存在するこ

と、その大気は、おたがいに高サの段階で違っていること、なお、この大気は、広サの段階にしたがって、より劣ったものに向かって、進展しつつも減少していくことを、第三部（173～176節）に記しました。

大気は、より劣ったものにむかって、進展しつつも減少していくため、たえず圧縮され、エネルギーを失っていきます。やがて最終末端部では、圧縮されて、力を失っていますから、もはや大気ではなく、大地に見られるように、自然世界の中で固定したものになります。これは、静止した実体で、物質 *materiae* と呼ばれます。

これが、諸実体や諸物質が生まれてくる起源です。その結果、次のようなことが言えます。第一は、実体や物質もまた、三つの段階があります。第二は、この実体や物質は、周囲をとり巻く大気によって、おたがいにつながっています。第三は、その実体や物質は、役立ちを果たすよう、ととのえられていきます。それは、それなりの形相をもったあらゆる種類の役立ちです。

303. 大地の中に見られる実体や物質は、太陽によって、しかも太陽の大気を介して造られてきました。これは、最初のものから、最後のものまで、どこまでも連続する仲介作用があると考えれば、だれしも肯定できます。しかも、どんなものでも、みずからに先行するもの、つまりは最初のものがなければ何も存在しません。その最初のものとは〈霊界の太陽〉です。さらに、その〈太陽〉のもとになる最初のもとは、〈神人〉であり、主ではないでしょうか。

さて〈太陽〉は、最終・末端部のうちにみずからを表わし、それに

は大気を介します。そのため先行するものは大気です。その先行する大気は、活動と膨張によってたえず減少しつづけ、最終部にいたります。そして、大気の活動と膨張が最終部で止むとき、それが大地の中にあるような実体と物質になります。ところで、大気よりのもの、すなわち、大気から生じたものは、その中に役立ちを果たすための努力 *nisus* または推進力（または効能） *conatus* を含みもっていません。

宇宙と宇宙万物は、最初のものから始まって、不断の仲介作用をへて創造されましたが、そのように考えない人は、当然の原因から引き裂かれ、ばらばらになった仮定の上で、ものを言う以外にはありません。内側からよく見とおす心をもっていれば、そのような仮説は、一軒の家ではなく、がらくたの積み重ねのように見えてきます。

304. 被造宇宙のうちにある万物はみな、以上のような起源をもっています。それで個々のものは同じようなパターンをもっています。つまり、相対的に静止の状態となる最終部で、落ち着き、そこで存続するために、最初の状態から始まり、進展していきます。

人体のなかでは、繊維は、その最初の〈かたち〉から始まり、腱になるまで進んでいきます。それから繊維は、その小器官も含め、その最初のものから始まって、軟骨や骨格になるまで進みます。そこで落ち着き存続するようになります。

人間にある繊維とか器官には、最初のものから始まり、最終のものにいたるまで、このような進展があります。しかしそのために、同じような状態の進展もあります。つまり、感覚作用、思考作用、情愛と

というような状態です。これらの作用もまた、光の中に進む最初のものから始まって、陰の中にある最終のものにいたります。あるいは、熱のうちにある最初のものから始まって、熱のさめた最終のものになります。

以上のような進展があるため、同じく、愛とそれに伴うあらゆるものの、英知とそれに伴うあらゆるものに、同じ進展があります。一口で言えば、被造宇宙には、万事このような進展があります。創造されたものはすべて、その最大のものにも最小のものにも、二種類の段階が存在することは、前の（222～229）節で説明しました。

万物の最小のものの中にも、以上の二種類の段階があるのは、〈靈的太陽〉は、天使たちがもつ靈的な概念からすると、万物の起源となる唯一の実体 *unica substantia* であることからきます（300節）。

**6 大地は、実体と物質から成っているが、その大地には、神
的なものは何もない。ただし、大地は、神そのもの
Divinum in se によってなった**

305. 大地の起源については、前節で扱いました。それで、大地の実体にも物質にも、それ自身神的なものは何もなく、そのものとしては、神的なものは何もないということが分かります。前述したように、そこで大気 *atmosphaerae* が究極的に終わっています。つまり、大気の熱はさめて寒冷となり、光は暗闇となり、活動は無力状態にな

ります。ただし、大地は〈靈的太陽〉の実体から、連続的な流れをと
おして、神によって成ったものを吸収しています。すなわち、〈神
人〉である主をとり巻く靈気を吸収しているのです。大地が構成され
る実体も物質も、その靈気からなっていますが、それも〈太陽〉から、
大気を介して、連続的な流れのうちに造られたものです。

306. 〈靈的太陽〉から、大気を介して、大地が生まれたと言っ
ても、自然的概念から出てくる単語では、これ以上のことは言えませ
ん。しかし、靈的概念から出る単語をつかえば、空間にかかわりがな
いため、もっと別の言い方ができます。靈的概念には、空間が入って
こないのです、自然的言語にある単語を越えるわけです。靈的な思考・
言語・文書は、自然的な思考・言語・文書と、すこぶる違っており、
そのあいだには何の共通点もありません。ただ相応による交流がある
だけです。それについては、前（295節）を参照してください。こ
のように、大地の起源については、自然的には、ある程度までしか分
からないため、以上で充分です。

7 創造の目的は、あらゆる種類の役立ちである。その役立ち
には〈かたち〉があり、その〈かたち〉は、大地にある実
体と物質がもとになっている

307. 太陽、大気、大地について、今まで述べてきましたが、以
上はすべて、目的のための手段に過ぎません。創造の目的は〈太陽〉

である主のみ力によって、大気を介して大地から生じるものです。そして、その目的を役立ち *usus* と言います。この役立ちの範囲は、全植物界、全動物界、そして最終的に、天使的天界のもとになる人類に及んでいます。

これを「役立ち」の器と呼んでいます、そのわけは、〈神の愛〉と〈神の知恵〉をうける器になるからです。それと同時に、出発点になる創造神をめざし、それをとおして、神とその偉大なみ業をむすびつけ、この結びつきによって、役立ちの器が、かつて実在したように、神によって存続するようになるためです。

出発点となる創造神をめざし、神とその偉大なみ業を結びつけると言うのは、見かけ上です。実際は創造主なる神が、自らの力でご自分の方に目を向けさせ、ご自分にむすびつけようとして、なさっています。ただ、それをどのようにして目を向けさせ、それによって結びつけるようになさっているかは、後述します。

それについては、以前とりあつかいました。〈神の愛〉と〈神の英知〉は、みずからの創造による〈自分以外のもの〉の中に、存在・実在せざるを得ません（47～51節）。被造宇宙にあるすべてのものは、〈神の愛〉と〈神の英知〉をうける器です（55～60節）。また、被造物がもつあらゆる種類の役立ちは、段階を追って人間にまでのぼっていき、人間をとおして、その根源にいます創造主である神にのぼっていきます（65～68節）。

308. 創造の目的は役立ちです。だれでも次のことを考えれば、はっきり分かります。つまり、創造主である神が、自らの力で実在さ

せ、創造されるものは、役立ち以外にあるでしょうか。役立ちが果たされるのは、他のもののためではないでしょうか。自分のために役立つ場合でも、それもまた他のもののためではないでしょうか。自分のために役立つという場合とは、他のものために役立つ状態になることではないでしょうか。

こう考えると、また次のように考えます。つまり、役立ちが役立ちになるには、人間によって引き起こされるのではなく、実在するすべてのものを役立たせられる方ご自身の力で、人間のなかに引き起こされることです。すなわち、主のみ力によるわけです。

309. ただしここでは、役立ちの〈かたち〉を多様に取り扱うため、次の順序で述べます。

- ① 大地の中には、形相の中にある役立ち、すなわち、種々の役立ちがもつ形相を生みだしていく推進力 *conatus* がある。
- ② 役立ちがもつあらゆる種類の形相には、宇宙創造についてのイメージが宿っている。
- ③ 役立ちがもつあらゆる種類の形相には、人間のイメージが宿っている。
- ④ 役立ちがもつあらゆる種類の形相には、無限なる方、永遠なる方のイメージが宿っている。

310. ① 大地の中には、種々の形相にある役立ち、すなわち、種々の役立ちがもつ形相を生みだしていく推進力 *conatus* がある。

大地の中には、このような推進力があることは、その大地の起源からも、察せられます。大地の素材になっている実体 *substantiae* や物質 *materiae* がありますが、この実体・物質は、大気が限界づけられて終わっているところです。しかも前述した（305、306節）とおおり、その大気は〈靈的太陽〉から、役立ちに供せられるように放出されています。ですから、大地を構成する実体・物質は、それが起源なのです。つまり、大地の集積が連綿とつながって維持されているのは、大気の圧力によるわけです。したがって、その大地には、役立ちの様々な形相を生みだしていく永久の推進力が備わっています。大地の生み出していく能力そのものは、そこから来ます。すなわち大気の末端・究極部になっていて、そのため大地は大気と共鳴して働いているわけです。

大地の中には、以上のような推進力 *conatus* または性格 *qualitas* があると言いました。それは、大地の素材になっている実体と物質がもっている推進力であり性格です。もちろん、それは地の中にあるとき、地から大気の中に放出されるときもあります。大気中に、このようなものが充満していることは、周知のとおりです。

大地の実体や物質には、以上のような推進力や性格があることは、次のような事実からも明らかです。つまり、あらゆる種類のタネは熱によって、その内奥部まで開き、きわめて繊細な実体の力で受精しますが、その実体は、靈的起源をもつものとは考えられません。そのようにして受精すると、タネの生産力のもとになっている役立ちに合流する力を得ます。そして、自然的起源をもつ物質と結合していくことによって、役立ちの〈かたち〉を生み出していきます。さらに、そ

れを胎内から押し出すようにして、光にむかって伸び、芽をだし成長していきます。その推進力は、そのあと地中から根をとおして、その末端部まで続きますが、その末端部は、また、役立ちの起源でもある最初の出発点に連なっています。

このようにして役立ちの原理は、つぎつぎと〈かたち〉をとっていき、〈かたち〉は〈かたち〉で、あたかも靈魂のような役立ちの原理を原動力にして、出発から終点まで、さらに終点から出発までと進展していきます。こうして、部分と全体の一つ一つが、何らかの役立ちを果たすようになります。〈かたち〉は、肉体のようだからこそ、役立ち、靈魂のようだとすることになります。

もっと内奥にある推進力があります。それは、植物の繁殖をとおして、動物界にも役立ちを提供しようとする推進力 *conatus* です。なぜなら、動物はみな植物によって養われるからです。同時に、その中には、もっと内奥にひそむ推進力がありますが、それは、人類に役立ちを提供しようとする推進力です。以上の説明から次のことが分かります。

- 1) 随所に触れてきたことから、承知のように、末端部が存在し、その末端部のなかに、先行するすべてのものが、それなりの秩序で同時的に存在します。
- 2) (222～229節で) 前述したように、万物の中で、最大のもののなかにも、最小のものの中にも、二種類の段階が存在しますが、推進力のうちにも、その二種の段階があります。
- 3) あらゆる役成ちは、末端部から主のみ力で生み出されます。したがって、その末端部の中には、役成ちへむかう推進力があります。

311. けれども、以上のような推進力は、みな生きたものではありません。理由は、〈いのち〉の末端部にある力 *vires* の推進力だからです。つまり、力は〈いのち〉から出るものでありながら、その力に媒体があれば、いずれ起源の形にもどっていく推進力になるからです。

末端部にある大気には、このような力があります。そして、その力によって大地にあるような実体や物質は、現実化して〈かたち〉をとり、内部も外部も、その〈かたち〉を保ちます。以上については、記すことがあまり多いため、これ以上、紙面をさくことはできません。

312. 以上のようにして、地上に出て最初に生産されるものは、まだ若々しく、単純なものでしかありませんが、タネが生みだしたものです。最初の推進力とは、以上のようなものになります。

313.② 役立ちがもつあらゆる種類の形相には、宇宙創造についてのイメージが宿っている。

役立ちがもつ〈かたち〉は三種類あります。鉱物界における役立ちの〈かたち〉、植物界における役立ちの〈かたち〉、動物界における役立ちの〈かたち〉です。

鉱物界における役立ちの〈かたち〉は、眼に見えないため、記すことができません。最初の〈かたち〉は、大地のもとになっている実体や物質で、その最小の中に存在します。二番目の〈かたち〉は、無限にちがった多様なものからなる集合体です。三番目の〈かたち〉は、腐って塵に帰った植物や、死んだ動物などからできています。つま

り、大地に帰って土壤に化したものが、たえず蒸発・発散させるものから成っています。

鉱物界にある以上三つの種類の〈かたち〉は、イメージとして創造に関係します。つまり、その〈かたち〉は太陽の力で、しかも大気およびその熱と光をとおして、活動的になりますが。それで創造の目的でもある役立ち、つまり〈かたち〉に内在する役立ちを生みだしていきます。（310節で前述したように）、〈かたち〉がもつ推進力のなかには、以上のような創造のイメージが隠されています。

314. 植物界にある役立ちの〈かたち〉にも、創造のイメージがあらわされています。それは、その植物がもっている最初の形から最終のものまで、また最終のものから、最初の形までにいることです。最初の〈かたち〉とは、タネを指し、最終の〈かたち〉は、樹皮をつけた茎です。茎の最終的なものが皮で、その皮をとおしてタネに向かいます。タネは、前述したように最初の〈かたち〉です。

樹皮におおわれた茎とは、大地におおわれた地球を連想します。あらゆる種類の役立ちが創造・形成されたのは、この大地からです。外皮や内皮をとおして、植物は成育します。そして、樹皮や枝につながっている根覆いを介して、果実の原型をつくり出そうとします。その果実からタネができることは周知のとおりです。

最初のものから、最終のものに、また最終のものから、最初のものにいたる進展の中に、役立ちの〈かたち〉に刻まれた創造のイメージがあります。そして、あらゆる成長過程の中に、果実またはタネを生み出す目的が存在します。それが役立ちです。

宇宙の創造は、〈太陽〉を身にまとった主を出発点にし、大地という最終・末端にいたるまでの進展であるとともに、役立ちをとおし、大地から始まって、その最初の方である主へ帰ることが、以上で明らかになったと思います。それと同時に、全創造の目的は、役立ちであるということになります。

315. 忘れてはならないことは、自然の世界にある熱・光・大気は、何ら創造のイメージ *imago creationis* をつくるものではなく、霊界にある〈太陽〉の熱・光・大気だけが、創造のイメージをつくることです。後者の場合、みずからそのイメージを伴っており、創造のイメージに、植物界の役立ちにある〈かたち〉を着せませす。自然界の熱・光・大気は、タネをひらかせ、そのタネの繁殖・拡散をささえ、タネに生産を形づくる物質を提供します。

ただしこれは自然界の太陽の力ではありません。自然の力は、それ自身何の力にもなりません。〈靈的太陽〉からくる力によります。その力によって、いつまでも生産が行われます。前者は創造のイメージづくりには何の関係もありません。創造のイメージは、あくまで靈的なものです。それは自然の世界の中で姿をあらわし、役立ちを提供し、また固定したものとして存続し、物質で満たされるため、すなわち自然界の物質でしっかり固められるために、そのようになっています。

316. 動物界における役立ちの〈かたち〉の中にも、同じような創造のイメージがあります。胎内や卵におくられた精子から始まって、その最終・末端部である肉体が形成されます。その肉体には、成長す

ると新しいタネを生みだします。この進展の過程は、植物界の役立ちを形成していく進展の過程と似ています。精子はその出発になるもの、胎または卵は大地です。出産前の状態は、タネが土の中で根をはっていく状態です。出産後は、次の繁殖に向かいます。それは樹木の成長から始まって、実を結ぶ状態になるまでと似ています。

以上を平行させてみても分かるように、植物の〈かたち〉にある創造の過程は、動物の〈かたち〉にある過程と似ています。つまり、最初のものから最終のもの、最終のものから最初のものへといたる進展過程です。

人間がもっている部分々々にも、そのような創造のイメージが宿っています。すなわち、愛から英知を経て、役立ちにいたる進展過程です。意志から理性を経て、行為にいたる過程とも言えるし、仁愛から信仰を経て、行いにいたる過程とも言えます。意志と理性、仁愛と信仰は、出発点になる最初のもので、行為や行いは最終のもので、その最終のものから、役立ちのうれしさを経て、最初にもどります。最初というのは、前述した意志と理性、仁愛と信仰です。

役立ちのうれしさを経て、もとに戻るわけですが、それは、いずれかの愛にもとづいて行為をし、実践するとき感じるうれしさからも、はっきり分かります。つまり、そのうれしさは、出発点となった最初の愛にもどり、ここに結びつきが生まれます。行為や行いのうれしさは、「役立ち」と名づくうれしさです。

人の情愛または思考には、もっとも純化された〈かたち〉の組織があります。そして、その中でも、最初から最後へ、また最後から最初へといたる進展の、同じような過程があります。人の脳の中には、灰

質 *substantiae cineritiae* と呼ばれる星状の〈かたち〉が存在します。その灰質から、髄質を介し、首をとおって、胴体にいたる繊維があります。その繊維は、その最終部まで伸び、その最終部から、最初にもどります。繊維がその最初のものにもどるには、血管が媒体になります。

人の情愛や思考は、以上の種々な〈かたち〉と実体が、いろいろ変わっていくことであり、そのすべての進展も同じような過程をとりません。繊維がその〈かたち〉や実体から出てくることは、〈靈的太陽〉から、熱と光を含む大気が出てくると似ています。人の体から行為が出てくるのは、大気を介して、大地から生え出てくるものに似ています。その生産物を役立てるうれしさこそ、出発となった起源にもどらせる力になります。

ただし、人間には以上のような進展過程があり、その進展過程には、創造のイメージが宿っているなど、全理性をつかっても、なかなか分かりません。なぜなら、一つの行為の中に、何千何万という力が一つの作用として映っているからです。それに、役立ちのうれしさと言っても、思考作用の中で概念として現れず、しかも、はっきりと感知されないまま影響しあっています。

以上については、前述したことを参照してください。創造されたものは、すべてに役立ちがあり、その役立ちは、高サの段階を経て人間にいたり、人間を経て創造者である神、創造主へのぼっていきます（65～68節）。創造の目的は、最終・末端部に実在します。その最終・末端部は、万物が創造主へ帰り、そこに結びつきが行われるために存在します（167～172節）。ただし以上のことについては、

次の部で、もっと明白な光の中で見えてきます。そこで、意志および理性が、心臓および肺臓と相応関係にあることを述べるつもりです。

3 1 7. ③ 役立ちがもつあらゆる種類の〈かたち〉には、人間のイメージが宿っている。

これについては、前（6 1～6 4 節）に述べました。つまり、役立ちはすべて、最初のものから最後のものまで、また最後のものから最初のものまで、万事が人間と関係があり、人間と相応の関係にあることです。したがってまた、宇宙のイメージを宿していると同時に、宇宙は役立ちの面で、人間のイメージを宿しています。これについては次節で述べます。

3 1 8. ④ 役立ちがもつあらゆる種類の〈かたち〉には、無限なる方、永遠なる方のイメージが宿っている。

以上の〈かたち〉には、無限なる方のイメージがあることは、全地球はおろか、他の天体にまで行って、その空間を満たそうとする能力・推進力があるからです。一つのタネから、樹木・灌木・草木が生まれ、それなりの空間を占有します。樹木・灌木・草木のなかには、タネを生産するものがあります。それも数個から何千個にのぼり、地に落ちると生長して、自分なりの空間を占めます。その中の一つのタネでさえ、これだけ新しいタネを次から次へと産出するわけですから、何年かすると、地球を全部覆い尽くすことにもなりかねません。このまま生産がつづけば、他の多くの地球をさえ満たし、これが無限につづくことになります。一つのタネから数千個のタネが生まれるとする

と、その数千個が数千個を生み、それが十倍、二十倍、百倍になったとしたら、どうでしょう。

以上の〈かたち〉の中にある永遠なる方のイメージについても、それが言えます。タネは、一年また一年と殖えていき、その繁殖は止むことがありません。世界の創造のとき以来、止むことがありませんでしたから、これからも永遠に止むことはありません。以上の両面から見て、これは、宇宙万物が無限なる方、永遠なる方である神によって造られたことを、はっきり証明するしるしになります。

無限なる方・永遠なる方のイメージは、それだけでなく、また多種多様のなかにも、無限なる方・永遠なる方のイメージがあります。被造宇宙にある実体にしても、状態にしても、事物にしても、一つが他と全く同じものは全然ありません。大気の中、大地の中、そこから生じる〈かたち〉の中に同一なものはないのです。宇宙を満たしていくものの中に、同一のものが生産されることは、永遠にありません。

これは、人の顔がそれぞれみな違っていることから、よく分かります。全地球で、同一の顔の人はおりませんし、そのようなことは永遠にありません。したがって、同じ気質を備えていることもありません。顔がその気質の特徴を示しています。

- 8 被造宇宙にある万物は、その役立ちから見て、人間のイメージと関係がある。そこから、神は人であることが、証明される

319. 古代の人たちは、人間は「小宇宙 *microcosmus*」であると言いました。それは、大宇宙 *macrocosmus* と関係づけて言っています。大宇宙とは、その全体像から見た宇宙です。ところで現在では、古代人がなぜ、人間をこのように呼んだかが知られていません。

宇宙すなわち大宇宙を見て分かることは、人は動物界にあるもの、植物界にあるものによって養われ、それによって肉体が生かされていること、その熱によって、生命活動を続けていかれること、その光によって、見ることができること、その大気によって、聞いたり息をしたりすることです。ところが、宇宙万物が大宇宙と呼ばれているのにたいし、人間が小宇宙と呼ばれるのは、そのためではありません。

古代人たちは、人間を小宇宙すなわち小型の宇宙と呼びましたが、それは、相応の知識 *scientia corespondentiarum* から汲みとったもので、最古代の人たちは、天界の天使たちとの交流によって、その知識のうちに浸っていました。天界の天使たちは、自分たちのまわりに見えるものによって、宇宙万物は、その役立ちの面からみて、人間のイメージをもっているのを知っています。

320. 被造宇宙は、その役立ちの面から見て、人間のイメージをもっているということで、人間は小宇宙・小型の宇宙であると言いました。ただし、これは、霊界における宇宙観が人の考えや知識になったものではありません。

むしろ、霊界にいる天使や、霊界に滞在することが許され、霊界にあるものを見た人によってしか、分からないことです。ところでわたしは、その機会が与えられたため、そこで見たものから、この秘義を

啓示することができます。

3 2 1. 次のことは知るに値します。外面的に見て、霊界は自然界とまったく同じように見えます。自然の世界にあるように大地あり、山あり、丘あり、谷あり、平野あり、草原あり、湖水あり、川あり、泉があります。鉱物界に属するものが全部あります。また楽園あり、庭園あり、林あり、森ありで、その中に、ありとあらゆる樹木と灌木が、実やタネをつけています。さらに、木あり、花あり、草ありで、植物界に属するあらゆるものがあります。それから、あらゆる種類の動物、トリ、サカナなど、動物界に属するものも、すべてあります。そこには天使と霊がいます。

以上のように記したのは、霊界のすべては、自然の世界にあるすべてのものと、まったく同じようであることを知っていただくためです。ただ一つのちがいは、霊界に存在するものは、自然の世界にあるもののように、固定したものではないことです。霊界にあるものは、自然的なものは何もなく、すべてが霊的です。

3 2 2. 霊界にあるものすべてをひっくりかえり、人間のイメージをもっています。それは、次のことから明らかです。すなわち、（3 2 1 節で）前述したものは、いずれも天使のまわりや、天使のいる社会のまわりに、あたかもかれらが造ったものであるかのように見えるし、実在します。そして、かれらのまわりにあって消えません。

これが、かれらの造ったもののように見えるのは、天使が去ったり、その社会が他の所へ移ったら、それがもう現れてこないために、そう

見えます。

そして、今までの天使に代わって他の天使たちが来ると、そのまわりにあるすべてのものの顔が変わります。樹木や果実も変わるため、楽園が変わります。バラやそのタネも変わり、バラ園も変わります。草の種類も変わり、草原が変わります。動物やトリの種類まで変わります。

このようにして、出現したり変わったりするのは、すべてが、天使たちの情愛と、それによる思考にもとづいて実在するからで、ここには相応があります。相応するものは相応されるものと、行動をとみにするわけで、相応するものは、相応されるものの表象的な像 *imago representativa* になります。万事がそのままの〈かたち〉で見られるときは、その像は現れませんが、万事が役立ちの面で見られるとき現れます。

天使たちは、主のみ力でその眼が開くと、役立ちの相応関係からものを見ており、そのものの中に自分をみとめ、眺めているわけです。わたしはそれを目撃する機会が与えられました。

3 2 3. 天使たちにある情愛や思考にもとづいて、天使たちのまわりに実在するものは、大地あり、植物あり、動物ありで、一つの世界を映し出しています。しかもこれは、天使を表象化する像であるという点で、古代人は、人間を「小宇宙」と呼んだわけが分かります。

3 2 4. 上記したことは、『天界の秘義』や小著『天界と地獄』、および、これまで相応について扱った、多くの箇所ではっきりしてい

ると思います。また、そこで触れてあるように、被造宇宙の中で、人間の何かと相応の関係をもっていないものはありません。人間の情愛、またそこからくる思考や、人体の器官・内臓などに相応します。実体としての相応があるだけでなく、役立ちの面での相応があります。

教会や人間について扱っている〈みことば〉には、何度も、オリーブとか、ブドウの木とか、杉のような樹木、庭園とか、林とか、森、それに地を這う動物、空とぶトリ、海のサカナが出てくるのは、そのためです。そこでそのようなものの名をあげるのは、相応があるからで、前述したように相応をとおして、意味が一つになります。

したがって、天使たちは、人が〈みことば〉の中で、以上のような箇所を読むとき、それ自身について考えているのではなく、それに代わって、教会や、教会に属する人間を、その状態の面で感じとっています。

325. 宇宙万物は、人間のイメージに関係があります。そのためアダムは、その英知と理知の面で、「エデンの園」として描かれています。そこには、あらゆる種類の樹木があり、川があり、宝石があり、金があり、アダムが名づけた動物がいました。

以上すべてのものは、アダムを指します。それが「人間 Homo」と言われるようになった原因です。

また、同じようなことが、エゼキエル書(31・3～9)の中で、アッシリヤについて言われています。アッシリヤとは、理知の面から見た教会です。また、ツロ(エゼキエル27・12、13)は、善と真理を認識する面での教会をあらわします。

326. 以上で、今明らかになりました。宇宙万物は、その役立ちの面から見て、一人の人間を映し出していることです。同時に、神は人間であることを証明します。

そして、前に挙げたようなものは、天使から発して、人間天使のまわりに出現してくるのではなく、主から発して、天使をとおして出現してきます。つまり、主の神愛と神知の流入が受け手である天使に及んで、実在するようになっていきます。しかも、天使の眼前には、宇宙の創造のように生まれてくるわけです。

だからこそ、天使たちは、そこで神が人間であることが分かります。また、被造宇宙はその役立ちの点から見て、主ご自身の像であることが分かります。

9 主が創造された万物は、役立ちである。万物は人間にかかわりを持ち、さらに、人間をとおして、〈始源である主〉にかかわる秩序・段階・程度にしたがい役立ちになる

327. これについては前述のとおりです。すなわち役立ちが実在するのは、創造主である神のみ力によります（308節）。全被造物の役立ちは、最終・末端のものから人間へ、人間を経て、始源である神にまでのぼっていきます（65～68節）。

創造の目的は、最終・末端のものの中に実在します。そして最終・末端のものは、万物が創造主である神へ帰り、そこで結びつきが成立するために存在します（167～172節）。創造主をめざしている

かぎり、そこには役立ちが存在します（307節）。

神性 *Divinum* は、ご自分が創造されたものの中に、存在・実在してはなりません（47～51節）。宇宙万物は、役立ちに応じて受け皿になっていますが、これも段階によります（58節）。全宇宙は、役立ちの面から見て、神の像 *imago Dei* です（59節）。その他にも、様々なことがあります。

以上で、次のような真理が見えてきます。すなわち、主が創造された万物は、役立ちであること、しかも、万物は人間に関係をもち、さらに人間を通して、始源である主にかかわる秩序・段階・程度に応じ、役立ちになるということです。ここでは、とりわけ役立ちについて、述べておきます。

328. 役立ちに関係する「人間 *homo*」とは、単にひとりの人間のことだけでなく、集団としての人間のことでもあります。それには、国家・王国・帝国のような大小の社会でもあり同時に、地球全体のような最大限の社会でもあります。いずれにしても、これらはみな人間です。

天界でもそれは同じです。天使のいる全天界は、主のみまえて、ひとりの人間であり、天界の社会は、一つ一つがみなそうです。それで、一人ひとりの天使は、人間であることです。それについては、小著『天界と地獄』（68～103節）を参照してください。そして、人間とは何か、後述することで明らかになります。

329. 宇宙創造の目的から、役立ちとは何かが分かります。宇宙創造の目的は、天使の住む天界が生まれることです。天使が住む天界が目的であれば、人間すなわち人類もまた目的です。天界は人類から成っているからです。以上から、創造されたものは、すべてが中間目的であることが分かってきます。そして、これの中間目的は、人間に関係づけられ、人間をとおして、主に関係づけられるような秩序・段階・程度において、役立ちになります。

330. 創造の目的は、人類から成る天使的天界であり、人類が目的でもあります。それで、創造された他のものは、すべて中間目的です。人間に関係づけられるため、人間にある次の三つのもの、すなわち肉体と、合理性と、霊性が、主にむすびつけられるようになることです。

人は霊性の面で、はじめて主とむすばれるようになります。ところが、合理的でなくては霊的にはなりません。さらに、肉体が健康な状態にないなら、合理的にもなりません。それはちょうど一軒の家のようです。肉体が土台です。合理性は、その上に建てられた家です。さらに霊性は、家の中にある必需品です。家の中に住まうことこそ、主と結ばれることです。

役立ちは、創造の中間目標であって、人間にかかわる秩序、段階、程度によってきまることが理解できたと思います。また、人の肉体を維持し、人の合理性を完成させ、主から霊的なものを受け入れるために、役立ちは存在します。

3 3 1. 肉体を維持するための役立ち。

これは、肉体の養育、衣服、住居、レクリエーション、娯楽、生活レベルの保全にかかわります。肉体の養育のため造られた役立ちとは、食料や飲料として使われる植物界のものすべてです。果物・ブドウ・タネ・野菜・草類です。また、食用に供せられる動物界のもの、ウシ、メウシ、子ウシ、シカ、ヒツジ、子ヤギ、ヤギ、子ヒツジ、およびそれからとる乳、それから、多種多様のトリ類・サカナ類など全部です。

身体の衣料として創造された役立ちには、植物・動物界からとられたものが、いろいろあります。住居のための役立ちも同じです。また、レクリエーションや、娯楽や、生活レベルの保全に役立つものがあります。これは、周知のことですから割愛します。一つ一つ取りあげると、それだけでも何ページにもなるからです。

もちろん、人間の役にたたないものも、たくさんありますが、余計なものだと言っても、役立ちを無意味にするわけではなく、その役立ちを存続させるため必要です。また、役立ちの乱用 *abusus* もありますが、乱用といっても、役立ちをなくするものではありません。真理を曲げることによって、真理がなくなるわけではないのと同じです。ただ、真理を曲げる人の中では、真理は失われます。

3 3 2. 合理性を完成するための役立ち。

前述の内容を教えてくれる学問すべてです。つまり、自然・経済・民事・道徳に関係のある科学・学問のことです。それを、両親や教師から、書物から、他の人との交際から、反省・考察をとおして自分の中から汲みとります。このような合理的なものは、高次の段階で、

役に立てば役に立つほど完成し、それが生活に適用されればされるほど、永続的になります。以上の役立ちについては、その内容が膨大であるのと、公共の善にたいする関係が種々あるため、列挙していくことができません。

333. 主からの霊性を受ける役立ち。

これは、すべて宗教と、それからくる信心業にかんするものです。神をみとめ、神を知るための教え、善と真理を知りみとめさせる教え、さらに、永遠の生命についての教えです。それにはまた、両親や教師が言ったこと、説教や書物から汲みとったもの、とくに、それにしたがって生活しようと努力することから得られます。キリスト教の世界では、〈みことば〉の教義研究や説教、および〈みことば〉をとおして、主ご自身から教わります。

身体を維持するための役立ちについて触れたことと同じく、霊役立ちも、それなりに広がりをもっています。養育、衣服、住まい、レクリエーション、娯楽、生活レベルの維持です。それを靈魂にあてはめれば、愛のもつ善にむかって養育し、英知の真理を着せ、天界に住まいを設け、〈いのち〉の幸福と天界のよろこびにむかってレクリエーションと娯楽をし、しのび寄る悪から身を守り、永遠の生命にむかって状態を保ちます。

肉体にかんするものは、すべて主からいただくものです。人はただ、主みずからの善を管理するよう任された、召使いであり家令です。以上のすべては、それを認めるに応じて、いただくようになります。

334. 以上は、役立ちを経験するため、しかも無償の贈物として、人間に与えられています。それは、天界にいる天使たちの状態を見ても、実に明瞭です。天使たちは、この世の人間とおなじように、肉体があり、合理性があり、霊性があります。天使たちは、無償で養育され、毎日食べものが支給され、衣服も与えられて、それをただで身につけ、与えられた家に、ただで住まわせてもらいます。以上については、心配はまったくありません。合理的・霊的になればなるほど、それだけかれらには、よろこびがあり、生活レベルの維持と保全があります。

人間と違うところは、天使たちの場合、以上が主からのものだと分かることです。（前322節で説明した通り）、天使たちのもっている愛と英知の状態にしたがって、創造されるからです。それにたいして、この世の人間は、それを見るわけにはいきません。暦は毎年繰り返します。愛と英知の状態ではなく、人間的配慮をとおして、実在するようになるからです。

335. たしかに、人間が神にかかわっていくため、役立ちが存在すると言います。ただし、役立ちは神のために、人間が提供するものではなく、人間のために神が提供してくださるものです。なぜなら、あらゆる役立ちは、主のうちにあって、無限に一つのものだからです。人間のうちにあって、主のみ力によらないものは一つもなく、人は自分の力で善をすることはできません。善こそ役立ちと呼ばれているものです。

霊的愛の本質は、自分のためでなく、他の人のために善をすること

です。〈神の愛〉は本質上、はるか無限に大きなものです。これは、両親の子どもにたいする愛に似たものがあります。両親は、自分のためではなく、子どものために、愛をもとにして善を行います。それはとくに、幼児にたいする母親の愛のうちにはっきり現れます。

主は、礼拝と崇敬と栄光をお受けになる方であり、ご自身のために礼拝され崇敬され、栄光をお受けになることを望まれると信じられています。そうではありません。それは人のためです。それによって人は、神性の流入をうけ、それを感知できる状態になれるからです。人はそれによって、流入を受ける妨げになるエゴをとり除きます。エゴとは自己愛です。心をかたくなにし、閉じてしまいます。自分からは、悪以外のなにも出て来ないこと、主からは、善以外のなにも生まれないことが分かれば、それは取り除かれます。心はやわらぎ、謙遜になり、そこから礼拝と信心が流れてきます。

それで、主が人をとおして提供される役立ちとは、主が愛からなされる慈しみの業であることが明らかになります。これは主の愛であるため、主の愛のよろこびを受けることにもなります。したがって、主は、ご自分を礼拝する人だけの傍におられると思わないでください。主のご命令を実行する人のそばにおられます。それは役立ちです。主が住まわれるのは、前者ではなく後者です（それについては、前述の47～49節を参照してください）。

10 悪い役立ちとは、主が創造なされたものではなく、地獄とともに起きたものである

336. 現実に actu 実在する善は、すべて「役立ち」と言われ、現実に実在する悪も、すべて「役立ち」と言われます。ただし前者は、よい役立ちであるのにたいし、後者は悪い役立ちです。すべての善は、主よりのものであり、すべての悪は地獄からのものです。したがって、よい役立ちで、主によって創造されなかったものではなく、悪い役立ちで、地獄から起こってこなかったものはありません。とりわけ、この節で触れる「役立ち」とは、地上に出現するすべてのものです。つまり、あらゆる種類の動物と、あらゆる種類の植物です。それで、人間に役立つ動植物は、主よりのものですが、人間に害をあたえる動植物は、地獄からのものです。

また、〈主よりの役立ち〉は、人の合理性を完成させるため、主よりの霊性を受けるために、すべて役立つものです。それにたいし、〈悪い役立ち〉は、合理性を駄目にし、人が霊的になっていくことを妨げるものすべてです。

人に害を加えるものも、「役立ち」と呼ばれていますが、それは悪い人間にたいし、害を加えるという役立ちがあるからです。それによって、害悪を解消し、結果的には治療として役立つわけです。愛には、善い愛と悪い愛がありますが、それと同じように、役立ちにも、その二つの意味で使われます。そして、愛の面から見ると、すべて、愛から出ているものを「役立ち」と呼んでいます。

337. 善い役立ちは、主のみ力によるものであり、悪い役立ちは、地獄の力によるものです。それを、次の順序で説明していきます。

① この地上で悪い役立ちとは、何のことか。

- ② 地獄にはすべて、悪い役立ちに由来するものがあり、天界には、すべて善い役立ちに由来するものがある。
- ③ 霊界から、自然の世界にむかって、たえず流れていく流入がある。
- ④ 地獄からの流入は、悪い役立ちがあるところに働いているが、その場所は、相応するものがある所である。
- ⑤ それは、霊的な末端部が、上位の部分から切り離されているところである。
- ⑥ 流入が働く二つの形相があるが、それは植物的形相と動物形相である。
- ⑦ この二つの〈かたち〉は、ともに流入によって、みずからの種を繁殖させる能力と、繁殖の手段をうける。

338.① この地上で、悪い役立ちとは何のことか。

この地上で悪い役立ちとは、動物界と植物界の有害なものすべてと、また鉱物界での有害物が入ります。以上三つの領域にある有害なものをすべて挙げるのは、名称を並べるだけで、意味がありません。名称を挙げるだけで、その種のもので生みだす害毒に言及しない場合、本書がめざしている目的を達成しません。

知識として次のものをあげるにとどめておきます。動物界には、次のようなものがあります。毒ヘビ、サソリ、ワニ、大蛇、ワシミミズク、ミミズク、ネズミ、イナゴ、カエル、クモ、それから、ハエ、雄バチ、ガ、シラミ、ダニ、つまり、穀物、葉、果実、タネ、食料・飲料になるものを消滅させ、人畜に有害なものです。植物界では、毒草、有害植物がそれに入りますが、草木類でも、それに該当するものです。

鉱物界では、有毒物質を含んだ土地がそうです。

以上わずかながらも、地上での悪い役立ちとは何かが分かります。悪い役立ちとは、すべて、善い役立ちに対抗するものです。善い役立ちについては、前（336）節で触れました。

339.② 地獄には、すべて悪い役立ちに由来するものがあり、天界には、すべて善い役立ちに由来するものがある。

地上に存在する役立ちで、悪いものは主からではなく、地獄に由来するものです。ただこれに分かるには、ある程度あらかじめ、天界と地獄について、知っておく必要があります。これが分らないと、悪い役立ちも、善い役立ち同様、主からくるとか、創造以来共存していると思ったり、あるいは、自然の働きであるとか、悪の起こりは、自然界の太陽にあると信じたりします。

実は、自然の世界に存在しているもので、霊界に原因か起源をもっていないものは何もありません。善は主からくるもの、悪は悪魔から、すなわち地獄からくるものです。これを知らなくては、人は以上二つの誤りから逃れられません。

霊界とは、天界と地獄のことです。天界には、前（336）節で述べたように、善い役立ちになるようなものばかりが、姿を表します。また、地獄には（338節で）列挙しましたが、悪い役立ちになるようなものばかりです。すなわち、各種のケダモノ、たとえば、ヘビ、トカゲ、大蛇、ワニ、トラ、オオカミ、キツネ、ブタ、ワシミミズク、フクロウ、ミミズク、コウモリ、ハツカネズミ、イエネズミ、カエル、イナゴ、クモ、各種の毒ムシなどです。それから各種各様の毒をもつ

もの、草類や土壌の中にある毒物です。

一口で言えば、あらゆる種類の害毒を及ぼし、人を殺す力があるものです。地獄では、この地上で見えるのと全く同じように、生命あるものに向かいます。ただし、霊界では地上に現れるのとは、ちがった現れ方をします。霊界での姿は、ただかれらの悪い愛から流れてくる欲情に相応したものです。つまり、他の人にたいして、以上のような〈かたち〉をして自分を表現するわけです。地獄では以上のような。したがって地獄は、死骸、汚物、尿、腐敗物のような汚臭がします。地獄にいる悪魔的な霊は、病毒をもつケダモノのように、その臭みを楽しんでます。

以上で次のことが分かってきます。この種のもは、自然世界にあっても、主から生まれたものでも、創造当初から造られたものでもありません。また自然の太陽によって、自然自身が造ったものでもありません。地獄に由来するものです。自然界の太陽を介して、自然が造ったものでないことは明らかです。霊的なものは、自然的なものに流れ入りますが、その逆ではないからです。また、それは主がお造りになったものではありません。地獄も地獄にあるものも、主がお造りになったのではなく、そこにいる悪い人たちに相応したものです。

340.③ 霊界から、自然の世界にむかって、たえず流れていく流入がある。

霊界は、自然の世界と、はっきり区別されています。それは、先行と後続のような関係、原因と結果 *causatum* のような関係です。それが理解されないなら、流入についても理解できないと思います。植

物や動物の起源について、何か記しても、その起源は自然にあるとしか言えないのは、それが分からないためです。たとえ神の創造をみとめても、神は最初に、自然の中にこのような繁殖力を植えつけられたのだとしか言えません。

自然の中に植え込まれた力など、存在しないことを知っててください。自然は、それみずからは死んでいます。自然は、大工が建物をつくるときの材料のようなものにすぎません。それがうまく建てられていくには、たえず動かしていかななくてはなりません。

霊的なもの *spirituale* は、主のいます〈太陽〉が起源です。そして、自然の最終・末端部にまで及んでいます。しかも、その霊的なものは、植物や動物の〈かたち〉を生みだし、この植物・動物界に、みごとな働きを展開していきます。その〈かたち〉が確固として永続するようになるため、大地から材料 *materiae* をとって、形相 *formae* に埋めこんでいきます。

さて、霊界が存在すること、また霊的なものは、主がまします〈太陽〉から、つまりは主のみ力からくることが分かりました。また霊的なものは、生命あるものが、生命のないものを動かしているように、自然の起動力になっていることも分かりました。さらに、自然の世界にあるのと同じようなものが、霊界にもあることも分かりました。したがって、植物にしても、動物にしても、主のみ力によって、霊界を媒介にして、初めて存在するようになることが、うなずけます。霊界をとおして、たえず存続するものになります。つまり、霊界から自然の世界にむかって、たえまなく流入があります。

以上について、次節で詳述していきます。地上には、地獄からの

流入によって、害になるものが生まれますが、これは人間に悪い流入が入ってくる場合と同じく、許しの法則 *lex permissionis* によります。その法則については、『神の摂理についての天使的英知』の中で述べられています。

3 4 1. ④ 地獄からの流入は、悪い役立ちがあるところに働いているが、それは相応するものがある場所である。

悪い役立ちとは、毒草や、有害動物を指しますが、それに相応するものは、死骸、腐敗物、汚物、老廃物、悪臭発散物、尿です。そのようなものがある場所には、前に挙げた草類や小動物が寄生します。そして不毛地帯には、ヘビ、トカゲ、ワニ、サソリ、ネズミのようなものがたくさんいます。沼地、水溜り、汚水、腐敗した土壤には、こんなものが一杯いるのを、だれもが知っています。それから、大気中の霧のように、有害な浮遊動物が空中にみなぎり、害虫は列をなして土地を這いまわり、草木の根まで食い尽くします。

わたしは、自分の庭園で一度目撃しましたが、裏庭で、塵がいっせいに、ごく小さい浮遊動物に変わりました。ステッキでつつくと、霧のように舞いあがりました。

死骸や腐敗したものは、このような有害無益な小動物と共鳴しており、同類であるという事実は、経験しただけでもはっきりします。しかも、理屈から言うと、たしかにその通りで、地獄には、おなじような腐敗物、悪臭物があって、そこには以上のような小動物が姿をあらわします。

このように、以上の地獄は、その名で呼ばれています。ある地獄は

「死かばね地獄」であり、ある地獄は「汚物地獄」であり、あるものは「尿地獄」などです。ただし、これらの地獄には、ふたがしてあって、悪臭が外に発散しないようにしてあります。ときどき、新参の悪魔が入るとき、ふたをあけますが、そのときは、吐気をもよおし、頭が痛くなり、それによって一度毒されたら失神を起こすことがあります。そこにある塵でさえもそうです。だから、「呪いの塵」と言われています。そのように、以上のような腐敗物があるところには、害が起こります。両者は相応しているわけです。

342. このような小動物は、空気、雨、地下水などの流れによって運ばれた卵がかえたものか、そこにあった湿気や腐敗物から生じたものかは、まだ解決されていません。前にあげたような有害な小動物やムシが、そこに運ばれた卵からかえったとか、創造のとき以来、どこにでも地中に隠されているものがかえったなどは、経験に反しません。なぜなら、ムシが発生する場所は、小粒のタネ、実の核、木材、石、葉です。草類の表面やその内側には、それに適合したシラミや毛ムシがいます。夏になると、家の中や、草原や森の中には、卵が発生する要素が何もないのに、ハエの中から、同時に大量に出現します。また、草原や若草を食いつくすものがありますし、ある熱帯地域では、空気中に充満し、汚染するものもあります。その他、汚水の中、酸化した酒の中、汚染された空気中に浮遊しているものもあり、それは肉眼では見えません。

草や、土壌や、沼地から発散する臭気、悪臭、放出気体などが、以上のようなものの発生源になると主張する人がいますが、これは実証

的にみて、うなずけます。いったん発生したら、その後、卵や受精などによって繁殖していきます。とは言え、突然に発生しないというわけではありません。どんな動物にも内臓があれば、それとっしょに生殖器官や繁殖の機能もあります。それについては（347節で）後述します。同じようなことが地獄にもありますが、これは従来知られていなかった一つの体験で、以上の事実と一致します。

343. 以上述べたような地獄と、地上にある同様のものとのあいだには交流があるだけでなく、しっかり結びついています。そう結論づけられる理由は、地獄が人間からへだたったものではなく、人々の周りにあり、むしろ悪い人たちの中にあるということからです。つまり地獄は、この世に隣接して *contigua* います。

人は、その情愛とか欲求および思考から見ると、善い役立ちとか悪い役立ちの起動力になる情愛・欲求・思考がもつて、天界の天使たちのまん中にいるか、地獄の悪霊たちのまん中にいます。地上で起こっていることは、天界か地獄かで起こっています。したがって条件さえそろえば、流入がそのまま以上のようなものを発生させます。それが天界であっても、地獄であっても、霊界に現れるものは、みな情愛とか欲求に相応します。霊界では、情愛や欲求にもとづいて実在するからです。

そういうわけで、情愛や欲求は、本来霊的なもので、地上で同質のものや相応するものに出会うと、霊的なものは、魂 *anima* をとり、物質的なものは肉体 *corpus* をとります。霊的なものにはすべて、肉体を身につけようとする推進力 *conatus* が内在しているわけで

す。地獄は人間の周りを取り巻き、地上と接していますが、それは、
霊界は空間のうちにはなく、むしろ相応する情愛のあるところに存在
するからです。

344. 英国の科学協会の会長だった二人の人、スローン卿とフォ
ークス卿が、霊界で話しあっているのをわたしは耳にしました。それ
は、地上におけるタネと卵の出現、およびその繁殖についてでした。
スローン卿の方は、それが自然のおかげだとし、創造の当初から自然
の中に備わっている能力があり、太陽熱を介して生産していく活力が
あると言いました。フォークス卿は、その活力は、創造主である神が、
自然の中で働き、持続していくものと言いました。

議論も終わりかけたとき、スローン卿は美しいトリを見ました。そ
してそのトリが地上にある同種のトリと、わずかでも違いがあるかど
うか調べてみるよう言われました、卿は、そのトリを手にとって調べ、
何も違いがないと言いました。しかも分かったことは、そのトリは、
ある天使の情愛が、その天使の外面に表象されたもの以外の何もので
もないということです。その天使の情愛がなくなると、トリも姿を消
しました。

スローン卿は、植物や動物の生産には、自然自身はなんら関与して
いないこと、ただ霊界からの流入が、自然の中に入っていき過ぎな
い事実を、以上の経験ではっきり悟りました。かれは言いました。

「あのトリは、その細かいところまで、大地からの対応物質で満た
され、固定していました。地上のトリと同じように、しっかりともち
こたえられるトリでしたよ。地獄からくるものについても、同じこと

が言えます」と。

また、それにつけ加えて、

「わたしが今、霊界について知っているように、知っていたとしたら、自然のおかげだとは言わなかったでしょうに。自然の中には、たえず流入があって、それを自然は固定化しているにすぎません。自然は、神のみ力による霊的なことにたいし、その点で役立っていることです」と言いました。

3 4 5. ⑤ それは、霊的な末端部が、上位の部分から切り離されているところである。

第三部で触れたように、〈霊的太陽〉の力で、自然の最終・末端部まで、霊的なものが流れ入っています。それは、天的段階、霊的段階、自然的段階という三種の段階をとおしてなされます。人間には創造当初から、つまりは生来、三つの段階が刻みこまれていて、その人の生活にしたがって開いてきます。

最高・内奥の天的段階が開くと、その人は天界的になります。中間にある霊的段階が開くと、その人は霊的になります。最下にあつて、最も外側の自然的段階しか開かない人は、自然的人間です。人がただ自然的人間にとどまって、肉体とこの世のことしか愛していない場合、その愛に比例して、天界的なものや、霊的なものを愛さなくなります。神についても、目を向けることなく、それだけまた悪くなっていきます。

以上で明らかなるように、「霊的・自然的なもの *spirituale naturale*」と言われる最終末端の霊性 *ultimum spirituale* は、自

分にある上位のものから分離できます。それと同時に、地獄を構成する人たちの場合、それが分離された状態です。動物や土地内部のものの場合、末端の靈性が上位の靈性から切り離されていないし、地獄に目を置くこともありません。ただ人間だけです。

以上から次のことが分かります。つまり、地獄にいる者たちの性格として、末端の靈性が上位の靈性と切り離されています。前述したように、この地上で、かれらは悪い役立ちをします。この地上に害毒をもたらす原因は、人間にあるとともに、地獄からきます。それは、〈みことば〉にもあるように、カナンの地の状態からも、証明することができます。

すなわち、イスラエルの子らが掟にしたがって生活していたときは、大地からの収穫があり、家畜も動物の群れも増えました。ところが、掟に服従なくなると、呪われたように土地は痩せ、収穫に代わって、イバラやトゲが生え、家畜も群れも子を生まず、野獣が荒らすようになりました。エジプトで、イナゴ、カエル、シラミが増えたことから同じことが言えます。

3 4 6. ⑥ 流入が働く二つの形相があるが、それは、植物の〈かたち〉と、動物の〈かたち〉である。

自然界には、動物界および植物界と呼ばれる二つの王国があります。それで、大地から二つの普遍的な〈かたち〉が生まれることが分かります。しかもそれぞれの王国では、みな共通するところがたくさんあります。動物界では、その主体に感覚器官と運動器官があります。それに、肢節・内臓があって、頭脳・心臓・肺臓で動いています。

植物界では、その主体になるものは、地下に根をおろします。そして、茎・枝・葉・花・果実・タネを生みます。

動物界にしても、植物界にしても、〈かたち〉を生むには、主がまします天界の〈太陽〉からくる流入と靈的働きが、その〈かたち〉生産の起源になります。自然の太陽からくる自然の流入や働きについては、前述したように、固定化させることしかありません。大小を含め、すべての動物は、「自然的」と言われる最終・末端の段階における靈性がその起源です。人間だけは、天的・靈的・自然的の三段階の全部から生まれます。

高サ（隔離）の段階では、それぞれが、みずからの完全性 *suum perfectum* から、不完全性 *imperfectum* にむかって、減少していきます。それはちょうど、光から陰に移るように連続しています。動物はそうです。したがって、そこから完全動物、やや不完全動物、不完全動物が生まれます。

完全動物には、ゾウ、ラクダ、ウマ、ラバ、雄ウシ、ヒツジ、ヤギ、その他家畜になる動物がいます。やや不完全な動物にはトリがいます。不完全動物としては、サカナ、貝類があります。これは、高サの段階では最低で、前掲の動物が光のうちにあるとすると、陰のうちにあります。

とは言え、靈的には最終・末端の段階、つまり自然的段階で生きており、大地と、そこにある食べ物と、繁殖のための仲間には目が届きません。以上の動物の魂 *anima* は、みな自然的情愛であり食欲です。

植物界にある主体にも、完全なもの、やや不完全なもの、不完全な

ものがあります。完全なものには果樹があります。やや不完全なものには、ツルのある樹木、灌木があります。不完全なものには草があります。ただし、植物は役立ちがある面で、靈的起源をもっていますが、動物は、前述したように、情愛と食欲がある点で、靈的起源をもっています。

347.⑦ 以上二つの〈かたち〉は、実在しているかぎり、種繁殖の手段を、流入でうける。

上にあげたようなもの、つまり植物界に属するものでも、動物界に属するものでも、地から生まれたものには、すべて創造のイメージがあります。これは、人間についてのある種の像であるとともに、無限・永遠なる方についての、ある種の像であることは、前（313～318）節で述べました。無限なる方、永遠なる方のイメージは、動・植物が、限りなく、しかも永遠にいたるまで、殖えていくという点からも見えてきます。そこで、繁殖のための手段は、ぜんぶ与えられているという事実が分かります。動物界にある主体は、精子をとおして、卵の中、胎の内、受精などにより繁殖します。植物界の主体は、地上にタネがまかれて殖えます。

以上で次のことがはっきりします。すなわち、より不完全で有害な動物や植物は、地獄からの直接流入によって生まれてきても、あとで間接的な流入で、タネや、卵や、ツルをとおして繁殖していきます。つまり一方の可能性は、他方の可能性を無効にしません。

348. 役立ちはみな、それが善い役立ちでも悪い役立ちでも、

主のまします〈太陽〉からくるもので、靈的起源をもっています。次に記す経験で分かりやすくなると思います。

わたしは、次のようなことを聞きました。いろいろな善と真理が主によって天界をとおって、地獄のほうへ送られました。それが段階を経て、深みへと入りましたが、やがて、かつての善と真理とは逆の、悪と偽りに変わっていききました。

こんなふうになった理由は、受けとめる側の者が、流入のすべてを自分の〈かたち〉にあったものに変えてしまうからです。それはちょうど、太陽の明るい光が、気味のわるい色に、さらにまっ黒になっていくようです。受けとめた側の内部の実体が光をさえぎり、消してしまうような〈かたち〉をしています。それは、ドブ、汚物、死骸などが、太陽の熱を悪臭に変えてしまうのと同じです。

ここで、悪い役立ちも〈靈的太陽〉が起源であることが分かります。しかし地獄では、善い役立ちが、悪い役立ちへと変わってしまいます。主は、善い役立ちしかお造りにならなかったし、これからもそうですが、地獄は、悪い役立ちを生むということが分かります。

- 11 自然自身は何も生み出したわけではないし、これからも生み出すことはない。神がご自分の力で、しかも靈界をとおして万物を創造された。被造宇宙で見えてくる存在は、以上を証明する

349. この世では、みな現象を見てしゃべっています。たとえば、太陽はその熱と光で、草原・田園・庭園・森林に見えてくるものを、生み殖やしていくのだとか、卵がかえってムシになるのも、地のケダモノや空のトリが繁殖していくのも、人間が生きていけるのも、太陽がその熱をそそぐからだと言います。ただ現象を見ただけでしゃべっている人は、口ではそう言っても、それを自然のセイにはしませんし、それについては考えようともしません。

それはちょうど、太陽が昇ったり沈んだりするとか、日や月を刻んでいるとか、今どこの高サにあるなどと、現象をもとにして話しあい、そう口に出して言うことは出来ます。しかしそれを、太陽の主体的行為とは考えないし、太陽の位置と、地球の回転などのお陰であるとも考えません。

ところが、太陽はその熱と光で、地上に見えてくるものを生み出していると、心の中で確信してしまうと、万物の起源は自然だと言うようになり、それが宇宙の創造にまでのしあがり、自然主義者となり、やがては無神論者になります。このような人が、神が自然を創造し、万物生産の能力を植えこまれたのだと、あとになって口にすることはありますが、見栄^{みえ}で言っているにすぎません。心の中では、創造主なる神と言っても自然のことです。自然の内奥にあるもの、とくに教会が教えている神聖なるものについては、何の価値もみとめていない人がいます。

350. 現象として見えるものを自然のおかげだとする人の中にも、黙認せざるを得ない場合があります。それには、二つの場合があります。

す。

第一の場合。主がまします〈天界の太陽〉について、そこからの流入について、また、霊界について、霊界の状態について、それから、人の中に霊界が現存することなどについて、何も知らない人がいます。それで、霊的なものは、自然的なものが純化されたものくらいにしか考えません。

その結果、天使は、エーテルの中や星々に住んでいると思ったり、悪魔は、人間の邪悪な性格を指していると思います。実際に存在するとしても、大気中にいたり、淵にいたりすると思います。

人間の霊魂については、死後、大地の中にいたり、審判の日まで、どこか分からないところ、または「プー Pu」にいるのだと考えます。それは、霊界およびその〈太陽〉について、何も知らないところから起こった幻想ですが、それに類することが、多々あります。

第二の場合。これも無知からくるものとして、黙認せざるを得ません。すなわち、よいもの、悪いもの、地上に姿を現すすべてのものを、神はどのように生み出されたかが、よく理解できていません。それを肯定してしまうと、神は悪いものも造られたとか、神は物質的な姿形をもっていると考えるようになる恐れがあり、神と自然とを混同するようなことになります。

以上二つの場合は、創造当初の植えつけられた力で、自然が、見えるものを造ったと信じている点、黙認せざるを得ません。しかし、自然を肯定するあまり、自分自身が無神論者になってしまうと、黙認はできません。なぜなら、神が造られたことを肯定する余地が、充分あるからです。

無知は、仕方がないのかも知れません。しかしながら、偽りが信念になっていくのに抵抗する力はありません。しかも、偽りは悪に密着しており、結局は地獄のものです。したがって、自然を肯定するあまり、自然から神を切り離してしまうと、罪を罪と思わなくなります。罪とは、切り離したり拒否したりして、神に抵抗することです。霊の状態、罪を罪と思わなくなると、死後、霊になるやいなや、地獄にとらわれ、羽目をはずして欲望に流され、大へんな罪に落ち込んでいきます。

351. 神が自然の中にある一つ一つのものの中で働いておられることを信じる人は、自然の中に見えてくるたくさんの現象から、自然肯定論者同様、いやそれ以上に神を肯定します。神を肯定する人たちは、植物や動物にある繁殖を見て、そのすばらしさに目を見はります。

植物の繁殖を見ましょう。小さなタネが地に落ちると、根を出し、根から茎が出、つぎつぎと芽を出して、葉と花と実をつけ、やがて新しいタネができます。それは成長の手順と再生産過程をあたかもタネが知っているようです。太陽は純粹の火ですが、その太陽がこれを知っているはずはありませんし、その熱と光に、そのような効果を調合できるはずはありません。植物の中に目を見はるような〈かたち〉をつくりあげたり、それを役立たせるよう、もくろむわけはありません。理性で考えれば、だれでもそれが分かります。

人は理性が高められていれば、それを見て考えた途端、かぎりない英知の持ち主、すなわち神が働いておられると、思わざるをえません。神をみとめている人は、それを見て、そう考えるわけですが、神をみ

とめない人は、見もしないし、考えもしません。なぜなら欲しくないからです。こうして、自分の合理的な判断力を感覚の力にゆだねます。感覚は五感からくる弱い光 lumen をもとにして概念をつくります。したがって、その迷妄で心をかたくなにし、「太陽を見てごらん。自分のもっている熱と光をつかって万物を動かしているんでしょう。見えないものについては、何とも言えません。何ものでもないのです」と、言います。

動物の繁殖にもまた、目を見はるようなものがあり、神を肯定する人は、それに注目します。ここでは、卵の中だけでも、のぞいて見てみましょう。トリのヒナは、その受精卵のなか、つまり原初の形の中に隠れています。それには、卵がかえるときまでに必要なすべてのもの、さらに、かえたあとの発展の過程が全部ふくまれています。つまり、おやドリになって、子を生める〈かたち〉をもつ一人前のトリになるまでの過程です。

そのような過程を含む〈かたち〉に心を高くして考え、注目するとき、気が遠くなりそうです。大きな部分にも、極小の部分にも、つまり見える部分にも見えない部分にも、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚のような感覚器官があり、筋肉をつかった運動器官があって、飛んだり歩いたりでき、心臓や肺臓のまわりには、内臓があって、脳の力で活動しています。下等のムシケラにも、以上のような能力があることは、数ある解剖学の本を見れば分かります。その中には、スワンメルダム Jan Swammerdam の『自然の書 Biblia Naturae』があります。

万事を自然のおかげだと言っている人も、以上のようなことを見ますが、現象としてしか考えず、自然が生んだことだと言います。それ

は、神について考えまいと、心を神から引き離しているからです。神については、考えまいとしている人は、自然の中のすばらしい現象を見ても、合理的に考えることができないし、まして靈的に考えることなどできません。むしろ、感覺的・物質的に考えます。そうなると、自然の中にあつて、自然をもとにして考え、自然を越えることがあります。それはちょうど、地獄にいる人と同じです。動物とちがうところは、合理的な能力をもっている点です。つまり、理解する能力です。だからこそ自分が欲するなら、目をつむることもできるわけです。

352. 神について考えるのを避けている人は、自然の中にあるすばらしさを目撃しても、それによって、かえって感覺的になり、頭が働きません。眼の視力は、ムシケラがものを漠然と一つのものとして見ているように、鈍化してしまっています。

ところが、一つ一つの部分は、何かを感じ、行動をとるため組織化されています。繊維があり、器官があり、小型の心臓、肺の導管、内臓と脳を備えています。しかも、これらのものは、みな自然の中で、もっとも純粋なものから織りなされています。そして、以上の組織体は、ある種の〈いのち〉に相応したものです。その〈いのち〉がもとになって、もっとも微細な部分が明確な働きを見せています。

一つ一つの部分の中には、数え切れないほどのものがあつて、こんなにも複雑なものが、ぼんやりした塊にしか見えないとしたら、その視力は鈍化しています。ところが、感覺的な人間は、自分が見ているところから考え判断します。かれらの心が、どんなにかたくなになつてしまったか、分かります。靈的なことがらでは、暗闇の中にいる

わけです。

353. 人は、自然の中にある見えるものをもとにして、欲しさえすれば、神を肯定できます。また、〈いのち〉の源として、神を考える場合もそうです。

空のトリを見ても、それぞれ種類にしたがって、自分の食べ物を見分けられるし、それがどこにあるかも分かります。鳴き声や格好から、同類を識別します。多くの群れの中でも、敵と味方を判別します。交尾を行い、自分の群れの集まる場所を知り、たくみに巣をつくり、そこに卵を生みおとし、それを温め、ヒナがかえる時期を知っています。そのとおりにヒナがかえると、やさしくはぐくみ、自分の羽根でかくまい、餌をとってきて養育しています。しかもヒナが自分でできるようになるまで続けます。しかも、それと同じことを繰り返し、自分の種族が永続できるように、家族を維持・発展させています。

自然のなかには、霊界をとおってくる神からの流入があります。それについて、考えてみようと思う人は、だれでも以上の中に、神の流入を見ることができます。心の中で、望みさえすれば、次のように言うこともできます。「このような知恵は、太陽が、その光の流れだけで、自然万物の中に注ぎ込むことはできない。自然の起源と本性は、太陽がもとになるけれど、それはただ純粹の火で、そこからくる光線には、いのちはない」と。

結局は以上のものは、自然の究極部では、神の英知の流入によるものです。これが結論です。

354. だれでも、自然の中にあって見えるものから、神を肯定できます。幼虫を見てください。ある種の欲求の充足をもとめて、地中にある状態から、天界的とも思える状態に変わっていきたいとばかり、あこがれます。それで、地面を這っていき、再生を待って、胎内にとじこもるかのように、こもります。そこでサナギになり、青ムシになり、若虫になり、最後にはチョウになります。このようにして、個体変化を経過したあと、その種にしたがって、美しい羽根を身につけ、みずからの天国に翼をひろげるかのように、空中を舞い、よろこばしげにたわむれ、交尾を行い、卵を落とし、子孫をつくって自己保存をめざします。そのようにして、花からとったおいしい蜜を自分の栄養にします。

自然の中にある見えるものから、神を肯定する人は、だれもが分かります。そこには幼虫のように、人間には地上の状態があり、チョウのように天界の状態があるのが、イメージとして湧いてきます。ところが、自然のおかげと心に固めてしまっている人には、それを見ても、人間の天界の状態など心にもないと思って拒否し、それが自然が植えた本能にすぎないと言います。

355. 自然の中で見えるものから、神を肯定できる人は、だれでもハチの生態について知られている事柄に注目します。ハチは草や花から蟻ろうを集め蜜を吸い、小舎を造るようにして、巣をつくることを知っています。その巣は、町のかたちをしていて、ホールがあって、そこから出たり入ったりします。遠方から、花のあるところ、草のあるところを嗅ぎつけ、そこから家造りのために蟻を、食料として

は蜜を集めます。蟻や蜜をいっぱい吸ったあと、方向をまちがえずに自分の巣にもどります。しかも、冬がやってくるのを予測して、知っているかのように、冬季に備えての食料と住まいを確保しておきます。

さらに、女王としての女主人を頭にすえ、そのハチから、子孫が繁殖できるようにします。女王バチのために、宮殿のようなものを造り、その周りには衛兵をおきます。出産のときがくると、女王バチは衛兵を連れて、小房から小房へと、卵を生みつけますが、その卵が大気にさらされないよう、ハチの一群があとから来て封印します。そこで、新しい子孫が誕生します。

子孫も時を経て、同じことができるようになると、家から追い出されます。追いだされた一群は、まずかたまりますが、団結がくずれないように群れをなして、家さがしに飛びまわります。秋も近づいてくると、役立たずの雄バチは、ひきだされ、羽根をもがれますが、それは巣に帰ってきて、自分が集めもしない食料を食いつくさないためです。その他にも、種々様々です。

以上から、ハチには、人間に供する役立ち以外に、霊界をとおって流れてくる管理組織の〈かたち〉があることが分かります。これは地上の人間にも、また天界の天使たちにもある〈かたち〉です。一人前の理性が備わっていれば、だれにでも理解できることです。以上のような習性は、はたして、自然の世界からくるものでしょうか。自然界のもとになる太陽が、天界社会の政治形体と類似した形体をもつでしょうか。

以上の事柄や、ケモノにある類似の現象から、自然崇拝者は自然の

おかげだと主張しますが、神を肯定し神を拝む人たちは、同じことを見て神のおかげだとします。なぜなら霊的人間は、自然の中に霊的なものを見、自然的人間は、その中に自然的なものを見るためです。つまり、各人は自分の性格をそこに見ているわけです。

わたしについて言えば、以上のことは、自然の中に入ってくる霊の流入を証拠づけることになります。すなわち、霊界から自然界への流入であり、主の神的英知による流入です。

少し考えてみて下さい。何かの政治形体でも、市民の法律でも、道徳的なことでも、霊的真理でも結構です。神がその英知によって、霊界をとおして、流入を与えておられると考えないで、分析的に考えつづけることができるでしょうか。

わたしには、そんなことはできませんし、今もできません。わたしは、今までの十九年間、その流入をずっと、しかも、はっきりと感じとってきました。それで、わたしは、自分が体験者として話しているのです。

356. 役立ちを目標にし、しかもその役立ちを秩序だて、〈かたち〉づくっていくのは、自然がやることでしょうか。知恵のある方であれば、やれないことです。これほどまでに、宇宙を秩序だて、形成していくのは、無限の英知をもつ神だけが、おできになることです。人間にとって、食糧になったり衣類になったりするようなものを、すべて見越して備えるのは、神以外にはできません。地上に生える果実や動物から食糧がえられ、また、それから衣料もつくれます。

おどろくべきことは、あのカイコと呼ばれている下等なムシが、

女王や国王から下女・下男にいたる男や女に、絹製の衣服を着せ、豪華なよそおいをさせています。ハチも下等なムシですが、蠟をつくりますから、それが明かりとなり、寺院や宮殿がひかり輝きます。以上やその他多くのことは、次のことをはっきり証明します。すなわち、主は、ご自分のみ力を用い、しかも霊界をとおして、自然の中に実在する万物を動かしておられるのです。

357. 以上に、次の事柄をつけ加えておきます。この世の見えるものから出発して、それを自然のおかげと思ひこみ、とうとう無神論者になってしまった人を、わたしは霊界で見ました。霊的光のもとでは、その人たちの理性は下にむかって開き、上の方は閉じているように見えます。その理由は、考え方が下方の地面を見てはいますが、上の天界を見ていません。理性の最底部をなしている感覚面の上は、ベールがかかっているように見えます。それが、地獄の火によって燃えゆらいで見える人、ススのようにまっ黒になった人、死骸のように青黒く見える人がいます。

したがって、自然のおかげだと思ひこまないよう注意してください。神のおかげです。それを示す材料には、こと欠きません。



第五部

- 1 人間のうちに主が創造され、かたちづくられた器と住まいが二つある。それは、いわゆる意志と理性のことである。意志は、主の神的愛のため、理性は、主の神的英知のための器・住まいである。

358. 創造主である神の〈神知・神愛〉については、すでに学びました。その神は、永遠のむかしからまします主です。また、宇宙の創造についても学びました。それで今、人間の創造について、話すことにします。

人間は、神の^{にすがた}似姿 *similitudo* として、しかも神の像 *imago Dei* として造られたとあります（創世 1・26）。「神の像」とは、神の英知 *Divina sapientia* を指し、「神の似姿」とは、神の愛 *Divinus amor* を指します。英知とは、愛が形をとった像以外のなものでもありません。それは、愛は英知のうちにあって、見える

もの、それと分かるものになるからです。見えるもの、それと分かるものになるからこそ、英知は、愛のイメージ化した像になります。

愛は〈いのち〉の存在 *Esse vitae* であり、英知は、その存在から出てくる〈いのちの存在 *Existere vitae*〉です。神の似姿や像は、天使たちにとっては、ことの外はっきり現れます。なぜなら、かれらの顔には、その奥底から、愛が輝いているからです。その美しさのうちに英知があります。美しさとは、かれらがもつ愛の〈かたち〉です。わたしは、それを見、そうだと分かりました。

359. 人は、神の似姿にしたがった神の像です。すなわち、神が人間のうちにましまし、その内奥部から、人の〈いのち〉になっていることです。前述したように（4～6節）、神は、〈いのちそのもの *Vita*〉であり、人間や天使は、神から〈いのち〉をいただく器です。それで、神が人間のうちにましまし、その内奥部から人の〈いのち〉になっていることが分かります。

また、〈みことば〉によっても周知のとおり、神は人のうちにましまし、人のうちに住まいを設けられます。〈みことば〉をもとにして、説教者がよく口にするところは、神をお受けするよう心の準備をするように、また神がその人の中に入り、心に宿り、神の住まいになれるように、などと言われています。また、信心深い人は、そのようなことを祈りの中で口にしたり、もっとはっきりと、聖霊について言及する人もいます。つまり、神聖な熱意に燃えているとき、自分たちのうちに聖霊がましますことを信じ、聖霊をもとにして、考え、話し、説教します。

聖霊とは主を指し、それ自身として、ペルソナにまします神以外

のなにもものでもありません。これは、『主についての新エルサレムの教義』（51～53節）の中で述べられています。主は言われます。

「その日には、あなた方がわたしの中におり、わたしがあなた方の中にいるのを認めるようになる」と（ヨハネ 14・[20]、21、同
じく 15・4、5、17・23）。

360. さて、主は〈神の愛〉であり、〈神の英知〉です。そしてこの二つは、人の中に住まいを設け、人に生命を与えられるため、主ご自身にとっての本質的な事柄です。つまり、人のなかにご自身が入っていくための器、または住まいです。それを創造し形成していくためには不可欠です。一方は愛のための器、他方は英知のための器です。

人のうちに存在するこの器・住まいが、いわゆる「意志」と「理性」です。愛をうける器・住まいが意志であり、英知をうける器・住まいが理性です。この二つは〈主のもの〉として、人のうちに備わっています。そしてこの二つから、あらゆる〈いのち〉が人間に与えられます。これについては後述します。

361. 意志と理性の二つは、どんな人にも備わっています。しかもこの二つは、愛と英知が相違しているように、おたがいに違います。この世では、これが分かっている場合もあるし、分かっていない場合もあります。人間共通の感覚では分かっている、考えの上で理解されていません。それを記述すると、余計に分からなくなります。

人間の意志と理性が、はっきり区分されていることは、通念として知っています。それを耳にすればぴんとくるし、他の人にもそれを口にすることがあります。「この人の意図はいいけれど、よく分かっていない」、「この人は、よく分かっていながら、意図がよくない」、

また「わたしは、よく分かって、それにより意志をもっている人を愛するけれど、よく分かっていながら意図がわるい人を、わたしは愛するわけにはいかない」と。

人が、意志や理性について思いめぐらし、それが別々のものとして区分せず、混同するのは、その人の考えが肉体の視覚につながっているからです。また、何かを記述するとき、意志と理性の二つが違っているのに気づいていない人がいます。それは、本人の考えが人間のエゴである感覚性につながっているからです。また、考えていることも、話していることも正しいのに、うまく記述できない人がいますが、これは女性には共通の現象です。他の多くのことがらでも、同じようなことがあります。

人はみな、善良な生活を送る人は救われ、悪らつな生活をする人は罪とされることを、通念としては知っています。また、善良な生活をする人は、天使たちの仲間入りをし、そこで人間と同じく、見、聞き、話します。また、正しいことを正しい動機から行い、公正を動機にして、公正を行う人には、良心があります。

それにたいし、この通念をすてて、以上の考えを押し込んでしまうと、良心とは何か分からず、靈魂が人間とおなじく、見たり、聞いたり、話したりすることを知らず、善良な生活とは、貧乏人にほどこしをするくらいのことしか分からなくなります。自分の頭で考えて、それを書くと、見かけとか、虚像、音のひびき、実体のない〈ことば〉でしか、表わすことができません。

あれこれ思いをこらし、著書をあらわした学者がたくさんいるのはそのためです。以上のような通念 *communis perceptio* を低めたり、

あいまいにしたり、やがては駄目にしてしまった人がいます。それで、他の人より自分には英知があると思っている者以上に、善や真理などが、はっきり分かる無学単純な人がいるわけです。以上の通念は天界からの流入です。それが思いの中に入り、視力にも及びます。それにたいし、通念から切り離された場合、その思いは視覚とエゴから、想像の中に入っていきます。

以上が本当であることは、経験してみても分かります。通念がしっかりしている人に、何か本当のことを言えば、そのとおりだと言います。神によって、神のうちに、わたしたちは存在し、生き、動いていると言えば、そのとおりだと言います。神は、人にある愛と英知の中に住まわれると言えば、そのとおりだと言います。さらに、意志は愛の器であり、理性は英知の器であると言ひ、わずかに説明しただけで、すぐ分かってくれます。神は愛そのもの、英知そのものであると言えば、すぐ分かります。良心とは何か尋ねると、すぐ答えます。

自分の考えを以上の通念からでなく、この世から、視覚をとおして入った原則とか、固定観念から働かせている学者がいたら、そのような人と同じ質問をしてみてください。すると、その人には分かっていません。さて、あとになって、どちらが賢いか考えてみてください。

- 2 愛と英知の器である意志と理性は、全体的にも部分的にも、
脳の中に存在する。同時に、全体的・部分的に^{からだ}身体の中に
存在する。

362. 次の順序で説明していきます。

- ① 人の〈いのち〉そのものになっているのは、愛と英知であり、同時に意志と理性である。
- ② 人の〈いのち〉は、その始源では *in principiis suis*、脳の中に存在するが、その派生的力は *in principiatis*、身体の中に存在する。
- ③ 〈いのち〉は、始源のうちに存在するのとおなじような性格で、全体にも部分にも存在する。
- ④ 〈いのち〉は、その始源をとおして存在するが、それはまた、全体のうちにある各部分からなり、各部分のうちにある全体から成っている。
- ⑤ 愛の性格に応じて英知があり、それにに応じて〈人となり〉が決まる。

363. ① 人の〈いのち〉そのものになっているのは、愛と英知であり、同時に意志と理性である。

〈いのち〉とは何か、人はほとんど何も知りません。〈いのち〉とは何かを考えても、何かふわふわした感じで、実体がつかめません。そう見えてくるのは、神こそ〈いのち〉であること、神の〈いのち〉とは、〈神愛・神知〉であるのを知らないからです。

したがって、人には〈いのち〉になるものはないわけで、人がそれを受けとめる程度に応じて〈いのち〉が与えられます。周知のとおり、熱と光は太陽から生じ、宇宙万物はそれを受ける器です。また、熱と光を受ければ、それだけ熱を帯び、ひかり輝きます。第二部で記したとおり、主がまします〈太陽〉から出る熱とは、愛であり、〈太陽〉

から出る光は英知です。したがって、〈太陽〉にまします主から発出する以上の二つがもとになって、〈いのち〉が存在します。〈いのち〉とは、主のみ力による愛と英知です。人も愛を失ってくると不活発になり、英知を失ってくると、^{もろろ}朦朧としてきます。両者を失うと消えていきます。

愛は、多種多様です。その派生的なものがあるので、他にも呼び方があります。たとえば、情愛、欲情、欲求、それぞれが満たされた場合の快とよろこびがあります。また、英知も多種多様です。たとえば、感知力、反省、記憶、思考、物事への意図があります。

それから、愛と英知との両者協働のものがあります。たとえば、同意、結論、行為への決定、その他いろいろです。みな両者からくるわけですが、優勢な方、近い方によって名づけられています。

両者から、最外的に ultimo 派生しているものが感覚です。視覚、嗅覚、味覚、触覚があり、以上の感覚が満たされるときのよろこび、楽しさがあります。

外見上では、眼が見る行為をしているようでも、実は理性が眼をとおして見えています。したがって、「見る」は、理性にも使います。外見上では、耳が聞いているようですが、実は、理性が耳をとおして聞いています。そのため「聞く」は、理性がもつ注意力、聴取力にも使います。外見上では、鼻がにおいを嗅ぎ、舌が何かを味わっているように見えます。ところが実際は、理性がその感知力をもとにして、においを嗅ぎ、また味わっています。したがって「嗅ぐ」また「味わう」は、感知力 perceptio にも使います。その他についても、以上に似ています。

そのようなわけで、以上すべての源は、愛と英知です。このことから、以上二つが、人の〈いのち〉をつくっていることが分かります。

364. 理性が英知を受ける器であることは、だれもが知っていますが、意志が愛を受ける器であることを知っている人は少数です。なぜなら、意志は自分からは何も行わず、理性をとおして行うからです。

意志にある愛が、理性にある英知に移行するさい、まず最初に情愛の中に入って、それから英知に移行します。しかも情愛があると感じられるとすれば、それは、考えたり、話したり、行なったりするときのうれしさによります。ところが、このうれしさは、あまり意識されません。実際は、人はだれでも愛していることをやりたいし、愛していないことは、やりたくありません。ここで、意志の出どころは、愛であることが分かります。

365.② 人の〈いのち〉は、その始源になっている点では、脳の中に存在するが、その派生的力は身体の中にある。

始源の面とは、その原初を言います。その派生的力の面とは、その原初の力から生産され形づくられたものです。始源の中にある〈いのち〉とは、意志と理性を指します。この二つは始源の面では脳の中に存在しますが、派生的力の面では身体の中に存在します。〈いのち〉の始源、すなわち原初が脳の中にあることは、次のようなことから明らかです。

1. 人が心にとめて考え始めると、脳の中で考えているのがぴんと感じられます。肉眼の視力を集中するときのように集中し、ひたいに力

が入ります。でも、何かそれ以上のことをしています。

2. 母胎で人が形成されていくとき、脳すなわち頭部が最初です。頭脳は、しばらくの間は、胴体よりも大きいくらいです。

3. 頭部は上に、身体は下にあります。これは、より上位の部分が下位の部分に向かって働きかけていくための秩序を示します。その逆ではありません。

4. 妊娠中、または傷害、病気、過度の緊張で、脳が損傷を受けることがあります。そうすると思考力は働かず、ときによって精神の錯乱をきたします。

5. 視覚・聴覚・嗅覚・味覚、それに触覚という身体全体にわたる感覚と会話能力をふくめ、身体の外的感覚は、みな「顔」と呼ばれる頭の正面部分にあります。以上はまた、繊維をとおして脳と直接交流をします。また、みずからの感覚的・活動的〈いのち〉を、その脳から引き出します。

6. そして、愛のもつ情愛は、顔の中にある程度の実像を描き出しています。また、英知からくる思考は、両眼にある光で分かります。

7. 人体の解剖によって、あらゆる繊維は、頭脳から首をとおって胴体の下っていくのが分かります。胴体から首をとおって、頭脳に上っていくものはありません。したがって、繊維が原点を示し、始源であれば、〈いのち〉も、そこが原点であり始源です。繊維が起源を示していれば、そこがまた、〈いのち〉の起源であるのを、だれも否定しつづけることはできません。

8. 通常の感知力をもっている人に、「あなたはどこで考えますか。思考の場所はどこですか」と尋ねると、頭で考えると答えます。次に霊魂は、ある種の分泌腺にあるとか、心臓にあるとか、その他のとこ

ろにあると言っている人に、「情愛やそれからくる思考の始源はどこにあるのですか、脳ですか」と尋ねてみてください。そうではないと答えるか、知らないと答えるでしょう。それを知らない理由については、前述した箇所（361節）を見てください。

366.③ 〈いのち〉は、始源の内にあると同じような性格で、全体にも部分にも存在する。

これを分かっていたくため、その始源 principia が脳のどこにあるか、それがまたどんなふうに分流となっているかを述べます。その始源が脳のどこにあるか、解剖してみれば分かります。解剖学で分かっていることは、脳が二つあることです。その二つとも、^{ずがい}頭蓋から^{せきすい}脊髄にまでつながっています。この二つの脳は、二種類の実体から成っていて、皮質実体および髄実体と言われています。皮質実体は、無数の腺状のものからできています。髄実体は、無数の繊維状のものからできています。

さて、以上の細い腺状のものは、繊維状のものにとっては頭部になるため、繊維状のものにとっての始源です。繊維はそのような腺からはじまって、ずっと伸びていき、^{たばじょう}順次束状にまとまって神経に通じます。さらに、このようにして、まとめられた神経は顔面にある感覚器官につながります。それが身体の運動器官につながり、運動器官の形をととのえます。解剖学の専門家に聞いてみれば、よりよく理解できるのではないのでしょうか。

脳の表面は、前述の皮質実体、すなわち腺状のものでできています。

そして、延髄のもとになっている脳腺状体の表面も、それでできています。

こうして、小脳の中心部や、脊髄の中心部をかたちづくっています。髄実体、すなわち繊維質のものは、どの場所からも開始し、そこから発出してきます。そこから出てくる神経は、身体全体に行きわたります。それについては解剖実験で、明らかになります。

解剖学によっても、解剖学者から聞いて得た証明によっても、以上が分かれば、当然、次に述べることも分かってきます。すなわち〈いのち〉の始源は、繊維質の出所にしかないことです。繊維質は、みずから発生してきたのではなく、その出所 *initia* から発出しています。始源になるもの、つまりその出所は、腺状のもののように見え、それも無数に近い数です。

その数は、宇宙にある星の数にも比べられます。また、その腺状のものからなる繊維の数は、その星々から出てくる放射線の数にも比べられます。星々はそれぞれの熱と光を地上にもたらしています。

また、腺状のものは、天界の天使社会の数にも比べられます。その社会の数は限りなく多く、しかも同様の秩序をもっていると、わたしは聞きました。

腺状のものから出てくる繊維質の数は、真理や善の霊性にも比べられます。そのような霊性は、放射線のように天使社会からも出ています。したがって、しばしば前述したように、人間は宇宙に似ており、天界の雛形ひながたでもあります。

以上で〈いのち〉は、始源のうちにあるのと同じように、派生的分流のうちにも *in principiatis* 存在するのが分かります。すなわち、

脳の中にある〈いのち〉の出所にあるのと同じ性格で、身体の中、つまり、以上の出所からくるものの中にも存在します。

367.④ 〈いのち〉は、その始源をとおして存在するが、それはまた、全体のうちにある各部分からなり、各部分のうちにある全体から成っている。

これは、脳と身体の手ては、根源的には脳の手源から発する繊維からなっていることです。(366節で)前述したことから明らかに、〈いのち〉の手源は、そこ以外にはありません。したがって、全体はそれぞれの部分から成っています。

すなわち、始源をとおして全体からなっている〈いのち〉は、それぞれの部分にもあります。なぜなら、全体は各部分に役割と責任を分配し、それによって、部分部分が全体のなかで位置づけられるようになるからです。

一言でいえば、全体は部分から成っており *existit*、部分部分は全体からなっています *subsistunt*、このような相補的交流があること、またこの交流によって結合が生じることは、身体にある多くの例から明白です。都市、国家、王国にもあるように、共同体は部分となる人間から成り、部分である人間は、共同体をもとにして存続します。これは、何か〈かたち〉のあるものには、すべてあてはまります。人間にあつては、これは最大の規模になります。

368.⑤ 愛の性格に応じて英知があり、それにに応じて〈人となり〉が決まる。

愛と英知がどんなふうかによって、意志と理性がどんなふうかが分

かります。前述したように、愛を入れる器こそ意志であるとともに、英知を入れる器こそ理性だからです。しかも、この二つが人間をつくり、その性格を決定します。

愛は多様です。それは、その変化にはかぎりが無い *indefinita* という点で多様です。これは、地上でも天界でも、人類の多様性を見れば分かります。おたがいにまったく違いがないほどの、二人の同じ人、二人の同じ天使は存在しません。それぞれを区別するのは、その人の愛です。人はそれぞれ、それなりの愛です。

人を区別するのは、その人の英知だと思われていますが、英知は愛からくるものです。つまり、愛の〈かたち〉です。実際、愛は〈いのちの存在〉であり、英知はその存在から出てくる〈いのちの实在〉です。

この世では人間を人間にするのは、理性 *intellectus* だと信じられています。こう信じられているわけは、前述したように、理性は天界の光にまで高められうるからです。それで人は、英知を味わっているように見えます。ただし理性は、超越する *transcendit* から理性です。すなわち、愛の及んでいないところにまで、超越していきます。そのため超越した領域にまで、本人のもののように見なされます。つまりその人は、そんなにすばらしい人かと思わせます。しかしこれは見せかけです。

超越するから理性であるわけですが、それは、知りたい、味わいたいという愛があるからです。とはいえ、知ったこと味わったことを、生活に適用したいと思う愛とは別物です。したがって、このような知恵は、この世では時間がたつと消え失せるか、記憶の外側にある末端で消え失せるのを待っています。このように死後は切り離されて、霊

にとって、それなりの愛と調和するもの以外は、何も残りません。

なぜなら、人を生かすのは愛だからです *amor facit vitam hominis*。愛が人を人にします。したがって天界の全社会と、その社会の全天使は、愛からくる情愛にしたがって秩序づけられます。そしてどんな社会も、またその社会にいるどんな天使も、自分の愛から切り離された理性にたよることはありません。

地獄と、その社会でもおなじです。ただし、天界の愛に反する愛にしたがって存在しています。以上から、愛におうじて英知も存在すること、愛におうじて、人となりが生まれる、ということが分かったと思います。

369. その人の主調になる愛 *amor regnans* にもとづいて、その人となりが生まれることは認めても、これはただ精神とか靈魂の面でしかあてはまらないと思われています。しかし実は、肉体の面でも考えなくては、本人のすべてではないことになります。わたしが霊界でいろいろ経験したことから分かったのですが、人は頭のとっぺんから爪先まで、つまり頭部にある始源的な部分から身体の末端部まで、その人の愛のあるがままを表わしています。

霊界では、だれもみな、その人本人の愛の〈かたち〉になっています。天使たちは天的愛の〈かたち〉をしていますし、悪魔は地獄的愛の〈かたち〉をしています。前者は顔も体もうつくしいのにたいし、後者は顔も体もくずれています。そして、かれらがもっている愛が侵害されると、その顔も変わります。そして、その侵害が大きくなると、かれらの全体が消え失せてしまうのです。これは霊界にしかないめずらしいことです。すなわち、かれらの場合、体は心と一体になってい

るため、このようなことが起こります。

前述したことから、その理由が分かります。つまり身体にあるものは、みな派生的動き *principiata* です。すなわち、始源となる原動力 *principia* をもとにして、繊維によって織りつづられた動きです。そして、その始源こそ愛と英知の器です。そのため、始源のあるがままに、派生的動きも働きます。始源のおもむくままに、あとの動きが続くわけです。そこに分離はありません。

したがって、心を主にむかって高くあげる人は、その人全体が主にむかって高められます。こころを地獄におとし貶める人は、その人全体が地獄に貶められます。だから、人は本人の〈いのち〉の愛に呼応して、その人全体が、天界に行くか、地獄に行くかします。神は人間です。だから人間の心こそ人間なのです。これは天使の英知から出たことです。しかも人の身体とは、感じたり行動したりするさいの〈心の外部 *externum mentis*〉のことです。このようにして心と体は一つです。二つではありません。

370. それで、次のことを知る必要があります。人間の肢節・器官・内臓の〈かたち〉は、その組成から見て、脳の中にあるそれなりの始源から生じた繊維からできています。その〈かたち〉は地中にあるのと同様の実体、および物質によって構成されており、大気中やエーテルのなかにある土質からも造られます。これは血液を媒介にして造られます。そのため人体のあらゆる部分が、それぞれ形成・存続を重ね、それぞれの機能を果たしていくには、人は物質からできたものを食べて養分にし、たえず新陳代謝をしていかななくてはなりません。

3 意志は心臓に相応し、理性は肺臓に相応していること

371. これは、次の順序で説明していきます。

- ① 精神にあるものは、すべて意志と理性に関係づけられ、肉体にあるものは、すべて心臓と肺臓に関係づけられる。
- ② 意志と理性は、心臓と肺臓とに相応する。その結果、精神にあるものはすべて肉体にあるものと相応する。
- ③ 意志は心臓に相応する。
- ④ 理性は肺臓に相応する。
- ⑤ 以上の相応によって、意志および理性について、数多くの秘義アルカナが分かってくる。また、愛と英知についても分かってくる。
- ⑥ 人間の精神とは、本人の霊のことである。また、霊とは人間のことであり、そしてまた肉体とは、精神すなわち霊が、この世で感じとったり行動したりするときの媒体になる外部のことである。
- ⑦ 人間の霊が肉体とむすびついているのは、人の意志および理性が、本人の心臓および肺臓と相応していることによって成立する。相応していない場合、分離する。

372. ① 精神にあるものは、すべて意志と理性に関係づけられ、肉体にあるものは、すべて心臓と肺臓に関係づけられる。

精神 mens とは、意志と理性以外のなにもものでもありません。それはまた、相対的に見て、人を動かす hominem afficiunt ものすべ

てと、人が思考する *homo cogitat* ものすべてを意味します。したがって人間には、情愛 *affectio* と思考 *cogitatio* のすべてがあるわけです。

人間を動かすものとは、本人の意志です。人間が思考するものとは、本人の理性です。人間が思考するものすべては、本人の理性の働きであることは知られています。人は理性をもとにして考えるからです。ところが、人間の情愛にかんするものすべてが、本人の意志からでたものであることは、それほど知られていません。それがあまり知られていないのは、人が考えるとき、情愛には注意をむけず、ただ考えている内容に心を注いでいるからです。

話している人に耳をかたむけても、その音調には注意をむけず、その話の内容に注目します。ところが、思考の中に含まれる情愛は、話の中に含まれる音調とおなじような関係をもっています。そうして、話す人の音調によって、その人の情愛を知り、話の中からその人の考えを知ることになります。

情愛は意志によるものです。なぜなら前述したように、情愛はすべて愛からのものであり、意志こそ愛の器だからです。情愛が意志によるものであることを知らない場合、人は情愛と理性を混同します。そのような人は、情愛は思考と同一だと言いますが、実際は一つのものではなく、ただ一つになって働いているだけです。

日常会話からも、このような混同が見られます。「わたしは、これをやろうと思う」などと言うのは、「わたしはこれをやりたい」という意味です。二つは別物だということは、平常言っていることから明らかです。「それについては、考えてみたい」という場合、それについて考えているあいだ、理性的思考に、意志の情愛が内在していま

す。それは、人の話のなかに音調が内在しているのと同じであることは、前述したとおりです。

身体のごとは、すべて心臓と肺臓とに関係があることは周知でも、その心臓と肺臓が、意志と理性とに相応することについては知られていません。したがって、それについて次に述べていきます。

373. 意志および理性は、愛および英知の器です。したがって、この二つは組織化された〈かたち〉であり、また、きわめて純粋な実体から構成された〈かたち〉です。この二つが器として働くには、次のような性格が必要です。

この二つの組成が肉眼には現れてこないことは、異論のないことです。それが顕微鏡で拡大されれば見えてきます。きわめて小さい昆虫も見えてきます。それにも感覚器官や運動器官があつて、感じとったり、這ったり、飛んだりします。そのようなムシにも、脳・心臓・気管・内臓があることが研究者によって、顕微鏡をつかった解剖で発見されています。

このように小さなムシケラがいて、肉眼では見えないし、その内臓などもいっそう見えないにもかかわらず、内部にある一つ一つが組織化されているのは、否定できないことです。それなら、意志および理性といわれている〈愛と英知の二つの器〉が、組織化された〈かたち〉をもっていないはずはありません。

愛と英知は、主からくる〈いのち〉です。それがどうして、主体のないところへ働きかけたり、実体として存在しないものに入ったりするのでしょうか。実体がなくして、思考はどこからわいてくるのでしょうか。思考力の発生場所をもたないで、人はどうして話すことができる

でしょう。

思考力が実在する場所は、脳の中で、それは中がいっぱいにつまっており、そのどの点をとっても、組織化されたものではないでしょうか。脳の中は、その組織化された〈かたち〉が、肉眼にもはっきり見えます。そして、その皮質実体の中に、意志と理性の器が現れています。もちろん始源状態の中であって、そこには、極小の腺が存在するのが分かりますが、これについては、前（366）節を参照してください。

これについては、虚空 vacuum という考え方から出発しないでください。虚空とは無のことです。無の中には何も起こってきません。無からは何も実在するようにはなりません。（虚空という概念については、前82節を参照してください）。

374.② 意志と理性は、心臓と肺臓とに相応する。その結果、精神にあるものは、すべて肉体にあるものと相応する。

以上はいままで知られていなかったこと、目新しいことです。それは、とりもなおさず、霊性 spirituale とは何かとか、それが自然性 naturale と、どう違うかが知られていなかったし、相応とは何かも分からなかったためです。

相応 correspondentia とは、霊性と自然性とのあいだの関係で、二つが相互に結びつくためのものです。霊性とは何か、霊性と自然性とのあいだの相応は、どんなものか、その相応とはいったい何かなどは、従来未知の分野だったと言われますが、この二つとも分かりうることです。

情愛や思考とかは、霊的なものであり、情愛や思考に関係あるすべ

てのことは、靈性に関係があることは、だれもが知っています。行動や言語は、自然的なものであって、行動や言語に関係あるすべてのことは、自然性に関係があることも、知らない人はいません。情愛や思考が靈的なものであり、それが人間を行動や言語に駆り立てていることを知らない人がいるでしょうか。

そのように、靈性と自然性とのあいだの相応とは何か、分からない人はいないと思います。思考があるからこそ、それによって人は舌でしゃべり、その思考に伴う情愛があるからこそ、人は肉体で行動します。この二つには、はっきりした区別があります。

わたしは考えていても、それを口にしないことが可能ですし、意志があっても実行しないことが可能です。そしてなお、肉体自身が思考をしたり、意志したりしているわけではなく、思考力が〈ことば〉を起し、意志が行動にかり立てることは知られています。なお、情愛は顔から輝き出て、そこに本人自身の像 *typus* を描き出している事実は、だれでも知っています。したがって情愛はそれ自身として見ると、靈的なものであり、表情とも言われる顔の変化は、自然的なものではないでしょうか。

したがって、だれでも次のような結論を下すことができます。すなわち、相応が存在すること、精神上のすべてと、肉体上のすべてとのあいだに、相応があることです。しかも、精神上のすべては、情愛と思考に関係があること、つまり意志と理性に関係があること、それと同時に、肉体上のすべては、心臓と肺臓とに関係があることです。その結果、意志と心臓とのあいだ、および、理性と肺臓とのあいだに、相応があることです。

以上は知ろうとすれば、知ることができたはずですが、知られていません。その理由は、人があまりにも外面的になって、自然的なことしか認めなくなったからです。それが人のもつ愛にとって、こころよいものになり、さらに、人の理性にとっても、こころよいものになってしまいました。こうして、自然性から切り離された靈性にむかって、しかも自然性を越えて、思考力を高めていくことが、不愉快になってしまいました。

したがって、自らの自然的な愛と、その心地よさからしか思考をすすめることがなく、靈的なものとは、自然の純化されたものだとか、相応があっても、それはただ自然の連続であるとしか考えなくなりました。単に自然的な人間にとっては、自然性から切り離して物事を考えていくことができません。その人にとっては、無であるためです。

以上は、従来まで分からず、知られずにいました。その理由は、全キリスト教会にわたって、教義をとおして靈的と言われうる宗教上のことがらが、ことごとく人の面前で消え失せていったためです。つまり、公会議とか優れた神学者たちが結論を下した神学上の命題、それは靈的問題ですが、それが理性を越えるものであると言って、盲目的に信じるべきことになったためです。

そのため、靈的なことといえば、大気やエーテルのなかを飛ぶトリのようだと思う人もいたくらいです。つまり、肉眼ではとらえられません。一方、極楽鳥のように目前近く飛んで、その美しい羽根で、見てくれとばかり、人の瞳をかすめるトリもあります。肉眼によって見るとは、靈的に見ることを意味します。

375. 意志および理性が、心臓および肺臓と相応の関係にあること

は、そのままでは断言できません。つまり、推理だけでは分かりません。しかし、結果を見れば分かります。これは、万事の諸原因をみて分かるようなものです。諸原因は、合理的に考えれば分かりますが、ただ結果を見なければ、不明瞭です。結果の中に諸原因があり、結果を通して、見えるものになります。人の精神は諸原因については、自明になるまでは、断言しません。

以上の相応関係のもつ結果については後述します。ただし、この相応関係については、霊魂にかんする仮説から固定観念に落ち入らないため、前節で述べたことがらを、あらかじめよく読んでおいてください。たとえば、(363、364節にあるように)人の〈いのち〉をつくるのは、愛と英知、つまりは意志と理性である。(365節にあるように)、人の〈いのち〉は始源的には脳の中にあり、派生的には身体の中にある。(366節にあるように)、〈いのち〉は始源のうちにあるのと同様、人間全体と各部分にある。(367節にあるように)、その〈いのち〉は始源を介して存在するが、全体における各部から成るとともに、各部分における全体から成っている。(368節にもあるように)、愛の性格によって英知の性格が決まり、その結果、〈人となり〉もできるなどです。

376. ここで確認のため、相応の表象を紹介します。それは、天界で天使たちのもとで見えた〈意志と理性^{たい}〉対〈心臓と肺臓〉の相応です。天使たちはそれを口では言い表せないほどすばらしい螺旋の流れで示しました。心臓に似たものと肺臓に似たものが、その内部のあらゆる組成といっしょになって、形づくられました。

そして、そのとき天使たちは、天界の流れにそって行きました。それは、天界は主による愛と英知の流入をもとにして、このような形を造ろうとつとめているからです。このようにして、心臓と肺臓のむすびつきを表わしたばかりか、心臓および肺臓が、意志のもつ愛、および理性がもつ英知に相応していることも示しました。

天使たちは、このような相応と一致を「天上の結婚 conjugium caeleste」と呼んでいました。そして次のように言いました。

「同じことが、身体全体にも、それぞれの肢節にも、器官にも、内臓にもあります。これは、心臓や肺臓と関係をもっているものについて言えます。それにたいし、心臓や肺臓が働かず、個々のものがその役目を果していないところでは、意志原理による生命運動は、なにもないし、理性原理による生命感覚は、なにもありません」と。

377. 心臓および肺臓が、意志および理性に相応していることについて、これから述べていきます。なお、身体各部全体の相応も、それに基礎をおくことになります。それは、体全体にある肢節、感覚器官、身体の内臓と呼ばれているものです。さらに、自然性と霊性とのあいだの相応については、従来知られていませんでしたが、二つの著書の中で、すでにくわしく述べました。その一つは『天界と地獄』ですが、もう一つは創世記と出エジプト記にある〈み〈ことば〉〉の霊的意味について書いてある本で、『天界の秘義』と呼ばれています。それでわたしは、ここで、以上二つの著書の中で、相応について書き示していることに触れてみようと思います。

『天界と地獄』の著書では、天界にあるすべてと、人間にあるすべてには相応があること（87～102節）、天界にあるすべてと、

地上にあるものすべてとのあいだには、相応があること（103～115節）について記してあります。

創世記と出エジプト記にある〈みことば〉の靈的意味を記した『天界の秘義』と言われる著書には、人の顔・表情と、心にある情愛との間の相応について書いてあります（1568、2988、2989、3631、4796、4797、4880〔?4800〕、5195〔?5165〕、5168、5695、9306節）。また、身体の身振りや行為が、理性また意志の働きと相応していること（2988、3632、4215節）。一般に言って、感覚の諸作用の相応について（4318～4330節）。眼と視野の相応について（4403～4420）、鼻とにおいの相応について（4624～4634）。耳と聴覚の相応について（4652～4634）。舌と味覚の相応について（4791～4805）。両手、両腕、両肩、両足の相応について（4931～4953節）。腰および生殖器官の相応について（5050～5062節）。身体の内臓、とくに胃、胸腺、^{にゅうび}乳糜の器官・導管、腸間膜の相応について（5171～5180、5189〔?5181〕節）。脾臓の相応について（9698節）。腹膜、腎臓、膀胱の相応について（5377～5396〔?5385〕節）。肺臓、肝臓管、膀胱管、脾臓管の相応について（5183～5185節）。腸の相応について（5392～5395、5379節）。骨の相応について（5560～5564節）。皮膚の相応について（5552～5573〔?5559〕節）。天界と人間との相応について（911、1900、1982、2996～2998。3624～3649、3741～

3745、3884、4091、〔?4051〕、4279、4423、〔?4403〕、4524、4525、6013、6057、9279、9632節）。自然世界にあるすべてのもの、またその三界にあるすべてのものが、霊界に姿をあらわす、すべてのものと相応していること（1632、1881〔?1831〕、2758、2990～2993、2997～3003、3213～3227、3483、3624～3649、4044、4053、4166、4366、4939、5116、5377、5428、5477、8211、9280節）。天界に姿を現すものは、すべてが相応であること（1521、1532、1619～1625、1807、1808、1971、1974、1677、1980、1981、2299、2601、3213～3226、3349、3350、3457〔?3475〕～3485、3748、9481、9570、9576、9577節）。〈み〈ことば〉〉の文字上の意味および、その霊的な意味は、『天界の秘義』のどこにでも触れられています。これについてはまた、『聖書についての新エルサレムの教義』を参照してください。（5～26、27～69〔?65〕節）。

378.③ 意志は心臓に相応する。

これは（375節で）前述したように、意志がその結果から明らかになるというふうに、逐一明らかにはなりません。明らかになるとすれば、次のことからです。つまり、愛からくる情愛は、すべて心臓に変化をもたらします。それは、心臓のゆれのことで、動脈による脈拍をみても、それが心臓と同調していることで分かります。

愛からくる情愛によって、変化したり、ゆれたりしますが、それは数え切れません。指でおさえてみて感じられるのは、ただ、脈拍が速くなったり遅くなったり、高まったり低くなったり、やさしくなったり激しくなったり、規則正しくなったり不規則になったり、その他多種多様です。

したがって、うれしいときと悲しいとき、気分が平静のときと怒っているとき、大胆になっているときと、おびえているとき、熱が出る病のときと、冷えこむときの病気など、様々に異なります。

心臓の運動は収縮しゅうしゆくと弛緩しかんと言われていますが、これは人がもっている愛の情愛にもとづいて移り変わります。そのため、情愛は心臓が原因であるとか、情愛は心臓に宿っているなどと考えた人は古代人の中に多く、その影響で現代でもそう考える人がいます。

そこから、日常の会話の中でも、大らかな心（臓）と臆病な心（臓）、うれしい心（臓）と悲しい心（臓）、やわらかな心（臓）と硬い心（臓）、偉大な心（臓）と小心な心（臓）、まったき心（臓）とくだけた心（臓）、肉の心（臓）と石の心（臓）、豊かな心（臓）、軟柔な心（臓）、柔和な心（臓）、決行の心（臓）構えをする、同一の心（臓）をささげる、新しい心（臓）を与える、心（臓）で反応する、心（臓）から受け入れる、心（臓）に入っていない、心（臓）をかたくなにする、心（臓）の友などと言われます。

そこから同心一致とか、不協和心とか、乱心とか、その他、愛とその情愛に関係のある同様のことがいろいろ出てきます。〈みことば〉も同じような〈ことば〉を使っています。〈みことば〉は、相応によって記されているためです。愛と言っても、意志と言っても

同じことです。前述にあるように、意志は愛の器だからです。

379. 周知のことですが、人間にもどんな動物にも、生命力をもった熱 *calor vitalis* があります。ただし、その起源の由来については知られていません。人はみなそれについては、ただ想像で話しています。したがって、自然的なものと霊的なものとのあいだにある相応が分かっていないから、人はその起源を太陽の熱のおかげだと言ったり、部分と部分の活動だと言ったり、生命そのものの働きだと言ったりします。とは言っても〈いのち〉が何か分かっていないため、ただそれを口にするだけで済ませています。

愛および情愛と、心臓およびその派生器官とのあいだには、相応があります。これが分かっていたら、愛こそ生命力をもった熱の根源であることが分かります。愛とは、主のまします〈霊的太陽〉から発している熱のことです。また天使たちは、それを熱として感じます。この霊の熱は本質的に愛であり、これが相応をとおして、心臓とその血液の中に流れ入り、熱を帯びさせ生かします。

人は、自分のもつ愛とその程度に応じて、火がついたように熱し、またそれが減じてくると興ざめし、つめたくなってくることは知られています。それを感じるし、見ることもできます。体全体に熱があるから、それを感じ、顔が紅潮することで見ることができます。それとは逆に、体が冷たくなると、熱が去っていったのを感じ、顔面蒼白になれば見ることもできます。

愛は人の〈いのち〉です。したがって心臓こそ、人の〈いのち〉の最初であり最後です。また、愛は人の〈いのち〉であり、人の靈魂は体内では、血液をとおして、みずからの〈いのち〉を働かせます。そ

れで〈みことば〉では、血は「魂」と呼ばれています（創世9・4、レビ17・14）。この「魂 anima」は、多様な意味をもっており、それについては後述します。

380. 血は赤い色をしています。これは、心臓と血液が、愛とその情愛に相応しているところから来ます。霊界では、各種各様の色が存在し、赤色と白色は色彩の基本になります。その他の色は、それからできているか、その対立するもの、つまり、ほの暗い火や黒い火炎の色から、各様な変化を生みます。ここでは、赤色は愛に相応し、白色は英知に相応します。赤色が愛に相応しているのは、霊界の〈太陽〉の火がその起源になっているからです。白色が英知に相応しているのは、霊界の〈太陽〉の光がその起源になっています。愛と心臓とのあいだには相応があり、そのため、起源を示す色として、血は赤色でなくではありません。

そのように、主への愛が支配している天界では、燃えるような赤い光が存在し、そこにいる天使たちは、深紅色の衣服を身につけています。英知が支配している天界では、明るい白色の光が存在します。そして天使たちは、みやびやかな白衣を身につけています。

381. 天界は二つの王国に分かれています。一つは天的王国であり、もう一つは霊的王国です。天的王国は、主への愛が支配的であり、霊的王国では、その愛からくる英知が支配的です。愛が支配する王国は、「天界の心臓部」と呼ばれ、英知が支配する王国は、「天界の肺臓部」と呼ばれます。

天使のいる天界の総体は、その全容を見ると、ひとりの人間を映しだし、主のみまえでは、ひとりの人間として現れることは、忘れないでいてください。したがって、心臓部は一王国を成しており、肺臓部も一王国を成しています。たしかに全天界をとおして、心臓的運動と、肺臓的運動が共通して存在し、そこから個々の天使にも、それが存在しています。そして、共通の心臓的運動と肺臓的運動は、ただ主からだけきます。愛と英知は、主おひとりの力によるものだからです。主がまします〈太陽〉、主のみ力によって存在する〈太陽〉の中には、以上二つの運動があります。それが天使のいる天界と全宇宙にゆきわたります。

それが分かるためには、空間概念をとり去ってください。そして、主の遍在を心にとめ、それで、明瞭にしてください。天界が二つの王国に分かれていて、天的王国と靈的王国があることについては、『天界と地獄』（26～28節）を参照してください。そこにはまた、天使的天界の全貌は、ひとりの人間を映し出していることについて記されています（59～87節）。

382.④ 理性は肺臓に相応する。

これは、意志が心臓に相応すると述べたことから分かってきます。霊をもつ人間、あるいは精神の中には、それを支配する二つのもの、すなわち意志と理性があります。自然的人間つまり肉体の中にも、これを支配する二つのものがあります。心臓と肺臓です。前述したように、精神のすべてと、肉体のすべてのあいだには、相応があります。したがって、意志は心臓に相応し、理性は肺臓に相応します。理性が肺臓に相応していることについては、自分なりに考えてみても、自分

なりに話してみても、人はだれでも、わが身にあると気づきます。

まず、考えてみると分かります。肺の呼吸に、一致と調和がなければ、人は何も考えられません。だまって考えるときは、呼吸も静かです。また、声をだして考えるときは、息づかいが耳に入ります。考えているあいだ、それによって息を吸ったり吐いたり、胸部をすぼめたり大きくしたりします。また、愛からくる情愛の流入があると、それによって、息が速くなったり遅くなったり、もの欲し気になったり、優しくなったり、気をつかったりします。そして、息を完全にとめると、思考不可能になります。もちろん、はっきりは感じられませんが、いったん呼吸した息の中で、小さく呼吸しているときは別です。

話をすると分かります。肺の助けを借りなくては、口から一語も出てきません。単語となって区切って発音される音は、すべて肺から器官と喉頭蓋をとって出てきます。ですから、胸を大きくふくらませ、通路をひらき〈ことば〉を発すると、叫びになるほど大きく高まることがあるし、縮めると、声も小さくなります。そして通路を閉鎖すると、〈ことば〉を発することはできず、思考も止まります。

383. 理性は肺に相応し、思考力は肺の呼吸に相応します。それで〈みことば〉では、「魂」や「霊」は、理性を意味します。たとえば、

「あなたは、心を尽くし、魂を尽くして、あなたの主なる神を愛しなさい」(マタイ 22・37)。

「神は、あたらしい心と、新しい霊とを与える」(エゼキエル 36・26、詩 51・12、13)。

「心(臓)」とは、前述したように、意志のもつ愛です。したがって、「魂」または「霊」とは、理性のもつ英知です。「神の霊」また

「聖霊」とも言い、神の英知です。それで、人を照らす神の真理を意味するようになります。これについては、『主についての新エルサレムの教義』を参照してください（50、51 節）。なお、

「主は、弟子たちに、息を吹きかけて、『聖霊を受けなさい』と言われた」（ヨハネ 20・22）。

また、

「エホバなる神は、アダムの鼻の中に、生命の魂を吹き入れられた。すると、生命のある魂になった」（創世 2・7）。

預言者にむかって言われています。

「霊の息のうえに預言しなさい。・・・風にむかって言いなさい。・・・四方から風で霊の息吹が来るように。殺された人たちが生きるよう、息吹を与えなさい」（エゼキエル 37・9）。

その他にもあります。そのため、主は、「鼻をとおる霊の息吹」とか、「生命の呼吸」などと言われています。呼吸は鼻をとおって行われるため、鼻は感知力を意味します。理知のある人は鋭い鼻の人と言われ、理知の乏しい人は、鼻がきかない人と言われます。

以上から、ヘブル語でも同様に、その他のある言語でも、霊 spiritus と風 ventus は、同じ単語です。この霊（息・風）という単語の起源は、魂を与えて動かす animatio という意味です。だから、人が死ぬと魂を返したと言われます。したがって、人は、霊が風あるいは空気のようなものだと信じています。肺から吐き出された呼気のことです。同じくこれが魂です。

「心を尽くし、魂を尽くして、神を愛する」とは、愛を尽くし、理性を尽くすことで、以上からもそれが理解できます。それと同時に、「新しい心と新しい霊」を与えるとは、新しい意志と新しい理

性を与えるという意味です。「霊」とは理性を指します。それで、ベザレルについては、

「かれは、英知と理知と知識の霊に満ちていた」（出エジプト 31・3）とあり、ヨシユアについては、

「英知の霊に満ちていた」（申命 34・9）とあり、ネブカドネザルは、ダニエルについて、

「知識と、理知と、英知のすぐれた霊が、かれの中にあった」（ダニエル 5・11、12、14）とあり、またイザヤには、

「霊にあつて迷える者は、理知を知る」（29・24）とあります。同じような箇所が、他にも数多くあります。

384. 精神にあるものは、すべて意志と理性に関係があり、肉体にあるものは、すべて心臓と肺臓に関係があります。したがって頭部にあつても脳は二つあり、意志と理性が違っているように、おたがいに区分されています。小脳は主として意志のため、大脳は主として理性のためです。

同じく、身体にある心臓と肺臓は、体内の他の部分と区別されています。すなわち、横隔膜によって区分されます。そして、^{ろくまく}肋膜と言われる固有のペールで覆われていて、それが「胸部」と言われる体の部分を成しています。そして、肢節・器官・内臓と言われている身体他の部分には、二つのものは結びついています。つまり対等^{ついで}の対になっています。腕・手・腰・足・眼・鼻がそうです。体にある腎臓、輸尿管、睾丸がそうです。

対等になっていない内臓は、右と左に分かれています。二つの

半球に分かれている脳がそうで、それ以外に心臓は二つの心室があり、肺臓には二つの葉^{よう}があり、右葉は〈真理の善〉にかかわりを持ち、左葉は〈善の真理〉にかかわりを持ちます。同様に、右は、英知の真理の源である〈愛の善〉にかかわりを持ち、左は、愛の善の源である〈英知の真理〉にかかわりをもっています。善と真理との結びつきは相補的です。そして、その結びつきによって一つのものになります。したがって人間にある、以上の対は、機能・運動・感覚のうちで、いっしょになって同調して働いています。

385.⑤ 以上の相応によって、意志および理性について、数多くの秘義が分かってくる。また、愛と英知についても分かってくる。

この世では、意志とは何か、愛とは何かについては、ほとんど分かっていません。なぜなら、人は理解することや、みずからの力によるかのように考えていくことはできても、愛することや、その愛から出発して、みずから欲することは、できなくなっています。それはあたかも肺を動かして自分から呼吸することはできても、心臓を動かして自分の力で動かしてみることはできないのと同じです。

現在この世では、意志とは何か、愛とは何かについて知られていませんが、心臓とは何か、肺臓とは何かは知られています。（心臓も肺臓も、眼前にして研究することができるし、解剖学者の調査や記録もあります。それにたいし、意志や理性は、眼前に置いてみることも調査してみることもできません）。したがって、相応とか、相応による一致協力が分かれば、意志や理性についての秘義もたくさん分かって

きます。それがないと、分からずじまいになるでしょう。

たとえば、意志と理性の結びつきについて、理性と意志の相補的はたらきについて、愛と英知の結びつきについて、英知と愛との相補的はたらきについて、また、愛が派生的に情愛の中に流れていくことについて、情愛がいろいろ組みあわされていくことについて、それが感知力や思考のなかに流れていくことについて、最後に、相応にしたがって、身体の変容や感覚作用に及んでいく流入についてなどです。

心臓と肺臓が結びついていること、心臓から肺臓にむかって血液が流れていること、肺臓から心臓にむかう相補的はたらきや、動脈をとおして身体のあるゆる肢節・器官・内臓に、血液が流れていることについて分かってくると、前述にあるようなことや、他の多くの秘義もはっきりと証明されてくるでしょう。

386.⑥ 人間の精神とは、本人の霊のことである。霊とは人間のことである。そしてまた肉体とは、精神すなわち霊が、この世で感じとったり、行動したりするときの媒体になる外部のことである。

人間の精神とは、その人の霊を指します。また、霊とは人間を意味します。ところが、霊とは風であるとか、霊魂とはエーテルのようなものであって、肺から吐き出された息に似ていると考えてきた人は、以上のことが、なかなか信じられません。かれらは、「霊は、霊でありながら、なぜ人間でありうるのですか。霊魂は、霊魂でありながら、なぜ人間でありうるのですか」と言います。神についても、神は「霊である」と言われています。

霊や靈魂について、このように考えるようになったわけは、ある言語で、霊と風が同じ単語をつかっているためです。また人が死ぬと、霊を返すとか、靈魂を戻すと言われます。それに、息がとまったり失神したりして死亡すると、肺にあった霊または靈魂が去って行って〈いのち〉が帰還していくと言います。そのような場合、魂は、風や空気としか感じられないため、肉眼や体の感覚で判断し、人の霊や靈魂は、死んだあとは人間ではないと思ってしまう。

以上のように、霊や靈魂について肉体的に判断する結果、いろいろの仮説ができ、さらにそこから、最後の審判の日までは、人は人間にならないとか、『最後の審判のつづき』に述べたように（32～38節）、死後は、しばらくどこかにいて体と合体するのを待つ、といった信仰が生まれました。

ところが、人間の精神はその人の霊です。したがって霊でありながら、ある天使たちは「精神 mentes」とも呼ばれています。

387. 人間の精神は、その人の霊です。そして霊は人間です。精神は、人の意志と理性にかんするすべてを意味するだけでなく、そのすべては脳の中に始源をもち、肉体の中にその派生力を保っているからです。以上は〈かたち〉の面で、人間の全体です。だからこそ、精神すなわち意志と理性は、人の肉体と、そのあらゆる箇所を意のままに動かします。

精神が考えたり、欲したりしたことを人の肉体は行動に移します。また、精神は何かを聞こうと耳を傾け、何かを見ようと目を向けます。精神は、舌と唇を動かして、しゃべり、手と指を動かして、気に入ったことをします。また、歩きたい方向にむかって足をのばします。こ

のような肉体の行為は、その人の精神に従っているのです。精神が、肉体のうちにあつて、その派生的力を及ぼしていなかったら、このようなことができるでしょうか。

精神が欲しているから、それに服して、肉体は実行しているとか、両者の一方は上にあり他方は下にあり、一方は命令し、他方はそれに聴きたがうと考えるのは、理性的に正しいでしょうか。これは、理性的に正しいとは言えません。むしろ、前述したように（365節）、人間の〈いのち〉は、脳のうちには始源的に存在し、肉体の内に派生的に存在するということです。

したがって、始源的に存在するように、〈いのち〉は人間全体と各部分にも存在します。始源をとおして、〈いのち〉は全体の中にあつて各部分から成り、各部分のうちにあつて全体から成っています（367節）。精神のすべては意志と理性に関係があり、意志と理性は主からの愛と英知の器であり、この二つが人の〈いのち〉になっていることは、前述したとおりです。

388. 以上述べたことから、次のことも分かります。すなわち、人間の精神は人間自身であることです。これは人間の〈かたち〉の最初の組織 *prima tela* です。あるいは前述からも分かるように、脳から始まって神経をとおして連続している始源的原動力があり、それがもとでつくられている人間の〈かたち〉、しかも個々すべての部分を伴った人間の〈かたち〉です。

人は死んでその〈かたち〉に戻るわけで、その〈かたち〉こそ、そのときは「霊」または「天使」と呼ばれます。しかもこの〈かたち〉

は、あらゆる完全性の面で人間であるとともに、靈的な存在です。

物質的な〈かたち〉は、この世では付属としてつけ加えられたもので、それ自身人間の〈かたち〉をしているわけではなく、人間の〈かたち〉を根拠にしてできたものです。付属としてつけ加えられたのは、人間がこの世で役立ちを果たすとともに、この世の純粹な実体から、靈的なものへのつながりを導き出していくためです。こうして〈いのち〉を長びかせ、永続させていくためでもあります。

人間の精神が、共同体としても、個々全体にわたっても、人間の〈かたち〉に向かって進んでいく永遠の推進力 *conatus* をもつ事実 は、天使的英知に由来しています。なぜなら神は人間だからです。

389. 人間が人間であるためには、頭と胴体をふくめ、完全な人間として実在するはずで、そこに欠けたところがあってはなりません。なぜなら、人間には、その人間の〈かたち〉に含まれ、その人間の〈かたち〉を構成しているもの以外は何もないからです。それは結局、愛と英知の〈かたち〉で、その〈かたち〉は、それ自身として見ると、神よりのものです。

愛と英知を具体化するもの *determinationes* は、すべて、「神人 *Deus Homo*」の無限なご性格の中に内在しますが、神人の像 *imago* では、有限な形をとります。これは、人であり、天使であり、靈です。人間の中に実在するはずのものが、何か欠けているとすると、それは、愛と英知の具体化にあたって、人間みずからに相応する何か欠けているからに他なりません。主は、原初のものから末端のものにいたるまで、人間に内在してくださるはずで、そして、ご自身の神愛と、ご自身の神知をつかって、被造世界の中での役立ちを全うしてく

ださるはずです。

**390.⑦ 人間の霊が肉体とむすびついているのは、人の意志および
理性が、本人の心臓および肺臓と相応していることによっ
て成立する。相応していない場合、分離する。**

人間の精神とは、意志と理性を指し、その人の霊です。しかも霊は、人間である事実は、今まで知られていませんでした。なお人間の霊には、肉体とおなじような脈搏と呼吸があることも、知られていませんでした。そのために、人間にある霊の脈搏と呼吸が、肉体の脈搏と呼吸に流れ入って、脈搏と呼吸をつくり出している事実も、また知られていませんでした。

人間の霊には、肉体とおなじように脈搏と呼吸があります。それで、人間の霊にある脈搏と呼吸および、人間の肉体にある脈搏と呼吸とのあいだには、それにふさわしい相応関係があります。前述したように、人の精神はその本人の霊です。したがって、これら二つの運動の相応関係が停止すると、二つは分離します。これが死です。

何らかの病気や事故によって、肉体がこのような状態になると、分離すなわち死が訪れます。つまり肉体は、本人の霊と行動を共にすることができなくなり、相応関係もなくなり、相応がなくなれば、結合もなくなります。

呼吸が止まるときだけでなく、心臓の鼓動が止まるときも同様です。それは心臓が動いているあいだは、愛がその生命力をもった熱を伴って、〈いのち〉を存続させているからです。これは、失神した人や窒息した人、また、胎児の生命の状態からも分かります。

一口に言えば、人間の肉体の〈いのち〉は、〈肉体の脈搏と呼吸〉および、〈霊の脈搏と呼吸〉とのあいだの相応にかかっていると云えます。そして、この相応が終わると、肉体の〈いのち〉も終わりを告げ、人の霊は去り、霊界で、自分の〈いのち〉を存続させます。霊界は、自然界における人間生活によく似ていて、それが終わったことさえ分からないくらいです。多くの人は、肉体を去って二日を経て霊界にいます。わたしは、二日ののち霊界にいる何人かの人と話しました。

391. この世で人が肉体をもっているように、霊にも脈搏と呼吸があります。それについてわたしは、霊自身や天使自身と話す機会がありました。かれらの証言にしくものはなく、わたしは機会が与えられて質問しましたが、かれらは答えて言いました。

「わたしたちは、世にある人と同じように人間です。それに、同じく肉体がありますが、それは霊的肉体です。また、自然の世界にいる人と同じように、胸に心臓の鼓動を感じますし、手のひらから上の方では、動脈の脈搏も感じます」と。

わたしは、これについて多くの人に尋ねたところ、同じように答えました。人間の肉体の中には人間の霊があつて、それが呼吸をしているのです。わたしは、自分なりの経験でそれを知りました。あるとき、天使たちに機会が与えられて、わたしの呼吸が影響を受けました。呼吸は好みにまかせて減らされ、とうとうわたしの霊の呼吸しか残らないところまでできました。わたしはそのとき、霊の呼吸を感覚で感じとりました。死んでいく人の状態について知らされ、それがわたしにも起こりました。それについては、小著『天界と地

獄』（449節）を参照してください。

わたしは何回か、自分の霊の呼吸だけの状態になりました。しかもそのとき、天界での共通な呼吸とびったり一致した呼吸を自分に感じました。わたしは何回も同じような状態で、天使たちといっしょでしたし、天使たちに会うため天界にひきあげられました。そのときは肉体の外にあって、霊の状態でした。また、この世にいるのと同じように、天使たちと、呼吸をしながら話しました。

それだけでなく他にもありますが、わたしは、生きた事例を見てよく分かりました。人間の霊は、肉体にあるとき呼吸するだけではなく、肉体を離れたあとも、呼吸することです。ただし霊の呼吸は、人には感知できないほど静かです。そして、肉体が行なうあからさまな呼吸に、流入を与えておりますが、それは、原因と結果との関係とあまり違いません。また思考が肺臓の中に流れ入り、肺をとおして言語化するのに似ています。以上から、人間にあって、霊と肉体との結びつきは、心臓の動きと肺の動き、両者の相応によって、できあがっているということが明白です。

392. 心臓の動きと肺の動きの二つは、実在するとともに永続するものです。それは、天使のいる全天界は、全般的にも個別的にも、その二つの生命運動のうちにあるからです。そして、天使のいる全天界が、このような運動のうちにあるのは、主ご自身のいます〈太陽〉、主ご自身の力による〈太陽〉から発して、主がその運動に流入をあたえておられます。つまり、主のみ力によって、その〈太陽〉がこの二つの運動を動かしています。

天界にあっても、この世にあっても、この太陽をとおし、このよ

うな〈かたち〉の連鎖の中で万物は主に依存しています。それは、最初のものから最後のものにいるまで、連綿とつながる作業です。しかも、愛と英知の〈いのち〉は、主によるものであり、宇宙の全動力は〈いのち〉によるものです。だからこそ、それ以外の起源を考えるわけにはいきません。周知のとおり、以上の多様性は、愛と英知をうけとめる器によって決まります。

393. 以上の運動の相応については、いろいろ後述します。たとえば、天界といっしょになって、呼吸している人の相応はどうか、地獄といっしょになって、呼吸している人の場合はどうか、天界といっしょになって、話をしている人の相応、地獄といっしょになって考えている人の相応はどうか、偽善者の場合、おべっか使いの場合、ペテン師の場合はどうか、その他です。

4 心臓が意志と相応しており、理性が肺臓に相応していることから、意志と理性について、あらゆることがわかってくる。すなわち、愛と英知について、人間の靈魂についてのあらゆることがらが、分かってくる。

394. 学問の世界では、多くの人が靈魂について探究しています。ただし、靈界について、死後の人間の状態についてなど、何も知らないため、仮説を立てる程度でしかありません。靈魂とはどんなものかと言うより、肉体の中での靈魂の作用について、述べます。靈魂とはどんなものかは、エーテルの中の何か極めて純粋なものであるとか、

エーテルのように、何かを包むものであると言った程度の考えしかありません。しかし、霊魂は霊的なものであることを知っているため、霊魂が自然の産物だとは言い切れず、ほんのわずかしか公表しようとしません。

霊魂とはその程度のもんと思っけていても、実際に霊魂が肉体の中ではたらし、感覚や運動に関係するものを全部生み出すことを知っているため、前述したように、かれらは一生懸命になって、肉体内での霊魂の作用を研究します。ある人は、その作用は流入によって起こると言い、ある人は調和によって起こると言います。ところが、いったいどうなっているのか知りたがっている精神自身が、このままでは、みづから休まる発見が何もありません。

そのため、わたしは天使たちと〈ことば〉をかわす機会に恵まれ、その英知にもとづいて照らされました。その中から次を紹介します。

人間の霊魂は死後も生き続けますが、それは本人の霊です。その霊は完全な〈かたち〉をもった人間です。人の霊魂は意志と理性で、そのたましいは、神のみ力による愛と英知です。人間の〈いのち〉をつくっているのは、この二つで、この〈いのち〉は、主おひとりから来るものです。なお、その〈いのち〉は、あたかも人間の所有のように見えますが、それは、人間が主を受け入れる器になるため、主がなさることです。

しかし、人が、その〈いのち〉を自分の所有のように思い、主をお受けする器ではなくなる恐れがあるため、主もまた、「善」と名のつくすべての愛と、「真理」と名のつくすべての英知は、主からくるも

ので、人間から出るものは何もないと、教えられました。以上の二つは〈いのち〉です。したがって〈いのち〉と言えるすべての〈いのち〉は、主からくるものです。

395. 霊魂は、その存在そのものとして考えれば、愛と英知です。そしてこの二つは、人間のうちにありながら、主からくるものです。したがって、人間には、主の住まいでもある二つの器がつくられました。一つは愛のための器であり、もう一つは英知のための器です。愛のための器は「意志」と言われ、英知のための器は「理性」と言われます。

さて、主にあつては、愛と英知は区別されながらも一つです *distincte unum*（前17～22節を参照のこと）。その神聖な愛は、主の神聖な英知からくるものです。またその神聖な英知は、主の神聖な愛からくるものです（34～39節）。そしてこれらは、神人すなわち主から同時に発出しています。そのため、人間の中には、意志と理性という二つの器、あるいは住まいがありますが、これはおたがいに区別されながら、どんな作用・知覚にも、一つのものとして働くよう、主によって造られました。意志と理性は、その働きの中では分離できません。

たしかに人間は、その器または住まいになることが可能です。その目的達成のため、ぜひ必要なことは、人間の理性が、みずからにあるエゴの愛を越えて、ある種の英知の光にまで高められることです。その英知に該当する愛にいたらなくても、その光によって、いかに生活すべきかを見、教わることです。こうして、やがてその愛の中に到達し、永遠の至福を味わうことができますようになります。

人間にはエゴの愛を越えて、理性を高めていく能力が備わっていません。ところがその能力を乱用した結果、主の器・住まいになれる可能性をぶち壊してしまいました。主のみ力によって、愛と英知の器になれたのに、自分の意志を、自己愛と世間愛の住まいにし、自分の理性を、そのような愛を肯定するための根城ねじろに化してしまいました。意志と理性という二つの住まいが、一つは地獄の住まいとなり、もう一つは、それを弁護するための、地獄的思考の住まいになりました。地獄では、そのような思考を英知と呼んでいます。

396. 自己愛と世間愛は、地獄的な愛になりました。人間は、この愛の中にひたって、自分のうちにある意志と理性を駄目にしてしまいました。それは、なぜでしょうか。

自己愛も世間愛も、創造された当初は天界的なものでした。霊的な愛に仕えていくための自然的人間のもつ愛でした。それは、家屋で言えば、土台のようなものです。人は、自己愛と世間愛があって、自分の肉体の世話をしたいと思います。養分をとり、衣服を着せ、住まいを設け、家を管理し、人のため自分の役目を果たそうとします。さらに、従順につとめを果たした価値にしたがい、誉れを得、この世の与える喜びを味わい、レクリエーションもしたいと思います。

ところが、これはすべて、役立ちという目的があつてのことです。以上をとおして、主に仕え、隣人に仕える結果になります。しかしもし、主に仕え、人に仕えたいと思う愛が皆無で、この世を使って、自分に仕えようとする愛しかなければ、その愛は、天上の愛から、地獄の愛に化してしまいます。それは、人は自分の精神と靈魂を、エゴの

中にひたしてしまうからです。エゴは、それ自身としては、すべて悪です。

397. さて人間は、意志では地獄にありながら、理性では天界にすることができます。こうして精神が二分されます。しかし、そうならないため、死後は本人のエゴの愛以上に、はみ出る理性的なものは、すべて取り除かれます。こうして、どんな人でも意志と理性が一つになって働きます。すなわち天界にいる人の場合、意志は善を愛し、理性は真理を思います。地獄にいる人の場合、意志は悪を愛し、理性は偽りを思います。

この世にあっても、人は一人でいるとき起こることで、自分の霊をもとにして考えると、そんなふうになります。しかし一人でないときは違ってきます。つまり多くの人は、肉体の中にあっては、考えることと欲することが別々です。それが別々になるのは、自分の理性を、〈自分の意志〉すなわち〈自分の霊〉のもつ固有な愛以上に、高めているからに他なりません。

以上述べてきたことは、意志と理性が二つのものとして区別されながらも、一つのものとして働くよう、造られている事実を知っていただくためです。なお、一つのものとして働くよう、生きている間そうならなければ、死んでから強制されます。

398. 今まで、愛と英知および意志と理性があって、それが靈魂と呼ばれていることに触れました。次は、靈魂がどのようにして肉体の中で活動し、そのすべての作用を行なっているかについて述べようと思います。これは、心臓と意志とのあいだの相応、肺臓と理性とのあ

いだの相応から分かってきます。なお、この相応によって次のようなことが明確になります。

- ① 愛すなわち意志は、人間の〈いのち〉そのものである。
- ② 愛すなわち意志は、人間の〈かたち〉をつくろうと、絶えずつとめている。またそれは、人間の〈かたち〉からくるあらゆるものに向かう推進力である。
- ③ 愛すなわち意志は、英知すなわち理性との結婚がなかったら、みずからの人間の〈かたち〉を介して、何かをすることができない。
- ④ 愛すなわち意志は、英知すなわち理性という未来の妻のため、家すなわち私室を用意する。
- ⑤ 愛すなわち意志は、また、みずからの人間の〈かたち〉に属するあらゆるものを用意する。それは、英知すなわち理性といっしょになって、働けるようになるためである。
- ⑥ 結婚式が行われたあと、初めての結合は〈知ることへの情愛〉をとおして行われる。ここから〈真理への情愛〉が生まれる。
- ⑦ 第二回目の結合は、〈理解することへの情愛〉をとおして行われる。そこから、真理への感知力が生まれる。
- ⑧ 第三回目の結合は、真理を見ることへの情愛をとおして行われる。そこから思考が生まれる。
- ⑨ 愛すなわち意志は、以上の三つの結合をとおして、みずからの感覚的〈いのち〉と、みずからの活動的〈いのち〉のうちにある。
- ⑩ 愛すなわち意志は、自分の家のすべてのものの中に、英知すなわち理性をみちびき入れる。
- ⑪ 愛すなわち意志は、妻との結合の状態を経ないで、何も行なわな

い。

- ⑫ 愛すなわち意志は、英知すなわち理性と結合し、英知すなわち理性が、相補的に結びつくようにする。
- ⑬ 英知すなわち理性は、愛すなわち意志から自分に与えられた能力によって、高められ、光に属するものを天界から受け、それを感じとることができる。
- ⑭ 同様に、愛すなわち意志は、高められうる。しかも、自分の妻である英知をその程度の高さで愛するなら、天界からくる熱に属するものを感じとることができる。
- ⑮ そうでない場合、愛すなわち意志は、みずからと行動をとともにさせるため、英知または理性をその高さから低める。
- ⑯ 愛すなわち意志は、もし同様に高められるなら、理性の中にある英知によって純化される。
- ⑰ 愛すなわち意志は、もし同様に高められないなら、理性の中で、あるいは理性によって唾をはきかけられる。
- ⑱ 理性の中で、英知によって純化された愛は、靈的または天的になる。
- ⑲ 理性の中で、しかも理性によって唾をはきかけられた愛は、自然的あるいは感覚的になる。
- ⑳ それにもかかわらず、合理性と言われる理解能力は残るし、自由選択力と言われる行動能力は残る。
- 21 靈的・天的な愛は、隣人愛であり主への愛である。自然的・感覚的な愛は、世間愛であり自己愛である。
- 22 仁愛と信仰との関係、およびその結びつきにかんしては、意志と理性の関係、およびその結びつきと同じである。

399.① 愛すなわち意志は、人間の〈いのち〉そのものである。

これは、心臓が意志に相応していることから分かります。心臓が身体の中で働いているのと同じく、意志は精神の中で働いています。身体にあるすべてのものが、その実在と運動の点で、心臓に依存しているのと同じように、精神にあるすべてのものは、その実在と〈いのち〉の面で、意志に依存しています。ここで言う「意志」は「愛」とも言えます。意志は愛の器であり、愛は〈いのち〉そのものだからです（前1～3節参照）。愛は〈いのち〉そのもので、主おひとりのみ力によります。

動脈や静脈をとおして、心臓とその働きの延長が、体中に行きわたっていることから、愛すなわち意志こそ、人間の〈いのち〉であることが分かります。一方は自然的、一方は霊的であるという違いがあり、心臓に相応する意志は、同様のことを行なっています。

心臓が体の中で、どのように活動しているかは、解剖学から証明できます。心臓の諸器官をとおして活動しているところでは、生気がみなぎり、〈いのち〉の流れに沿って進みます。それにたいし、心臓がその諸器官をとおして活動しないところでは、生気はありません。

さらに心臓は、身体の内部で活動を行う最初のものであるとともに、最後のものです。最初のもは、胎児を見れば分かり、最後のものは、死んで行く人を見れば分かります。それが肺臓の協力をまたなくとも行なわれることは、窒息した人や、失神した人からも、見きわめることができます。

以上から、身体にある〈いのち〉も、その従属的なものは心臓だけに依存しているのと同じように、精神的〈いのち〉は、意志ひとつに依存していることが分かります。また胎児や、死んでいく人や、窒息

した人、失神した人に見られるように、呼吸が止まっても心臓が働くように、意志は、思考が止まっても生きています。以上のことから、愛すなわち意志こそ、人の〈いのち〉そのものである事実がはっきりします。

400.② 愛すなわち意志は、人間の〈かたち〉をつくろうと、絶えずつとめている。それはまた、人間の〈かたち〉からくる、あらゆるものへ向かう推進力である。

以上は、心臓が意志に相応していることから分かります。周知のとおり、身体のすべては母胎の中で形づくられ、それも脳から始まる繊維と、心臓からくる血管で組成がおこなわれ、しかも、あらゆる器官と内臓の組織も、脳と心臓の二つから成っています。

それから分かりますが、人間にあるすべてのものは、愛すなわち〈意志のいのち〉から出発し、脳に由来するその始源の力で、繊維をつかって実在するようになります。そして、身体にあるすべてのものは、心臓から始まって、動脈と静脈をつかって実在します。

以上から、愛であるとともに意志でもある人の〈いのち〉は、人間の〈かたち〉をつくるよう、絶えずつとめていることが、明らかになります。そして人間の〈かたち〉とは、人間のうちにある、ありとあらゆる部分から成りたっているため、愛すなわち意志は、そのあらゆるものを形づくろうとする、不断の努力と推進力をもっていることになります。

この人間の〈かたち〉にむかう努力と推進力が存在するわけは、神は人であるからです。すなわちその方の〈いのち〉は、神の愛と神の英知です。この方はすべての〈いのち〉の本源です。

人間そのものにまします〈いのち Vita〉が、それ自身〈いのち〉ではないものの中で働いていないなら、人間の中に現在あるようなものが、形づくられるはずはないことが、だれでも分かります。人間の中には、何千何万という部分があっても、それが一つとなって働き、本源である〈いのち〉そのものであるお方の像にむかって、心一つにして共鳴し、人間がそのお方の器・住まいになっていくことができます。

以上のことから、愛、またその愛からくる意志、またその意志からくる心臓は、人間の〈かたち〉をつくろうと、絶えずつとめていることが分かります。

401.③ 愛すなわち意志は、英知すなわち理性との結婚がなかったら、みずからの人間の〈かたち〉を介して、何かをすることができない。

これもまた、心臓と意志との相応によって分かります。胎児は肺臓によらず、心臓によって生きています。まだ血液が心臓から肺に流れておらず、肺は呼吸する力を与えられていません。それで、心臓の左心室に通じる穴をとおして呼吸しています。したがって胎児は、まだ身体を少しも動かすことができず、しばられたようになって、じっとして、感覚もはたらかすことができません。感覚を働かせる諸器官も閉ざされています。

愛すなわち意志についても、これと同じことが言えます。意志によって、たしかに生きてはいますが、漠然として生きています。つまり、感知と活動に欠けています。

ところが、出産によって肺臓がひらくと、すぐさま、感じたり動い

たりし始めます。それと同時に、欲求したり思いめぐらしたりもしません。以上から、愛すなわち意志は、英知すなわち理性との結婚がなければ、みずから人間の〈かたち〉をしていますが、それを用いて、何かをすることができません。

402.④ 愛すなわち意志は、英知すなわち理性という未来の妻のため、家すなわち私室を用意する。

造られた全宇宙と、その個々のものの中には、善と真理との結婚があります。善は愛からのもの、真理は英知からのもので、この愛と英知の二つは主の中にあり、万物は主によって創造されました。このような結婚が、どんなふう人間の中に実在するかは、心臓と肺臓との結合をよく観察してみれば分かります。心臓は、愛すなわち善に相応し、肺臓は、英知すなわち真理に相応しています（378～381節、382～384節で前述しました）。

この結合を見ると、愛すなわち意志が、英知すなわち理性にむかって婚約するようしむけ、そのあと英知を、あたかも結婚するかのよう導き入れる様子がよく分かります。つまり、英知のために家または私室を用意するという、これは婚約です。それから、情愛をとおして英知を自分と一体化させること、これが導き入れです。そして、愛は英知といっしょに、その家にあつて英知を実践します。

このようなことは、靈的〈ことば〉をつかわないかぎり、充分表わすことができません。愛と英知、それに意志と理性は、靈的なものだからです。もちろん、自然の〈ことば〉でも伝達できますが、ぼんやりと感じとる程度でしかありません。なぜなら、愛とは何か、英知とは何か、善い情愛とは何か、真理への情愛とも言える英知の情愛とは

何かが、よく分かっていないからです。

とは言え、以上のことがらには、心臓および肺臓とのあいだの相違があるため、それと並行して考えれば、愛と英知、または意志と理性とのあいだの婚約とか結婚が、どんなものか分かってくるでしょう。つまり、心臓と肺臓との関係は、意志と理性との関係に似ています。一方は自然的な関係で、他方は霊的な関係です。それ以外は何の違いもありません。

心臓および肺臓の関係から知れることは、心臓が先にあつて肺臓を〈かたち〉づくり、そのあと心臓は、自分を肺臓に結びつけることです。つまり心臓は、母胎の中で肺臓を形成し、出産のあと肺臓とむすびつきます。

以上を、心臓自身は、「胸部」と言われている自分の家の中で行います。そこは「横隔膜」と言われている仕切り、および、「肋膜」と言われているベールによって、体の他の部分から切り離されている場所で、ここが心臓と肺臓の共同住宅になっています。これは、愛と英知、意志と理性の関係についても同様です。

403.⑤ 愛すなわち意志は、また、みずからの人間の〈かたち〉に属するあらゆるものを用意する。それは、英知すなわち理性といっしょになって、働けるようになるためである。

「意志と理性」と言いながらも、実際は、意志こそ全人間であるということを知らなくてはなりません。意志は理性といっしょになって、脳の中に始源的に存在し、身体の中に派生力をもって存在しますが、それはまた、人間全体の中にも、各部分の中にも存在することは、前（365～367）節で述べたとおりです。したがって意志は、人

間全体がもつ共通の〈かたち〉、および全体の中の個々の〈かたち〉の面から見て、全人間 *totus homo* です。それにたいし、理性は意志の伴侶 *consocia* です。つまり、心臓に属する肺臓のようなものです。

意志は、人間の〈かたち〉から切り離された何かではありません。そんなふうには考えないよう、注意しなくてはなりません。同じものなのです。したがって、意志が理性のために、私室を用意するとはどんなことか、理性といっしょに行動できるよう、自分の家、つまり身体全体のうちにある万事をととのえろとは、どんなことなのか、分かってきます。

用意し、ととのえろと言うことは、身体の個々全体が意志にむすびついているのと同じように、理性にもむすびつくようにすること、あるいは、身体の個々全体が、意志にしたがって動いているように、理性にもしたがうようにすることです。身体の個々全体が、意志とむすびついているように、理性にもむすびつくためには、その用意がどんなふうに使われていくかについては、人体解剖学によって観察し、イメージをつかんでおく以外にはありません。それによって、人体にあるすべての部分が、どんなふうに関連されているかが分かります。肺臓が呼吸すると、その肺の呼吸によって人体の個々全体が活動します。これは、心臓の鼓動でも同じです。

心臓は、心耳 *auricula* によって肺臓と連結しており、肺臓の内部組織にもつながっていることは、解剖学で知られています。また、体全体の内臓は、ぜんぶ靭帯で胸房とむすびついています。そのため肺で息をすると、身体にある個々全体は、全体としても部分としても、そのような呼吸運動の影響を受けるわけです。つまり、肺が息を吸う

と肋骨が胸部を広げ、肋膜はひろがり、横隔膜もひろがって、靭帯によってつながっている内臓はすべて、肺臓の活動をとおして、ある種の活動をいとなみます。

解剖学にくわしくない人が、以上の学術用語を知らないからと言って、問題が反って曖昧にならないよう、あまり多くを口にしないことにしましょう。ただ、解剖にくわしい人や専門家に尋ねてみてください。からだ全体のあらゆる部分が、胸部から内部臓器につながっていて、肺が息をして広がると、個々全体が、肺に同調した活動にむかって、刺激されるかどうか分かります。

意志の力によって、人間の〈かたち〉がもつ個々全体と理性との結合が、いかにうまくととのえられるか、ここで解明できたと思います。その連結のところに注意し、解剖する人の眼でよく調べてください。そのあと、その連結にしたがって、肺が息をするのと、心臓が動くのときに、それが協力して働いているのに眼をとめてください。それから、肺臓の代わりに理性を置き、心臓の代わりに意志を置いて、考えてみるとよく分かります。

404.⑥ 結婚式が行われたあと、初めての結合は、〈知ることへの情愛〉をとおして行われる。ここから、〈真理への情愛〉が生まれる。

結婚式とは、出生後の人の状態のことです。無知の状態から始まって理知の状態になり、それから英知の状態になることです。

全くの無知の状態が最初で、このときは結婚式はまだ行われません。なぜなら、理性で思いめぐらすことは何もないし、愛あるいは意志からくる漠然とした情愛だけだからです。この状態のときは、依然とし

て結婚式をする手前のところでは。

二番目に来るのは、人間にとって幼少年期に該当します。そこで周知のとおり、〈知ることへの情愛〉が生まれます。この時期で、幼児・少年は話すこと読むことを覚え、そのあと、理性的なことを少しずつ覚えていきます。意志に属する愛が、それを行っていくことには、疑いの余地がありません。愛すなわち意志がはたらかないと、そのようなことは行われなからずです。

〈知ることへの情愛〉は、どんな人にも生後かならずあります。そして、理性が段階的に形成され、成長し、完成されていくような内容を、この情愛によって習得していきます。それはだれでも、道理をもとにし、体験を調べれば、認められます。

〈真理への情愛〉も、そこから出てくることは明らかです。人は、〈知ることへの情愛〉によって理知的になります。そのあとは、〈知ることへの情愛〉によって動かされるのではなく、家庭、公共生活、道徳など、また〈推論していく情愛〉や、自分の愛することがらを結論的にもっていく情愛によって、動かされるようになります。この情愛が靈的なものにまで高められると、〈靈的真理への情愛〉になります。

〈知ることへの情愛〉こそ、最初で手始めの状態であることは、〈知ることへの情愛〉が高められて、〈真理への情愛〉になっていくことから分かります。なぜなら、真理に感動することは、情愛をもって真理を知りたいと思うことで、それを発見すると、情愛のよろこびをもって、その真理を汲みとるからです。

⑦ 第二回目の結合は、〈理解することへの情愛〉をとおして行わ

れる。そこから、真理への感知力が生まれる。

これは、合理的直感力をつかって吟味していく人なら、だれでも認められます。〈真理への情愛〉と〈真理への感知力 perceptio veri〉は、理性がもつ二つの能力であることは、合理的直観から分かると思います。しかも、この二つの能力は、ある人にとって一つになって働き、別の人の場合は一つになりません。理性によって、真理を感じとり percipere たいと思っている人は一つですが、ただ、真理を知りたいと思ってるだけでは、一つになりません。

明らかに人は、〈理解することへの情愛〉をもっていればいるほど、〈真理への感知力〉をもっています。真理を理解したいという情愛を消し去ってしまうと、〈真理への感知〉は何もありません。それにたいし、真理を理解したいという情愛を感じると、本人の情愛の程度に応じて、本人の感知力も生まれます。理性 ratio は、どんな人間にも完璧に備わっていて、〈真理を理解したいという情愛〉があれば、〈真理の感知力〉も欠けることはないからです。合理性 rationalitas と呼ばれている〈真理を理解する能力〉は、人間にはみな備わっていることは、前述したとおりです。

⑧ 第三回目の結合は、〈真理を見ることへの情愛〉をとおして行われる。そこから思考が生まれる。

〈知ることへの情愛〉と、〈理解することへの情愛〉と、〈真理を見ることへの情愛〉は、それぞれ別ものです。すなわち、真理への情愛、真理への感知力、冥想思考は、それぞれ別ものです。以上は、精神作用をはっきりと感じとっていない人には、ぼんやりしてありますが、それをはっきり感じとれる人には明確です。

精神作用をはっきりと感じとっていない人には、ぼんやりしていると言いましたが、それは〈真理への情愛〉や〈真理への感知力〉があっても、思考の中ではいっしょで、そのため判別できないからです。

人は、自分の霊が身体的に思考しているとき、それはとくに、仲間がいるか、他の人といっしょのとき起こるということを明確に意識します。

それにたいして、〈理解することへの情愛〉のうちにあって、それによって真理を感じとる場合、自分本人の霊が考えているわけですから。つまり冥想している *meditatio* のです。その冥想は身体的思考の中に入っていきますが、それも静かに入ります。冥想は、身体的思考の上を行き、記憶をもとにした思考内容を、あたかも眼下に見おろすように直視しています。その思考内容をもとにして、結論をくだしたり確認したりします。

以上から、〈真理への情愛〉と、〈真理への感知〉と、冥想思考の三つがあって、それが順序よく続いているのが、明らかになります。それは愛から発しており、理性の中にしか実在しません。すなわち、結合が行われたあと、愛が理性の中へ入っていき、そのとき最初に〈真理への情愛〉が生まれます。それから、知ったことを〈理解することへの情愛〉が生まれます。それから最後に、理解したことを身体的に思考する中に、〈真理を見る情愛〉が生まれます。冥想思考とは、内観 *visus internus* にほかなりません。

まず最初に、普通の思考が実在しますが、それは、自然的精神に帰属するものです。次に〈真理への情愛〉からの〈真理への感知〉をもとにして、究極的に冥想思考が現われます。これは、英知から出る思考とも言える思考で、前者は自然的精神の直観をとおして、記憶をも

とに考える思考です。理性の外で、愛すなわち意志による働きはすべて、〈真理への情愛〉には関係がありません。善い情愛に関係があります。

405. 意志による愛から、理性の中で、以上の三つが順序よく続いてくることは、理性のある人間なら理解できるはずですが、ただし、はっきりと見えてくるわけではないので、信じにくいかも知れません。

前述したように、意志による愛は、相応によって心臓と一つになって働き、理性による英知は、肺臓と一つになって働いています。したがって、〈真理への情愛〉、〈真理への感知〉、(冥想) 思考などについて、(404節で) 前述したことは、肺臓とその組織機構を見れば、はっきり分かるし、確認もできます。これについて、少し触れておきます。

出生のあと、心臓の右心室から肺に血液が送られます。肺を通過したあと、血液は心臓の左心室に入ります。こうして肺臓は活動を始めます。これは、肺にある動脈と静脈をつかって、心臓がする働きです。

肺には気管支があって、それも小さな枝に分かれていて、それが気胞に入り、そこから肺の力で空気が外に出、呼吸が行なわれます。気管支とその枝の周囲には、動脈と静脈があり、それを気管支脈と言います。これは、気管支の奇静脈すなわち空静脈 *vena cava* および大動脈のことです。この動脈と静脈は、肺にある動脈と静脈からは区別されています。そこで血液は、二つの血管をとおって肺の中に入り、二つの血管をとおって、肺から出ていくことが分かります。また肺は、心臓の鼓動と同一の速度で呼吸をしていません。つまり周知のとおり

り、心臓の交互運動と、肺臓の交互運動は同時ではありません。

前述したように、心臓および肺臓は、意志および理性にたいして相応関係をもっています。そして、その相応にもとづく結合は、一方の働きがあれば、他方もあるといったつながり方をしています。つまり心臓に始まって、血液が肺に流れるのを見ると、どのようにして、意志に始まって、流入が理性の中に流れていくかが分かります。先程（404節で）前述したように、〈真理の情愛と感知〉や思考について言われたことを、意志が行なっているわけです。わたしは、この相応から、以上を教わりましたが、まだいろいろ述べることで、多くを教わります。

愛すなわち意志は、心臓に相応し、英知すなわち理性は、肺臓に相応します。したがって、肺臓の中にある心臓からの血管は、〈真理への情愛〉に相応し、肺臓にある気管支の分脈は、その情愛からくる感知力や思考に相応します。

肺臓の組織をその根源から調べ、それを〈意志の愛〉および〈理性の英知〉と並行して考えてみると、（404節で）前述したことが、ある種のイメージをもって見えてくると同時に、信用がおけると確信できます。ただし心臓や肺臓について、解剖学の教える内容を知っている人は少なく、不明の用語で何かを確認しようとする、漠然としてしまう結果になるため、これ以上多くの〈ことば〉を使って、この並行関係を証明することは、控えます。

406.⑨ 愛すなわち意志は、以上三つの結合をとおして、みずからの感覚的〈いのち〉と、みずからの活動的〈いのち〉のうちにある。

理性を伴わない愛、つまり理性的思考を失なった愛の情愛は、からだの中で感じることはないし、活動することはありません。理性のない愛は、めくらのようであり、思考のない情愛は暗闇の中にいるようです。理性とは、愛が見えるための元になる光ですし、理性による英知は、〈太陽〉である主から発出する光から来ます。

このように、意志の愛は、理性の光がなかったら何も見えず、めくらですから、肉体の感覚もまた、理性の光がなければ、盲目であるばかりか、肉の塊でしかありません。視覚も、聴覚も、その他の感覚もそうです。その他の感覚もそうなるわけは、前述のとおり、理性の中に愛があって、はじめて本当のことが感知されるわけで、肉体の感覚は、みな本人の精神の感知力をもとにして、感じとるようになります。

身体的活動も、みなそれと同じです。理性を失なった愛をもとにした行為は、闇夜の中で、人がおこなう行為に似ています。何をしているのか自分でも分かりません。したがって、行為の中に理性や英知からくるものが何もない場合、その行為は生きた行為とは言えません。行為には愛あってこそ、それなりの存在が生まれ、理知あってこそ、それなりの性格が生まれます。

それだけではありません。善の可能性は、すべて真理をとおして生まれます。善は真理のうちにあり、しかも真理を介して働きます。しかもなお、善は愛のもの、真理は理性のものです。

以上から、愛すなわち意志は、（404節で）前述したように、以上三つの結びつきをとおして、それ自身の感覺的〈いのち〉のうちにあるとともに、活動的〈いのち〉のうちにもあることが、把握できたとおもいます。

407. 以上は、心臓と肺臓の結びつきを見ると、生き生きと立証されます。つまり、意志と心臓とのあいだ、理性と肺臓とのあいだには、相応の関係があります。愛は理性と一つになって、靈的に活動するとともに、心臓は肺臓と一つになって、自然的に活動します。そこで、前述したことが、眼前にイメージとして見えてきます。

心臓と肺臓がいっしょに働かない場合、人には感覚的な〈いのち〉は何もなく、活動的な〈いのち〉もありません。これは、胎児つまり母胎の中の子と、生後の状態を見れば分かります。

人が胎児のとき、すなわち母胎にあるあいだ、肺が閉ざされたままで、何の感覚も活動もありません。感覚器官は閉じ、両手はしばられたようあり、両足も同様です。ところが、生まれると肺が開きます。開いた途端に、人間として感じ活動します。心臓から血液が送られることによって、肺が開きます。

心臓と肺臓の共同作業がなかったら、人には感覚的〈いのち〉はなく、活動的〈いのち〉もありません。失神した人を見れば分かります。その場合、心臓は動いても、肺臓は動きません。呼吸が止まっています。そのとき、感覚で感じることも、動くこともないことは周知のとおりです。溺れた人や、喉に何かつまって、肺臓の呼吸器官がふさがれた人についても同じことが言えます。感覚を失い、動かなくなるため、死んでいるように見えますが、まだ生きていることは、心臓によって分かります。肺の障害物が除去されるやいなや、感覚的〈いのち〉も活動的〈いのち〉も回復します。血液はそのあいだ、肺動脈と肺静脈をとおって循環しており、気管支動脈、気管支静脈を通りません。これが呼吸を可能にするわけです。愛が理性におよぼす流入についても、同じことが言えます。

408.⑩ 愛すなわち意志は、自分の家のすべてのものの中に、英知すなわち理性を導き入れる。

愛または意志の家とは、精神にかんするすべての面での全人間 totus homo を言います。（前述したと思いますが）、精神面でのすべては、肉体面でのすべてと相応しているため、家とは、肢節・器官・内臓と言われる肉体面でのすべてを含む全人間を指します。

肺が身体的全領域に入っていくように、理性は精神的全領域に入っていきます。これは、前述したことから明らかです。たとえば、愛すなわち意志は、英知または理性という自分の将来の妻のために、家すなわち私室を用意します（402節）。それと同時に、愛すなわち意志は、英知すなわち理性と一致して働くことができるよう、自分の家、すなわち自分の人間の〈かたち〉に属するあらゆるものをととのえます（403節）。

その箇所ですべてのことで、次のことが分かります。身体全体にある個々全体の器官は、肋骨・脊椎・胸骨・横隔膜・および以上に依存する腹膜からくる^{じんたい}靭帯でつながり、それが肺の呼吸にもなって、相互の活動を同時に進行・継続させるようになっていることです。

呼吸の交互作用は、内臓自身にまでも影響を与え、その一番奥まったところにまで及んでいることは、解剖によって明らかになっています。前述の靭帯は、これが内臓の表皮につながっていて、その表皮は、ずっと内臓の奥まで及んでおり、ちょうど動脈や静脈の枝が延びているような感じです。

そのように、身体の個々全体にわたって、肺臓の呼吸は、心臓と完全に一つになって働いています。その結びつきを、一層完璧にし

ているのは、心臓自身が肺の運動をそのまま受けていることです。心臓は、肺のふところにいだかれ、心耳によって肺と連結し、横隔膜の上におさまっています。しかも、その横隔膜の動脈をとおして、肺の呼吸と連動しています。さらに、胃は食道や気管と連結していて、それによって同じような結びつきをもっています。

以上の解剖学的説明を付け加えたのは、愛すなわち意志と、英知すなわち理性が、どんなふうに使われているか、また両者が、精神のあらゆる働きに同調している様子を見ていただくためです。

409. ⑩ 愛すなわち意志は、妻との結合を経ないでは何も行わない。

理性がなかったら、愛には何の感覚的〈いのち〉もないし、何の活動的〈いのち〉もありません。なお、愛は精神の全領域に理性を導入します。（前407、408節で述べました）。そういうわけで、愛すなわち意志は、理性との結びつきがなかったら何もしません。理性のうちにない場合、愛が実行できることは何でしょう。それは、不合理 *irrational* しかありません。

理性は、何をしたらいいか、どのようにしたらいいかを教えます。愛に理性が欠けていたら、このようなことは何も分かりません。したがって、愛と理性とのあいだには、二つのものでありながら、一つのものとして働くような結婚があるわけです。同じような結婚は、善と真理とのあいだにもあります。善は愛に属するもの、真理は理性に属するものです。このような結婚は、主が創造なさった宇宙の個々のものの中にあります。その役立ちは善に関係があり、その役立ちの〈かたち〉は真理に関係あります。

人の身体の個々あらゆる部分の中に、右と左があつて、右は、真理の出所としての善に関係をもち、左は、善の出所としての真理に関係をもち、このようにして結合するようになっているのは、以上のような結婚がもとになっています。

人体に、平等の対（つい）があるのはそのためです。二つの脳があり、脳の半球も二つあります。心臓の心室は二つ、肺臓の葉は二つ、眼、耳、鼻、腕、手、腰、足、腎臓、睪丸、その他は、それぞれ二つあります。平等の対になっていない場合、右と左にあります。

以上のようにしているわけは、善は、みずから実在するために、真理をめざしますが、真理は、みずから存在するために善をめざしているためです。天使的天界においても、その各社会においても、そのようになっています。

愛すなわち意志は、英知すなわち理性との結婚がなかったら、みずからの人間としての〈かたち〉をつかつて、何もすることができないことは、（401節）で、詳細にわたる内容を参照すれば、分かります。悪と偽りの結合については、善と真理との結合に対立するものとして、別のところで触れるつもりです。

410. ⑫ 愛すなわち意志は、英知すなわち理性と結合し、英知すなわち理性が、相補的に結びつくようにする。

愛すなわち意志が、英知すなわち理性に結びつくのは、心臓が肺臓と相応していることから分かります。解剖の実験では、心臓は、肺がまだ動いていないのに、〈いのち〉の鼓動を続けるということです。失神した人、窒息した人、胎内の胎児など、卵の中にいるヒナによって経験して教わります。

解剖実験で教わることは、心臓がまだ単独で働いているあいだに、肺臓をかたち造っていくことです。そこで呼吸ができるように肺の調節をします。しかもなお、他の内臓や器官をかたちづくり、その器官をつかって、いろいろの役立ちが果たせるようにします。顔面にある器官は、感じるができるため、運動の器官は、活動することができるため、また他の器官は、愛の情愛に対応する役立ちを果たすことができるために、かたちづくられます。

心臓は、みずから人体内で、やがて各種機能を果たしていく目的で、このような器官をつくっていきます。それと同じように、愛も、意志と呼ばれている自分の器の中で、愛自身の〈かたち〉をつくる各種の情愛をあらわしていくのが目的で、働きかけることが、ここで初めて明らかになります。その愛の〈かたち〉とは、人間の〈かたち〉のことであることは、前述したとおりです。

愛の情愛とは、その最初で身近なものは〈知ることへの情愛〉であり、〈理解することへの情愛〉であり、〈知り理解したことを見る情愛〉です。そこから当然分かることは、以上の情愛をめざして、愛は理性の〈かたち〉を造っていくことです。それも、感じたり動いたりし始め、考えることを始めるとともに、愛はそのような情愛の中に入っていきます。理性みずからそれには貢献しないことは、前述したように心臓と肺臓の並行関係からも理解できます。

愛すなわち意志は、英知すなわち理性にむかって結びついていきますが、英知すなわち理性が、愛すなわち意志に結びついていくわけはないことが、以上で分かってきます。そこで言えることは、次のとおりです。〈知ることへの情愛〉から発して、愛が自分のために求める知識も、〈理解することへの情愛〉から発して、愛が求める〈真理

の感知)も、〈知り理解したことを見る情愛〉から発して、愛が求める〈思考〉も、理性に由来するものでなく、愛に由来するものです。思考にしても、感知にしても、さらに知識にしても、霊界を起源にして流れてきます。しかしそれを受け止めるのは理性ではありません。むしろ理性のうちにある本人の情愛にしたがって、愛が受けとめます。

それを受けとめるのは、一見、理性でも意志でもないように見えますが、それは偽りです。また理性が、愛または意志にたいして、結びついていくように見えますが、これもまた偽りです。愛または意志こそ、理性に自分をむすびつけ、相補的なつながりができるように働きかけています。相補的にむすばれるようにする働きは、英知を相手にし、愛がむすぶ結婚によります。それで初めて、〈いのち〉と〈愛の力〉によって、相補的になって見える結合が生まれます。

善と真理とのあいだの結婚も同じです。善は愛に属するもの、真理は理性に属するものです。そして、万事を取り仕切るのは善のほうです。善が真理を自分の家へ招き入れ、おたがいに調和すれば、善は真理と結ばれるように働きかけます。善は自らと調和しない真理を招き入れることもあります。それは、〈知ることへの情愛〉や〈理解することへの情愛〉や、〈それについて考えることへの情愛〉から発していて、役立ちにたいする態度が決定していない場合です。役立ちこそ善の目的です。それは善の中の善と呼ばれます。

真理が主体になって、善にむかって働きかけるような相補的結合は、実際は存在しません。相補的に結びつくとなると、善がもつ〈いのち〉が出発点になります。

したがって、どんな人間でも、またどんな霊や天使でも、主から注目されるとすると、本人の愛と善がもとになっているわけで、愛や善

から切り離された理性や真理がもとになることはありません。

前述したように、人の〈いのち〉はその人の愛です。人の〈いのち〉は、あたかも、真理をつかって、みずからの情愛を高めていくようなものです。あるいは、英知をもとにして、情愛を完成していくようなものです。愛の情愛は真理をとおして、つまり英知をとおして高められ、完成していきます。ここで、愛が英知といっしょになって働いており、しかも英知が起動因になっているように見えます。しかしむしろ、愛がみずから起動因となり、英知をつかって働いています。あるいは、愛の〈かたち〉をつかって働いています。この〈かたち〉は、理性からは何も引き出してはいません。すべては、愛が特定化して生じています。この特定化こそ情愛です。

4 1 1. 愛にとっては、自分に好意をもってくれるものはすべて、〈自分にとっての善〉と呼びます。また、その善にみちびくための手段として働いてくれるものをすべて、〈自分にとっての真理〉と呼びます。それが手段であるからこそ愛されもするし、自分の情愛に属するものになります。こうして情愛が〈かたち〉をとってきます。

したがって真理とは、〈愛に属する情愛のかたち〉以外の何ものでもありません。また、人間の〈かたち〉とは、愛に属する〈あらゆる情愛のかたち〉以外の何ものでもありません。

美 *pulchritudo* とは、真理をつかって、自分なりに会得する理知のことで、その真理は、外的と内的の視覚または聴覚で捕えるものです。愛はこの真理を、自分のもつ〈情愛のかたち〉におさめて行きますが、その〈かたち〉は千差万別です。それでも、すべての〈かたち〉には共通点があります。それは、人間であるという共通の〈かた

ち)です。このような〈かたち〉は、愛する本人にとって美しくもあり、魅力的です。それ以外のものは、本人にとって美しくもないし、魅力的ではありません。

愛の側から、理性に自分を結びつけていくわけで、その逆ではないことが、ここではっきりします。この相補的なつながりは、愛に発する働きです。愛すなわち意志が働いて、英知または理性が相補的に結びついてくるとは、以上のような意味をもっています。

4 1 2. 以上述べたことは、前述した心臓と愛の相応、肺臓と理性の相応をもとにすれば、ある種のイメージの下で、明らかになります。心臓は愛に相応していますが、それはまた、動脈や静脈のように、心臓の動きが具体化された部分は、情愛に相応しており、肺臓につながる部分は、〈真理への情愛〉に相応します。肺臓にも、気管 *aerifera* と呼ばれているものがあって、これによって呼吸が行われます。それでこの気管は、情愛に相応しています。

肺の中の動脈や静脈は、情愛そのものではないし、呼吸は、感知力でも思考力でもないことは、誤解のないようお願いします。ただそれらは相応していること、つまり対応して、同時的にはたらいっていることです。それと同じく、心臓にしても肺臓にしても、それが愛であり理性であるのではなく、互いに相応しています。相応しているとは、おたがいの中に相手が見えることです。

解剖によって肺臓の様子がすみずみまでよく分かり、しかもそれを理性で追究してみると、理性は、自分の力では何も動かないし、感知しないし、思い考えることもなく、みな、愛による情愛をもとにしていることが明らかになります。このような情愛を、理性の中では、

〈知ることへの情愛〉、〈理解することへの情愛〉、〈真理を見ることへの情愛〉と言っています。（これはすでに前述しました）。

そして肺臓の状態はすべて、また空静脈 *vena cana* や大動脈 *aorta* の血液に依存しています。そして、気管支の末端にまで及ぶ呼吸は、以上の諸器官に依存して現実化するものとなります。なぜなら、血液の流れが止まるやいなや、呼吸も止まるからです。肺臓のメカニズムと、それに相応している理性については、まだいろいろと分かってくるはずですが、解剖学について知っている人は少なく、未知の専門用語で証明したり確認をとることは、問題をあいまいにするので、この程度にとどめておきます。

わたし自身、肺の構造を知ったかぎりでは、次のことに、はっきりした確信がもてました。つまり、愛はみずから、その情愛をとおして理性に結びつくこと、理性は、愛からの情愛に、みずから結びつくことではないこと、相補的に結ばれるのは、愛から始まることで、それは、愛にとつての感覚的〈いのち〉、活動的〈いのち〉になっていくためであることです。

それから、次のことは充分理解しておいて下さい。つまり、人間には二重の呼吸があつて、一つは霊の呼吸であり、もう一つは肉体の呼吸です。霊の呼吸は、脳から始まる繊維に依存しており、肉体の呼吸は、心臓からくる血管に依存するとともに、空静脈や大動脈にも依存していることです。

それと同時に、思考作用が呼吸を引き起こしていることは明らかです。また愛の情愛が思考を引き起こしていることも明らかです。情愛のない思考は、心臓のない呼吸と全くおなじく不可能です。

したがって前述したように、心臓が肺臓の中で働いているように、

〈愛からくる情愛〉がはたらいて、〈理性からくる思考〉に結びついています。

4 1 3. ⑬ 英知すなわち理性は、愛から自分に与えられた能力によって高められ、光に属するものを天界から受け、それを感じとることができる。

再三触れましたが、人は英知の秘義を耳にすれば、それを感じとることができます。このような能力は、創造当初から人間みなに与えられているもので、「合理性 rationalitas」と呼ばれています。この能力によって、人は物事を内部から理解し、公正や平等を導き出し、善や真理を判別します。これが動物とちがったところです。理性が高められ、光に属するものを天界から受け、それを味わうことができると言ったのはそのことです。しかも、肺臓は理性に相応するものをもっていることから、肺臓の中に、そのイメージを浮き彫りにしていくことができます。

肺臓を見れば分かるように、これは、独特の細胞的実体でできています。それは気管支が、極めて小さな気泡にまで連なっており、その気泡は、呼吸をとおして空気を吸入します。以上は、思考力が働くとき、相応によって、肺と一体になっている様子を示しています。

その気泡状スポンジの実体は、拡張したり収縮したり、その両方の状態をとります。一方は心臓と同調し、他方は心臓とは、およそ別口の働きをします。心臓と同調しているときは、肺にある動脈と静脈を使っており、これは心臓の働き以外のなにものでもありません。ところが心臓と、切り離された状態に近い場合は、空静脈や大動脈の働きによるわけで、この器官は心臓外にあります。

肺の場合それを理性とすると、心臓に相応する本人固有の愛を越えて、高められ、天界からの光を受け入れることができます。ところが理性は、自分固有の愛を越えて高められつつも、その愛とのつながりを絶やさず、その愛から、〈知ることへの情愛〉や、〈理解することへの情愛〉と言われているものを吸収します。しかもそれは、名誉のためであったり、栄光のためであったり、この世での利益であったりします。このようなものは、どんな愛の表面にもくっついているようです。そのため、愛がかがやいていても、表面どまりで終わります。それにたいし、英知の人の場合、その愛は輝き出ます。

理性は高められ、天界の光にあるものを受け入れ、感じとることができることを確認するため、肺について、以上のとおり述べました。そこには、完璧な相応関係があります。相応をとおして分かるわけで、理性から肺のことが分かり、肺から理性のことが分かります。このようにして、両者から確認が得られます。

4 1 4. ⑭ 同様に、愛すなわち意志は、高められうる。しかも、自分の妻である英知を、その程度の高さで愛するなら、天界からくる熱に属するものを、感じとることができる。

理性は、天界の光のうちにあげられ、その光から英知を吸収することができます。これは、前節および他の諸節で述べてきました。愛すなわち意志についても同じです。天界の光にあるものを愛し、英知に属するものを愛すれば高められます。これも随時述べてきました。ただし、愛すなわち意志は、名誉、栄光、利益を目的にしたのでは高められません。役立ちを愛することを目的にします。自分のためではなく隣人のためです。

このような愛は、主のみ力によって天界から来るもので、それ以外にはありません。人が悪を罪として避けるとき、主がそれを与えてくださいます。したがって、愛すなわち意志が高められるには、この方法をとらなくてはなりません。これなくしては高められません。

愛すなわち意志は、天界の熱のうちにあげられ、理性は、天界の光のうちにあげられ、この双方があげられると、ここに両者の結婚が成立します。これがいわゆる「天界の結婚」で、天上の愛と英知との結婚です。要するに、愛が英知を自分の妻として、その程度の高さで愛するなら、愛もまた高められるということです。

主のみ力による隣人愛は、英知への愛です。すなわち、人間の理性への純粋な愛です。これは、この世の光や熱でも同じことです。熱のない光があると思えば、熱のある光もあります。熱のない光と言えば冬季です。熱のある光は夏季です。熱と光がいっしょになると、万物が花を咲かせます。冬の光に相応する人間の光とは、本人の愛を伴わない英知を指します。夏の光に相応する人間の光とは、本人の愛を伴った英知を指します。

415. 肺臓と心臓の連結をみると、英知と愛が結合したり分離したりする様子が、手にとるように見えます。心臓が、気管支にあるぶどう状小胞につながるのは、心臓みずから送っている血液によることがあるし、心臓からではなく、空静脈や大動脈から送ることもあります。前者の場合、つまり血液が心臓から直通で来ているとき、身体の呼吸は、霊の呼吸と分離できませんが、後者の場合は分離できます。

そのように、人の思考は、呼吸と相応をとおして、一つになって働いています。呼吸にかんして肺に二つの状態があるのと似ていますが、

人は、他人といっしょにいて考えつつ話したり行動したりするとき、他人といっしょにいないとき、自分の評判を落とす心配がないとき、考えつつ話したり行動したりするときは、別の考えをもっていることになります。

したがって、そのようなとき、神や隣人や教会の靈性に反抗して、考えたり話したりすることもあるし、道徳的なことや、民事的なことに対抗して、そうすることもあります。盗み、復讐、冒瀆、姦淫をおかすと、そのようなことになります。それにたいし、人がいて自分の評判を落とす心配があるときは、まるで、靈的・道徳的で、よい市民のように、話し、説教し、行動します。

以上から、愛すなわち意志は、理性と同様、高められて、天界の熱すなわち愛にかんするものを、受けとめることができることが、了解できたと思います。ただし英知を、その程度の高さで、愛するときにかぎります。しかしながら、英知を愛していないときは、分離させることも可能です。

4 1 6 . ⑮ そうでない場合、愛すなわち意志は、みずからと行動をと もにさせるため、英知または理性を、その高さから低める。

愛には、自然的な愛と靈的な愛があります。自然的な愛をもっていると同時に、靈的な愛のうちにある人は、理性的な人間です。それにたいし、自然的な愛しかない人の場合、靈的な人とまったく同じように、理性的に考えることができますが、理性的な人間ではありません。自分の理性を天界の光の中に、つまり英知のうちに高めることはあっても、その英知や天界の光からくるものは、自分の愛から出るものではありません。たしかに、愛が同じことを実行させることはあっても、

名誉や栄光や利益にたいする情愛から、それを行なっています。

本人は、理性が高められても、それで何かを獲得したわけではないと感じますが、それは自分の自然的な愛によって、ひとりで反省しているとき、分かることです。そのようなとき、天界の光や英知からくるものを愛しているではありません。したがって、自分と行動をともにさせるため、やがて、理性をその高みから引き下ろすこととなります。

たとえば、理性がいま、英知のうちに高められて考えているとします。そのとき、正義とは何か、正直とは何か、純潔とは何か、しかも純粋な愛は何か分かっています。自然的な愛でも、物事を理解したり直感したりする能力によって、天界の光の中で見ることができます。また道徳的なもの、霊的な徳性のようなことを、話したり説教したり記述したりすることができます。

ところが、理性が高められていないときは、そのような愛は自然的愛に過ぎないため、以上のような徳性が見えなくなります。それで、正義が不正に、正直が嘘に、純潔がわいせつに見えてきます。理性が高められていたとき話したことを考えても、せせら笑ったり、人の心をつかむために使った〈ことば〉に過ぎないと考えたりします。

愛が英知を、その英知のレベルで妻として愛していないときは、自分と行動をともにさせるため、愛は英知をその高みからひきおろしてしまうということがどんなことか、以上で明らかになります。愛が英知を、その程度の高さなりに愛するなら、愛はひきあげられます。これについては、前述の（4 1 4 節）を参照してください。

4 1 7. 愛は心臓に相応し、理性は肺臓に相応しますが、その相互の

相応によって前述したことが明確になります。つまり、理性は自分固有の愛を越えて、英知にまで高められること、また、愛がたんに自然的なものにすぎない場合、理性はその高みから、その愛によってひきもどされることなどが、どういう意味か分かると思います。

人間には、肉体上の呼吸と、霊の呼吸の二つの呼吸があります。この二つの呼吸は、別々になるときと、いっしょになるときがあります。たんに自然的な人間、とくに偽善者では、これが分離し別々です。霊的な人間や正直な人では、めったに分離しません。

したがって、自然的でしかない人、偽善者の場合、たとえ理性が高められても、そのときは英知にかんすることは、ほとんどが記憶の中にしまったままです。そして人中ひとなかにいるときは、記憶の中からとりだしては考え、知恵のある〈ことば〉を口にします。ところが、人中から離れると、記憶からではなく、自分の霊、つまり自分の愛から考えています。呼吸もそれと同じように行なっています。思考と呼吸は、その働きが相応しているからです。肺のメカニズムは、心臓からくる血液で呼吸する場合と、心臓以外からくる血液で呼吸する場合があるのは、前述したとおりです。

4 1 8. 通説では、英知が人をつくるとあります。ですから、だれかが知恵のあることをしゃべったり、教えたりしていれば、人は本人の人柄を信じるし、本人もまた自分がそんな人間だと思います。

人なかひとなかにいて、しゃべったり教えたりしているときは、記憶をもとにして考えています。それが自然的な人間であるに過ぎない場合、自分の愛の表層、つまり名誉・栄光・利益が動機です。ところが、自分

ひとりである場合、自分の霊の内部にある愛から考えていますから、そのときは知恵もなく、ときには気違いじみています。

以上から、知恵のある話し方だけで人は判断されてはならず、その人の生活がもとになることが分かります。つまり〈いのち〉から切り離された場合の、かしこい〈ことば〉からでなく、〈いのち〉に結びついた、かしこい〈ことば〉から判断しなくてはなりません。ここでの〈いのち〉とは愛を指します。愛は〈いのち〉であることは前述しました。

419.⑯ 愛すなわち意志は、もし同様に高められるなら、理性の中にある英知によって純化される。

人は生来、自分とこの世しか愛していません。目前に現れるのはこの世だけだし、自分の考えにもそれしかありません。これは自然的・肉的な愛、物質的な愛とも呼ばれます。なおこの愛は、両親のもつて、天上の愛から切り離されていたため、不純です。

人間は、理性を天界の光の中にあげる能力を備えています。そして、この理性と協力して、自分の愛が英知に高められるために、どう生きるべきかも分かります。だからこそ本人の愛は、その不純から切り離されることが可能になります。愛すなわち本人は、理性によって自らの愛をけがし、それに唾を吐きかける悪には、どんなものか見ることができし、その悪を罪として避ければ、その悪と反対の天界的なものをすべて愛するようになることも分かります。そのような悪を罪として回避するには、どんな手段をとればいいのかも分かります。愛すなわち本人は、英知の源である天界の光のうちに、自分の理性をあげていく能力を用いることで、これが分かります。

それで本人の愛が、天界を第一に、この世を第二にすればするほど、また、主を第一に、自分を第二にすればするほど、その愛はみずからの不純物から清められ洗われます。すなわち、天界の熱のうちにあげられ、理性がひたっている天界の光と結びつき、〈善と真理〉すなわち〈愛と英知〉の結婚と言われている結婚が成立します。

どんな人間でも、理性で理解できるし、合理的に見とおすことができます。また盗みやだましを避けて、それから遠ざかれば、それだけ、正直や公正や正義を愛することになるし、復讐や憎しみを避けて、それから遠ざかれば、それだけ隣人を愛することになり、姦淫を避けて、それから遠ざかれば、それだけ純潔を愛することになります。

また人はだれしも、それに対立するところを取り除かないかぎり、正直・公正・正義・隣人愛・純潔や、その他の天上愛の情愛のうちにあって、天界のこと、主のことがよく分かりません。対立するものを取り除けば、以上の情愛の中にあり、その情愛から見、分かるようになります。

いずれしばらくは、天界の光を自分の愛の中に移し入れた状態で、目の前はぼんやりしています。ところが、妻である英知を、その程度の高さで愛せず、受け入れない場合、つまり、責めたり非難したりする場合、その高さから落ちてきます。結局は自分の理性がもつ英知は、名誉・栄光・利益に、手段として役に立ってくれているということで妥協します。

そのような場合、自分とこの世を第一にし、主と天界を第二にします。主と天界は、自分とこの世に奉仕してくれるかぎり愛するという点で、第二になります。役に立たなければ、これを拒否して捨て去ります。この世でしないなら、死後になってそうします。さて以上で、

愛すなわち意志は、これがともに高くされれば、理性の中にあつて、純化されるという真理が明らかになったと思います。

420. 肺のなかで、同じようなことがイメージとして浮かびます。前述のように、動脈や静脈は、愛がもっている情愛に相応し、肺の呼吸は、理性がもっている感知力や思考性に相応します。心臓からくる血液は、肺のなかで不純物から浄化され、呼吸した空気からは、摂取できるものを血液中にとり入れることは、多くの実験で分かっています。

「血液は、肺の中で不純物から浄化される」と記しました。これは、毒素が入ってくると、摂取した飲食物から、呼吸した乳糜が血液に充滿するだけでなく、湿気が呼吸で吐き出され、嗅覚で他の人たちが感じとることもあり、心臓の左心室に入ってくる血液が、量的に減少することもあつて、浄化が行われることは明らかです。

さらに「呼吸した空気から、摂取できるものを血液中にとり入れる」と記しました。これは森林・花・樹木からは、たえず多量の匂いや発散物が流れてきていることから分かります。また、地下水や、川や池の水の中には、また多量の各種塩分があり、また、人間や動物が発散するもの、流出するもので、大気もこれで充滿しているわけで、それも莫大な量になります。

空気を吸いこむと、それが肺に入ることは否定できませんし、これが否定できないなら、血液もまた、みずから養分になるものを摂取することも否定できません。そして人は、自分の愛がもつ情愛に相応するものを摂取しているわけです。

肺の奥まった部分つまり気胞には、多数の毛細血管があり、それに付随する吸入口で、以上の養分を吸収します。そして、心臓の左心室にもどってくる血液は、そこで動脈用の血液となって明るい色に変わります。以上で血液は、異質なものを分離・浄化され、同質なものによって、自分を養うことが確認されます。

肺臓の中で血液は自己浄化し、養分を摂取することは、人の気性をもつ情愛に相応しています。これはまだ知られていなかったことですが、霊界ではごく当り前のことです。天界にいる天使たちは、自分たちのもつ英知の愛に相応する匂いだけを、ことさらに喜び、地獄にいる霊は、英知に対抗する愛に相応する臭いを、ことさらに喜んでいます。前者の匂いは香りですが、後者の臭いは臭気です。

そこから、人はこの世で、自分のもつ愛の情愛との相応にしたがって、自分の血液の中に、同質のものを植えつけていくことが分かってきます。人の霊が愛しているものを、本人の血液自身が相応にしたがって呼吸したいと願うわけです。そして、呼吸をとおして摂取することにもなります。

人は、英知を愛していれば、自分のもつ愛は浄化され、英知を愛していなければ、それにつばを吐きかけるのは、以上の相応からきます。人間の浄化は、すべて英知に属する真理が媒介になります。また人が汚されてくるのは、すべて、英知の真理に対抗する偽りによります。

4 2 1. ⑩ 愛すなわち意志は、もし同様に高められないなら、理性の中で、あるいは理性によって唾を吐きかけられる。

愛は、高められない場合、不潔のままとどまります。（4 1 9、4 2 0 節で前述しました）。不潔のままとどまる場合、復讐・憎悪・

嘘・冒涇・姦淫などのような不潔なものを愛します。そのような場合、本人の情愛は情欲と呼ばれ、仁愛・正義・正直・真理・純潔に属するものを拒否します。愛は、〈理性の中で、理性によって〉、唾を吐きかけられると言いました。つまり、愛は〈理性の中で〉以上の不潔なものの影響をうけます。また愛は英知に属するものを、〈理性によって〉、自分の奴隷にし、さらにそれを歪曲し、偽りにしたり、汚したりします。

肺の中で、心臓すなわち血液が、以上とどんなふうに相応しているかについては、（420節で）前述したこと以上に、述べる必要はないでしょう。ただ、血液が浄化されることに代わって、血液が汚されること、血液が芳香で養われるのに代わって、悪臭で養われることになります。それは、天界と地獄で行われていること、そのままです。

4 2 2. ⑩ 理性の中で、英知によって浄化された愛は、靈的または天的になる。

人間は生来自然的です。ただし、理性が天界の光のうちにあげられ、同時に、愛が天界の熱のうちに高められると、靈的または天的になります。そのとき、春の光のうち、また春の温まりの中にあるエデンの園のようになります。

靈的になったり、天的になったりするのには、理性ではなく愛です。愛がそうになると、自分の妻である理性を靈的または天的にします。愛が靈的になったり天的になったりするのには、理性が教え示す〈英知の真理〉にしたがった生活がもとになります。愛は自分の理性を介してそれを吸収していきますが、自分の力ではありません。愛は、真理を知らなくては、自分を高めることができません。真理を知るこ

とは、理性が高められ照らされる以外の何ものでもありません。そのため、人が真理を愛し、その真理を実践すればするほど、愛は高められます。

理解することと、意志することは別ものです。つまり、話すことと実践することは違います。英知による真理を理解し、これを口にしても、意志するわけでも、実践するわけでもない人がいます。理解し、口にしていく〈光の真理〉を、愛が実践するとき、その愛は高められます。以上のことは、人は理性だけで分かります。

英知的真理が分かり、それを口にしながら、それに反した生活をしている場合、つまり、それに反したことを欲したり行なったりしている場合は、どうなると思いますか。

愛が英知によって浄化され、靈的、天的になるわけは、本書第三部で述べたように、人間には、自然的段階、靈的段階、天的段階と言われる〈いのち〉の三段階があるからです。人は、一つの段階から、もう一つの段階にあげられます。ただし、英知だけであげられていくのではなく、英知にもとづく生活^{いのち}によって高められます。人の生命とはその人の愛を指します。したがって、英知にしたがって生活すればするほど、英知を愛していることになります。また、罪の不純から身を清めれば清めるほど、英知にしたがって生活していることになります。すなわち、英知を実践すればするほど、英知を愛しているわけです。

4 2 3. 人の愛は、理性の中での英知によって清められ、靈的になり天的になりますが、これは心臓と肺臓の相応関係によって、明確には分かりません。なぜなら、人は自分の肺が呼吸時に、どんな血液をも

っているか見られないからです。血液は不純物でいっばいかも知れませんが、清い血液と見分けられるというわけではありません。そのうえ、自然的でしかない人の呼吸も、見かけは靈的な人の呼吸とおなじです。しかし天界では、それがはっきりと見分けられます。そこではだれでも、愛と英知の結婚にしたがって呼吸しているわけです。天使たちが、その結婚で識別されているように、みな呼吸でも識別されません。

したがって、ある人がその結婚のうちにいないまま天界に入ると、胸がしめつけられるようになります。呼吸している本人の靈魂が、死のあがきに置かれている人のように、うめきます。そのため、さかさまになって身を投げ、自分と同じ呼吸をしている人に合流するまで休みません。それは、情愛とそれによる思考の相応によるわけです。

以上から、次のことが分かってきます。靈的な人とは清められた人のことです。ある人はそれを「生魂の靈 spiritus animalis」と言っています。つまり、より純化された血をもっているわけです。そして、人は愛と英知の結婚のうちにあればあるほど純化されます。純化された血は、その結婚に一番ぴったりと相応しています。このような純粋な血が血液の中に流れてくると、その本人もまた、その血によって浄化されます。

愛が理性の中で唾棄^{だき}された人では、事情は逆になります。しかし、前述したように、人はだれも、何かの血液実験によって調べてみることはできません。むしろ、愛からくる情愛をもとにして調べられます。情愛は、その血液に相応しているからです。

4 2 4. ⑱ 理性の中で、しかも理性によって唾を吐きかけられた愛は、 自然的あるいは感覚的・肉体的になる。

靈的な愛から分離した自然的愛は、靈的な愛の反対になります。なぜなら、自然的愛は、自己愛であり世間愛です。靈的愛は、神への愛であり隣人愛です。そして、自己愛と世間愛は、下と外部に目を向けますが、主への愛は、上と内部に目を向けます。

それで、自然的な愛が靈的な愛から分離してしまうと、本人のエゴ *proprium* から上へ高められることがなく、反ってエゴの中に浸ってしまい、エゴを愛すれば愛するほど、エゴに癒着します。そうになると、理性が高められて、天界の光のうちから英知に属するものを見ても、それをひきずりおろし、自分のエゴの中で、それを自分に結びつけ、そこで、英知に属するものを捨て去るか、誤魔化すか、自分のまわりに配置して、名誉のためにそれを口にします。

したがって、自然的な愛は段階を追ってのぼり、靈的、天的になるか、あるいは、段階を追ってくだり、感覚的、肉体的になるかのどちらかです。そして、役立ちを愛するためでなく、自己愛だけで、人を支配することを愛すれば愛するほど、下っていきます。このような愛は悪魔と言われます。この種の愛にひたっている人も、靈的愛のうちにある人と、大して変わらないくらいに話すことができます。ただしそれは、記憶からしゃべっているか、自分で天界の光に理性を高めて話しているかのどちらかです。

それでも、喋っていることや行なっていることは、外観だけの美しさを見せる果物のようで、中身はまったく腐っています。あるいは、アーモンドの殻だけは立派に見えても、中はムシ食いで腐っているようなものです。

このようなことは、霊界ではファンタジーと言っています。そこでは名をセイレンと言う情婦がいて、その幻想をつかって、自分を美しく見せ、きらびやかな衣装を身につけますが、そのファンタジーが去ると、セイレンは映像でしかありません。かれらは、自分を光の天使になぞらえる悪魔のようです。その種の肉感的な愛は、自分ひとりでは、理性をその高みからひき下ろし、自分固有の愛をもとにして考えます。そのときは、神よりは自然、天界よりはこの世、教会の真理や善よりは、地獄の偽りであり悪を優先して考えます。つまり、英知にさからって考えています。

以上で、肉体的な人間と言われる人が、どんな人か汲み取れます。理性の面ではなく、愛の面で、肉体的です。人中でしゃべっているとき、理性の面で肉体的であるのではなく、霊の中で、自分に話しているとき、そうなります。霊においてですから、死後は愛と理性の両面で、肉体的霊 *spiritus corporei* と呼ばれる霊になります。かれらは、この世で自己愛をもとにして、他人を支配する愛がきわめて強く、また他の人の上に自分の理性を高く置いたため、肉体の面では、エジプトのミイラのように見え、精神の面では、粗雑で低能のように見えます。この種の愛は、そのものとして見れば以上のとおりですが、現在この世で、それを知っている人が、はたしているのでしょうか。

ただし役立ちへの愛をもとにした支配的愛があります。これは、自分のための役立ちではなく、公共の善のための役立ちへの愛をもとにしています。ところが人は、あれとこれの区別がほとんどつきません。しかし、その間には、天界と地獄のあいだにあるような違いがあります。この統治の愛にある二つの種類の違いについては、小著『天界と地獄』（551～565節）を参照してください。

4 2 5. ㊦ それにもかからず、合理性と言われる理解能力は残るし、自由選択力と言われる行動能力は残る。

以上二つの能力が人にあることについては、前述しました（2 6 4～2 6 7 節）。人間にこの二つの能力があるわけは、自然的な人間から霊的な人間になれるため、つまり再生できるためです。つまり前述したように、人の愛は、霊的な愛になり、再生します。ただし、自分の理性をつかって、何が善で何が悪か、また何が真理で何が偽りかを知らないなら、霊的になることも、再生することもできません。それが分かれば、どちらかを選択することができます。そして、善のほうを選択した場合は、自分の理性をつかって、その善を実現するための手段は何か知ることができます。

人がこの善にいたるためとる手段は、すべて与えられています。その手段を知り、理解するには、合理性 *rationalitas* をつかいます。それを欲し実行するには、自由選択力 *libertas* をつかいます。自由選択力はまた、その手段は何かを知り、分かり、考える意欲です。

霊的なものや神学的なものは、理性を超越するとか、それを理性によらないで信じなさいという教えが、教会の教義の中にありますが、そのような教義を信じている人は、合理性と自由選択力という二つの能力のことは何も分っていません。このような人は、合理性と呼ばれている能力を否定する以外の何ものでもありません。

また、人は自分の力で善をすることができないとか、何らかの意志をもって、救われるため善をしてはならないという、教会の教義を信じている人がいますが、このような人も、人間に備わっている二つの能力について、宗教的信念のもとに、否定している以外の何ものでもありません。

したがって、以上のような教義で心を固めてしまった人は、死後は、その信仰どおり、二つの能力を失ってしまいます。そして、天界的自由の中にある代わりに、地獄の自由の中にいます。天使的英知の中にある合理性をもとにしている代わりに、地獄の狂気の中にいます。

かれらはまた、驚くことに、その二つの能力は、悪をなし偽りを考えるために与えられていると考えます。悪をする自由とは、奴隷になることであり、偽りを考える理性とは、不合理を指します。しかし本人はこれを知りません。

ただし、明確に知っておかねばならないのは、自由選択力と合理性の二つの能力は、人のものではなく、人にあっても、主のもので。人は自分のもののように、それを所有することはできません。つまり、人は自分のものとして与えられているのではなく、人のうちにあっても、たえず主のもので。

とは言え、人から取り去られることは、決してありません。その理由は、前述したように、人はこの二つの能力がなければ救われず、再生できないからです。

教会では、人は自分の力で真理を考えることも、自分の力で善を実行することもできないと教わります。でも人は真理を考えるのは自分の力によると思ひ、善を実行するのも自分の力によると思ひ、感じるしかありません。そこで人は、自分の力でするつもりで、*sicut a se* 真理を考え、自分の力でするつもりで、善を実行すると信じなくてはならないことが明らかです。このように信じないなら、真理を考えることも、善を実行することもなくなり、宗教はその存在を失います。

自分の力で真理を考え、自分の力で善を実行し、しかも、それが神よりのものであると、自分に言い聞かせます。人は、自分の力でする

つもりで真理を考え、善を実行しなくてはならないことについては、
『生命^{いのち}についての新エルサレムの教義』の最初から最後までを参照し
てください。

4 2 6. 21 霊的・天的な愛は、隣人愛であり、主への愛である。自 然的・感覚的な愛は、世間愛であり、自己愛である。

前述したように、隣人愛とは、役立ちへの愛です。また主への愛と
は、役立ちを果たす愛です。この愛は、霊的・天的な愛であって、役
立ちを愛するとか、その愛をもとにして役立ちを愛すること自身、人
間のエゴの愛から切り離されているためです。役立ちを霊的に愛する
人は、自分を眺めているのではなく、善の影響を受ける自分以外の人
たちを見えています。

以上の愛に対立しているのが、自己愛と世間愛です。これは他の人
たちへの役立ちよりも、自分自身を目標にすえます。人は、神の秩序
をひっくり返し、神の代わりに自分を置き、天界の代わりにこの世を
置きます。主や天界をうしろに見ます。主や天界をうしろに見るのは
地獄です。ただ、この種の愛については、さまざまに前述しました。

(4 2 4 節)

けれども、役立ちのために役立ちを実行する愛と言っても、自分の
ために役立つと思ってする愛と同じように、ぴんと感じられません。
そのため、それを実践しながらも、役立ちのために行なっているのか、
自分のために行なっているのか、分からないままです。

ただ、知っておく必要のあることですが、悪を避けていればいるほ
ど、役立ちのために、役立ちを行なっていることになります。悪を避

ければ、それだけ自分の力でなく、主のみ力で役立ちを果たしています。悪と善はまる反対です。したがって、人が悪のうちにいなければ、それだけ善の中にいることになります。悪の中にいると同時に、善の中にいる人はいません。だれも、二人の主人に仕えることはできないからです。

以上のように記したのは、次を知っていただくためです。つまり、人は自分が行なっている役立ちが、役立ちのための役立ちか、自分のための役立ちか、つまり、その役立ちが霊的なものか、たんに自然的なものかは、気持ちでは感じとれないとしても、悪を罪として考えているかどうかによって、それが分かってきます。

悪が罪であるとして考え、そのため悪を行なわないなら、本人が行なっている役立ちは霊的です。また本人は、罪に背を向け、それを避けているかぎり、役立ちのための役立ちの愛を、気持ちでも感じとれるようになります。つまり役立ちの中にある、霊的なうれしさが感じとれるようになります。

4 2 7.22 仁愛と信仰との関係、およびその結びつきにかんしては、 意志と理性との関係、およびその結びつきと同じである。

天界には二種類の愛が存在していて、それによって天界は分けられています。それは天的愛と霊的愛です。天的愛は主への愛であるのにたいし、霊的愛は隣人への愛です。またこの二つの愛が分けられているのは、天的愛が、〈善への愛〉であるのにたいし、霊的愛は、〈真理への愛〉です。

天的愛のうちにいる場合、人は、〈善への愛〉から出発して役立ちを果たします。それにたいし、霊的愛のうちにいる場合、人は〈真理

への愛) から出発して、役立ちを果たします。

天的愛は英知と結婚し、靈的愛は理知と結婚します。善から出発して善を行なうのが英知であり、真理から出発して善を行なうのは理知です。したがって、天的愛は善を実行するのにたいし、靈的愛は真理を実行します。

以上二種類の愛を区別するには、次のように言えば分かりやすいでしょう。天的愛のうちにある場合、その人は、自分の〈いのち〉に刻みこまれたものとして、英知をもっています。記憶に刻みこまれたものではありません。なぜなら、神の真理について語ることなく、それを実行するだけです。それにたいし、靈的愛のうちにある人は、自分の記憶に刻みこまれたものとして、英知をもっています。神の真理について、それを口にし、記憶にしまってある行動原理にのっとって実行します。

天的愛のうちにある人は、自分の〈いのち〉に刻みこまれた英知をもっているため、何かを耳にすると、それが真理か真理でないかを即座に感知します。本当かどうか尋ねても、ただ、「そうです」とか「そうではありません」と答えるだけです。主の〈みことば〉にあるのは、このような人を言います。

「あなた方の語る〈ことば〉は、『はい』か、『いいえ』かでないくはならない」(マタイ 5・37)。

そのため、「信仰」について聞きたいとは思いません。「信仰って何ですか。英知ですか。仁愛とは何ですか。実行することですか」と言います。

かれらに信仰とは信じることだと言うと、その意味が分からず、身をそむけ、「そんな人がいたら狂っている」と言います。

第三天界には、衆にすぐれた英知の人がいます。かれらがそうなのは、神にかんすることを耳にすると、すぐそれを生活に応用し、悪を地獄からのものとして避け、ただ主を礼拝しているからです。かれらは、純真無垢のうちにおり、他の人には幼児のように見えます。また、英知による真理については、何も言いませんし、話していることにうぬぼれから出たものは何ともありませんから、無学で単純な人のように見えます。

それでも、だれかが話しているのを聞くと、その音調から本人の愛が全部感じとれ、その〈ことば〉から、本人の理知が全部分かります。かれらは主のみ力で、愛と英知の結婚のうちにおり、前述にあるように、天界の心臓部を表象します。

4 2 8. 霊的愛つまり隣人愛のうちにいる人は、自分の〈いのち〉に英知が刻印されおらず、むしろ理知をもつ人です。前述したように、〈善への情愛〉から出発して、善を行なわせるのは英知ですが、〈真理への情愛〉から出発して、善を行なわせるのは理知です。

この種の人、信仰とは何かが分かりません。「信仰」を耳にすると、真理のことだと思えます。「仁愛」を耳にすると、真理を実践することだと思えます。何かを信じなくてはならないと言うと、それはからもんく空文句であって、「真理を信じない人がいるのですか」と言います。

かれらは、自分がいる天界の光のもとで真理を見ているので、こんなことを言います。だから〈見ないものを信じる〉と言えば、それは幼稚であるか、愚かであると言います。かれらは、前述したように、天界の肺臓部をなしています。

429. それから、〈自然的・靈的愛〉のうちにいる人がいます。かれらは、自分たちの〈いのち〉に刻印された英知や理知をもっておらず、〈みことば〉をもとにした、ある信仰をもっており、それも仁愛につながっているかぎりの信仰です。この人たちは、仁愛とは何かとか、信仰は仁愛かどうかとも知りません。英知と理知にひたっている天界の住人ではなく、むしろ、知識だけをもつ人の中にいます。

ただし、悪は罪だからと言って避ける人は、最外部天界にいて、そこで夜の月光に似た光のもとにいます。信仰については、分からないまま心に固めてしまわず、ある種の〈真理への情愛〉をもっている場合、真理をうけ入れる程度と、それにもとづいた生活に応じて、天使たちに教わり、〈靈的愛〉と〈理知〉のうちにある社会に高められます。

それにたいし、仁愛から切り離された信仰の中で生活してきた人たちは、砂漠に追いやられます。天界にいる人たちはみな〈善と真理の結婚〉のうちにいるのにたいし、かれらは何の善のうちにもおらず、したがって〈善と真理の結婚〉もありません。

430. 「愛および英知」について、この部で述べてきたことは、「仁愛および信仰」についても言えます。仁愛の代わりに「靈的愛」と言ってもよく、信仰の代わりに「理知への道としての真理」とも言えます。また、以上は「意志および理性」と言うこともできます。意志は愛の受け皿であり、理性は理知の受け皿だからです。

431. 以上にたいし、わたしはメモをつけ加えます。天界では役立つ情愛をもって役立ちを行う人は、みな自分がひたっている交わり

がもとになって、他の人たちより知恵もあるし、幸福でもあるという状態が生まれます。そこで役立ちを果たすということは、まじめに、公正に、合法的に、忠実に、自分の職業にもとづく仕事を行うことです。

かれらは、これを「仁愛」と言っています。信心からする礼拝は「仁愛のしるし」といい、それ以外のことは義務であり慈善です。かれらが言うには、だれでも自分の職業からくる仕事を、まじめに、公正に、合法的に、忠実に行なっていれば、公共性がその善の中にとどまり、存続していくものであるとのこと。しかもこれは、主のうちにあって行うこととなります。なぜなら、主から流れてくるものは、すべてが役立ちだからです。その流れは、部分から全体へ、全体から部分へと、浸みとおります。ここで、部分とは天使を指し、全体とは天使たちの社会を指します。

5 受胎によって、人間はどんなふうが始まっていくか。

432. 妊娠したあと、人は母胎の中で、どんな始まりと原初の状態をとるかについては、だれも知りません。見るができないからです。しかも、それがもとになる霊的実体は、自然の光をとおして人の目に入ることがありません。

父親からの精子がもとで、妊娠が行われます。それにより人間の原初の形ができますが、この世には、その研究に精神力を注いできた人がいます。しかもその中で誤りをおかした人も少なくありません。人

間は、その原初的な状態から見て、すでに完成されているとか、またそれが一種の始まりで、次第に肉がついて完成されていくなどと言うのは、誤りです。そのためわたしには、その始まり、原初のものが、どんなふうになって、それなりの〈かたち〉をとっていかを見せてもらいました。

それは、天使たちが見せてくれました。天使たちには、主からの啓示がありました。天使たちにとっても、それは英知のわざです。また英知のよろこびとは、自分の知っていることを他の人たちに伝えることです。こうして許しを得て、人間の最初の〈かたち〉が像となって、天界の光のうちに、私の眼前に現れました。それは次のようでした。

人の脳をかたどる極めて小さなものが見えました。それには淡い輪郭で、ある顔が前面についています。付属的なものはありません。この原初の形のいちばん突出した部分は、連続した小球状のものが集まってできています。その小さな球状のものは、それより微小のものが集まってできています。その一粒一粒が、またさらに微小な部分から成り立っています。それには三つの段階があります。

前面にあって、なだらかな丘状になった部分は、顔のようなものに見えます。突出した部分は、透明な脳膜でおおわれている、やわらかな肢節でした。最小の脳の形をしている突起の部分は、二つの膨れた部分に分かれています。いちばん大きいものは大脳で、それが二つの半球からできています。

わたしは次のように聞きました。つまり、右側の膨れた部分は、愛の受け皿であり、左側の膨れた部分は、英知の受け皿です。そ

して、すばらしい組み合わせによって、協力体勢がととのっています。

さらに、あふれてくる天界の光で、次のことが示されました。その内奥部にある小脳で、その位置と流れをみると、連続した部分が天界の秩序と〈かたち〉をしており、その外側の連続は、天界の秩序と〈かたち〉の逆を行っています。

天使たちは、以上が示され見せられたあとと言いました。

「内奥部にある二つの段階は、天界の秩序と〈かたち〉をしていて、主からくる愛と英知の器になっています。外側にある段階は、天界の秩序と〈かたち〉に反抗するもので、地獄的な愛と狂気の器になっています。人は遺伝的な墮落によって、生まれつき、あらゆる種類の悪のなかにいます。そしてその悪は、その外側の部分に居座っているわけです。前述したように、上位の段階は主からくる愛と英知の器になっていますが、その段階が開かないかぎり、その墮落した部分はなくなりません。

なお、愛および英知とは、人間自身を指します。だからこそ、愛と英知の本質は主です。この人間の原初のもものは、その器であるわけですが、だからこそ、この原初のものの中には、〈人間のかたち〉に向かっていく絶え間のない推進力がひそんでいます。つまり〈人間のかたち〉を身につけていくよう順次進んでいるのです」と。

訳者あとがき（初版）

本書『神の愛と知恵』の正確な原題は、『神の愛および神の英知にかんする天使の英知 Sapientia Angelica de Divino Amore et de

Divina Sapientia』（アムステルダム、1768年）です。翻訳に使ったラテン語原典は、S・H・ウースター師監修による米国スヴェーデンボルグ出版協会発行の1899年度版です。

著者エマヌエル・スヴェーデンボルグについては、小社アルカナ出版から、すでに原典訳『天界と地獄』（1985年）および『真のキリスト教上下』（1988-9年）を、出版していますから、馴染みのある読者も多いと思います。一般には、18世紀北欧の神秘思想家として、また（誤解ではありますが）オカルト的著者として、巷間に知られています。

本書は、目次にもあるように、五部からなっています。原典では、各部が無題になっているため、簡単に解説を加えておきます。

第一部は、愛の定義から始まります。愛と生命との同一性を指摘し、その生命の源としての神は、〈人間そのもの〉、人間の原型です。その〈神・人〉によって、宇宙万物と人間が創造されました。特に人間は、その〈意志と理性〉が神の〈愛と英知〉をうける器であることから、神の似姿として造られています。

第二部は、創造にさいして、特殊な媒体となった霊界の太陽について触れます。自然の太陽からくる熱と光が、自然的生命の源になっているのと同様、霊界の太陽からくる熱（すなわち愛）と、

光（すなわち英知）があつて、自然界だけでなく、霊界、とくに人の霊的な生命（つまり合理性と自由）の成長にとって、唯一無比の力になっています。以上は『天界と地獄』にも散見できます。

第三部では、段階 *gradus* の概念が入ります。創造の秩序には、連続的な段階と隔離的な段階があります。とくに後者には、目的・原因・結果の系列があり、それがあらゆる秩序をより高い段階に引きあげていくジャンプ力になります。これは自然界の無生物から、霊の世界に生きる人間まで、ありとあらゆるものに及び、その契機にしたがい、人の霊眼も開かれていきます。自然界と霊界の相応も、宇宙万物・人間・霊界・天界のハイラルキーも、そこから説明でき、天界を目指す人と、地獄を目指す人の区別も、そこから生まれます。

第四部は、自然の大気が、太陽の熱と光の媒体となって、宇宙の創造と成長に役立っているように、霊界の太陽の熱と光、つまり神の愛と英知は、霊界の大気を通して、自然世界の背後にあつて、万物と人間を役立ちの世界へと導いています。そこでコナートゥス *conatus* という概念が登場します。英語では *efforts*、日本語でも「努力」と訳されていますが、自然の物質世界と生物の世界、それに人間にも備わっている生命的なジャンプ力、神の愛と英知がめざす目的、つまり役立ちに向かわせる働きです。本書では、「推進力」（場合により「効能」）と訳しました。

第五部は、人間の心臓と肺臓の解剖学的反省をとおして、人の意志と理性が、それぞれ役割を異にしながらも、いかに神の愛と英知に近づいていくかを、夫婦の結婚になぞらえて解説します。つまり、「知る・理解する・感知する」というステップを踏みな

がら、意志と理性が相補的に結ばれ、神の愛と知恵による恒久の計画が、人の中で実現されてゆき、人は神の似姿・神の像になって行きます。

スヴェーデンボルの『神の愛と知恵』は、その数多くの著作のなかでも、特に親しまれていますが、その理由は、万物の進化が偶発的に生起して、その積み重ねで、この世界の秩序を説明しようとするネオ・ダーウィニズムや唯物史観にたいして、時代的には遙か以前から、はっきりとした「ノー」を提示している点です。神の創造の秩序のなかで、神によって意図的に組み込まれた〈愛と英知〉の広大な計画を、いきいきと読者のまえに示します。

この著作は、後代の思想家、とくにシェリングに影響を与え、ベルグソンやシャルダン、現代ではR・シェルドレークに、また別の視野の下で継承されています。

アルカナ出版では、本書に続いて、『神の摂理』（1764年）と『結婚愛』（1768年）を翻訳出版する計画です。これは天使的英知の三部作として、宗教界、哲学・思想界に多くの影響を与えてきました。ヘレン・ケラー女史もこの書で宗教的感化を受けたことが、かの女の『わたしの宗教』に記録されています。

1991年2月15日

再版のあとがき

初版からおよそ二年後、再版を出すにあたり、スヴェーデンボル原典訳シリーズを愛読してくださる方々に感謝します。初版にかかげたスヴェーデンボル原典翻訳委員会という翻訳者名は、

当事者は相変わらず、筆者一人ということで、改めました。今後ともよろしく願います。

1993年5月20日

第三版のあとがき

スヴェーデンボルイの不朽の名著の一つ『神の愛と知恵』の原典訳は、長らく縦書きでなじんでいただきましたが、今回、『天界と地獄』および『天界の秘義』に因み、横書きに変更いたしました。

誤植、誤字の訂正を含め、再版までの口語体表現をそのまま維持しましたが、冗長な部分のより簡潔な表現への改善を除いて、変更は最小限にとどめました。旧版と同様のご愛読をお願いいたします。

2005年4月10日

アルカナ出版 訳者 長島

達也

